



TITLE:

都市の空間と共同体 - 中世都市から近世都市へ(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

仁木, 宏

CITATION:

仁木, 宏. 都市の空間と共同体 - 中世都市から近世都市へ. 京都大学, 1994, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1994-03-23

URL:

<https://doi.org/10.11501/3075779>

RIGHT:

②

都市の空間と共同体

― 中世都市から近世都市へ ―

目次

頁

序論

中近世移行期都市史研究の成果と課題

一

第1節 自治都市と共同体をめぐって

五

1 古典的研究の限界 5

2 中世都市の「発見」 9

3 近世京都の町共同体 14

第2節 城下町研究の達成

一九

1 戦国・織豊期城下町論 19

2 城下町研究の問題点 23

第3節 移行期都市史研究の視角

三十一

第1部 近世京都の成立

三七

序章 研究史

三九

第一章 中世的都市支配と社会構造

五一

第1節 都市領主の支配と社会構造

五二

第2節 室町幕府の京都支配

五八

第二章 町共同体の確立

六九

第1節 共同体確立前夜

六九

1 都市民衆の運動方向

69

2 幕府の法と地下人

75

第2節 町共同体確立の条件

九〇

1 個別町の三側面

90

2 共同体の性格と確立の契機

98

3 個別町から惣町・町組へ

103

第3節 戦国後期社会の矛盾と限界

一一八

1 社会構造の複雑化

118

2 非分の世界

121

第三章 新しい都市支配と町共同体

一四一

第1節 三好政権の登場

一四一

第2節 織田政権の京都支配

一五五

第四章 「公儀」支配の論理

一六七

第1節 中世都市社会の解体

一六七

1	空間構造の改変	167
2	都市領主の否定	170
第2節 都市法とその特質		一七六

1	法令の内容	177
2	施行と罪科	181
第3節 非分と政道		一九六

1	京都奉行の限界とその克服	196
2	公権力と奉公人規制	202
第4節 政道と町共同体		二一四

終章	近世京都の誕生	二二一
----	---------	-----

第Ⅱ部	都市と寺院	二二九
-----	-------	-----

序章	研究史	二二三
----	-----	-----

第一章	大山崎の展開と寺院	二三七
はじめに		二三七

第1節	平安前期の大山崎	二四一
-----	----------	-----

1	大山崎の立地と律令国家	241
2	寺院の草創	245

第2節	権門の都市分割と寺院	二五五
-----	------------	-----

1	都市支配の変容	255
2	権門所領と寺院	258

第3節	室町幕府の成立と大山崎	二七四
-----	-------------	-----

1	神人在所の確立	274
2	宝積寺の展開	278

3	都市寺院の変貌	282
---	---------	-----

第4節 自治都市の発展

二九〇

1	都市民の成長と宝積寺	290
---	------------	-----

2	信仰の重層化と寺院の発展	295
---	--------------	-----

第5節 城下町から近世都市へ

三二四

1	統一政権と大山崎	314
---	----------	-----

2	山崎城と宝積寺	318
---	---------	-----

おわりに

三二六

第二章 大坂石山寺内町の構造とその展開

三二九

序 節 寺内町研究の成果と視角

三二九

第1節 大坂寺内町の復元的考察

三四七

はじめに	347
------	-----

1	法安寺の立地	352
---	--------	-----

2	御坊と寺内六町	362
---	---------	-----

3	寺内町の景観	380
---	--------	-----

おわりに	393
------	-----

第2節 大坂寺内町の空間構造

三九四

はじめに	394
------	-----

1	法安寺と生玉社	395
---	---------	-----

2	寺内六町の構成	403
---	---------	-----

3	都市周縁の構造	416
---	---------	-----

4	交通路と周辺田畠	432
---	----------	-----

おわりに	446
------	-----

第3節 本願寺の支配と寺内町

四五〇

はじめに	450
------	-----

結 論

中世都市から近世都市へ

四八五

終 節 大坂寺内町の歴史的位置

四七七

- 1 六町の共同体 451
- 2 領主権と町自治 459
- 3 「寺の論理」と「町の論理」 473

序 論

「中近世移行期都市史研究の成果と課題」

日本中世の都市史研究は、現在、戦後第二のブームを迎えている。

第一のブームとは、いうまでもなく一九五〇年代から七〇年代にかけての自由都市論の隆盛をさす。

豊田武、原田伴彦、林屋辰三郎、佐々木銀弥、脇田晴子氏らに主導された第一ブームでは、西欧自由都市との比較で、京都・堺など畿内の巨大な自治都市を日本中世都市の典型、到達形態とし、その近世都市への変容をどちらかといえば否定的に評価（『「敗北」とする』）していた。

この第一期とくらべて今回のブームの特徴をあげるならば、①畿内の巨大都市より、地方の中小都市を主な分析対象としている。②狭義の自治都市に限らず、寺社門前、城下町、市町など、多様な都市を視野にいれている。③都市民衆の共同体のあり方より、都市の景観・空間構造などに興味関心が集まっている。④文献史学のみならず、考古学、建築史学、歴史地理学、民俗学など様々な領域の総合研究が実現しつつある。⑤研究者、研究論文の数が単位を二桁異にするほど増加している、などという点を指摘できよう。

序論では、こうした第一ブームから第二ブームへの議論の流れを整理して、現段階における都市史研究の課題を見極め、本論（第Ⅰ部・第Ⅱ部）を展開するための視座を確定したい。

とはいえ、中世・近世の都市論のすべてをまとめることは不可能であり、ここでは中近世移行期を中心に取り上げることとする。当該期の都市は大まかに自治都市と城下町にわけることができる。城下町には国府や守護所などのいわゆる政治都市をふくむこととし、自治都市はこれら城下町以外のすべての都市を包摂する概念としておく。

もちろん、自治都市・城下町の区別はあくまで便宜上のものであり、両者を明確に線引きできるわけではない。ただ、従来の研究が別個に進められてきたという経緯もあり、それぞれの研究史を第1・2節で追うこととする。そして第3節で共通する課題をまとめてゆきたい。

第1節 自治都市と共同体をめぐる

1 古典的研究の限界

一九五〇年代から七〇年代初頭にかけて、日本中世都市史研究においては、いわゆる自由都市論がたたかわされた。その内容の詳細については佐々木銀弥氏や脇田晴子氏の論稿に詳しいので、あらためて述べることはしない¹⁾。

これら自由都市論の問題点についても、すでに佐々木氏が的確な指摘を行っている。問題点の第一は、西欧型自由都市像を基準とし、そのあてはめによって都市を評価しようとしたことである。そのため、都市をみる視角が一面的になり、また中世都市の日本的な特徴が捨象されてしまった。

また自由都市論は戦国期の畿内大都市のみを対象とした。そのため、中世社会において圧倒的多数をしめる、地方中小都市を視野にいれることができず、きわめて限定的な都市像を描くことになった、という(2)。

佐々木氏の指摘とは別に、自由都市論がかかえていた限界を、いくつかつけくわえてみておきたい。自由都市論では、都市における共同体の自治が、都市民によってかち取られたものであったのか、権力から合法的に分割・委任されたものであったのかが議論された。しかしこれは、共同体の自律性と都市領域内の政治的自治を混同した論争であった。都市の地縁的な共同体が構成員にかかわる問題を自律的に解決する能力を身につけてゆくのは、共同体自身の成長によるのであり、政治権力の分有を必要とはしない。逆に、都市共同体が共同体内部の自律性を確立したとしても、それがそのまま、当該都市領域の政治的自治の獲得を意味するわけではない。実際には、共同体の自律性の貫徹が公権の介入によって妨げられたり、自律性を高めた都市共同体が一定度、領域的な自治を担う例は多いが、原則として、共同体の自律性と領域的な自治が別物であることを忘れてはならないのである。

自由都市論は、都市単位の自治のみ追究していたが、純粋な意味で自治都市が成立したところは存在しなかった。京都は最後まで室町幕府や三好政権の所在地であったし、堺にしても阿波三好氏の強い影響下にあった。大山崎は特定の勢力に属さなかったがたえず軍勢が布陣・駐屯しており、寺内町では一向宗・法華宗寺院が都市領主として君臨していた。この意味で自治の限界性を強調することは誤りではない。しかし注目すべきなのは、都市全体の自治ではなく、町を単位とする自治であるべきだった。基盤となる町自治の検討を前提とした上で、その都市全体への広がり、権力支配とのかかわりなどを考察する視角が必要なのである。

自由都市論の問題点としては、戦国期において都市領主(寺社など)や公権力がどのように都市支配を展開していたか、その実態の検討をないがしろにしたこともあげられる。一方で、統一政権の都市支配を強調したため、まるで統一政権期になってはじめて都市が権力支配に服したかの誤解を招いたのである。これが統一政権の過大評価につながり、自由都市「敗北」論も生んだといえよう。しかし、戦国期段階の諸都市においてもそれぞれの領主・公権が一定の支配を実現しており、統一政権との段階差を検討するかたちで研究は進められるべきであった。こうした方法によってこそ、統一政権の正しい評価が可能となるはずである。

自由都市論以降、戦国期の畿内自治都市をめぐる研究は急激に少なくなった。

京都については、洛中の土地所有の実態を解明した瀬田勝哉・脇田晴子氏の研究⁽³⁾、都市と農村の対立を徳政状況から解いた脇田氏の研究⁽⁴⁾などが目立つほかは、東寺領の門前町や巷所についての考察がみられる程度である⁽⁵⁾。一方、歴史地理学や建築史学の視点から京都の復元を行った足利健亮・高橋康夫氏の研究は、興味深い視角を提示している⁽⁶⁾。また今谷明氏は、政治史の中で京都の都市自治の限界を説明しようとした⁽⁷⁾。

中小都市については、大山崎に関する小西瑞恵・脇田晴子・田端泰子氏らの研究がある⁽⁸⁾。寺内町に関しては峰岸純夫・藤木久志氏らの研究がなされたが、寺内町を特殊化しすぎたきらいがある⁽⁹⁾。いずれもそれぞれの都市の具体的な実態を解明したり、新しい視角からの分析を試みているが、個別研究の域を出るものは多くない。また都市共同体を正面からあつかったものは、大山崎を対象とする研究をのぞきほとんどみられなくなった。

このように、自由都市論において中世都市の代表とされていた、戦国期の畿内自治都市に関する研究が低迷する一方、網野善彦氏の研究によって、畿内大都市のみを中世都市とする認識が根本的に

つがえられていった。

2 中世都市の「発見」

八〇年代の中世都市史研究を切り開いたのは網野善彦氏である。氏は、中世都市の「自治」(あるいは「自由」・「平和」)を支える原理として「無縁・公界・楽」を発見した。そしてそうした原理が働く多くの場を都市として認定し、中世社会には数多くの都市的空間が存在したことを改めて告知したのである⁽¹⁰⁾。自由都市論においては都市として認められていなかったような、中世前期の市町、中小の寺社門前などが、中世都市として「発見」、「再発見」されていった。

網野氏の研究によって、中世都市の多様な相貌が明らかにされ、きわめて豊かな都市像が提供されるようになった。氏が提起した研究動向は現在にいたるも発展的に継承され、冒頭で述べた中世都市史研究の第二ブームをまきおしたのである。

しかし、網野氏の議論にはいくつかの問題点もふくまれている。

一つは、中世の都市、就中、楽市場を理想的に描きすぎ、現実世界には存在しない都市像をつくりあげたことである。中世都市の理念、理想形としての楽市場像は理解できるが、その特権を守るためには寺社や都市共同体の実力が前提とされ、それらの執拗な交渉によってはじめて特権が獲得されえたという事実を見落としてはならない。楽市場の都市特権を安易に原始以来のものと措定してしまうと、そうした特権の意義や権力との矛盾など、戦国期固有の問題を追求する視点を喪失することになるのである。

また網野氏の理解では、中世から近世への移行に際しての、都市民側からの積極的な働きかけを無視することになる。「無縁・公界・楽」の最終的な衰退時期としてのみ移行期をとらえる限り、城下町の生成から展開、自治都市の性格変化の過程が都市民の意志によってどのように規定されているか、都市民の志向がどのようなかたちで近世都市に実現されているか、などについては視野に入らないのである。これでは近世への移行を中世都市・都市民の「敗北」としてしか評価しないことになる。

網野氏が明らかにした中世都市の理念と、現実世界の間に横たわる複雑な関係を解き、また中世と

近世の都市原理の違いを認めた上で、その移行を具体的に解明する方法を開発することが求められているといえよう。

網野氏の研究をうけて、中世都市の広域性・多元性に注目する斉藤利男氏の研究が生まれた。斉藤氏は多賀城や平泉を対象に、都市的集落がかなり広い範囲に散在している様子を明らかにし、それが中世前期都市の特徴であるとした⁽¹⁾。

保立道久氏は、豊田武氏による、都市は常設店舗からなるという史観の誤りを強調する。保立氏は絵画史料に注目し、疎塊的な街村でも町屋と考えられるとした。そして寺社の門前が市庭となり、宿の辻堂が宿泊施設となるなど、寺社が都市空間の核になるとしている⁽²⁾。

このように文献史学においては、自由都市論にとらわれない、中世都市の新しいイメージが次々と描かれつつある。

考古学の分野では、七〇年代になって本格的な発掘が始まった備後国草戸千軒遺跡(広島県福山市)が、中世自治都市研究のパイロット的な役割をはたしてきた。文献史料がほとんど残らない草戸で、中世前期から後期にかけて数時期にわたる都市遺構が出現したことは、文字史料で不明な都市でもそ

の展開を具体的に追跡できる可能性を示唆した。また多量の出土遺物は、草戸が瀬戸内海から遠く大陸とも結びつく重要な港湾都市であったことを明らかにし、都市をめぐる流通についても考古学が多くを物語りうることを広く認識させた(13)。

八〇年代にはいると、堺・博多をはじめ全国で自治都市の発掘が急速に進み、多くの成果があげられている。しかし中世自治都市については、それぞれの都市遺跡の考古学的知見がまだ集約して分析されておらず、全体としての都市発展をどのように評価できるかは今後の課題である。

中世自治都市については近年、建築史学の分野でも注目すべき研究が発表されている。

伊藤毅・宮本雅明氏は共通して、寺院・門前の同心円的空間構造を指摘した。伊藤氏によれば、京都の東寺に典型的にみられる構造は、「寺内」と「寺辺」によって「境内」が構成され、その外側に門前町、散所が展開するというもので、これはそのまま寺家(僧)―職人・商人・百姓の身分階層に対応したものだという。また、宮本氏は博多・堺・尼崎などを事例に、各寺院の伽藍方向に秩序づけられた門前の町割を想定し、境内・門前が一体化した独立した空間の存在に注意をうながしている。

そして戦国期の都市は、こうした各寺院を核とする空間が複数集まった、複合した構造をもつとす

る。たとえば伊藤氏によれば、寺院・境内や町の構、公家・武家の邸宅を中心とするまとまりなどの「島」が分散的に浮かぶ「海」が京都であった。宮本氏の博多にしても、博多浜は承天寺・聖福寺や櫛田神社の境内・門前町の複合にすぎず、同様の息浜とならんで一つの都市を形成してはいるが、全体としての統一性はきわめて乏しいという。そして豊臣政権の都市改造とはこうした寺内・門前の解体・再編を意味し、寺院から付属物(寺院と町との結びつき)を取り去って、都市の周縁へ純粋な寺院のみを集合させ、都市の中心部には町屋のみを残して統一した都市を完成させた、とあつづけている

(14)。

いずれも中世都市の景観を具体的に示し、それが近世への移行の中でどのように変化してゆくのかを解明したすぐれた研究である。しかし、宮本氏に対して、実際にその都市を発掘している考古学の立場から疑問が提出されているように(15)、建築史が描く都市の「理想」が必ずしも実態と合致しているとは限らない。都市を支配し、その構造を規定しようとする寺社領主の「理想」と、現実の間の乖離・矛盾を検討する視角が必要とされよう。

またこの点にもかかわるが、両氏は分析の際に領主権力(寺院・豊臣政権)の都市形成・改造を重視

したため、都市の構造とその変化における都市民の意志、働きかけがいかなるものであったかについては不明のまま残している。

これに対して同じく建築史の伊藤裕久氏は、菅浦・堅田など、近世初頭に大改造をうけていない小規模都市（集落）を取り上げ、中世末の都市（集落）空間の復元を試みた。そして、身分階層の違いが地域的な住み分けをおこさせるなど、都市民（・周辺農民）のもつ論理によって都市空間が形成されてゆくさまを活写した⁽¹⁶⁾。建築史学による自治都市論としては今後、伊藤（裕）氏のように、都市民の論理と空間構造のかかわりを追究する方向に進むべきであろう。

3 近世京都の町共同体

かつて自由都市論の主流であった共同体論は近年、中世史側からはほとんど追究されていない。そうした中で、近世の都市共同体の検討が進み、特に京都においては地縁的な共同体の、中世からの連

続性が注目を集めている。

たとえば朝尾直弘氏は、家屋敷・財産や営業上の信用を相互に共同で保障する近世初頭の町共同体は、一方で共同体全体に迷惑をおよぼすものを排斥することを指摘した。そして身分は権力が法定するのではなく、「誰が町人であるかは町が認定する」と結論づけたのである⁽¹⁷⁾。

この他、安国良一氏は、町民が町によって様々な面で保障を得、町の問題が町民個々の事情に優先した様を具体的に実証している⁽¹⁸⁾。

京都ほど都市共同体が発達した例は他にはほとんどみられない。しかし、そこには当該期の共同体に普遍的な動向の最先端の一つが表現されていたはずであり、京都の事例をいかに一般化して考察できるかが課題となろう。

そして、このように詳細が明らかとなる近世の町共同体との比較において、その前史としての中世の都市共同体のありさまを検討してゆくことが緊要なのである。

(1) 佐々木「日本中世都市の自由・自治研究をめぐって」、『社会経済史学』三八―四、一九七二年

）、脇田「中世史研究と都市論」（『日本中世都市論』、東京大学出版会、一九八一年）。

(2) 佐々木同右論文。

(3) 瀬田「近世都市成立史序説」（『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年）、脇田「中世京都の土地所有」（前掲著書注（1））。

(4) 脇田「都市と農村の対立」（前掲著書注（1））。

(5) 仲村研「東寺境内款冬町の支配」（『京都「町」の研究』、法政大学出版局、一九七五年）など。

(6) 足利「中近世都市の歴史地理」（地人書房、一九八四年）、高橋『京都中世都市史研究』（思文閣出版、一九八三年）。

(7) 今谷『戦国期の室町幕府』（角川書店、一九七五年）。

(8) 小西「中世都市共同体の構造的特質」（『日本史研究』一七六、一九七七年）、脇田「自治都市の成立とその構造」（前掲著書注（1））、田端「中世大山崎の惣結合」（『中世村落の構造と領主制』、法政大学出版局、一九八六年）など。第Ⅱ部第一章参照。

(9) 峰岸「一向一揆」（岩波講座『日本歴史』中世四、岩波書店、一九七六年）、藤木「統一政権の

成立」（岩波講座『日本歴史』近世一、岩波書店、一九七五年）など。第Ⅱ部第二章序節参照。

(10) 網野『無縁・公界・楽』（平凡社、一九七八年（増補版一九八七年））など。

(11) 斉藤「荘園公領制社会における都市の構造と領域」（『歴史学研究』五三四、一九八四年）。同『平泉』（岩波書店、一九九二年）など。

(12) 保立「宿と市町の景観」（『季刊自然と文化』一三、一九八六年）など。

(13) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡』（広島考古学研究会、一九八三年）。

(14) 伊藤「中世都市と寺院」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅰ、東京大学出版会、一九八九年）、宮本「空間志向の都市史」（同右）、同「尼崎」・「堺」（『同右』Ⅱ、一九九〇年）。このほか伊藤氏は『近世大坂成立史論』（生活史研究所、一九八七年）で、豊臣大坂城下町における寺町や天満寺内町の配置について、興味深い検討を行っている。

(15) 大庭康時「中世の商業都市『博多』」、續伸一郎「『中世都市堺』の成立と展開」（シンポジウム『中世都市の成立と展開』報告、鎌倉考古学研究所ほか主催、一九九二年）。

(16) 伊藤裕久『中世集落の空間構造』（生活史研究所、一九九二年）。

(17) 朝尾直弘「近世の身分制と賤民」(『部落問題研究』六八、一九八一年)など。

(18)、安国良一「京都の都市社会と町の自治」(岩崎信彦ほか編『町内会の研究』、御茶の水書房、一九八九年)など。吉田伸之「公儀と町人身分」(『歴史学研究』別冊、一九八〇年)参照。但し、こうした研究動向に対しては小路田泰直氏の批判がある(『日本近代都市史研究序説』序章、柏書房、一九九一年)。

第2節 城下町研究の達成

1 戦国・織豊期城下町論

戦国期の城下町研究としては、歴史地理学の松本(島田)豊寿・小林健太郎氏の古典的研究があった。これらの研究によって、城下は給人居住域と市町からなり、統一的なプランがまだ定立していなかったこと、領国内において城下町が数多くの中心集落の一つにすぎないこと、などが明らかにされた(19)。

またこれに先行する守護城下町については松山宏氏の研究がある(20)。ただ、氏の研究は、史料紹介的なものが多く、国府との関係、戦国大名城下町への展開など、大系的な把握は十分なされていない。

一方、考古学による城下町研究では、七〇年代から本格化した越前国一乗谷（福井県）の発掘調査が多くの資料を提供した。歴史地理学の地籍図にもとづく分析では、惣構内に商工業者は居住しないと考えられていたのに、実際は多くの町屋が軒を連ねていたことが明らかになったり、武家屋敷の内部構造が解明されたりした（3）。

こうした新旧の成果を集約し、研究史の段階を大きく進めたのが小島道裕氏であり、小島氏の影響を受けて考古学・城郭史の立場から新しい視角を切り開いたのが前川要・千田嘉博氏である。

三氏の研究の第一の特徴は、新しい方法論の積極的な採用にある。小島氏は、地籍図をもとにして城下町の町割を復元し、その変遷を都市法の展開と関連づけて論じた（4）。千田氏は、城館のみを個々にみるのではなく、周辺城館と共に城館群として把握し、また城郭を城下町・市場・寺社・交易流通と共に評価する方法を縄張り研究の中に取り入れた（5）。さらに前川氏は、「『掘っていないからわからない』のではなく、『掘っていない部分はどうか考えられる』のか」、制限された発掘調査区の中での検出遺構を都市遺跡全体の中でどのように位置づけるかが重要であるとし、従来の考古学の方法を厳しく批判する。そして地籍図・絵図なども利用し、文献史学・歴史地理学・民俗学なども包括した広

義の考古学の必要性を力説している（6）。

戦国期から織豊期にかけての城下町構造の変遷を体系的な形で提示したのは小島氏である。氏によれば、戦国期城下町の特徴はその二元性に求められる。惣構の中には武士や大名需要のための直屬商工業者が居住し、主従制支配下の給人居住域となっている。一方、惣構外の市町の商工業者は公的・統治権的支配下であり、市町はイエ支配のおよびえない公界・楽市であった。こうした市町に戦国大名は時限立法として楽市令を發布した。しかしこれら全体としての城下町は、他の在地市町や自治都市と並列した存在でしかありえなかった。

ところが安土にはじまる織豊系城下町は、給人居住域もふくめて城下町の一円楽市化をおこない、二元性の克服に成功した。兵と商工と農の分離を進め、また在地の都市機能（在地市町・自治都市）を城下町に吸収して地域構造を再編した。さらに城下町を移転させることによって、武家屋敷地区と町屋地区を明瞭に区分した計画的町割を貫徹させた。そして豊臣政権の全国統一にともない、こうした城下町のあり方が全国的に普遍化した、というのである（7）。

小島氏のこうした体系をうけて、前川・千田氏がいくつかの応用問題を提起している。前川氏は考

古学的見地から、当該期の城下町空間変容の指標を提起した。すなわち条里の破壊、中世都市・寺院・街道の取り込みなどと、家臣団・商工業者の居住域・身分分離を関連させて説明するモデルを作ったのである。また、短冊型地割が長方形街区を構成するセットに織豊系城下町の特徴を認め、その範囲の広がりや城下町の段階指標とした。

さらに前川氏は、織豊期の城下町や自治都市の多くが盛土整地によって地割を一変させていることに注目し、これは旧来の町割、寺院・墓地など旧勢力の遺制を否定し、統一政権との新しい関係で住民を都市の中に居住させることを意図したものである、という(8)。

千田氏の貴重な成果の一つは中心地論を実証的に考察したことにある。天正十一、二年段階の織田・信雄領尾張国において、信雄城下の清須はネットワークを構成する中心集落の一つにすぎなかった。

ところが天正十四年になると、各支城・城下町にいた武士・商職人が中心城下町清須へ集住させられ、清須は他の中心集落を決定的に凌駕して領国内の流通を一元的に把握する存在となった、という(9)。

さらに三氏は、当時の最先端をゆく織豊系城下町との比較において、他系列城郭・城下町との地域差、階層差の分析をも試みている。たとえば、戦国期城下町でも東国・南九州・四国などでは、城と

市町が近接して市町の自立性が低く、都市法も発達しない。反対に、自治都市が強い畿内では、町場に城館が付随するようにして城下町が成り立つという(10)。

今後とも、三氏の共同研究によって、当該期の城郭・城下町の姿はより一層明確にされてゆくであろう。

2 城下町研究の問題点

ここではまず小島・前川・千田三氏の研究史上の評価を再確認しておきたい。第一は、以上に述べてきた通り、戦国・織豊期城下町の実態解明を飛躍的に進めたことである。第二には、城郭・城館と城下町を統合的に検討する視点を開発したこと。三氏の研究をうけて、城郭研究者の多くが城下町への興味を示しはじめている。

いま一つ忘れてならないのは、文献史学・歴史地理学・考古学など、学際的な中世都市研究の契機

を作り出したこと。もちろん前提として一乗谷城下町や草戸千軒の発掘調査、鎌倉・大坂・江戸などの都市考古学の発展もあったが、三氏の研究が中近世都市考古学に「市民権」を与える大きな力になったことはまちがいない。そしてこうした動向をもとに、各地で発掘成果の集積、研究集会・シンポジウムが開催されるようになってきたのである(11)。

このように実証的・論理的にすぐれ、研究動向にも大きな影響を与えてきた三氏の研究ではあるが、いくつかの問題点も残されている。

まず第一は、小島氏のいう都市支配の論理についてである。氏によると「楽」の属性を城下町一円に適用することによって、自立的な都市民・商工業者が織豊政権・大名に服属していったという。これは事実としては正しいと思われる。しかしこれだけでは、城下町の一円楽市化がなぜ可能であったか、都市民がなぜ織豊政権支配を容易に受け入れたのかについて、十分説明がなされていない。これは、一円楽市化における都市民・商工業者側の主体性、権力への要求・対抗の分析が不十分である点に原因があろう。

小島氏の戦国期城下町の二元性論については、惣構内・外それぞれに住む商工業者の性格規定をめ

ぐっていくつかの疑問が提示されている。たとえば越前国一乗谷では、惣構内の小規模で画一的な町屋に住む商工業者は格下の職人であり、むしろ惣構外に有力で広い商圈を掌握する商工業者が居住していたのではないか(12)。また越後国春日山では、上杉氏の領国経済を支えるような御用商人は、城から離れ、旧来からの交通の要衝であった直江津に本拠を置いていたのではないか、などという疑問である。小島氏が予想したような、惣構内に給人(商工業者)、惣構外に「自由な」商工業者という単純な図式は再考の余地があろう。

前川氏の町割論は、なぜ発達した織豊系城下町で多く長方形街区がみられるかの説明を欠いている。千田氏が解明したように、天正十一、二年段階の尾張の多くの城下町がいまだ一本街村状であったこと(13)は、むしろこうした「未発達な」城下町の方が当該期の典型であったのではないかとの疑問をいだかせる(14)。また、たとえ長方形街区を形成した城下町でも都市民は、両側町単位に共同体を形成する場合が多かったと思われ、都市構造の中で両側町をみる視点も重要であろう(15)。

惣構理解については市村高男氏が積極的な批判を展開している。市村氏によれば、一元化したと小島氏が評価した織豊系城下町の惣構内においても、戦国期城下町の多元的な構造は完全には解消され

ず、異質なものが混在した状態であつたろうとする。また従来、惣構といえは大名が建設して、都市民を囲い込んだものと考えるのが一般的であつたが、都市民側から見直す必要がある。藤木久志氏の城籠論⁽¹⁾なども参考にすると、都市民(また周辺村落の農民)が惣構の築造に関与し、それゆえ彼らは戦争の際に惣構の中に籠るのではないかというのである⁽²⁾。同様に、松岡進氏は、城下町形成過程において、上からの意図と下からの合意が微妙なずれをとまなしながら重なりあつていったのでないかとし、今後は下からの合意を検討する必要があると強調した⁽³⁾。

さらに笹本正治氏は、商工業者が強制的に城下町に集中させられたのではなく、大名が用意した城下町の環境に納得してはじめて彼らは移住するのではないかと批判を加えている⁽⁴⁾。これらの指摘をまとめるならば、小島氏の惣構論(城下町構造論)は、都市民・商工業者側からの視点が不十分であるということになる。

同じことは千田氏の中心地論にもあてはまる。近世初頭の尾張をめぐる氏の研究では、清須などの城下町と熱田などの自治都市が何の説明もなく、同種の中心集落として図上に表示されている⁽⁵⁾が、こうした方法は妥当とはいえない。天正十四年段階における清須への都市集中に際しても、自治都市

は中小城下町とは異なった反応を示したはずであるし、その多くはその後都市として生きつづけた。地図上で機械的に上からの重層的構成を見いだし、地域支配の貫徹という視点のみから都市の淘汰を説明する方法では解けない問題も多いだろう。

三氏の描き出した織豊系城下町が近世都市の原型として成長してゆく過程は明快であるが、それら城下町が中世から近世への都市一般の展開の中で、どこに位置するのかは案外わかりにくい。小島氏のいう一元化、前川氏の短冊型地割と長方形街区のセットがなぜ織豊系城下町のみにもみられたのか、積極的な説明はまだなされていない。他大名の城下町や自治都市との相違はわかって、そうした相違の理由については不明であり、比較検討するための方法論も準備されていない。

以上に述べてきたように、三氏の城下町研究の最大の問題点は、戦国大名・織豊政権の支配論理か、のみ城下町の展開を説明しようとしたことだといえよう。たとえそれがどれほど困難な作業であっても、支配される側の都市民・商工業者(・周辺農民)にとっての城下町の意味を問いつづけ、自治都市との比較の視点を追求する必要があるのである。

(1) 松本『城下町の歴史地理学的研究』(吉川弘文館、一九六七年)、小林『戦国城下町の研究』(大明堂、一九八五年)など。

(2) 松山『守護城下町の研究』(大学堂書店、一九八二年)など。

(3) 小野正敏・水藤真編『実像の戦国城下町 越前一乗谷』(よみがえる中世六、平凡社、一九九〇年)など。

(4) 小島「織豊期の都市法と都市遺構」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八、一九八五年)など。

(5) 千田「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」(『ヒストリア』一二九、一九九〇年)など。

(6) 前川『都市考古学の研究』(柏書房、一九九一年)序章など。

(7) 小島前掲論文注(4)、同「戦国期城下町の構造」(『日本史研究』二五七、一九八四年)など。

(8) 前川前掲著書注(6)第二章三、四4。

(9) 千田「尾張国における織豊期城下町網の構造」(村田修三編『中世城郭研究論集』、新人物往来社、一九九〇年)。

(10) 千田前掲論文注(5)、前川・千田・小島「戦国期城下町研究ノート」(『国立歴史民俗博物館研

究報告』三二、一九九一年)など。

(11) たとえば、「清須―織豊期の城と都市―」(第五回東海埋蔵文化財研究会、一九八八年)、「近

世都市の構造」(第三回関西近世考古学研究会大会、一九九一年)、「都市と商人職人像」(第二回

「考古学と中世史研究」シンポジウム、帝京大学山梨文化財研究所主催、一九九一年)など。

城下町を見る新たな視点は、歴史的景観の保存運動にも大きな力となっている。(千田「有子山

・出石城と城下町」、「出石城と町並み保存」、出石有子山城・此隅山城の保存を進める会、一

九九二年など)。

(12) 小野正敏「発掘された戦国時代の町屋」、討論「都市と商人職人像」(網野善彦ほか編『中世都市と商人職人』、名著出版、一九九二年)。

(13) 千田前掲論文注(9)。

(14) 前川・千田氏らの研究では、ともすれば織豊系の中でも最先端の城下町のみを追究する傾向が生じる。一ランクあるいは一時期分「未発達な」城下町にも目配りし、相対化する作業を忘れてはならない。

(15) 玉井哲雄「近世都市空間の特質」(吉田伸之編『日本の近世』九「都市の時代」、中央公論社、一九九二年)参照。

(16) 藤木「村の隠物・預物」(網野善彦ほか編『ことばの文化史』中世一、平凡社、一九八八年)など。

(17) 市村「IV 討論」(『清須』研究報告編、東海埋蔵文化財研究会、一九八九年)、同「戦国期城郭の形態と役割をめぐって」(『争点日本の歴史』四(中世)、新人物往来社、一九九一年)。

(18) 松岡「IV 討論」(『清須』、前掲注(17))。

(19) 笹本「戦国時代の職人・商人」(『中世都市と商人職人』、前掲注(12))。

(20) 千田前掲論文注(9)第19図。

第3節 移行期都市史研究の視角

以上の二節でみてきたような、近年の研究成果を前提とするならば、中近世移行期の都市史研究を進めてゆくためには、どのような課題に取り組む必要があるのだろうか。

自治都市研究、城下町研究を通じて、また文献史学のみならず、考古学・建築史学・歴史地理学とも共通した都市研究の方法として、都市の空間構造論が重視されつつある。これは都市内外における、中心核(寺社・城郭など)、町屋、市町、寺社、惣構などの空間配置に注目し、そこから都市の性格、都市計画、領主権力のあり方などを読み解く研究方法である。

都市の自治や共同体のみを評価基準としていた自由都市論の段階にくらべると、こうした空間構造論を導入することによって、より多様な都市についての豊かな実像が明らかになり、自治都市と城下町を比較検討する可能性も生まれてきたといえる。しかし現在、隆盛をきわめている空間構造論にも

いくつかの問題がはらまれている。

城下町論や建築史学の自治都市研究の多くにおいては、それらの空間構造が大名や寺社など領主権力によって形作られる側面のみが強調されている。史料上の制約から領主権力の主導性に注意が集まるのは不可避であり、また実際、領主の権能が都市形成、再開発に大きな力をおよぼしたことはまちがいない。しかし都市の空間構造の形成、変容においてそこに住む（住むことになる）都市民の志向性が反映されなかったと考えることはできないであろう。いかに困難であっても、都市民の志向を空間構造から読みとってゆく作業を怠ってはならないのである（一）。

従来の都市空間論のいま一つの問題点は、中世における、空間の変容過程をほとんど追究してこなかったことである。中世都市の広域性、分散性、多元性などを指摘するだけで、地域的・時代的な差異やそれがどのような運動方向をもって変化しつつあったのかを分析せず、きわめて固定的、類型的な把握に終始している。そして統一政権によって初めて空間構造が変化させられると考えるのである。確かに、城下町はもちろん、京都や堺など自治都市においても、統一政権による都市改造は大きな意味をもった。だが、統一政権を迎える前に、非織豊系の城下町や自治都市もその空間構造を徐々に

変化させていたはずである。統一政権のみの力で空間を根本的に変容させたとはみるのではなく、諸都市独自の変容の方向性が統一政権の改造と何を同じくし、どこを異にするのか。この点を明らかにしてこそ、統一政権の都市改造の意味も正しく評価できるのである。

では、都市民の志向性、中世都市の変容の方向性を分析するためには、何に注目すればよいのだろうか。当該期の商工業の段階を確定し、都市民Ⅱ商工業者の志向の最大公約数を求めるのも一つの方法である。しかしこれでは余りに漠然としているといえよう。

当該期の都市民の運動エネルギーは多く、都市共同体という形で結晶していたはずである。そこで本稿では、この共同体に注目することで都市民の志向性、空間構造変容の行方を探ることにする。

都市の空間構造と共同体、この両者それぞれと相互関係の分析が本稿の主題となるのである。なお、本論を展開するにあたって、従来の一般的な研究と方法論を異にするいくつかの点について、最初に提示しておく。

第一には、都市民・商工業者の行動論理、志向性を、自治・自立の方向でのみ説明しないこと。都市民の中に大名支配や城下町化への反発をみることは全くの誤りではないが、一方で城下町の惣構構

築への協力、新しい統一的な領国構造、流通機構への期待といった面も見落とすべきではない。しかも都市民のそのような志向を、一部特権御用商人の突出、自治・自立への「裏切り」として切り捨てることはできないのである。

第二は、自治都市と城下町を最初から別物として区分せず、むしろ都市としての共通性を追究すること。都市の全体構造（同心円構造、二元的構造など）や惣構の意義、統一政権支配をうけての変容のあり方（寺院の隔離、都市共同体の把握など）等、両者を分析する上で共通の視角は数多くある。また一定地域のなかでの都市間ネットワーク、相互補完のあり方を経済のみならず、政治・軍事的な視野からも解明する必要がある。その上で都市相互の違い、段階差や時代差などをみてゆくべきである。

第三には、そうした中でも特に①都市民・共同体、また商工業者の志向と、②公権力のあり方に注目すること。ここでもベクトルの向きを正反対とみるのではなく、当該期の矛盾の中で両者が緊張関係をはらみながらも、ある部分では同じ方向へ向かっていったのではないかとの予測が成り立つ。そして都市民・共同体、商工業者がどのように近世の「公儀」権力を規制していったかを把握する努力が多とされるべきであろう。

(1) 伊藤(裕)前掲著書注第1節(16)、玉井前掲論文第2節(15)。こうした姿勢を示す最近の成果としては、斉藤利男「越後府中と直江の津」(渡辺信夫編『近世日本の都市と交通』、河出書房新社、一九九二年)がある。

第
I
部

近世「京都」の成立

序章 研究史

一九六〇年代に盛んであった自由都市論については、序論で内容の紹介と課題の指摘を行った。中世京都はこの自由都市論で主要な対象とされた都市であるが、京都研究固有の問題点も多い。そこで一部、序論第1節第1項とも重なるが、戦国期の京都を自治都市とみなす、従来の主要な議論の誤りを最初に確認しておきたい。

第一に、京都Ⅱ自治都市論においては、都市民が領主権力の支配権を奪うか、委譲されて自治権を獲得したとし、上京・下京の町共同体を自治都市そのものとみなしていた。しかしこれは都市民の地縁的共同体内の自律性を、都市領域全体の自治と誤認した議論である⁽¹⁾。

地縁的共同体内の自律性は、個別町(両側町)単位に自生し、町人を相互に保護・規制するところに本質があった。こうした自律性が一定度成長すると、町共同体は権力支配への抵抗基盤としての側面

をもちはじめた。だが、町共同体の自律性がたとえ地域的に上京・下京規模まで拡大しても、それだけで領主権力を排斥し、都市領域全体の自治権を得るにいたるわけではないのである。

第二に、この点と密接にかかわるが、自由都市論は、領主権力の弱体化にともなう都市市民が都市自治を達成したとし、戦国期における領主支配と都市市民の関係を具体的に追究する視角をもたなかった。

これは、土地領主や座の本所など、中世的な都市領主の支配の実態を戦国期において分析し、町共同体の発達との関係で考察しようとしなかったことに起因する。いま一つには、戦国期の室町幕府や細川・三好政権など、京都支配の公権についての研究が進んでいなかったため、これらの実力を過小評価したことによるが、幕府研究が深められた現在の水準⁽³⁾からは到底認められない。幕府や三好政権が最後まで京都全体の市政権を基本的に掌握していたことを忘れてはならないのである。

第三に、従来の自由都市論においては、統一政権の登場によって初めて権力と町共同体が直接的な交渉をもつようになるとする。そして統一政権が武力で都市市民を圧伏し、町共同体は上意下達機関と墮し、輝かしい自治都市は「敗北」したとする傾向が強いのである。

しかし都市市民の自治は本当に武力のみによって克服されたのであろうか。そもそも町人の自律性は本当に破壊され、町共同体はその本質を失ってしまったのであろうか。「敗北」という評価は、中世末期の町共同体の権能やそれを統一政権が支配に取り込む過程を十分に分析せずに導かれた結論である。

以上のような点に従来の京都Ⅱ自治都市論の限界を認めるとすれば、第Ⅰ部の課題は自ずと明らかになる。まず戦国期段階の京都における領主権力の支配構造を確認する。その上で、新たに成長してきた町共同体と中世的な領主権力の関係、矛盾を解明する。そして統一政権がそうした矛盾をどのようにに解きほぐしていったかを実証的に追究するのである。こうした方法によって初めて、都市京都における中世から近世への移行の意味を全体的に明らかにできると考える。

もちろん従来から、中世後期の京都支配をめぐる研究がなされてこなかったわけではない。そこでは、土地所有論、座研究、幕府論などがそれぞれ別個に行われてきた。

土地所有については、たとえば脇田晴子氏によって、身分的土地所有の強固な残存が主張されている⁽³⁾。また座研究は、商手工業の編成の問題として豊田武氏によって詳細が解明されたが⁽⁴⁾、そこ

では領主(Ⅱ座の本所)支配の側面は強調されず、都市支配の一環として座を研究する視点は薄い。

中世後期における、京都の都市支配をめぐる研究としては室町幕府論が大きな位置を占めている。

佐藤進一氏は、室町幕府がどのような過程をへて、朝廷・本所権力(都市領主)から「市政権」を篡奪していったかを追究した。その過程は、警察、治安、土地に関する行政・裁判、債権関係の裁判、特定商人への課税、特定の商業組織の直接支配・機関内への組み入れの順であったとし、都市民支配から土地支配、商業支配へと進んだという。そして王朝・本所の政治経済機構を解体し、市政を独占したというのである(8)。その後、羽下徳彦・桑山浩然・小林保夫氏らの諸研究によって幕府の京都支配の制度が明らかにされてきた(9)。

しかしこれらの研究の多くは考察の対象を応仁の乱以前においており、戦国期の実態は不明である。また、ここであつかわれる「市政権」とは、鎌倉時代、朝廷が確保していた権利であり、そうした「市政権」にもとづく支配制度と都市民一般との直接的な関係如何についてはほとんど不明のまま残されている。

これに対し今谷明氏は、室町幕府の京都支配研究は、幕府支配を過大評価しすぎていると批判した。

検断権や裁判権のみで都市民や土地に関する支配は貫徹しない。領主の土地所有、権門寺社の商工業支配の重要性を等閑視してはならないとし、むしろ「権門体制論」が有効であろうという。その上で氏は、応仁の乱後の幕府支配制度を解明し、多くの貴重な成果を上げているのである(10)。しかし氏の研究も幕府制度の探究を主な目的としており、権力支配と都市民との具体的関係については十分明らかにできていない。こうした戦国期幕府の京都支配研究の停滞が、京都を自治都市とみなす議論を助長し、統一政権支配の革新性を実際以上にきわだたせたのである(11)。

このように従来の研究では、特に戦国期の京都について、都市支配の全体構造を把握する視角を欠いていた。確かにのちにみるように、中世の京都は統一した都市とよべるような存在ではない。しかし、都市を支配する領主権力が総体としてどのような支配を実現していたかを検討する必要は当然あるであろう。

ところで、序論でも紹介したように、近世京都の町共同体像が近年、詳細に解明されてきた。

吉田伸之氏によると、近世初頭の町には、商業と手工業が未分離な多様な小資本が混在し、町屋敷所有の点でもフラットな構成をとっていた。小資本の中心は住居・店舗・作業場である町屋敷で、家

持ちとしての同質性・近似性を特徴とする。その結果、町中の平和・友愛、他者の排除、形式的平等の堅持が町の論理とされ、町人の論理は町の論理の下に包摂された。これは小資本・小経営がまだ脆弱であり、私的な論理を町の論理に融合させることが自立と存続の絶対条件であった歴史的段階であったことに照応する、という(9)。

また安国良一氏は、家屋敷の買得によって町の構成員となることから、その売買に際しては町の審査・承認が個別の契約よりも優先する。そのかわり買主は家屋敷所持を町によって保障されるという。町が構成員にかかる債務を保障し、みだりに他人の請人に立つことを制限した。そして問題解決は町あるいは町間の自律的仲裁・調停機能にもとづく、とした。ただ氏は、都市社会は生活圏・経済圏において広域性を特徴とし、自己完結的である部面が少ないことから都市社会全体からの視点が必要であることも強調している(10)。

このような近世初頭の町共同体はいつごろ形成されたのであろうか。もちろんそれは長い中世社会の中で形作られたものに違いないが、直接的な前身はいつの時代かに、何らかの契機によって急速に成長したのではなからうか。

自由都市論が下火になって以降も、脇田晴子氏は中世京都の町共同体についていくつかの論点を提示しており、氏の議論がある程度、現在の通説の地位を占めている。そこで特に氏の研究を取り上げ、検討を加えておきたい。

氏の町共同体研究は、村落共同体との連関性・相違性を明らかにしたこと、地縁的結合と職種の結合の構造的連関を解明したこと、自治都市が最後まで領主的土地所有の制約下にあったことを分析するなど、多大の成果を上げている(11)。

しかし、いくつかの問題点もある。

まず氏は、戦国末期においては、物権化した座特権を集めた問屋が座商業を一手に掌握し、こうした問屋や高利貸資本が町共同体を支配したとするが、その実証はほとんどない。

また氏は、門閥町人と中小町人は対立したが、中小町人は町共同体の中に組み込まれていたゆえに抵抗力は弱かった。高利貸資本に主導権を握られていたから洛中が、徳政一揆の際に徳政免除を望んだことに、この点が特徴的にあらわれている、とした。だが門閥町人と中小町人の対立は史料上ほとんど確認されない。都市民が徳政一揆にくみしないことは、高利貸資本の主導権というより都市社会

の論理（私有権の保障、地縁的相互保障）で説明すべきであろう。

脇田氏は、個別町が町組、上京中・下京中へ結集するのが遅れたのは、座中や町や個人が直接に権力に結びついたからである、という。しかし個別に権力と結びつくことと町共同体結合は矛盾しない。中世の自力救済社会では様々な方法で自己の利益を追求するのが常であって、二者択一ではないはずである。

さらに氏は、町共同体は、領主権力から部分的に権力委譲されて自治を達成する、という。しかし何度も指摘したように、町共同体は構成員の利益保護のために結成されるもので、共同体内の自律性を基本とするのであるから、領主権と直接は関係ないのである。そもそも町共同体が構成員の利害を体现する「公」となったとしても、中世において「公」は重層するものであり、町共同体の「公」が領主権力の公権と重層しても何ら不思議ではない。

町共同体は幕府の市政権のもとで末端機構としての役割を担った、ともいう。しかし末端機構として組み込む必然性、その具体的方法、組み込みの論理などは全く不明のまま残されている。また制度上組み込まれたからといって、実態として共同体の自律性が奪われたかどうかは疑問である。

このようにみえてくると、脇田氏の議論もやはり自由都市論の枠組みに規制をうけていることがしられる。中世京都の町共同体の研究を進めるためには、旧来の枠組みを取り払い、その近世への移行を領主権力支配、都市の空間構造との関連で解く方法論の追究が肝要なのである。

いま一つ、政治史的な分析から京都の自治について発言している、今谷明氏の研究についても簡単にふれておく。氏は、都市自治の最高達成形態を天文法華一揆に求め、その敗北後、自治権は細川・三好政権に奪われるとしている¹⁾。確かに都市を単位とする民衆運動としては、法華一揆は一つの頂点であったかもしれない。しかしそれは町を基礎とする共同体の積み上げというより、宗教一揆の側面の方が強かった。その意味で中世的な都市民衆運動の最高達成といえるかもしれないが、町共同体に結集する都市民の連帯はこれ以後、むしろ高揚を示す。今谷氏の評価は一面的といわざるをえない。

本論にはいる前に、第1部で使用する用語の統一をはかっておきたい。

古代末期以来、京中の土地を分割して私有し、そこから地子銭や諸役を徴収した公家・寺社などを「土地領主」とよぶ。中世後期には武士の中にも土地領主になるものがいた。脇田晴子氏は、こうし

た者の中に、比較的まとまった土地を領有して地子銭のみならず諸役をも賦課し、一定の検断権まで保持しつづける「領主」と、小規模な地片を所有して地子銭のみを徴収できる「地主」がいたとするが⁽⁷⁾、本稿では両者を一括して「土地領主」とする。

これら土地領主から土地を借用し、地子銭その他を支払うのが「百姓」である。これは農民、土地耕作者の意ではない。土地を借用するものは公家・寺社であっても、商工業者であっても「百姓」とよばれたのである。

中世の商工業者の特権組織である座を支配するのが「座の本所」、座の構成員を「座人」とする。また主従制をむすぶのが「主人」と「被官」である。

これら土地領主、座の本所、主人をあわせて「都市領主」とする。詳細については第一章でふれるが、都市京都を分割支配するものと一括したい。これに対し、都市京都の住民という意味で「都市民」の語を使用する。これには、百姓、座人、被官や町人がすべてふくまれることになり、その総体を表すものとして「都市民」とする。

(1) この点については、森谷尅久「解説」(今谷明『戦国期の室町幕府』、角川書店、一九七五年)二二九頁、鎌田道隆「戦国期における市民的自治について」(『奈良大学紀要』一二、一九八三年)二八頁にも指摘がある。

(2) 今谷明掲著書注(1)、同『室町幕府解体過程の研究』(岩波書店、一九八五年)など。

(3) 脇田「中世京都の土地所有」(『日本中世都市論』、東京大学出版会、一九八一年)など。

(4) 豊田『増訂中世日本商業史の研究』(岩波書店、一九五二年)など。

(5) 佐藤「室町幕府論」(岩波講座『日本歴史』中世三、岩波書店、一九六三年)。

(6) 羽下「室町幕府侍所考―」(『白山史学』一〇、一九六三年)、同「室町幕府侍所考―二―」(『中世の窓』一三、一九六三年)、桑山「中期における室町幕府政所の構成と機能」(『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年)、同「室町幕府経済機構の一考察」(『史学雑誌』七三・九、一九六四年)、小林「地方頭人考」(『史林』五八・五、一九七五年)など。

(7) 今谷前掲著書注(1・2)。

(8) 桜井英治氏は、職人の経営独占の否定に関して、従来考えられていた「豊臣政権の斬新さ」の

誤りを指摘している（「中世職人の経営独占とその解体」、『史学雑誌』九六一一、一九八七年）。

（9）吉田「町人と町」（『講座日本歴史』近世一、東京大学出版会、一九八五年）など。

（10）安国「京都の都市社会と町の自治」（岩崎信彦ほか編『町内会の研究』、御茶の水書房、一九八九年）など。

（11）脇田前掲著書注（3）。

（12）今谷前掲著書注（1）。

（13）脇田前掲論文注（3）。

第一章 中世的都市支配と社会構造

序章でも述べたように、中世後期京都の支配をめぐる研究は、土地、商工業座など個別の支配関係をめぐるものや幕府論などがそれぞれ別個に行われてきた。そのため一つの都市としての京都が、全体としてどのようなシステムによって支配されてきたのか、総合的な研究もなければ、そうした点を追究する視角にも乏しかった。

もちろんこうしたシステムを簡単に説明することはできない。しかし、町共同体の展開や京都の近世都市化を考察する上では無視できない前提であり、本章でできる限りの分析を加えておきたい。

第1節 都市領主の支配と社会構造

第一に、洛中の土地をめぐる支配についてみる。

すでにはやく脇田晴子氏は、中世京都を一つの統一された都市とみることの誤りを指摘し、京都と上京・下京と洛外の北野社・祇園社・東寺などの門前が複合した都市にすぎないと主張した⁽¹⁾。また高橋康夫氏は、洛中洛外図などをもとに戦国期の洛中の都市空間を復元し、下京に近接して妙顕寺・妙覚寺などの法華宗寺内町があったとしている⁽²⁾。

最近、伊藤毅氏は東寺門前を分析し、寺院を核とする同心円的構造が形成され、そこがかなりの程度完結した都市空間となっていることを明らかにした。そしてこうした構造は洛外の大寺社門前に限らず、洛中の中小寺社門前にも共通してみられると想定している。上京の公家邸にも町屋が建ちならぶ門前空間が付属していた。こうして中世の京都は、京都という「海」に、寺社・公家門前や町（共同

体）という「島」が無数に浮かぶような空間構造をとっていたとした⁽³⁾。

こうした成果にもとづけば、脇田氏が一つの都市と考えた上京・下京もいくつかの空間のモザイク状の複合にすぎないことになる。

それでも寺社や公家の門前では、ある程度まとまった土地支配が展開されていたと思われるが、洛中の大部分ではまとまった土地を一時的に支配する領主はいなかったと思われる。

一般に洛中の土地領主は、借地人である百姓へ土地を割りつけて地子銭や諸役を徴収し、また百姓の家屋・家財の検断権をもっていた。そのかわり土地領主は、百姓の土地用益を保証してやったのである⁽⁴⁾。ただ、十六世紀半ば以降になると、都市民の地子銭無沙汰闘争が高まりをみせ、土地領主の支配は不安定化してゆくこととなる⁽⁵⁾。

第二に、商工業支配をみる。

中世京都において商工業活動を行う場合、なんらかの座組織に所属しなければならいとされている。本稿でいう座組織とは、公家・寺社を本所とするいわゆる座のみならず、天皇・朝廷をいわば本所とする供御人・駕輿丁などもふくめて考える。

座組織の領主として商工業支配にあたった本所は、座役・供御役などを座人から徴収した。そしてその見返りに、朝廷や幕府に働きかけて、商工業活動における座人の独占権を保障してやったのである。都市京都の基幹産業は商工業であり、そうした商工業を支配するこれら本所も都市領主の一種と規定できよう。

中世の京都には武士のみならず、公家・寺社の被官が数多く生活し、主人と主従制的な関係を取り結んでいた。將軍に直属する中間や小者なども、被官と類似した一面をもつ。彼らの多くは、普段は商工業などに従事する一般的な都市民で、主人に軍役・夫役を奉仕するかわりに、幕府や他領主の検断・諸賦課が免除されるよう交渉してもらったり、身柄を保護されたりした。首都京都であればこそ、武家・公家などの手近な軍勢力・労働力として使役されるこれら被官たちが存在したのであり、その主人は一種の都市領主といえよう。

主人との間に結ばれる被官関係は、都市民にとって決してマイナスではなかった。従来、被官関係はタテの支配をはかる領主権力側が主体的に推進したとされ、ヨコの共同体的な結合と矛盾する側面を重視する傾向が強かった。だが少なくとも戦国期の洛中においては、それは都市民個々の権益を保

障する重要な要素であり、都市民側の積極的要求としても被官関係は取り結ばれたのである。

このように中世都市京都では、土地、商工業、主従制など多様な面で都市領主による支配が展開していた。ここで都市領主となったのは、天皇・朝廷、公家、寺社、武士などで、支配階級に属するすべてのものがその可能性を有していた。

こうした分割支配の実態をうけて、洛中においては一定の領域を一円的に領有する支配権はほとんど存在しなかった。たとえば寺社門前や法華宗寺内などにも座人や武家被官は存在したであろうし、また北野社に廻役を納める洛中散在の酒屋は、居住する地の土地領主に地子銭を納入していたはずである。さまざまな主体がさまざまな都市領主として京都を支配し、一人の都市民はそれぞれの面で支配に服したのである。

当該期の都市社会構造はこうした都市支配のあり方に強く規定されていた。

この時期、各都市領主と領民(百姓・座人・被官)の間に取り結ばれた諸秩序が、都市を構成する基礎的な単位となっていた。これらの秩序は、都市が生み出した富(労働力を含めて)をそれぞれの方法で収奪することを目的に形成されたものである。しかし、実際にはそれにとどまらず、各々の秩序が

一定の裁定権や規範を有し、都市社会の中で領民を保護する機能をもっていた。そして領民も、朝廷・幕府の諸賦課免除、検断、裁判など、多様な点でこれら秩序の保護機能に依存していたのである。こうした秩序が無数に集まって、全体として京都の都市社会構造が形成されていた。

しかしここで注意したいのは、各秩序は決してタテ割に完結していたわけではなく、複数の秩序が錯綜しつつ存在していた点である。

あえて図式化すれば、ある領主は土地領主、座の本所、主人として、それぞれ別の都市民を百姓、座人、被官として支配することになる。逆にある都市民に注目すると、彼は百姓、座人、被官というそれぞれの面で、別の土地領主、本所、主人と関係を結ぶことになるのである。

このように、中世(後期)京都における都市構造は、各都市領主と各都市民の間に結ばれた錯綜した秩序を基本とし、こうした秩序の総体によって構成されていた。

(1) 脇田前掲著書注序章(3)。

(2) 高橋「戦国動乱と京の都市空間」(『京都中世都市史研究』、思文閣出版、一九八三年)。

(3) 伊藤「中世都市と寺院」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』I「空間」、東京大学出版会、一九八九年)。

(4) 瀬田勝哉「近世都市成立史序説」(『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年)、脇田前掲論文注序章(3)など。

(5) 馬田綾子「中世都市と諸闘争」(『一揆』三「一揆の構造」、東京大学出版会、一九八一年)など。

(6) 豊田武『座の研究』(同著作集第一巻、吉川弘文館、一九八二年)、脇田晴子「座の性格変化と本所権力」(『日本中世商業発達史の研究』、御茶の水書房、一九六九年)など。

第2節 室町幕府の京都支配

序節でふれたように、佐藤進一氏は、室町幕府が朝廷・公家寺社からの尊権によって市政権を独占したとしている。確かに純粹制度上はこうした理解に誤りはない。しかし幕府の京都支配の実態はいかなるものだったのだろうか。

去晦日、室町土御門三福寺地子錢未進為催促、大館兵庫殿中間罷越、立料申懸之、六十錢事為御法間、一貫二百文可取之由云、存外なる申事、不及覚悟亭主雖申之、種々悪口、家具携、罷出候間、其町人出合、打擲仕之、其旨被入上意御耳、彼宿亭、当方被官人堤三郎兵衛申次、為此方如御法可成敗之由御申、御代々御判被成下之、当方被官人為上意不可有御成敗之由、三管領同前也、右筆かたへ御尋之處、近年事不存知之申之、然者、御判・証文等被御覽度之由、細川伊豆守

(比叡山)

・本郷常陸介兩人して被仰出之、只今則可備上覽之處、此一乱以來、山迄預ケ置候間、向後召寄

可懸御目云

、其外証例多之、常德院殿江州御動座之時、鳥羽・田中事、木村民部事、近年、北

白川井口跡事、為此方不及御成敗、被仰出申付候者也、只今事、先開闢申合可致成敗云々、(一)

この三福寺地子錢催促事件では、大館兵庫の中間に對して乱暴を働いた「亭主」が、政所執事伊勢貞孝(蜷川親俊の主人)の被官人であつたため、幕府の検断をうけず、独自に成敗をうけるべきだとい

ている。

このように、主人には被官の検断権が認められており、土地領主にも一定の關所検断権があつた。

また幕府の酒屋・土倉役や商売役を、公家・寺社領の百姓、被官や役人などが免除されている例は枚挙にいとまがない。

(一四九四)

洛中洛外諸商売并徳役等条々目録 明 応 三
十一 十四

一諸寺社領地上百姓事

(足利義高)

一公方御小者事

(日野富子カ)

一上様御中間・御小者衆事 付、御地上百姓等事

一御所々御被官人事 付、御地上百姓事

一御所御女房衆御被官人事

一公方役仕諸職人事 (政資)

一吉良殿・石橋殿・渋川殿并日野殿、其外公家・門跡・権門勢家被官人事 付、地上百姓等事

一四府駕輿丁事 付、釜殿事

一御牛飼并御輿舁事 付、彼等被官人事

一駒方神人事

一小舎人・雑色并政所公人 付、彼等被官人事

一御元服以下御祝諸役人被官事

以上(2)

この史料そのものは、足利義高元服の臨時課役については免除特権を認めない、とする人々の書き上げである(3)。しかし、ここに挙げられた百姓・被官人・役人などは通常、課役を免除される人々であつたといえよう。

この他、地口銭・棟別銭・夫役などの都市課税も戦国期には多くを徴収できなかった(4)。

室町幕府の都市法のほとんどが都市民に直接交付されなかったことも重要である。当該期の都市法の大部分は都市領主の権利保護の法令であり、これらは文面上の宛先にかかわらず、公家・寺社などに与えられた。

徳政令・撰銭令など都市民一般を対象とする法令さえ直接、都市民に伝達されたわけではない。

定 徳政事

(中略)

右条々、せんれいにまかせて、(先例) (定置) (所詮) (沙汰) (穩便) ためおかる、所也、しよせん拾分一をさたし、おんひんに(白昼) (約) (馳過) (流質) 女をもつてはくちうにとるへし、若このやく月をはせすきは、なかれしちたるへきうへハ、徳

(沙汰)(及) (左右)(寄) (嗽々)(儀) (置手)
政のさたにおよふへからず、萬一事おさうによせ、かうく^ノのきにおよは、をきてとい、
取てとい、ともにもつてさいくわにしよせらるへし、このほかの借錢以下事、相たかひにち
進) (罪科) (処)
うしんせしめ、御下知をもつて其沙汰たるへきの由、所被仰下也、仍下知如件、
(一五二〇)

永正十七年二月十二日

(松田秀俊)

丹後守平朝臣判

(斎藤時基)

上野介藤原朝臣判

右札二枚、上下京二打之、

為公人与雑色打之、立売

辻二一枚、四条町止一枚、(5)

(辻カ)

ここでは幕府の徳政令が、文書の奥に記された通り、上京・下京のそれぞれ繁華街に打たれること
で公布されている。

一上下京諸土倉、今度徳政之儀付而御停止之旨被仰付、以政所公人・開闢・雑色令相触之、先以

忝存候由申、(後略)(6)

これは、徳政停止の旨を政所公人らが洛中に触れ知らせたことを示す。

しかしこうした方法によって、幕府法が十分、都市民にゆきわたったわけではない。たとえば、永
正五年(一五〇八)の撰銭令では、高札を洛中に打つとともに、畠山尚順に対して、その「洛中被官人」
に触れるよう命じなければならなかった(7)。

また永禄年間と推定される喧嘩停止の法令では、諸被官を取り締まるよう、それぞれの主人にあた
る伊勢貞孝らに命令が下された(8)。

このように幕府は、市政権にかかわる局面で、都市民に法令を手交するすべをもたなかった。これ
は、都市民が中世的な領支配秩序の中に包摂され、都市を支配する公権力である幕府と直接対峙す
るはずの「公民」としての都市民が京都には存在しなかったからでもある。

以上にみてきたように、幕府が獲得していた検断権や都市課税権は、中世的な都市社会のあり方に
大きな制約をうけ、また都市法令も直接都市民に施行するにはいたらなかった。畢竟、幕府の市政権
は、むしろ中世的な都市構造に依存することになる。

では、こうした幕府や都市領主は全体としてどのようなシステムで京都を支配していたのであろうか。

幕府は、市政権にもとづいて行政や裁判の場で都市領主の支配・権益を保障した。すなわち領民の反抗に対しては個々の領主に代わって制裁を加え、領主間で紛争がおこれば裁定する。

しかしこのようにいわば「公的な」関係のみによって、幕府と都市領主の相互関係がすべて説明できるわけではない。

幕府法廷で裁判を行ったり、幕府の市政権の発動を依頼して法令を発給してもらったりする時、都市領主は必ず、幕府の有力者や担当の幕府奉行に礼銭を支払う。権力を直接形成するこうした上級の武士ではない中下級の武士も、地子銭などを徴収する代官となり、都市領主の暴力装置の役割をはたした。そして中間搾取を行い、やはり礼銭収入を得たのである。

先にみた、三福寺地子銭催促事件に際しては、この地子銭催促を大館兵庫の中間が行っているが、これは大館兵庫が地子銭徴収の代官であったことによるのだろう⁽¹⁰⁾。

武士たちのこうした個別的、私的活動は、ある意味で幕府の市政権を補完する、権力行使の一形態

といえるだろう。実際、彼らが権力の一端を形成していたからこそこうした働きかけが可能であったのであり、また彼らの活動なしに幕府の市政権は完成しなかった。

以上、全く概念的にしか分析できなかったが、室町・戦国期の京都においては、領主権力総体による都市支配体制がしかれていたことをのべてきた。都市領主の諸支配権を幕府・武士が公的・私的に保障し、土地・生業・人などから得られる都市支配の収益を、礼銭というかたちをも使って領主権力各層内で分配していたわけである。

だが幕府が、このように公家・寺社の形成する社会秩序や礼銭に深く依存していたことは、公権力たる幕府が公家・寺社の支配権を制限し、統一的な都市支配を行う道を閉ざすことにもなった⁽¹¹⁾。

戦国期の武士が幕府公権に一元的に結集せず、個別に権益の追求を行っていたことも重要である。こうした点は従来の室町幕府論、さらにいえば中世の権力論が等閑視してきた側面であるが、戦国期の権力構造を考える上で避けて通れない問題であるといえよう。

これらが、統一的な都市支配にとって最大の障害となっていたのである。

(1) 『親俊日記』天文八年(一五三九)八月三日条。

(2) 『蜷川家文書』二九四「洛中洛外諸商売并徳役等条々目録」。

(3) 『蜷川家文書』二九三「足利義高元服等要脚借用銭条々事書」明応三年十一月十四日は、前掲

史料注(2)と同日付で、「一彼兩役

目録在
別番

如酒屋土倉役、不□□諸役免除 綸旨 御判之在所、同

(権門)

□□勢家被官、随分限可相懸之」とある。

(4) 馬田綾子「洛中の土地支配と地口銭」(『史林』六〇一四、一九七七年)など。

(5) 『室町家御内書案』「徳政令案」。

(6) 『親俊日記』天文八年七月二十五日条。

(7) 一 撰銭事、近年令超過先規条、被定御法、被打高札於洛中之上者、守彼札、於古今渡唐銭
可取用之趣、堅可被相触洛中被官人・同分国中所々之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正五年八月七日

(諏訪長直)

沙弥

(飯尼貞運)

近江守

(畠山尚順)
尾州代

(『建武以来追加』「室町幕府奉行人連署奉書案」、今谷明・高橋康夫編『室町幕府文書集成』奉行人奉書篇(思文閣出版、一九八六年、以下「奉書集成」と略す)(二五〇七)

(8) 『蜷川家文書』七五五「上野信孝・進士晴舎連署奉書」(永禄四カ)八月廿四日付。

(9) 前掲史料注(1)。

(10) 今谷明前掲著書注序章(1)第四章参照。

第二章 町共同体の確立

第1節 共同体確立前夜

1 都市民衆の運動方向

中世京都の民衆運動は、第一章でみたような社会構造に規定され、都市領主個々に対する個別的抵抗を主とすることになった。そうした延長線上で応仁の乱後、都市民衆は様々な面で一層力をたくわえてくる。

第一に、瀬田勝哉・脇田晴子氏などによると、都市民の経済的成長にともなって土地領主権が弱体

化し、百姓の土地保有権が強化されるという(1)。

これによって百姓の家産、すなわち家屋・家財への領主支配権が制限をうけるようになり、百姓の家屋所有が確立してくる。たとえば、瀬田氏によると、十五世紀後半、家屋の売買・質入の自由化が進み、家持・借家人関係も発生するという(2)。また高橋康夫氏は、同時期以降、生活空間の造形、すなわち家屋装飾の発達がみられるが、これは家屋所有の安定化を前提にしている(3)。

しかし土地領主に対して家産所有が自立することは、一方で土地領主の保障力が低下することをも意味し、百姓は家産・家屋を自力で維持する必要性に迫られることになる。徳政令の頒発や撰銭状況の激化は、債権・貨幣価値の不安定性をもたらし、その点でも家屋は最も重要な家産となっていた。中世京都の都市域の広がりや正徳に復元することは不可能である。高橋康夫氏は、酒屋・土倉や祇園会の山鉾の位置などを地図上におとし、その密集域を都市領域と考えた。これによると、応仁の乱前にくらべて乱後は都市面積が極端に小さくなったという(4)。こうして都市域が縮小する一方で、応仁の乱後、経済が一層発展したことは必然的に市街の稠密化をもたらした。

このような都市の状況は高度な土地利用を必要性とせしめ(5)、都市民に土地・家屋をめぐるきびし

い相互規制を強いていったものと想像される。

次に、座組織の変質を取り上げる。

都市民の生業を安定させる中世的な形態として、座や職^{シヤ}があった。これは座の領主の保護によって独占的な商工業経営を可能とするものであったが、低劣な生産力水準が商工業者の総数規制を必然化していたともいえる。

ところが戦国期になると座も変化を余儀なくされてゆく。一つには、本所の支配権が低下して、座役などの無沙汰が多くみられるようになる。これは座組織が独立性を強め、座人が本所の支配・保護下からの脱却を進めつつあったことの結果といえる。

もう一つの変化は、座・職の独占権が徐々に侵されていったことである。表1は、商工業の独占権が侵害された事例を集めたもので、一五二〇年代以降、こうした事例が多くなることがわかる。生産力・経済流通の発展が中小・洛外商工業者の輩出を促し、商工業独占が崩壊傾向を強く示しはじめたのである。

本所の支配権の低下、座独占の形骸化という事態をうけて、新しい商工業者組織も生まれた。それ

表1 商工業独占権の侵害

No.	年月日	被侵害者	独占内容	侵害者	侵害内容	出典
1	文明10(1478).4.17	中興家俊	御膳六段紋使用	(非分之類)	此紋を付ける	親元日記
2	明応9(1500).10.10	松崎良精	三嶋御用	良精法師	直買取	証書之引付
3	文應2(1502).6.7	松崎社大宮殿丁供今 宮神人達	魚物商賣	?		証書之引付
4	永正元(1504).8.23~	米崎寺上人・座中	洛中米売買	?	小売在所へ直送、他所市立	徳川家文書
5	6(1509).5.-	酒屋中	酒製造・販売	?	坂本・奈良・河内・摂津商売	徳川家文書
6	7(1510).5.3	九条座中	技藝製造・販売	?	製造・販売	東寺百合文書
7	14(1517).12.15	石清水八幡宮大山崎神 人	油製造	東寺地下人 販売人以下	大山崎の油を買わず、方々から	藤宮八幡宮文書
8	16(1519).7.9	四府殿丁	(絹布以下花物)	(非分族)	運送	好野守吉宛果文書
9	大永2(1522).6.5~	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	魚物を洛中問凡へ運送	(非分族)	絹布以下花物	別本殿引付四
10	3(1523).6.22	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	洛中商売	助太郎	押して商売	・今宮村文庫
11	8(1528).閏9.25~	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	洛中商売	大倉人	直売・押売等	別本殿引付四
12	享祿2(1529).12.14	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	洛中商売	(非分族)	押売・押持	田中光治所蔵文書
13	天文8(1539).5.27	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	絹製造・販売	(非分族)	細工と号し製造・販売	古文書集
14	9(1540).10.-	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	洛中洛外其外果物	山科親民等	悉商売	松崎社大宮殿丁供今 宮神人
15	11(1542).閏3.-	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	(非分族)	西岡物賣目新市で商売	別本殿引付四
16	12(1543).5.5	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	(非分族)	切花・束紙を櫃で売買	徳川家文書
17	13(1544).12.-	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	(非分族)	無料売買	別本殿引付一
18	14(1545).8.7~	北野宮神人西京詣主等	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	洛中洛外土倉	悉売買	北野文書
19	15(1546).5.-	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	(非分族)	切花・束紙を櫃で売買	別本殿引付一
20	16(1547).2.28	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	(非分族)	切花・束紙を京中に運送し、売買	土岐文書
21	3.-	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	(非分族)	新儀非分に売買	別本殿引付一
22	永祿7(1564).12.27	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	悉商売	古文書集
23	11(1568).11.29	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	洛中に運送、松崎社大 宮殿丁供今宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人
24	天正11(1583).11.-	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	松崎社大宮殿丁供今 宮神人	悉商売	松崎社大宮殿丁供今 宮神人

◇ 本表は、洛中を中心とし、松崎の松崎氏のものに限った。年月日は主として文書の発給時を示し、侵害が行われた時点とは異なる所もある。

が、脇田晴子氏がいうような問屋制商工業支配であるのか⁽⁶⁾、最近、桜井英治氏が大工について明らかにしたような都市基盤の組織であるのか⁽⁷⁾、本稿では十分検討することはできない⁽⁸⁾。

しかしいずれにせよ、戦国期京都の商工業者の大部分をしめる中小の業者は、強固な独占権や総数規制の恩恵をうけず、領主の十全な保護を期待できない状況に置かれつつあったことはまちがいないだろう。もちろん、原材料の入手や製品の流通など、直接生産にかかわっては商工業者の組織が機能した側面もあったかもしれない。だが、資金・信用の確保、経営の永続性などにおいてはこうした組織の保障力に多くを期待できなかったであろう⁽⁹⁾。

彼らは都市社会の中で、商工業者組織とは別に、それぞれの経営を安定させるための体制を構築する必要に迫られていたのである。

三番目に被官や役人についてみてみよう。

幕府の公人注文をみると、彼らが洛中に散在して住んでいたことがわかる⁽¹⁰⁾。彼らは、「公方人之第一として御成・御物^二付申」すことを理由に、「不致諸公事、諸商売お自由^二仕事、惣中并宛身、^(歴)暦々御下知頂戴」と特権を主張している⁽¹¹⁾。

の最も基本的な行政文書であった⁽¹³⁾。ここではそうした幕府奉行人奉書の内、地下人集団を宛所とするものについて検討する。

洛中の「百姓中」等に宛てた幕府奉行人奉書は、土地領主への地子銭等の納入を命じたものがほとんどで、奉書の実際の交付先は必ず土地領主であった(表3)。土地領主に対応する存在として「百姓中」がある程度のまとまりを示していたことは間違いないが、奉行人奉書に関する限り、それは領主に対置されて初めてあらわれる存在でしかなかった。

「座中」等宛の幕府奉行人奉書には、座の本所への役銭等の納入を命じるだけでなく、座特権を保障するものも多くふくまれている(表4)。後者の奉書中には、座特権違反者は「為諸本所同座中、随見合、加減敗」えてもよいとするものがあり⁽¹⁴⁾、「座中」が幕府の保障を自らの力で実態化できる権能を有する集団であったことがわかる。

さらに、幕府奉行人奉書には、洛外の「郷中」・「地下人中」等に宛てたものが存在する(表5)。これらには、「喧嘩」・「違乱」の停止、「忠節」行動の期待、法令の「存知」や近辺の領主への「合力」命令などさまざまな内容がふくまれている。

表3 「百姓中」等宛 幕府奉行人奉書一覧

No.	年月日	宛先	所在地	内容	出典
1	明応7. 10. 10	当地上百姓等中	錦小路門・綾小路門	地子銭沙汰せよ	日野家親文書
2	7. 12. 25	当地上衆中	土御門室町	地子銭沙汰せよ	東山御文庫記録
3	8. 4. 23	万松軒領地上衆中	五条東洞院	地子銭以下沙汰せよ	尊経閣蔵年文書
4	9. 7. 13	当社(所)在地衆中	北小路船橋	地子銭以下沙汰せよ	富田仙仙助蔵文書
5	9. 7. 13	当所在地衆中	中御門油小路春日西洞院	地子銭以下沙汰せよ	同
6	永正4. 5. 23	地上衆中	一条河内	地子銭満足等沙汰せよ	一条文書
7	6. 7. 24	当地百姓中	大宮	地子銭以下沙汰せよ	宝鏡寺文書
8	6. 7. 24	当地百姓中	五辻大宮	地子銭等沙汰せよ	同
9	6. 7. 27	当地百姓中	土御門万里小路	地子銭以下沙汰せよ	久我家文書
10	6. 10. 9	当地地下人中	小川	地子銭沙汰せよ	実相院文書
11	7. 12. 21	当地百姓中	一条河内	地子銭沙汰せよ	一条文書
12	7. 12. 30	当地沙汰人由	西條松原	地子銭沙汰せよ	同

本表は基本的に、今谷明・高橋康夫共編『室町幕府文書集成』奉行人奉書編(一九八六年、思文閣出版)によった。

表3 「百姓中」等宛 幕府奉行人奉書一覧

No.	年月日	宛先	所在地	内容	出典
1	明応7. 10. 10	当地上百姓等中	錦小路町・綾小路町	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
2	7. 12. 25	当地上衆中	土御門室町	地子銭沙汰せよ	東山御文庫記録
3	8. 4. 23	万松軒領地上衆中	五条東洞院	地子銭以下沙汰せよ	尊經閣編年文書
4	9. 7. 13	当社(所)在地輩中	北小路船橋	地子銭以下沙汰せよ	富田仙助所蔵文書
5	9. 7. 13	当所在地輩中	中御門油小路春日西洞院	地子銭以下沙汰せよ	同上
6	永正4. 5. 23	地上衆中	一条町小河町	地子銭請足等沙汰せよ	一条文書
7	6. 7. 24	当地百姓中	大宮	地子銭以下沙汰せよ	宝鏡寺文書
8	6. 7. 24	当地百姓中	五辻大宮	地子銭等沙汰せよ	同上
9	6. 7. 27	当地百姓中	土御門万里小路	地子銭以下沙汰せよ	久我家文書
10	6. 10. 9	当地地下人中	小川	地子銭沙汰せよ	実相院文書
11	7. 12. 21	当地百姓中	一条町小川	地子銭沙汰せよ	一条文書
12	7. 12. 30	当地沙汰人中	唐橋猪熊	地子銭沙汰せよ	東寺百合文書
13	11. 12. 23	当地沙汰人中	三条六角烏丸	地子銭以下沙汰せよ	兩足院文書
14	12. 9. 11	当地上百姓中	近衛西洞院	地子銭沙汰せよ	土御門文書
15	15. 9. 27	所々百姓中	洛中所々	地子銭沙汰せよ	天竜寺文書
16	16. 6. 8	当地百姓中	錦小路西洞院・錦小路室町	地子銭沙汰せよ	同上
17	大永2. 8. 28	当地百姓中	北少路大宮	地子銭沙汰せよ	大徳寺文書
18	5. 6. 15	当地上衆中	四条町・六角町	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
19	6. 12. 27	当地百姓中	(不明)	地子銭沙汰せよ	九条家文書
20	7. 5. 28	当地百姓中	三条坊門烏丸	地子銭以下沙汰せよ	壬生家文書
21	享祿3. 6. 26	当地上衆中	五条坊門	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
22	4. 7. 10	当地百姓中	北小路大宮	地子銭以下沙汰せよ	大徳寺文書
23	?. 4. 8	当地上衆中	四条・六角	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
24	天文2. 9. 22	当地百姓中	北少路大宮	地子銭以下沙汰せよ	大徳寺文書
25	3. 10. 29	当地上衆中	六角	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
26	5. 10. 27	当地百姓中	万里小路高倉土御門正親町	地子銭沙汰せよ	久我家文書
27	5. 12. 29	当地百姓中	近衛町	地子銭沙汰せよ	吉田文書
28	5. 12. 29	当地百姓中	綾小路町	地子銭沙汰せよ	同上
29	5. 12. 29	当地百姓中	油小路	地子銭沙汰せよ	同上
30	7. 12. 16	当地百姓中	春日西洞院町	地子銭沙汰せよ	久我家文書
31	8. 2. 25	当地百姓中	土御門万里小路	地子銭以下沙汰せよ	大徳寺文書
32	8. 5. 11	当地百姓中	六角東洞院	地子銭沙汰せよ	八坂神社文書
33	9. 6. 26	当地百姓中	(不明)	地子銭等沙汰せよ	田中教忠所蔵文書
34	10. 7. 12	当地百姓中	(慈福寺)	地子銭沙汰せよ	後鑑所収文書
35	(~13). 11. 21	当地上衆中	四条室町	地子銭沙汰せよ	鹿王院文書
36	14. 12. 28	当地上衆中	下京	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
37	15. 9. 30	当所名主百姓中	春日西洞院町	年貢・地子銭以下沙汰せよ	久我家文書
38	15. 12. 14	当地百姓中	北少路大宮	地子銭等沙汰せよ	大徳寺文書
39	15. 12. 26	当地百姓中	(安居院)	地子銭沙汰せよ	宝鏡寺文書
40	15. 12. 30	当地百姓中	五条坊門室町	地子銭沙汰せよ	金蓮寺文書
41	16. 9. 22	当地百姓中	四条室町	地子銭相拘えよ	鹿王院文書
42	18. 5. 21	当地上百姓中	四条	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
43	21. 7. 13	勢田分所々百姓中	(不明)	地子銭并役銭以下沙汰せよ	久我家文書
44	22. 6. 22	当所百姓中	四条綾小路	地子銭等沙汰せよ	田中教忠所蔵文書
45	永祿元. 11. 29	当地百姓中	下京・六角	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
46	元. 12. 29	当地百姓中	一条	地子銭沙汰せよ	同上
47	2. 3. 6	当地百姓中	四条・六角	地子銭沙汰せよ	同上
48	2. 3. 11	当地百姓中	四条・六角	地子銭沙汰せよ	同上
49	2. 11. 3	当地上百姓中	四条綾小路	地子銭沙汰せよ	吉田文書
50	3. 7. 14	当地百姓中	六角	地子銭沙汰せよ	日野家領文書写
51	3. 12. 23	当地上百姓中	四条・六角	小舎人・雑色以下諸役人居 住停止	同上
52	4. 3. 18	当地小舎人雑色中	四条・六角	地子銭沙汰せよ	同上
53	5. 12. 28	当地百姓中	大宮	地子銭沙汰せよ	田中教忠所蔵文書

本表は基本的に、今谷明・高橋康夫共編『室町幕府文書集成』奉行人奉書編(一九八六年、思文閣出版)によった。

表4 「座中」等宛 幕府奉行人奉書一覽

N O	年 月 日	宛 先	内 容	出 典
一	(文明一〇)・四・一七	酒屋中 一衆中	柳桶六星紋の使用特權安堵 錢通私宅等々所、商売課役免除	親元日記 蠅川家古文書
二	一六・一・一・二三	中村与次	四糸油小路酒屋、焼失質物の請出免除	同 右
三	七・三・八・二六	野洲井・沢村・酒屋土倉中	洛中洛外酒屋土倉并味噌屋等役銭を納入せよ	同 右
四	元・一・二・二三	中西与三	洛中米商売役を沙汰せよ	同 右
五	元・一・二・二三	中西与三	織手方機別役を沙汰せよ	同 右
六	元・一・二・二三	米屋中	洛中洛外米屋公事を沙汰せよ	壬生家文書
七	元・一・二・二三	米屋中	洛中洛外米屋公事を沙汰せよ	川端道喜文書
八	元・一・二・二三	京創座	洛中諸口駄米を場につせ	蠅川家古文書
九	元・一・二・二三	場沙汰人中 (米屋中)	洛中諸口駄米を場につせ	東山御文庫記録
一〇	元・一・二・二三	米場座中	洛中諸口駄米を場につせ、他所立市停止	蠅川家古文書
一一	元・一・二・二三	佐野三郎左衛門尉 (四府駕輿丁座中)	組灰課役を沙汰せよ	古文書
一二	元・一・二・二三	組古物反古詰商人中	非分族の絹布以下売買停止、御輿宿御番等を勤仕せよ	狩野亭主豆亀集文書
一三	元・一・二・二三	帶座中	小物反古詰役を沙汰せよ	古文書
一四	元・一・二・二三	當座商人等中	率分・立売小割座関等を沙汰せよ	田中光治所蔵文書
一五	元・一・二・二三	組座中	組課役を沙汰せよ	久我家文書
一六	元・一・二・二三	享祿	座中法度違犯者は當座衆中として申付けよ	三浦周行所蔵文書
一七	元・一・二・二三	天文	諸公事・次鎌輿役等免除	東山御文庫記録
一八	元・一・二・二三	(後藤源四郎治光并同名三人)	龜屋五位女への帶座座頭職安堵を存知せよ	後藤文書
一九	元・一・二・二三	當座衆中	魚商売棚公事銭免除、唐櫃物役銭を納所せよ、此外非分役銭免除	田中光治所蔵文書
二〇	元・一・二・二三	御厨子所供御人中	諸口塩倉物過書馬并抜荷等往反は諸本所同座中見合いに成敗せよ	言繼卿記
二一	元・一・二・二三	(當座中)	洛中洛外御座中役銭を沙汰せよ	土岐文書
二二	元・一・二・二三	御服左近右近座中	諸商売役免除、非分抜売停止	狩野亭主豆亀集文書
二三	元・一・二・二三	(下京四府駕輿丁米座)	御服商売役銭を相拘えよ	同 右
二四	元・一・二・二三	御服商売座中	惣別諸役免除につき紙折敷商売も相違無し	同 右
二五	元・一・二・二三	駕輿丁猪熊座中	諸國渡において沙汰免除	同 右
二六	元・一・二・二三	(徳橋師内木小太郎)	諸國渡において沙汰免除	徳橋師文書
二七	元・一・二・二三	(四府駕輿丁左近府猪熊座)		京大所蔵壬生家文書
二八	元・一・二・二三			

集団としての「座中」のみならず、それらの長と思われるものの宛の奉書も収載した。

たとえば享禄二年（一五二九）、東山十郷中宛てに出された奉書では、近隣の吉田社領内の「非分輩」の違乱を停止する下知がなされたことを「存知」し、「致嗽儀族」がいれば「東山十郷」として吉田社に「合力」するよう命じている（一〇）。この奉書の実際の交付先は吉田社である。しかし「郷中」とよばれる地縁的な共同体が個々の領主の支配圏を越えて結集し、当該地域の諸問題を自律的に解決する能力を保持するようになっていたこと前提にしてこの奉書が出されたことは間違いない。幕府や吉田社は、「郷中」にそうした権能があつてはじめて法令の遵行を期待しえたのである（一一）。

このようにみてくると、それがたとえ実際には共同体に交付されない法令であつたとしても、「百姓中」はさておき、「座中」や「郷中」が一定の自律性をもつことを前提に、幕府はそれら宛の奉行奉書を発給していることがわかる。

ところで幕府関係の法令を見渡した時、町共同体を宛先とするものは天文年間以前にはみられない。こうした傾向は幕府奉行人奉書に限らず、管見の限り、天文三年以前には洛中の町を宛先とする文書は全くみることができないのである（表6）。「座中」や「郷中」宛の法令が十五世紀後半以降、数多く確認できるのに、町共同体宛の文書が全く見えないということは、単なる史料の残り方の問題では

表5 「郷中」宛の幕府奉行奉書一覽

表5 「郷中」宛の幕府奉行奉書一覽	小寺番左衛門の証文は御旨容ないことを存知せよ	蛸川家古文書
35 永禄3. 12. 21	忠節したら徳政の高札を打つ利平沙汰はすべて棄破することを存知せよ 今度御入洛に忠節せよ	同上
36 5. 3. 10		同上
37 (5. 9. 2)		同上
38 11. 9. 23		加茂郷文書

明応2年4月以降のみに限った。

表5 「郷中」等宛 幕府奉行人奉書一覧

No.	年月日	宛先	内容	出典
1	明応2. 8. 3	紀伊国(郡)諸侍中	伊勢貞陸の下知に従え	東寺百合文書
2	2. 8. 3	相模郡諸侍中	同上	同上
3	8. 10. 30	西岡諸侍中	松尾社へ社納を全うせよ	松尾神社文書
4	文亀元. 7. 30	山科七郷沙汰人中	海老名高定に合力せよ	言国卿記
5	2. 6. 14	上鳥羽沙汰人中	東寺との鉾楯企を停止し、子細を注申せよ	東寺百合文書
6	永正元. 4. 23	梅津四ヶ村	梅津庄用水を掘取れ	長福寺文書
		名主沙汰人中		
7	元. 9. 14	当所名主沙汰人中	北白河同組拾郷は伊勢貞宗に属して忠節せよ	八坂神社文書
8	2. 8. 16	東山十郷々人等中	吉田斎場所を警護せよ	吉田文書
9	3. 5. 16	東山十郷地下人中	吉田雑掌に合力せよ	同上
10	3. 11. 16	東山十郷地下人中	同上	兼右卿記
11	5. 3. 29	賀茂惣郷地下人中	細川高国を相支え、忠節せよ	座田文書
12	5. 8. 7	大山崎名主沙汰人中	撰銭令を存知せよ	建武以来追加
13	12. 9. 2	西山名主沙汰人中	論所は勸修寺門跡に安堵したので存知せよ	勸修寺文書
14	13. 9. 21	八条名主沙汰人中	七条朱雀用水争論について注申せよ	東寺百合文書
15	13. 9. 21	七条名主沙汰人中	同上	同上
16	13. 10. 10	西九条惣庄中	同上	同上
17	13. 10. 10	吉祥寺北条	同上	同上
18	13. 10. 10	西唐橋惣庄中	同上	同上
19	(17). 3. 13	伏見庄名主百姓中	真木鳴光基に合力せよ	守光公記
20	17. 11. 2	十ヶ郷中	浄蓮華院への御下知停止を存知せよ	吉田文書
21	大永6. 10. 23	山科惣郷中	勸修寺境内安堵の奉書を存知せよ	勸修寺文書
22	享祿2. 11. 3	東山十郷中	吉田社領内での違乱停止に合力せよ	吉田文書
23	3. 3. 10	北白河地下人中	吉田社領違乱停止の御下知を存知せよ	同上
24	天文元. 10. 16	東山十ヶ郷中	山科本願寺買得地所を押置したので拘置け	経厚法印日記
25	2. 8. 15	山科七郷中	年貢を山科家雑掌へ沙汰せよとの奉書を存知せよ	言国卿記
26	2. 10. 16	西岡諸侍中	革鳴道宗に田畠を返付したので存知せよ	革鳴文書
27	2. 12. 30	十郷中	敷地・田畠を吉田社へ付したことを存知せよ	吉田文書
28	3. 11. 28	西岡中筋諸侍中	各相談して年貢以下を松尾社へ社納せよ	東文書
29	6. 9. 3	西岡諸侍中	革鳴一宣に田地等を返付したので存知せよ	革鳴文書
30	11. 3. 13	山科七郷中	当郷内三宮神木伐採を存知せよ	言国卿記
31	11. 10. 20	西岡桂西庄諸侍中	違乱の際は葉室家雑掌に合力せよ	専修寺文書
32	13. 10. 8	山科七ヶ郷中	地頭職・田地等の山科家への返付を存知せよ	言国卿記
33	16. 2. 8	当所四郷中	八幡徳政に際し神物の改動無し	蛭川家古文書
34	17. 6. 25	山科七郷中	山科七郷の御料所化を存知せよ	勸修寺文書
35	永祿3. 12. 21	八幡四郷中	小寺番左衛門の証文は御許容ないことを存知せよ	蛭川家古文書
36	5. 3. 10	西岡諸人御中	忠節したら徳政の高札を打つ	同上
37	(5). 9. 2	一揆中	利平沙汰はすべて棄破することを存知せよ	同上
38	11. 9. 23	賀茂諸侍中	今度御入洛に忠節せよ	加茂郷文書

明応2年4月以降のみに限った。

表6-1 個別町宛文書一覧 (禁制を除く)

No.	年月日	文書形式	宛先	内容	出典
23	22	〔Ⅱ〕・二木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
21	20	〔Ⅱ〕・二木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
19	18	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
17	16	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
16	15	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
15	14	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
14	13	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
13	12	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
12	11	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
11	10	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
10	9	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
9	8	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
8	7	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
7	6	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
6	5	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
5	4	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
4	3	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
3	2	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右
2	1	〔元禄三〕・三木下秀吉書状	正室町頭南月行事	御町衆が拙者所近辺で狼藉、引渡さなければ此方から撤収	室町頭南月行事書 同 右

〔表注〕

〔No.欄の「・」は町宛文書(またはそれに準ずるもの)ではないことを示す。

〔年月日欄の「Ⅰ」は天文一八・七・九、永禄一・八・六、〔Ⅱ〕は永禄一・八・七、天正一〇・六・三、期と推定できることを示す。(以下の表も同じ)

〔出典欄の「上下京古書」は、「上下京町々古書明細記」の略。(以下の表も同じ)

No.17は、個別町宛のものではないが、文書の伝来にもつき本表に収載した。

表6-2 上京・下京宛文書一覧 (禁制を除く)

No	年月日	文書形式	宛	先	内	出
1	天文二・六	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	八坂神社文書
2	10・三	同	上京中	正	府領金山を執行せよ	北野文書
3	同	同	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
4	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
5	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
6	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
7	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
8	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
9	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
10	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
11	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
12	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
13	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
14	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
15	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
16	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
17	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
18	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
19	永祿四・一〇	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
20	元龜四・二	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
21	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
22	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
23	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
24	天正二・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
25	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書
26	(一)・三	府宛行人廻寄書	上京中	正	府領金山を執行せよ	聖町領南半町文書

なかろう。これは、幕府などが町共同体を把握できなかったというより、町共同体そのものが文書の宛先となりうるような存在ではいまだなかったことに主要な原因があるのではなかろうか(一七)。

もちろん、「町人」による法の遵行を命じた法令は十六世紀初頭からみられる。たとえば永正九年(一五一一)の撰銭令では、違反者を「町人」として注進「すること」、「見かく」ししたならば同罪であることを決めている(一八)。これは「町人」の注進がなければ法令違反者を検挙できにくい状況を示すとともに、「町人」がしばしば違反者をかくまって、権力の法令に抵抗していたことを示唆する。

「町人」としての連帯責任を前提とした支配は、応永二十六年(一四一九)の酒屋起請文や撰銭令にすでにみられる。

(条坊門) (角) (間) (油小路) (東類) (酒屋) (室) (公)
 四てうのはうもんと六かくとのあいた、あぶらのこうちひかしのつらのさかやのむろの事、くは
 方(使)(覧)(毀)(仍)(後)(状)
 うの御つかいの御らん候ところにてこおし申候、よんでこ日ためにしやう如件、

(応永)
 おうあゐ廿六年
 亥十月三日

(室)(建) (町) (注進)
いまよりのちむろたて候ハ、ちやう人とし候て、ちうしん申入候へく候、

(左近)
ちやう人さこの二郎(略押)(19)

しかしこれらはあくまで「町人」としてのまとまりであり、「町中」、「町人中」といった共同体が責任を負わされたわけではないことに注意しておきたい。

都市における地縁的な生活共同組織はいかなる場、時代にもある程度普遍的に認めることができる。京都においても南北朝期以降、道路の両側の町並みが形成する両側町が発達していたことは、多くの研究が明らかにした通りである⁽²⁰⁾。しかしそうした戦国時代前半までにみられる「町人」としての結びつきは、いまだ共同体として幕府権力に把握されるようなものではなかったのである。

こうした「町人」のまとまりが、近世京都を生み出した強力な町共同体に変化するためには、戦国時代後半に大きな飛躍を必要としたのである⁽²¹⁾。

(1) 瀬田勝哉前掲論文注第一章第1節(4)、脇田晴子前掲論文注序章(3)。

(2) 瀬田勝哉同右論文。

(3) 高橋康夫「生活空間の数寄デザイン」(『洛中洛外』、平凡社、一九八八年)。

(4) 高橋前掲著書注(3)二二―二三頁。

(5) 高橋前掲論文注(3)。

(6) 脇田「領主経済の変質と問屋的支配」(前掲著書注序章(3))。

(7) 桜井「16世紀京都の職人組織」(『歴史学研究』五七九、一九八八年)。

(8) この他、戦国期には惣町共同体(上京中・下京中)とは別に、上京・下京単位の商工業者組織もみられるようになる。

(9) 中小の業者にとっては、隔地間取引よりも日常的な交易が中心であったこと、また有力座商人とは顧客の階層が異なることなどもその条件として指摘できよう。

(10) 御役者公人々数之事

次第不同

つき山ノ町

久富三郎右衛門尉

同町 余田善右衛門 同
同町 秋田又二郎 同
三条場町 □福富又三郎 同
同町 同甚三郎 同

上京下京

(一五六八) 以上廿九人

永禄拾壹年 辰 七月 日

(戊)

(『蜷川家文書』八一三「幕府役者公人人數注文」)

(一) 政所之役者公人事、公方人之第一として、御成・御物^二付申、其上諸商売^二付而、役人之事不及中、異于他儀候、然間、不致諸公事、諸商売^お自由^二仕事、惣中并宛身、曆々御下知頂戴、不珍題目候、然処、今度遠江茜染之座中号十六人相定、公人新四郎茜染之儀、可令停止之由申、

無覚悟申分也、右^二如申入、於公人者、諸商売不可有異論之段無紛、爰茜之座人之内之娘茜染可仕之旨、慥被成奉書訖、彼座人之娘、公人新四郎妻候、彼是以新四郎茜染之事理運条、被披聞、可奉忝存候、

(永禄)

永十 正月日 公人

(『蜷川家文書』八一〇「幕府政所公人等申状案」)

(12) 脇田晴子氏は、中世後期の京都の都市民が公家・寺社や武士などと被官関係など個別のつながりをもっていたため、結果として町共同体の結集が不十分となったとしている(前掲著書注序章(3))。この指摘は一面、的確ではあるが、共同体としての連帯のみを評価し、個別的なつながりをマイナス・イメージでとらえるのは、当該期の実態分析の視角として正しくなからう。

(13) 今谷明「室町幕府奉行人奉書の基礎的考察」(前掲著書注序章(2))。

(14) 『土岐文書』天文十六年二月二十八日、奉書集成三六五四など。

(15) 吉田社事、為天下安全御祈禱所、異于他之处、社領内非分輩及違乱云々、以外次第也、早可

停止其妨之段、被成御下知畢、令存知之、若致噉儀族在之者、為東山十郷可合力之由、所被仰出之状如件、

享祿二

十一月三日

(飯尾)

貞広(花押)

(飯尾)

為完(花押)

東山十郷中

(『吉田文書』二、奉書集成三一七六)

(16) 反対に、こうした「郷中」は幕府の法令に積極的に反論さえ行なう(『経厚法印日記』天文元年(一五三二)十一月二十四日条所収「東山十郷惣郷中書状」十一月二十四日)。

(17) 同じ地縁的共同体でも、洛外の「郷中」にくらべて洛中の町共同体の成長が遅れたのは、商工業者の方が移動性が強く、町中への定住化が遅れたことも一因と考えられる。

(18) 定 撰銭事

(五ヶ条略)

右条々、堅被定置訖、若有違犯之輩者、男ハ頸をきり、女ハゆひをきらるへきなり、恣^(切)又^(指)り^(撰)

又あらずる輩あらハ、町人として注進せしむへし、見かくさハ同罪たるへし、私^(隠)けんたん、^(検断)

同為町人可致注進之由、所被仰下也、仍下知如件、

永正九年八月廿日

(松田英致)

対馬守 平朝臣

(諏訪長俊)

散位 神宿 祢

(飯尾貞運)

近江守 三善朝臣

(斎藤基雄)

美濃守 藤原朝臣

(『東寺百合文書』せ八八、京都町触研究会編『京都町触集成』別卷二(岩波書

店、一九八九年)元禄四年以前No六五(以下、「町触六五」と略す)

(19) 『北野天満宮史料』古文書二七「隆重請文」。

(20) 『京都の歴史』三 近世の胎動(学芸書林、一九六八年)など。

(21) 戦国時代前半までの「町人」の結びつきを、町共同体とくらべてどのようなものと理解するかは、今後の課題としたい。

第2節 町共同体確立の条件

従来の一般的な理解では、洛中の治安の乱れが都市民に自衛を強要し、町共同体の形成を促したとしてきた⁽¹⁾。もちろんこうした理解そのものは全くの誤りというわけではない。

しかし本稿では第一に、「治安の乱れ」なるものを暴力行為のみに限定せず、合力銭などの強要、裁判の不公平さなどもふくめて考え、戦国期権力の性格から解明してゆきたい。この点は第3節で検討する。第二に、町共同体の形成を戦国期の都市社会・都市民の内在的な問題として把握する立場をとる。そこでこの点について以下、本節で検討する。

1 個別町の三側面

土地・家屋

百姓は、土地領主の保護下からの自立傾向にともない、家産の中心である家屋を自力で維持する必要性に迫られていた。また先に述べたように、高密度な土地利用の必要性は、都市民に土地・家屋をめぐる相互規制を強化させた。ここに、個別町(両側町)が町内の土地・家屋の共同管理、共同保障を行う要因がある。

天文九年(一五四〇)の松田盛秀の書状によると、盛秀の被官であった野村次郎の家が何らかの事情で空き家になっていた。ところが、「彼家去八月大風吹破、余見苦數躰候間、彼町人等所望仕、加修理度旨懇望」してきたので盛秀は「内々可遣之旨同心」している⁽²⁾。ここでは町が、町屋の管理を引き受け、修理しようとしていることがわかる。

また四条綾小路町人等が天文十八年(一五四九)、幕府に提出した申状によると、「当町東はし南煩正西 与 申者在之、彼者死去仕、跡をむすめ相拘申、彼家之余地 烏町町竹山次郎三郎 与 二 沽却仕候、言語道断曲事候」としている。文意に不明な点もあるが、町人等の主張は、「限一町、余町 へ地

(売)
を不可商買之旨、被成下御下知者、可忝畏存候」という点に集約されている(3)。町が町内の土地の流出を抑止する意志を示しはじめたことを明らかにしてくれる。

さらに、一五六〇年六月頃のイエズス会宣教師にかかわる史料があげられる。宣教師が新しい家を捜して、下京に一軒の家をみつけた。ところが、「もし伴天連がそれを購入しようとしていることにその町の人たちが気づくならば、彼らがその売却に同意することはあり得ないことであった。だが町の人たちにそれを気づかれぬように秘密を保つことは不可能であった。」とある(4)。町の同意がなければ、家を売買することができなかったことがわかる。

以上みてきたように、十六世紀半ば以降、町による共同管理によって、空き家の補修がなされたり、土地・家屋の自由な売買・貸借が規制されたりするようになった。こうした町は土地領主の所領範囲にとらわれず、社会的に新しい領域を形成していった。と同時に、地子銭などを個々の百姓が支払うのではなく、町がまとめて納める体制も成立し、地子銭を減額しようとする「百姓」の志向も町によって実現されてゆく(5)。

生業

戦国後期、中小商工業者がその経営を安定させる体制の必要性に迫られていたことも、すでに第1節でみた。都市民が町に結集する第二の契機がここにある。

永禄元年(一五五八)、鍛冶大工吉次が禁裏御大工としての正当性を吉久と争った時の吉次の二問状には、「吉久父故新四郎者、下京五条坊門西洞院絹屋方四郎三郎^ト 申者之養子^仁 罷成、鍛冶職事一向

不存知候畢、猶以於御不審者、町人等^ニ 被成御尋候哉」とあり、同じことが三問状では、「但此段者、

町人^并 座中^(大工) 仁 可被尋聞召者也」とされている。また三問状に「如此事者、町人各可為存知之条、不

可有其隠者也」とあるが、ここでいう「如此事」とは、吉次が唐門・北御門の釘などを沙汰したこと、浅山某が禁裏修理をしたときに吉次が釘などを調進したこと、禁裏の門の金物を吉次が相談せず一人で調進したことを不当だと故新四郎が主張したが、相談する必要はないと吉次が申し放ったこと、故新四郎の非道の存分がよろしくないので吉次が義絶したのはもちろんであることなどをさす(6)。

商工業経営の内容は従来、主に座組織によって認知されていた。ところがそれとは別に、町人が同

じ町の他の町人の経営内容の詳細について認識を深めていたのである。

この認識はより積極的に町人の経営を保障してゆく。

天文十三年（一五四四）の曾我正成の申状によると、「号酢屋餅屋、以由緒之旨、橋本新三郎致存知候訖、然正成母、為彼後室相統無紛之处、所々鬻売買太無謂、証文等致所持之处、（天文五年）先年日運衆追罰之刻令紛失之、雖然、地下人各此様躰慥存知仕者也、然者別紙以請文申上畢」とある（7）。

ここでは「地下人」が、正成の相伝の由緒や証文紛失の事情、つまり広い意味での経営内容を認知し、それを保障する起請文を書いてやったのである。文中の「地下人」はおそらく曾我正成と同町の町人であろう。

この他、町を単位に頼母子を行って資金融通することも一五二〇年代から確認され（8）、また徳政令が出て、質物を受け出しにくるのを土倉と同じ町の町人が妨害している例もみえるようになる（9）。

このようにして、商工業者の座組織とは別に、個別町が町民個々の経営内容を認知し、その生業を保障しようとする新しい体制が生み出されていったのである。

一 揆

個別町は一成員の問題を町全体の問題と考える、一揆的な集団の特徴を濃厚に示しはじめる。

洛中で発生した喧嘩をまとめると、天文二年（一五三三）の例を初見として、町が主体となる喧嘩がしばしば起こるようになることがわかる（表7）。また、武士が洛中の町屋などに打ち入った例を検討すると、この打入にも大永七年（一五二七）以降、町としての抵抗がみられる（表8）。

第一章でみた三福寺地子銭催促事件では、地子銭未進を催促するためにやってきた大館兵庫の中間が悪口を吐き、町人の家具を持ち去ろうとした。そのため同じ町の町人が出合い、中間を打擲したというのである（10）。

この他にも町はしばしば犯罪人を隠したり、権力の検断を妨害したりもした（11）。

被官関係などとは別に、洛中の都市民の間に新しい人的関係が形成されてきたのである。

以上、三つの側面にわけて検討してきたように、個別町共同体は、土地、生業、一揆のそれぞれの面で共同性を強化する契機をもった。もちろんそうした契機は相互に関連をもたなかったわけではなく、實際上、結びついて一体化したことはいうまでもない。

これは、第一章で検討した、中世的な都市支配や社会秩序においてはばらばらであった諸要素を個

表7 喧嘩とその解決

No.	年月日	主 体	合 力 ・ 中 分	郡府・将軍	出 典
1	文明 6(1474). 8. 14	昭慶法印×細川政国	-	-	実隆公記
2	11(1479). 5. 29~	楊酒屋小原×赤松被官甘草	合)赤松・浦上・斯波内板倉・山名	将軍：仲裁	晴富宿禰記
3	閏9. 3~	壬生晴富×下司石井	中)朝廷	×	晴富宿禰記
4	長享 2(1488). 11. 3	壬生晴富×安富被官?	-	-	実隆公記
5	12. 11	典葉頭重長朝臣	中)傍輩等	×	実隆公記
6	3(1489). 正. 19	×細川被官牟礼被官	-	-	実隆公記
7	延徳 4(1492). 4. 7	西園寺齊持等×斯波被官等	-	-	晴富宿禰記
8	明応 2(1493). 5. 12~	細川方×?	合)浦上美作守・赤松政則	×	晴富宿禰記
9	4(1495). 正. 16	浦上山城守・阿蘇前守	中)上原等	-	晴富宿禰記
10	5(1496). 6. 24~	×細川玄蕃頭・妙満寺權部	-	-	晴富宿禰記
11	7. 22	衆	-	-	晴富宿禰記
12	永正 3(1506). 7. 16	町人同士	-	-	晴富宿禰記
13	15(1518). 5. 20	妙覚寺×妙蓮寺	+	将軍：仲裁	後法興院記
14	大永 7(1527). 8. 2	伊勢貞宗被官×相國社人	+	郡府：相國社に殺害人	八坂神社文書
15	享祿 5(1532). 正. 23	相國被官×加田家内者	合)相國、中)三東西実隆	×	実隆公記
16	天文 2(1533). 9. 12	河原者小五郎子×相屋者	+	郡府：裁定	檀川家文書
17	8(1539). 8. 3	近衛家×声聞師村	中)高屋弥介弟僧	×	音維野記
18	10(1541). 3. 4	禁裏仕丁×正親町家	中)禁裏・山科昌維	×	音維野記
19	11(1542). 2. 1	烏丸町×正親町	-	-	音維野記
20	1	大館兵庫中司	合)町人	郡府：裁定	報復日記
21	6. 18	×伊勢被官堤三郎兵衛	-	-	何事記
22	14(1545). 6. 14~	清水寺×相國社	+	郡府：仲裁	音維野記
23	18(1549). 9. 7	細川内古津×高富家神九郎	+	-	音維野記
24	11. 17~	江州衆×地下人	+	郡府：三東町へ発向	相國社記
25	19(1550). 閏5. 2	三東町×?	+	将軍：下京一町へ発向	音維野記
26	7~	郡府小倉人×下京一町	+	×	音維野記
27	7. 15~	広橋家×今村・小泉等衆	中)山科昌維	×	音維野記
28	20(1551). 正. 24	四辻内田口兵衛尉	合)四辻家	×	音維野記
29	21(1552). 6. 7	×正親町室町大工	中)六町宿老衆	×	音維野記
30	永祿 9(1566). 8. 16	?	中)上下京宿老地下人・二東家	×	音維野記
31	10(1567). 5. 11	伏見家×声聞師村	中)上下京宿老地下人・二東家	×	音維野記
32	11(1568). 7. 18~	一東家門前町	中)上京中宿老共	×	音維野記
33	元龜 2(1571). 5. 27	×賀部寺門前町	+	将軍：雑色衆釈放	音維野記
		町×室町	中)安禪寺	×	音維野記
		雑色衆×?	中)勤修寺晴秀・松田藤弘	×	音維野記
		上京中×大徳寺門前	中)磯与右衛門尉・石成友通	×	音維野記
		二東室町×上四町	-	-	音維野記
		上野中務大輔×荒川与三	-	-	音維野記

○ 本表は、応仁の乱以降、洛中で発生した喧嘩を集めた。但し、武士同士の間には除いたものもある。
「No」欄に「☆」印を付したものは、町共同体か主体となった喧嘩である。

表8 武士の打入

No.	年月日	武 士	打ち入られた所	理 由	合 力 ・ 中 分	出 典
1	文明11(1479). 正. 14	(武辺盛)	壬生寺	飛梁	-	晴富宿禰記
2	17(1483). 6. 11	細川成之被官三好	藤原木村宅	半人女房衆預置	合)公家衆・町人	実隆公記
3	18(1486). 3. 22~	公方?	一条冬冬宅等	半人衆所在	合)公家衆・町人	実隆公記
4	大永 7(1527). 7. 6	(武辺者)	竹内宅(風聞)	-	合)公家衆	音維野記
5	15	斎藤右衛門大夫衆	正親町実隆宅(風聞)	-	合)公家衆	音維野記
6	16	?	中山康親宅(風聞)	-	合)公家衆	音維野記
7	18	三好方	和氣親政宅	-	合)上京町人	音維野記
8	11. 26	阿波衆	島丸町屋敷	-	合)所司・上下町人・下京町人	音維野記
9	29	阿波衆	行事官行方宅	-	合)町人	音維野記
10	12. 9~	三好衆	浄土寺坊	-	合)公家衆・上京下京町人	音維野記
11	11	?	大森宅	-	合)公家衆・上京下京町人	音維野記
12	11	柳本衆	舞花院	-	合)(上京町人)	音維野記
13	13~	?	二位殿宅(風聞)	-	-	音維野記
14	8(1528). 正. 10	赤井衆	近衛補家・龍形小路	-	-	音維野記
15	13	阿波衆	在草・中御門直秀宅	-	-	音維野記
16	13	阿波衆	春日室町	-	-	音維野記
17	26	阿波衆	立死(仁)	-	-	音維野記
18	26	柳本新三郎	正親町(前守權大)	-	-	音維野記
19	17~	?	一東房衆宅・向所風	-	-	音維野記
20	17~	?	高小崎直宅(風聞)	-	-	音維野記
21	17~	?	堤三郎兵衛宅	-	-	音維野記
22	17~	?	堀三郎兵衛宅	-	-	音維野記
23	17~	?	堀三郎兵衛宅	-	-	音維野記
24	17~	?	堀三郎兵衛宅	-	-	音維野記
25	17~	?	堀三郎兵衛宅	-	-	音維野記

◇ 「No」欄に「☆」印を付したものは、町共同体か打入に抵抗しているもの。
「打ち入られた所」欄に「(風聞)」とあるものは、風聞だけで、実証には打ち入られなかったことを示す。

別町レベルで統合したものといえよう。ここに、都市社会構造の新しい基礎単位が生まれたのである。

2 共同体の性格と確立の契機

個別町が最も重視したのは、その成立の経過からも明らかなように、町内における商工業空間の維持であった。

一五六一年、キリシタン宣教師が四条烏丸町で借家を借りて住みはじめた。ところが宣教師の家に對するいたずらや投石などが絶え間なくつづいた。そこで同じ町の町人たちは「(家主に向かって)伴天連がいるためにこの辺りがこのように騒々しいことには我慢がならぬ。是が非でも彼に出て行ってもらわねばならぬ」と主張した。しかし家主がそれが同意しないことを知ると町人たちは「彼(家主：著者注)の主な収入が酒の販売(によるもの)であり、それが良酒であるために多くの顧客を持っていることが判っていたので、彼らはその通りの出入口に、何びとも今後はあの家で酒を買うことは罷か

りならぬ。(もし買う者がいれば)、容器と代金を没収する、と禁止令を掲げた。そこで家主は自分の収入が減ってしまうことが判り、またしても家から出て行くようにと言って司祭を苦しめた。」という(12)。

これは町の生業保障の裏返し例である。共同体全体の利益に反して迷惑をおよぼす場合には、この酒屋のように町から厳しい制裁をうけ、生業が成り立たないようにされるのである。

ここでの共同体全体の利益とは商工業空間の安寧秩序を維持することであつた。店棚を出して商工業活動する町人にとって、その安寧が乱され、客がやってこないことは死活問題であつた。第1項で町屋の共同管理の例として取り上げた野村次郎の空き家修理の場合も、吹き破れた空き家があることによって町の信用が失われ、商工業活動上の不都合が生じることを恐れて景観の保全をはかったという一面がある(13)。

織田政権期初頭のものであるが、下京饅頭屋町で、町人の内のいく人かがなんらかの公役に出た時に作成されたと思われる惣中掟書がある。そこでは、「右此御人数、御町之為名代御出候上者、夜番

(普請)

・日番 并 公方不審可除之御定にて候」としている⁽¹⁵⁾。町共同体全体の「犠牲」となって名代をつとめる成員を保障するため、町役を免除することも、町の重要な機能の一つであった。

こうして個別町は保護と制裁のバランスをとりつつ、都市社会の中で新しい秩序を形成していったのである。

このように個別町が急速な進化を示すのは十六世紀の初期、一五二〇―三〇年代、享祿から天文年間初頭の段階と考えられる。このことは、幕府その他の文書の宛先に町があらわれること(第1節第2項)、「喧嘩」、「打入」への対抗などの自力救済行動を行う武力集団として町がみえるようになること、第1項でみた三つの要素が確認できるようになることなど、いずれもがこの時期以降である事実から確認できる。

ところで、こうした進化は徐々に顕在化してゆくものだが、その一つの画期は天文法華の乱に求められよう。

一向一揆に対抗して京都におこった法華一揆は、やがて領主権力総体の反感をかい、天文五年(一五

三六)、近江の六角氏や山徒による攻撃をうけた。この天文法華の乱で下京のほぼ全城、上京の一部が焼失したといわれている。これは応仁の乱以降最大の災害であり、大規模な都市復興が必要とされた。もちろん都市破壊の面では、十五世紀後半の応仁の乱の方が被害は甚大であったが、応仁の乱段階では、復興の主体ははまだ都市領主であったと考えられる。それに対して、今回の復興は都市民の側に主体が移ったと思われる。

法華の乱後、旧来の地縁的な共同組織が一時的に崩壊し、組織を再構成する途上で都市民は相互に保障力・規制力を高めていったと想像される。また新しい商工業者が洛中に来住したものと思われるが、彼らは中世的な諸特権とは無関係に社会生活を維持する必要にせまられたことであろう。

ここで象徴的な事例をあげておく。

上京誓願寺門前の小河の上には、天文法華の乱に伴う焼失以前、勧進所や在家が建ちならんでいた。ところが乱後、誓願寺はそうした在家などの再興を拒否した⁽¹⁶⁾。幕府は誓願寺の意向を認め、天文八年、「千本間魔堂外諸勧進所并在家再興儀、任 公方下知旨、堅被停止之上者、宜致存知由候也」とする命令を「小河一町中」宛に出している⁽¹⁷⁾。これは「一町中」が在家、すなわち町屋再興にか

かわりをもっていることを示す。

また幕府は、同じ「小河一町中」宛に天文十一年、「近年至境内北町、致針貫^{云々}、太不可然^々」、「於彼針貫者、早速可引退当寺境内」と奉行人奉書を発給している(17)。「一町中」は、自らの自衛のための施設である針貫を、誓願寺の領主権を侵して建造していた。これらの史料から町共同体は、単に共同体内部にとどまらず、当該地域の諸問題に対処できる権能をもつにいたったことがわかる。

ここで「小河一町中」がどの程度、法華の乱以前の組織を引き継いでいるかは不明である。しかし乱後の都市復興の中で、町屋の再興に「一町中」が関与し、また相互規制、自衛を強める中で針貫を構築し、領主権を侵害するまでになっていたことは明らかである。

天文法華一揆については、従来から自検断や地子銭無沙汰闘争との関係で注目されてきた(18)。もちろん天文法華の乱で都市社会が一挙に変化したわけではない。しかしそれは、都市社会の底流にあったさまざまな運動を表面化させ、町共同体の形成に結実させる重要な政治的契機となったのである(19)。

3. 個別町から惣町・町組へ

武士による町屋などへの打入に対しては、一五二七年以来、個別町とならんで上京・下京単位でも町人が抵抗している(表8)。

喧嘩については、一五五〇年代以降、個別町同士の喧嘩、あるいは個別町がかかわった喧嘩を惣町やその宿老が中分している例が目につく(表7)。

『言継卿記』によると、天文十八年(一五四九)十一月十七日、正親町橋辻角で喧嘩があり、四辻家の田口兵衛尉が殺された。十九日、この殺人犯が正親町室町の大工であることが判明し、報復のため四辻家から正親町室町へ武力攻撃をかけるという風聞がたっている。ところが翌二十日になると、正親町室町の町共同体が四辻家に対して謝罪し、(正親町室町)「從彼町可成敗之処、逐電間不及是非、近所六町之宿老衆・四辻上使罷向、彼家こほち出、放火^(毀)」して紛争が解決したのである(20)。

これは町同士が直接争った喧嘩ではないが、町共同体が形成する地域秩序を維持するために近隣の

町組が大きな役割をはたしていることがわかる。

この他、「上下京宿老・地下人」や「上京中為百廿町」して喧嘩を「中分」している例がみえる(表7)(²¹)。これらの事例は、町共同体がその内部の武力紛争を自律的に解決する権能を獲得したことを意味する。

しかもそれが厳しい自己浄化機能をふくむことは、先にみた天文十八年の正親町橋辻角における「喧嘩」の処理からうかがえる。そこでは犯人の木工の「成敗」は彼が住む正親町室町の責任とされ、実際の「成敗」執行を近辺のより上級の町共同体が行っている。各町は地域社会のルールを厳守し、それぞれの責任で「平和」を維持してゆかねばならなかったのである(²²)。

こうして洛中の町同士の武力紛争は終息し、町単位の「喧嘩」はほとんどみられなくなってゆく(表7)。

この他、惣町は領域内のさまざまな問題への対応能力を身につけてゆく。景観維持のため惣町が家屋構造の制限をすることもあったし(²³)、惣町として権力に対して要求を出すこともあった。

ただ町組については、禁裏六町をのぞき戦国期の確かな史料は少ない。

天文十年、小河七町々人中に宛てて出された茨木長隆奉書は、誓願寺寺内の狼藉を禁止する法令を存知し、違反者は「為町」として交名を注進するように命じている(²⁴)。小河七町の実態については史料の限界で不明とするよりないが、小河一町をふくむ町組的なものであったろう。

ここに新しい都市社会構造が形成された。

領域(土地)・生業・人を一体化した個別町を基礎に、それらを重層的に惣町まで高めたものである。それは規範を形成して裁定権をもち、都市民や共同体が直面する問題を解決し、相互に保護しあう機能をはたした。と同時に、他の共同体に迷惑をかけた者をその共同体の責任で自己制裁するルール、自浄機能をもっていたのである。こうして重層的な町共同体は都市民にとっての「公」となった。

もちろん個別町内部には中世的身分(座人・被官など)や富の多寡による差別、個別町間にはそれぞれの由緒や経済力による序列などが存在したと思われる。新しい都市構造の形成によってこうした格差がなくなるわけではないが、むしろ相互の均質性に注目することによって町全体、惣町全体としての発展を追求したのである。

町共同体は戦国期の都市社会の中であくまで自生的に成長してきた。それはいかなる領主権の委任

・委譲によるものでもなく、国家的支配権を分有する都市領主権とは基本的に異質である。その運営にあたって、原理上、幕府権力も都市領主も必要としない町共同体が生まれたことになる。基本的な構成原理を異にするため、中世的な都市支配体制には町共同体を有効に支配することはできなかった。領主権力は都市支配の深刻な危機に直面したのである。

(1) 例えば、秋山国三「近世京都の黎明」(『近世京都町組発達史』、法政大学出版局、一九八〇年)など。しかし、こうした議論では、統一政権によって治安が回復されると町共同体の意義が低下し、支配の末端化するという評価に陥ってしまう。

(2) (端裏書)
「天文九」

被官人野村次郎左衛門尉進退事、去年子細依令言上、被成下御下知、退違乱強、畏存候、然彼家去八月大風吹破、余見苦敷躰候間、彼町人等所望仕、加修理度旨、懸望候間、内々可遣之旨同心候処、松田豊前守相支之趣、町人注進之条、則罷向、給御下知次第具申理処、町人内申事之条、何様相届、重而可返事仕之由申之、其以後、毎日彼町へ立使者、家之儀聊尔

二 請取候者、可為曲事之旨申之、言語道断次第候、有訴人申分者可經 公儀之處、帶御下知之儀乍令存知之、如此所行、御下知違背之段、不可過之候、所詮、不可致承引之旨、被成成懸奉書者、弥以可忝存之趣、宜預御披露候、恐々謹言、

十月廿六日 盛秀(花押)

飯尾中務大夫殿

(『蜷川家文書』五四五「松田盛秀書状」)

松対 天文十八 四 八

(3) 一 四条綾少路町人等申状

右子細者、当町東はし南類正西 与 申者在之、彼者死去仕、跡をむすめ相拘申、彼家之余地 丸 鳥町町竹山次郎三郎 与 申者 二 沽却仕候、言語道断曲事候、其子細者、家之敷地計者商買 不 成申候、以余地商買仕候、惣別下京者あき地 二 も祇園会致出錢候処、他町へ地を進退仕候時者、家計之商買不成申候によつて、祇園会相支令言上、以御雑色前々も被相触停止之段候、殊更此家之余地 可賣之由、前々沙汰候つる間、使者 立、曲事旨申候之處、左様之儀曾以

無之由返事仕なから、如此之所行前代未聞候、所詮、限一町余町、地を不可商買之旨、被成下御下知者、可忝畏存候、恣裏以下之地、余所、進退仕者、其町之祇園会山之儀者退転之条、申上候也、仍言上如件、

天文十八年四月 日

(「賦政所方」)

(4) フロイス『日本史』三 第九章。

(5) 脇田晴子前掲論文注序章(3)、拙稿「百姓・家持・借家人」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅲ「人」、東京大学出版会、一九九〇年)など。

(6) (端裏書)

「端裏書」
鍛冶吉次二問状 永禄元
十二 十一

鍛冶御大工彦兵衛吉次重謹而言上

右新四郎吉久言上之趣者、祖父兵衛対吉次鍛冶職事譲与事、不可有之由申候哉、既致讓状

備右之上者、無謂言上沙汰之限候歟、就中於譲与者、何吉次御大工職不存知哉、祖父
存生之時者、相互致御沙汰候畢、其時吉久父故新四郎者、下京五条坊門西洞院絹屋方四郎
三郎 申者之養子 仁 罷成、鍛冶職事一向不存知候畢、猶以於御不審者町人等 被成御尋候
哉、其後故新四郎自絹屋方罷出、如元鍛冶職仕候時者、不及相論、申談勤御役候、然者
先年織田彈正忠御修理方被申沙汰候時者、西北両御門御金物以下悉以我々相調申候事歴然
候、第一吉久事、至于今武者小路馬場倉 仁 乍致奉公号御大工事、言語道断之子細候、此段
不及返答之上者、承伏勿論也、条々掠申之段沙汰之限存候、所詮任讓状之旨、速被仰付候
者、忝可存者也、仍重而謹言上如件、

永禄元年十二月 日

(「東山御文庫記録」甲七十一「鍛冶大工吉次二問状」)

(端裏書)

「端裏書」
鍛冶吉次三問状 永禄元
十二

鍛冶彦兵衛吉次重謹而言上

(中略)

一故新四郎絹屋四郎三郎養子^仁罷成、堪忍事、曾以無之由言上、沙汰之限之子細也、但此
^(大工)
段者、町人^并座中^仁可被尋問召者也、

(中略)

一織田彈正忠御修理申沙汰之時、西・北御門御金物調進事無之^{云々}、不知案内之申状也、
唐門・北御門釘以下致其沙汰畢、又御大工中務為町人之間、以密儀令致調進^{云々}、是
又虛言也、肝要者其時之御大工中務可被成御尋者也、加之作州住人浅山御修理申沙汰之
時、釘等調進歷然也、加田新左衛門尉被申付候釘注文等于今所持之条、無紛者也、將又
御門金物調進事、後日故新四郎開付、曲事之由堅令申、自此時義絶、殊踏入吉次細工所
^{云々}、是又虛言也、御門御金物不及談合、一身調進無曲之由故新四郎雖令申之、更以非
可談合事、不及覚悟之由申放畢、惣別故新四郎非道之存分不可然之条、義絶之段者勿論

也、如此事者町人各可為存知之条、不可有其隱者也、

(中略)

永祿元年十二月 日

(『東山御文庫記録』甲七十一「鍛冶大工吉次三問状」)

なお、この相論については、桜井英治前掲論文注第1節(7)参照。

諏信州

一 曾我左近將監正成申状 天文十三 閏十一 廿七

右、号酢屋餅屋、以由緒之旨、橋本新三郎致存知候訖、然正成母、為彼後室相統無紛之處、
所々猥売買太無謂、証文等致所持之處、先年日蓮衆追罰之刻令紛失之、雖然地下人各此様
躰體存知仕者也、然者別紙以請文申上畢、所詮、退非分族、如先々可申付之旨、被成下御
下知者、可奉忝存趣、為預御披露、粗言上如件、

天文十三年閏十一月 日

(『別本賦引付』一)

(8)

一 從去大永五年八月合力興行事、懸錢拾壹貫百文余也、然為拾貫取錢、壹貫百文余為利平懸増之、於未進輩者、加三文子利平云々、任今度德政法、被棄破訖、可令存知之由、所被仰下也、仍――

(一五二七)

大永七年二月二日

丹後守

伊――

四条油小路

合力衆中八人中

(『頭人御加判引付』二)

(9)

質物事、背制札旨、令拘惜、或籠置人数、或相語町人、及物忽^{云々}、以外次第也、所詮、任德政之法、於質物者、以十分壹可致其沙汰、若令難決者、一段可有御成敗之由、被仰出候也、仍執達如件、

(一五四六)

天文十五

十一月十六日 晴秀(花押)

(松田)

(松田)

盛秀(花押)

佐野与三郎殿

(『蜷川家文書』五九二「室町幕府奉行人連署奉書」、奉書集成三六三三)

なお、同日付、同文の幕府奉行人奉書が佐野弥左衛門尉・高野弥三宛にも出されている(『蜷川家文書』五九三・五九四、奉書集成三六三四・三六三五)。

(10) 前掲史料注第一章第2節(1)。

(11) 『兼右卿記』永禄十年正月十八日条所収、「飯尾為房撰錢令案」永禄九年(一五六六)十二月二十九日(後掲注第3節(一)第3条など)。

(12) フロイス『日本史』三 第九章。

(13) 前掲史料注(2)。

(14) (前欠カ)

(普請)

右此御人数、御町之為名代御出候上者、夜番・日番^并公方不審可除之御定にて候、若違乱之

於御人躰者、御参会^(一)、御出被成、御諺可在候、則月御汁^二、必可有御出者也、但御隙入候者、此面御人数之内、御指替可有先儀処如件、

(一五六九)

永禄拾貳^己五月十七日

惣中

(『慢頭屋町惣中掟書案』)

なお、本文書は京都における町掟の初見である。

(15) 以下の経過については、今谷明掲著書注序章(1)第三章四3、高橋康夫「水上空間」(前掲著書注第1節(3))参照。

(16) 誓願寺雑掌中、当寺門前小河々上事、勸修寺家相談進止^{云々}、然上者、千本間魔堂外諸勸進所并在家再興儀、任公方下知旨、堅被停止之上者、宜致存知由候也、宜致存知由候也、仍執達如件、

天文八

十二月廿四日

(茨木)
長隆(花押)

小河一町中

(『誓願寺文書』、「茨木長隆奉書」)

(17) 誓願寺雑掌中、当寺門前小河々上諸堂等事、先年堅被停止之處、近年至境内北町、致針貫^云、

、太不可然、既云大門已下造立、云寺家進止之地、旁以任先度御下知旨、於彼針貫者、早^々速可引退当寺境内之由、所被仰出之状如件、

天文十一年
九月廿日

(飯尾)
貞広(花押)
(治部)
貞兼(花押)

小河一町中

(『誓願寺文書』、「室町幕府連署奉書」奉書集成三五一一)

(18) 最近の成果としては、今谷明「天文法華の乱」(平凡社、一九八九年)がある。

(19) 従来、天文法華の乱終結直後に町組の初見史料(『年頭御拝礼参府濫觴之控』「古京仲之組六角町古帳之写」)があらわれるとされてきた(『京都の歴史』第三卷(京都市、一九六八年)第五章な

ど)。しかしこの史料については疑問もあり、法華の乱と町組を結びつけて考える見解には賛同できない。

(20) 十七日条 月出之後、於正親町橋辻角喧嘩^{云々}、四辻内田口兵衛尉討死^{云々}、馳向之處、四ヶ

所疵有之、五過時分死了、相手不知^{云々}、

十八日条 四辻被来、昨夜之儀談合也、庭田青侍加田弥三郎^与申事有之、不可然之由各意見、

本人可被糺明由申候了、伊勢牧雲同来、一盞有之、町人存知之輩有之間、為禁裏被仰出、

相手之名可相尋之由、四辻長橋迄参被申入候了、予可同道之由被申之間、同参申入候了、

十九日条 四辻明後日未明に、正親町室町へ取懸之由有之、彼町大工相手顯形^{云々}、及大儀

之条、先可延引之由被仰出了、

二十日条 四辻室町へ被取懸之由風聞之間罷向、從彼町可成敗之處、逐電之間不及是非、然

者為隱便之體、可有成敗之由申之間、近所六町之宿老衆・四辻上使罷向、彼家こほち出放

火^{云々}、自然為用心五百計用意也、方々合力之人数者被聞了、無殊事、於四辻一盞有之、

(『言繼卿記』天文十八年十一月条)

(21) 『言繼卿記』天文十九年閏五月二日条、同天文十九年七月十六日条。

(22) 藤木久志氏は、戦国期、地域社会における犯罪人の逮捕は、彼が住んでいた村共同体の自浄作

用の一環として、その村が責任と義務を負うべきであったことを明らかにした(『戦国の作法』、

平凡社、一九八七年)。同様のことは、当該期洛中の町共同体の間でも認められるであろう。

(23) 『耶蘇会士日本通信』四八、一五七七年九月十九日付。

(24) 誓願寺事、異于他為靈場処、於寺内、近日每度致狼藉、或音曲、或吹笛・尺八、乱脇次族在

之云々、以外次第也、所詮被停止之、重被打制札上者、早可致存知、若猶有不能承引輩者、

為町可致交名於註進、可被処罪科由候也、仍執達如件、

天文十

四月十二日

(茨木)

長慶(花押)

小河七町々人中

(『誓願寺文書』「茨木長隆奉書」、町触一一六)

第3節 戦国後期社会の矛盾と限界

1 社会構造の複雑化

第2節でみたように、町共同体にもとづく新しい都市社会構造が十六世紀初期以降、成立したとしても、第一章で分析した中世的な支配関係、社会構造がただちになくなるわけではなく、両者は並存することになった。これは都市民にケース・バイ・ケースで多様な選択肢を与えることになる。

たびたび引用する、天文八年の三福寺地子銭催促事件では、地子銭の催促をうけた住民が、最初は町人として町共同体に守られ、ついで被官人として主人の保護をうけていた(1)。

次に、永禄九年(一五六六)の三好政権の撰銭令をみてみる。

定

上京洛外

(精 銭)

一 せいせん(精 銭)の事、先度之高札にあひ見ゆるといへとも、やゝもすれハ猥背法度(法度)云々、太以曲事之

次第也、所詮、旧借并質物之儀もはつとの料足をもてとりかハすへし、若違背のやからあらハ拾貫文過銭たるへし、被定置六銭外ゑりいたしたる料足を替遣輩も、同罪として過銭同前たるへき事

一 依此御法、諸商売をとめて不売者、永其座中をはつすへし、万一座人中としてかくし置者可為同罪、酒屋・土倉共以可承知之、(以下略)

一 背此制法輩、御成敗刻、咎人之主人、或町人、或親類已下、聊不可相拘事、右条々堅被定置訖、若背此旨、以内々相济輩者、権門勢家之被官をいはす、於其身者被処嚴科、至私宅者闕所におこなわるへき由、所候也、仍下知如件、

永禄九年十二月廿九日

(飯尾為房)
兵部丞三善 判(2)

これは、戦国末期の都市民がどのような人間関係によって自己の權益を守ろうとしていたかを示す

好個の史料である。ここでは、撰銭令の違反を「座人中」が「かくし置」き、また権力が違反者を成敗しようとするとその「主人」・「町人」・「親類」などが妨害している。すなわち都市民は、座結合、主従制、町共同体、血縁集団などの中に身をおき、権力の公的検断をのがれようとしていたのである。この史料そのものは法令違反の罪科からの逃避を示すにすぎないが、これらの人間関係は、他の場面でより積極的に地下人の権益の保護、進展に働いたことは容易に推測できる。

さらに、町共同体が発達した一五四〇年代以降も、被官・役人としての特権を利用しようとする人々はあとをたたなかつた(表2)。

しかしこのような並存状況は町共同体にとって大きな桎梏ともなった。

四条綾小路町の町人等は先述したように、町内の土地を烏丸町の竹山に買わせまいとして申状を提出したが(3)、その後の経過から結局、隣の町の人々の口入もあって竹山の買得を認めざるをえなかったことがわかる(4)。竹山は將軍「御被官」であり、四条綾小路町が口入をうけ入れた背景には、このことがあったと思われる。

いま一つ、これも先にみた例だが、曾我正成の商売の由緒を示す証文が紛失したため、町人たちが

起請文を書いて由緒を証明し、正成の生業を保障したことがあった(5)。ところが「下京餅屋中」が「御月扇御料所」であることを根拠に正成の商売を侵している(6)。餅屋中は將軍との関係で正成の特権を打ち破ろうとしたのであろう。これらは町による土地管理、生業の保障と、領主支配関係や商工業者組織の利害が相いれなかつた例とみることができよう。

中世的な領主支配、社会構造との衝突が、町共同体の全面展開を阻害していたのである。

2 非分の世界

町共同体は町人相互の保護や町域内の防衛のため、幕府市政への抵抗も示しはじめる。徳政令発令時の土倉保護についてはすでにみたし(7)、撰銭令違反者を町人が保護している例も知られている(8)。これに対して幕府が都市民に地縁的な連帯責任を求める圧力も強くなる。永正年間の撰銭令では「見かく」しした者だけが罰せられたが(9)、天文年間には違法者の「隣三間」が無条件で罪科に処せ

られる例がでてきた(10)。

これらの事例は、公権力である幕府と、新しく成長してきた町共同体間の関係がいまだ未確立であったことによると思われる。ではなにゆえ、両者の関係は容易に確定しなかったのだろうか。

ところで自由都市論においては、都市民の自治に対峙するものとして武家(階級)を一括化して考えていた。しかし戦国期の京都は公家・寺社・武家・都市民等が混住する空間構成を示し、社会的にも相互にさまざまな結びつきを有していたことはすでに第一章でみた。

また佐藤氏以下の室町幕府論も、公権力支配からはずれた場面における武士の行動は全く考察の対象に入っていない(11)。だが幕府権力と武士一般の志向を同一視し、武士の行動をすべて公権にもとづくものとして説明することはできない。

戦国期の幕府・武士と都市民・共同体との関係については、公的な支配関係とは異なる視角からも考察する必要があるのである。

a 「喧嘩」と「打入」

表7は、『言継卿記』にみえる喧嘩記事をまとめたものである。

戦国期の洛中洛外においては、公家・寺社・武士・町・村がそれぞれ一つの集団として他の集団と喧嘩をしていることがわかる。ことさらある集団同士の喧嘩を特徴的なものと見なすことはできず、身分や共同体の性格にかかわりなく、自力集団間の喧嘩がいわば対等なかたちで行われている(12)。

こうした自力救済の武力紛争が際限ない報復をもたらすのではなく、一定のルールにのっとって解決されることは、勝俣鎮夫・藤木久志氏等の研究によって説明されてきた(13)。洛中の喧嘩においても、そうしたルールにもとづくパターンが確認できる。すなわち「喧嘩」↓「合力」による争闘のうち、公家・寺僧・武士などが中人として「中分」に入り、「相当」がはたされて紛争が終息するのである(14)。

次に、表8は、同じ『言継卿記』にあらわれた、武士の打入記事を集めたものである。

この表からうかがえる打入のパターンを示すと、まず武士が敵方同意者、敵方預物検断、地子銭徴収等の名目で、公家邸や都市民の家へ「打入」を行うか、「打入」するとの風聞が立つ。そこで公家

衆や都市民が結集し、武力抵抗の構えをみせる。ここで戦闘になる場合とそうでない場合とがあるが、「中分」が入って武士は撤退するのである。

武士が敵方同意の者、敵方預物のある家を検断することは、「正当な」権力行使のはずである。にもかかわらず公家衆・都市民がこれに抵抗しているのは、それらの検断が「正当な」公権にもとづくものとは認識されず、「私検断」として否定されたからだと思われる⁽¹⁵⁾。また地子銭の徴収も、正規の権利を有しない非分として退けられたのであろう。

また、打入に抵抗を示した公家衆や都市民・共同体に対して、武家権力がその暴力的発動である「発向」を行った例は一つもない。むしろ、打入が中人の「中分」によって解決されていることは、先にみた喧嘩のパターンとの類似性を示している。すなわち武士の打入は公的な権力行使の一環ではなく、私的な武力行動の一種とみなされ、洛中洛外の自力救済のルールによって処理されていたのである。

以上にみてきた喧嘩と打入の事例から、当該期の武士が多分に私的性格を帯び、洛中洛外の自力救済の武力世界の中で行動していたことがわかる。そして武士と都市民等は、公的な支配関係とは別に、同レベルの自力集団として対抗関係を形成していたのである。但し、そうした中でも特に武士は強力な武力を有するため、その打入が都市京都の中で卓越した問題となっていたであろうことも想像に難くない。

戦国期の幕府権力は、「政道」の一環として「誼譚」を禁止していた⁽¹⁶⁾。また幕府は町共同体の「喧嘩」を「惣町一同」の「狼藉」とみなし、町全体を「其咎」に処す方針を示したこともあった⁽¹⁷⁾。実際、天文十一年には「喧嘩」をした三条町に、同十四年には「三条町一町」に対して「御発向」が行われ、公家・寺社や洛外村落にまで軍勢召集がなされている⁽¹⁸⁾。

一方、幕府は、寺社はもちろん、やがて町共同体に対しても禁制を発給し、武士の私的な「乱入狼藉」、「寄宿」、「非分課役」などを禁止していった(表9)。

このように、戦国期の室町幕府も喧嘩や打入を法制的には制限しており、洛中「平和」実現の姿勢をもっていなかったわけではない。ではなぜ、実際には喧嘩や打入がくり返されたのであろうか。

先に、天文十四年、「喧嘩」をした「三条町一町」に対して「御発向」が行われたとしたが、これは「喧嘩」の際に將軍家小舎人が殺されたことに対する、將軍義晴の私的報復の色合いが濃かった。

表9 町共同体宛禁制一覧

No.	年 月 日	文 書 形 式	宛 先	寄宿・陣取・放火	非分課役	非分狼藉	非分申懸	その他の禁制事項	命令事項	出 典
1	天文15(1546).11.10	幕府奉行人連署奉書	上様御被官中 白雲精屋一町	○	○					上下京町々古書明細記
2	11.18	幕府奉行人連署奉書	上京室町頭老町	○	○				○	室町頭南半町文書
3	(18(1549)).7.10	三好長慶書状	上京洛中洛外惣御中			○	○			室町頭南半町文書
4	弘治 4(1558). 5. 8	幕府奉行人連署奉書	上様御被官中 上京白雲精屋一町	○	○	○				上下京町々古書明細記
5	6. 2	幕府奉行人連署奉書	上京室町頭老町	○						室町頭南半町文書
6	永祿元(1558).10.23	幕府奉行人連署奉書	鷹司老町	○	○	○				清和院町文書
7	4(1561). - . -	六角氏奉行人連署奉書	室町一町	○	○	○		竹木伐採		室町頭南半町文書
8	5(1562). 3.23	六角氏奉行人連署奉書	(上下京中)				○	敵方預備物違乱	○	精拙抄
9	8(1565).10.11	一乘院寛慶(足利義昭)奉行人連署奉書	清和院町		○	○		竹木伐採		清和院町文書
10	(11(1568)).9.21	三淵教実判物	上下京中 (上京中)		○	○				鏡頭屋町文書
11	9. -	織田信長朱印状	下京	○	○	○	○			室町頭南半町文書
12	9. -	織田信長朱印状	下京	○	○	○	○			鏡頭屋町文書
13	9. -	織田信長朱印状	四条あまへ(余部)	○	○	○	○	竹木伐採		余部文書
14	10. 7	幕府奉行人連署奉書	上京室町頭老町	○	○					室町頭南半町文書
15	10.12	織田氏奉行人連署奉書	(上下京中)			○		竹木伐採 押買・押売等 請取沙汰・ 理不尽催促	○	武家事記
16	12(1569).正.16	織田信長朱印状	(上下京中)							鏡頭屋町文書
17	? 2.29	織田家奉行人連署判物	近衛殿門外・同五 雲園師(???)町人中	○						近衛家文書
18	元亀元(1570). 9. -	浅井長政判物	(上京中)	○		○				室町頭南半町文書
19	4(1573). 7. 朔	織田信長朱印状	下京町人中	○	○	○			○	鏡頭屋町文書
20	7. 4	柴田勝家書状	下京中	○	○		○			鏡頭屋町文書
21	7. -	織田信長朱印状	上京	○	○			地子銭免除	○	上立売親九町組文書
22	7. -	織田信長朱印状	新在家精屋町	○	○			地子銭野島分	○	上下京町々古書明細記
23	天正 2(1574).正. -	織田信長朱印状	上京中	○	○				○	上立売親九町組文書
24	? 3. 2	木下秀吉書状	室町頭町中	○						室町頭南半町文書

◇ 本表は、初見から織田政権期までのものを集めた。

公家や洛外村落からわざわざ軍勢召集がなされたのも、こうした私利性格をうすめるためと考えられ、実際、町屋の焼討ちは公家や村落の召集者を帰らせた後で、開闢のみによって実行されたのである。

天文二十一年には、「喧嘩」をしたため、侍所開闢による「成敗」を受けそうになった雑色を保護するため、將軍義輝が「堅被仰」れたこともあった(30)。これらの例にみられるように、権力の首長である將軍自らが武力的報復の主体となったり、主従制的関係を公的な「成敗」に優先させるなど、私的な側面を濃厚にもっていたのである。

b. 非分の特質

天文十五年(一五四六)を初見として、町共同体を宛先とする禁制がみられるようになる(表9)。禁制は町共同体が礼銭を支払って獲得したものであり、これら禁制の中に町共同体が直面する問題の一端が表現されているものと想定できる。戦国・織田政権期の町共同体宛禁制に表れるそうした条項の

内、ここでは非分狼藉、非分申懸、請取沙汰などに注目したい。

非分狼藉とは、町屋などへの武士の打入を主な内容とする。打入の理由としては、敵方の人や預け物の検断、地子銭の徴収などがあげられるが(表8)、これらは市政権の発動であり、また都市領主の支配権を保障する行動でもある。

非分申懸については次の史料が参考となる。

一 今度敵敗北之刻、町々家々以礼銭拘事、慥於申合輩者、不及是非、無其故、理不尽号相拘、無謂儀雖有申懸族、一切不可致承引、猶以違論於相紛者、可致注進、速可被加裁断事、⁽²¹⁾

この史料は永禄五年(一五六二)、近江六角氏の軍勢が入京し、京都支配にあたった時に出された掟書である。合意もないのに保護してやる(「相拘」)と号して無理なこと、すなわち礼銭の強要をする者がいても一切承引してはならないとしている。このように非分申懸とは、礼銭などを町共同体に強要することを主要内容とする。

天文八年、二条室町と四条東洞院町人の訴えによると、細川晴元の威をかりて町の土地を不法に進退した吉村彦左衛門尉の違乱を抑止するため、將軍の意をうけた開闢兩人が晴元の元へ向かった。と

ころがその開闢の内の一人、松田頼康が町人に合力銭を要求しているので制御してほしい、という⁽²²⁾。頼康が本来、開闢の職務として吉村の違乱を抑止したにもかかわらず、私的な保護関係として町人に合力銭を強要したものであろう。これも非分申懸の一例である。

第三の請取沙汰とは、幕府の有力者が本来関係がない訴訟の当事者とし、有利な判決を得ようとする行為で、これによってしばしば裁判の不公平が生じる⁽²³⁾。

以上の点から、武士の非分とは単なる私的活動ではなく、戦国期の権力行使の一形態でもあることに気づかれる。これは戦国期になって都市民や町共同体に一層の富が堆積したため、この新しい権益に個々の武士が寄生しようとしたことに原因がある。そしてその前提には、武士が幕府公権に包摂されつくさず、個別に権益追求をつづけていたことがあったのである。権益の内容や搾取の方法、その主体が武士である点などに違いはあるが、これは旧来の都市支配の一変形といえる。武士の非分とは中世的な都市支配の最後の形態なのである。

ところで戦国期、京都の支配者は頻繁に交代した(表10)。支配者の交代は敵方を検断するための打入を引きおこし、新しい支配者は礼銭・合力銭を要求するのが常である。また政権交代は、賦課の徴

表10 京都支配者の変遷

No.	年 月	入 京 者	出 京 者
1	明応 2(1493). 2	細川政元	足利義材・畠山政長
2	永正 4(1507). 6	細川澄之	細川政元(死)・細川澄元・三好之長
3		細川澄元・三好之長	細川澄之(死)
4	5(1508). 4	細川高国	細川澄元・三好之長
5	17(1520). 3	細川澄元・三好之長	細川高国
6		細川高国	細川澄元・三好之長(死)
7	大永 7(1527). 2	(足利義隆・細川晴元・三好元授) 柳本賢治	足利義隆・細川高国
8		足利義隆・細川高国	三好元長・柳本賢治
9	8(1528). 5	(足利義隆・細川晴元・三好元長)	足利義隆・細川高国
10	享祿 4(1531). 3	細川高国・内藤彦七	(足利義隆)・木沢長政
11		(足利義隆・細川晴元・三好元長)	(足利義隆・細川高国(死))
12	5(1532). 6	(細川晴元・一向一揆)	(三好元長(死))
13	天文8(1535). 閏6	三好長慶	細川晴元
14		細川晴元・三好長慶と和睦	
15	15(1546). 8	(細川氏(死)・上野元治)	細川晴元・三好政長・(三好長慶)
16	16(1547). 7	(細川晴元・三好長慶・三好政長)	(足利義隆・足利義輝・細川氏(死))
17	18(1549). 7	三好長慶	足利義隆・細川晴元・(三好政長(死))
18	21(1552). 正	足利義輝・三好長慶と和睦	
19	22(1553). 8	三好長慶	足利義輝
20	永祿元(1558). 11	足利義輝	(三好長慶)
21	5(1562). 3	六角義賢	足利義輝・(三好長慶)
22		足利義輝・(三好長慶)	六角義賢
23	8(1565). 5	三好三人衆・(松永久秀)	足利義輝(死)
24	11(1568). 9	足利義昭・織田信長	(三好三人衆)

◇ 本表は、細川政元のクーデターから織田信長の入京にいたる間を対象にした。
()内の人物は、必ずしも京都にいなかったことを示す。

収権や裁判の判決内容を流動的にする。ここに武士の非分が繰り返されざるをえない戦国期権力の本質があった。

こうした武士の非分は、首都ゆえ、都市社会ゆえ発生したものである。しかしそれは同時に、都市社会ゆえ最も重要な経済活動・社会生活の不安定性をもたらし、過大な出費を必要とさせたため、町共同体と激しく衝突する。非分が権力行使の一形態であったことから、ここに戦国期の権力―町共同体間矛盾の集中的な表現を認めることができるのである。

こうして戦国期の幕府権力は將軍から末端の武士にいたるまで、いまだ中世的な私的性格を払拭できず、洛中においては自力救済の武力世界の中に埋没していたのである。こうした権力が洛中に「平和」をもたらせず、町共同体との間で安定した支配関係を構築できなかったのはいわば当然であった。町共同体はこうした問題への対処として、乱暴狼藉を働いた武士を「討留」める権限を得ようとした。天文十九年の田布施家久書状は、「拙者手者」が「乱暴・請取沙汰已下之於狼藉」を行なったならば、「不能御届」に「討留」めてもよいと保障している⁽²⁴⁾。しかしこうした対症療法が問題の根本的解決に結びつかないことは明らかであった。

一方、都市民の側にも武士との個別的な結びつきによって自らの權益を守ろうとする根強い志向があった。先にみた六角方の掟書でも「町々家々以礼銭拘事、慥於申合輩者、不及是非」としている。また請取沙汰の背景にも、武士との結びつきによって裁判を有利に進めようとする都市民の姿が見え隠れするのである。

こうした私的関係は武士の非分を誘発する土壌でもあった。それは礼銭等の過当、不当な負担を町共同体に強い、武士の介入による刑事・民事の不公平な裁判の温床となった。それゆえこの問題は、洛中「平和」を志向する町人・町共同体にとって大きな自己矛盾ともなっていたのである。

だが、こうした矛盾を町共同体が武力のみによって、あるいは共同体の自律的な規制によって解決することは不可能であった。一方、武家権力もこうした自己の本質的矛盾を根本的に解決することなしに、町共同体の支配、新しい都市京都の支配を貫徹することはできなかった。町共同体にとっても、武家にとってもこの矛盾の解決が緊要の課題となっていたのである。

こうして権力・都市民双方に複雑な要素をはらみながら戦国時代は後半にさしかかる。

(1) 前掲史料注第一章第2節(1)。

(2) 前掲史料注第2項(二)。

(3) 前掲史料注第2項(3)。

(4) 「——」 飯尾中務大夫

(親 俊) 蜷川新右衛門尉殿 貞広

(小)

綾少路正清家裏地 丈数、御被官竹山買得分事、同町人就申給奉書、雖及訴陳、隣町之衆以下

(子カ)

口入□細依在之、訴論共致同心之間、如元被返付之上者、任売券状之旨、□令全領知段、対

(盛秀)

竹山可被成御下知候哉趣、松田対馬守兩人申旨、急度御申入肝要候、恐々謹言、

(天文十九年カ) (飯尾)

十二月廿三日 貞広(花押)

(親 俊)

蜷川新右衛門尉殿

(「蜷川家文書」六三五、「飯尾貞広書状」)

一綾小路正清与竹山相論事、既雖及訴陳、隣町之衆以下口入趣、御兩所御礼之通令披露之處、然者、任売券狀之旨、可令全領知旨、对竹山可被成下御下知之由、頭人申候、恐々、

十二月廿八日

(盛秀)

松田对馬守殿

(忠房)

飯尾中務大夫殿

(『親俊日記』天文十九年条所収、「蜷川親俊」書狀案)

(5) 前掲史料注第2項(7)。

(6)

一下京餅屋中申狀之旨、令披露了、然曾我將監存分条々雖在之、為御月扇御料所之間、先如此間、可致商買之旨可被成御下知之由候、但此中、自然酢屋相紛之儀在之者、可被遂御糺明由、頭人被申候、恐々、

十二月廿一日

(晴長)

諏方神左衛門尉殿

(『別本賦引付』一、某書狀)

諏信州

一 曾我左近將監正成申狀

天文十四 三九

河彦左

右餅屋号酢屋事、正成令相統之處、近年猥商買仕之族在之条、去年就歎申上之、被成下御

(売)

成敗候、其以後、為下京餅屋中掠申之歟、又如此間、可致商買之旨被成御下知之条、迷惑

仕候、但其時御奉書之面 二毛、相紛酢屋之儀在之者、可被遂御糺明之由候、忝存候、然者

白餅・赤餅・蓬餅・阿古屋・粽・水鈍等之事者、於酢屋商売随一候、自余之餅屋調儀一向

無謂次第候、雖然以我等下致商買類事者、非制之限候、其外之輩、此色々商買之段、預御糺明、堅可致停止之由、重被成下御下知者、可奉忝存者也、仍粗言上如件、

天文十四年二月廿一日

(『別本賦引付』一)

(7) 前掲史料注第2節(9)。

(8) 前掲史料注第2節(11)。

(9) 前掲史料注第二章第1項(18)。

(10) 『本能寺文書』乾「飯尾元運提書」天文五年閏十月七日。

(11) 佐藤前掲論文注序章(5)など。

(12) 田端泰子『日本中世の女性』(吉川弘文館、一九八七年)第二部第二参照。

(13) 勝俣「戦国法」(『戦国法成立史論』、東京大学出版会、一九七九年)、藤木『豊臣平和令と戦国社会』(東京大学出版会、一九八五年)、同前掲著書注第2節(22)など。

(14) 佐藤進一氏が分析したように、戦国期には朝廷の京都「市政権」は全く失われていた(前掲論文注序章(5))。しかしそうした制度面とは別に、朝廷や公家が洛中洛外の自力救済社会の中でどのような調停機能を保持しつづけていたかは検討する必要がある。

(15) 高橋康夫氏は、大永七年の一連の打入への抵抗を、「政治的保守性」を帯びる公家・都市民の、反堺公方府・親室町幕府の行動として評価している(「町組『六町』の成立と構造」、前掲著書注第一章第1節(2))。しかし抵抗の契機は、公家・町人側の性格ではなく、堺公方府方武士の公権の希薄性に求められるべきであろう。

(16) 抑細川、政道事、少々申付之、其条目、(松田)頼亮注送之、

停止条々 撰銭事、盗人事、火つけの事、辻切事、誼諱事、相撲事、博奕事、踊事、

(『実隆公記』永正三年七月十一日条)

(17) 被尋下喧嘩事

凡故戦防戦御法在之、仮令於一町内重科人出来時、雖不知子細、及隣三間有御成敗者哉、然(宮カ)

(足利義植)

惣町一同致狼藉時、被処□町其咎歟、爰 惠林院殿御代、藤民部又三郎、至摂州木津・今□
間、及喧嘩生害時、不謂本人・惣庄、悉以被発向畢、每度依時宜、随事躰、或本人、或惣次、
有御成敗来乎、

天文十四年八月十六日

(『同事記録』天文年間)

(18) 就今度喧嘩、三条町御発向事、人数之儀、被仰出之处、則被応御触之条、尤神妙、向後亦可
被抽忠功之由、被仰出候也、仍執達如件、

天文十一
六月十八日

(飯尾)
堯連 判
(諏訪)
晴長 判

祇園社執行玉寿殿

(『祇園社記』雜纂第一「室町幕府奉行人連署奉書案」、奉書集成三五〇一)

『言繼卿記』天文十四年六月十七日条、『嚴助往年記』天文十四年六月十四十八日条。

(19) 同右。

(20) 『言繼卿記』天文二十一年六月七日条。

(21) 『鳩拙抄』「六角氏奉行人連署掟書案」(後掲注第三章第1節(6))。

(22) 一 布下披露 二条室町 本党寺前 人并四条東洞院町人中、就祇園會寄町事、去年令言上之、
(賴康)
落居處、松田豊前守、去今合力錢催促之段、迷惑趣申之、彼一町、吉村彦左衛門尉、為
(細川晴元)
右京兆恩補、恣令進退之条、諸人不相構私宅云々、因茲家數少之間、町人歎申候上者、

以去年被仰懸之旨、開闢兩人、為御使罷向京兆、可被退吉村一町違乱之段、可申屈之至、
(勉力)
至兩町催促者不可然之由、可被申通、各如此、

(『披露事記錄』天文八年五月七日条)

(23) 峰岸純夫「一向一揆」(岩波講座『日本歴史』中世四、岩波書店、一九七六年)参照。

(24) 急度以折紙申候、就此方近陣、拙者手者、洛中可致徘徊候、自然、無故乱暴・請取沙汰已下
之於狼藉者、不能御屈、可被討留候、從前々堅雖申付候、種々恣致申_レ之由、其間候之間、
為御案内令啓候、此旨宜預御披露候、恐々謹言、

(天文十九年)

後

五月廿四日

上京

月行事御中

(『室町頭町文書』「田布施家久書狀」)

(25) 前掲史料注(21)。

第三章 新しい都市支配と町共同体

第1節 三好政権の登場

天文十八年（一五四九）、三好長慶が將軍足利義晴を追って入京して以降、中世京都はその最後の段階を迎える。従来、戦国最末期のこの時期は、混乱と退廃をもって説明されてきたが、今谷明氏の一連の研究により、そうした評価の再検討の必要性が明らかになった⁽¹⁾。

今谷氏の研究は幕府・三好政権など権力構造を主な対象とするものであったが、都市京都研究においても、当該期の権力―町共同体などについての関係を見極める必要がある。

町共同体を宛先とする法令は、すでに室町幕府の最終段階、一五三〇年代半ばに初見史料がみられる(表二)。第二章でみたように、この時期以降、町共同体の成立が確認されることもあわせ考えれば、こうした法令の出現によって町々の共同体としての性格を前提とする支配が行われるようになったことが想像される。

また同じ頃から、幕府は町共同体を保護する禁制を発給しはじめた(表9)。当該期の禁制は受益者が幕府に礼金を支払って獲得されるものであり、町共同体が保護者として幕府への期待を高めていたことがわかる。また幕府も保護するべき対象として町共同体を認識しはじめていた。

このように町共同体を基礎とする支配はある程度、室町幕府も試みていたが、それを全面的に採用したのが三好政権である。

一五四九年以降、年未詳のものも多くもふくめて、三好政権が発給した町共同体宛法令には、惣町宛の、都市民一般を対象とするものが増えてゆく。しかもその多くは実際に町共同体に手渡されたものであった(表6)。

さらに三好政権は個別町を単位とする賦課もはじめた(三)。

表11 町共同体宛法令一覧I (織田政権期まで)

No.	年月日	文書形式	宛先	内 容	出 典
1	天文2(1533).8.9	幕府奉行人連署奉書	下京地下人中	祇園会山神を執行せよ	八坂神社文書
2	(3(1534)).4.28	茨木長隆奉書	所々町中(禁裏六町)	禁裏堀を掘れ	百柱野記
3	4(1535).11.15	茨木長隆奉書	上京・下京地下中	新座だけの積塔を阻止せよ	座中天文記
4	8(1539).12.24	幕府奉行人連署奉書	小河一町中	新座寺門前の勧進所再興停止を存知せよ	新座寺文書
5	24	茨木長隆奉書	小河一町中	新座寺門前の勧進所・在家再興停止を存知せよ	新座寺文書
6	10(1541).4.12	茨木長隆奉書	小河七町々人中	新座寺内勧進停止を存知し、承引しない輩の交名を町として注進せよ	新座寺文書
☆7	12.13	幕府奉行人連署奉書	上下京中	洛中洛外屋地・野島地子銭を本所へ沙汰せよ	室町頭南半町文書
8	11(1542).9.10~	幕府奉行人連署奉書	小河一町中	新座寺境内北町の針賃を撤去せよ	新座寺文書
9	15	茨木長隆奉書	小河一町中	新座寺境内北町の針賃を撤去せよ	新座寺文書
10	14(1545).8.13	飯尾元運奉書	上京・下京地下中	西京神人住中への特権安堵の奉書を存知せよ	北野文書
☆11	(18(1549)).7.10	三好長慶提書	上京洛中洛外惣御中	地子銭納所せよ、上夫を出せ、牢人衆許容禁止他	室町頭南半町文書
☆12	(19(1550)).後5.24	田布施家久書状	上京月行事	拙者手者の狼藉人は討めよ	室町頭南半町文書
13	永禄4(1561).10.8	幕府奉行人連署奉書	上下京中	京中借錢・借米の催促を延引せよ	堀川家文書
14	5(1562).3.23	六角氏奉行人連署提書	(上下京中)	敵方者は追い出せ、敵方内通者は成敗他	堀川抄
15	9(1566).3.17	飯尾為清奉書	上京中洛外	撰銭令	兼右野記
16	12.19	飯尾為清奉書	上京洛外	撰銭令	兼右野記
☆17	卯.22	三好長慶提書	余部司惣中	預かっている稲を返付せよ	余部文書
☆18	〈戦国期〉.正.8	松永長頼・三好長慶連署状	洛中洛外下京中	地子銭・諸成物等を納所せよ	室町頭南半町文書
☆19	〈戦国期〉.2.7	松山重治書状	室町頭月行事	当町内の西河方私宅を西河又三郎へ引渡せ	室町頭南半町文書
☆20	〈戦国期〉.卯.21	今村慶満・多羅尾綱知連署状	上京中	洛中段米免除	室町頭南半町文書
☆21	〈戦国期〉.7.21	三好長慶書状	当(立売)四町中	生嶋宅以下を破壊した犯人を執明して申分けよ	室町頭南半町文書
☆22	〈戦国期〉.12.19	細川国慶折紙	上京中	屋地子等を沙汰せよ	室町頭南半町文書
23	永禄11(1568).10.21	幕府奉行人連署奉書	上下京中	禁裏料所諸役等を沙汰せよ	百柱野記
☆24	11.29	幕府奉行人連署奉書	上下京地下人中	洛中洛外塩商売についての特権安堵を存知せよ	新座寺文書
☆25	12(1569).正.16	織田信長提書	(上下京中)	寺社本所領押領停止・喧嘩口論・合力停止、直訴訟停止他	新座寺文書
☆26	2.28	織田信長朱印状	(下京)	撰銭令	新座寺文書
☆27	3.16	織田信長朱印状	上京・(下京)	撰銭令	室町頭南半町文書
☆28	閏5.14	幕府奉行人連署奉書	下京中	殺人犯(松原某)を注進せよ、許容竊司罪	新座寺文書
☆29	(元亀2(1571)).10.15	織田氏奉行人連署判物	立売組中	禁裏賄米を請取り、来年正月より和利を進納せよ	上立先親九町組文書
☆30	4(1573).7.朔	織田信長朱印状	下京町人中	地子銭を納所せよ	新座寺文書
☆31	().7.-	織田信長提書	上京	運仕せよ他	上立先親八町組文書
☆32	7.-	織田信長提書	新在家組屋町	町域確定、惣構規定、地子銭は野島分、法度を定めよ	上下京町々古書明細記
☆33	天正2(1574).正.-	織田信長朱印状	上京中	家宅再興せよ他	上立先親九町組文書
☆34	〈織田期〉.9.9	大代久慶書状	室町頭南月行事	陣所近辺で狼藉した町人を引渡せ	室町頭南半町文書
☆35	〈織田期〉.極.朔	村井貞勝・明智光秀連署状	下京惣中	田地指出せよ	新座寺文書
☆36	〈織田期〉.12.22	朝山日乗提書	上下京中	米による売買禁止、撰銭禁止他	新座寺文書

◇ 本表は、初見から織田政権期までのものを集めた。
「No.」欄に「☆」印のないものは、文書の伝来から考えて、必ずしも町共同体に手交されたとは限らないもの。
町共同体保護の事項は、「内容」欄に記さなかった。

だが、町共同体を支配の基礎とするこうした政策が、何の装置もなしにスムーズに効果を上げるはずがない。そこには町人・町共同体支配の新たな論理が必要であった。三好政権が室町幕府と区別される重要な点は、それが町共同体支配を正当化する論理を積極的に身につけようとした点に求めらるべきである。

条々

- 一 公方衆地子錢之儀者、御入洛迄百姓前可相拘事
- 一 寺社本所領者、此間如有来候可令納所事
- 一 当方衆取来請地 并 当知行分者、為町中速取立、此方へ可納事 付、上夫可出事
- 一 牢人衆許容之輩於在之者、雖為以後、聞付次第可令成敗事
- 一 京中へ出入事、使之外、不寄貴賤令停止之上者、罷越、或不謂儀申懸、或於致狼籍者、(藉)相支可有注進候、可申付候、恐々謹言、

(天文十九年)

七月十日

三好
長慶 在
判

上京洛中洛外惣御中 (3)

これは天文十八年(一五四九)、三好長慶が入京直後に出した掟書である。

第一・三条では、地子錢を「相拘」えたり、「納所」したりすることを命じ、第四条では、牢人衆を許容しないように指示している。これらは共同体の機能を支配に利用しようとした条項といえよう。単に地縁的な連帯責任を追及する従来の方法から一歩進めて、町共同体に秩序維持の責務を負わせ、「平和」違反者の自己浄化を求めたものといえよう。

町共同体がそれぞれの自律性によって作り上げてきた地域社会を認知した上で、そうした地域社会の中での共同体の権能・義務を、支配の展開においてもはたさせようとしたのである。

ところが第五条では、「罷越、或不謂儀申懸、或於致狼籍者」は注進すれば処罰すると述べ、武士の非分を厳しく取り締まる姿勢を示している。非分を抑止することで町共同体の要求を実現し、支配

の正当性を獲得しようとしたものといえよう。そしてそのかわり、町共同体に支配命令への服従、敵方の自己糾明などを要求したのである。ここに三好政権の支配論理が凝縮したかたちで認められる。

条々

一 敵方^江之者、洛中或入交、或隠居輩在之者、早速可追出之、万一隠置之族、於露顕者、其宿并許容輩可被処罪科事、

一 敵方^江内通之輩、堅可被加成敗、違犯族有訴人者、可被褒美事

一 対敵方非奉公人、隨時節出入輩、不可有其咎、但於自今以後儀者、可為各別事

一 敵方跡財物預置輩、為当方被押執儀、一切不可在之条、万一於違乱者可致注進、速可被加成敗、雖然預物号返遣之、敵方^へ往反可為曲事、預主可拘持事

一 今度敵敗北之刻、町々家々以礼錢拘事、慥於申合輩者、不及是非、無其故、理不尽号相拘、無謂儀雖有申懸族、一切不可致承引、猶以違論於相紛者可致注進、速可被加裁断事

右条々違犯輩、速可被処敵科者也、仍下知如件、

永祿五年三月廿三日

(能寺)

沙弥忠行

(平井定武)

右兵衛尉⁽⁴⁾

六角氏が出したこの永祿五年の掟書からも同様の事象が読みとれる。第一、三条で、敵方(三好方)の検断命令を指示する一方、第四、五条では、非分の抑止を令している。三好政権が打ち出した政策基調が、その後、京都を支配する権力に継承されていったことを示している。

三好政権の町共同体に対する立場は、長慶が立売四町中に出した書状にもうかがえる。

(踊)

急度申候、仍去十六日立売四町衆、於生嶋弥六前跳之刻、号打飛礮、無謂於其庭令破損彼宅

以下由候、如何在之儀候哉、生嶋事致在国、足弱^茂留守中如此之儀、迷惑之旨候、以糾明之

上、可為有様之間、可申分事肝要候、恐々謹言、

(三好)

七月廿一日

長慶(花押)

町人が飛礮を打ち、生嶋弥六宅を破損したのに対し、長慶が「以糺明之上、可為有様之旨、可申分」と四町中に命じている。弥六は長慶の被官と思われ、このような場合、四町中に武力制裁がなされるのが常であった。ところが長慶は直接武力を使用することを控え、町共同体の自浄機能を利用して犯人を自己究明させようとしたのである。

先にみたように、すでに戦国期の幕府も町共同体に対して奉行人奉書等で支配命令を伝達する一方、禁制を発給して不十分ながらも保護を試みていた。しかし、これら命令と保護は基本的に別個のものとして存在した。三好政権では、そうした命令・保護の条項を同時にふくむ掟書が現れた点に特徴がある。

洛中「平和」侵害の最大の要因の一つは武士の私的活動による種々の非分であった。これらの掟書はそうした非分抑止を一方の大きな目的とした。もう一方の目的が支配命令の伝達であり、掟書が町共同体宛であることよりみれば、支配命令と保護の統一的提示の意義は明らかとなる。権力は、洛中

「平和」実現のネックである武士の非分抑止を進めるかわりに、町共同体による法令の遵行、自律性にもとづく支配の一層の進展をはかった。これによって権力は支配の「正当性」を確保し、町共同体との間の公的な支配関係を構築しようとしたのである。

三好政権のこうした姿勢の前提には、都市民・共同体から権力に向けられた執拗な要求行動があったものと思われる。三好政権になって禁制が増えることがそのことを例証している（表9）。

江
洛中 段米之儀、雖被仰付候、先規以来無之由、懇望候条、得其意候、別儀有間敷候、恐々謹言、

卯月廿一日

今村紀伊守

慶満（花押）

多羅尾左近大夫

綱知（花押）

上京中

上京段米、為御樽錢拾貳貫文請取申候、委曲以面申候条、不能巨細、恐々謹言、

（今村）

慶満

卯月廿三日（一）

この史料は、三好政権が洛中に段米を課した時に、上京中が「先規以来無之由懇望」し、「御樽錢拾貳貫文」を支払うことによって段米を逃れたことを示すものである。従来、幕府によって賦課される地口錢などについては、個々の土地領主が幕府と免除交渉するのが常であった。そうした交渉が惣町共同体によって担われるように変化したのである。

一方、当該期の権力側に町共同体の要求を受け入れざるをえない条件もあった。先にみたように断続的な政権交代を前提とする権力には、早急な都市支配の確立、人心掌握の必要があり、町共同体の敏心をかう積極策を次々と打ち出さねばならなかったのである。しかしより根本的には、三好政権の政権基盤の問題があったろう。三好政権は四国に本拠をもち、畿内では摂津国衆や河内にしか支持基盤をもたない、新入りの権力であった。それゆえ京都を支配するにあたって、新しい支配単位としての町共同体に注目する必然性と柔軟性をもっていたのである。

やがて三好政権は中世的な都市支配権を侵害しはじめた。三好政権にこうした侵害が可能であったのは、町共同体の形成した新しい都市社会構造を体制的に承認し、それに京都支配の基盤を移動さ

せつつあったことに求められよう。

こうして三好政権は、町共同体を通じて統一的に都市を支配する方法を見い出した。これは日本の都市支配の歴史における画期的な変化を意味する。権力は、中世的な社会構造に規定されない、新しい支配の契機をここでつかんだ。三好政権は、室町幕府とは一線を画し、近世権力へとつながる京都支配に足を踏み出したのである。

しかし三好政権がそれを貫徹できなかった最大の理由は、武士の直接的な暴力行為にはある程度歯止めをかけられても、彼らが都市民と被官関係などを結び、個別に権益を追求する体制にはほとんど手をつけられなかったことに求められよう。

そしてそれは同時に、町共同体にとっても桎梏となっていた。町共同体の武家への保護要求は、公権力としての三好政権への働きかけと、相も変わらぬ私的な保護関係との二本立てによって成り立っていたのである。

(三好)

従町中為御音信三種五荷、即申聞長慶候之處、祝着候由、相心得可申旨候、^へ將又私^へ鳥目貳十足被懸御意候、御懇儀令祝着候、旁御兩人^へ申候、爰元御用之儀等、承不可有疎略候、恐々謹言、

(天文二十二年)
後正月廿三日

鷹司町惣中(8)

鳥養兵部丞
貞長(花押)

鷹司町から三好長慶・鳥養貞長への礼物に対する礼状である。貞長は、「爰元」に「御用」があれば承り、よいように取りはからおうと言っている。町共同体が、礼物を送ることで武士と個別の関係を取り結び、保護をうける関係に入ったことを示す。

尚々、彼二町^(カ)への折紙、調進之候、此上馳走專要候

今度之拘銭之儀、其刻其方馳走之儀候間、町中二町之分致申調、至坂本可被持候、自余之拘も悉其分^二候条如此候、近日 御出張候間、馳走肝要候、恐々謹言

(天文十九年)
正月九日

香川治部少輔
政利(花押)

朽木左兵衛尉
広綱(花押)

室町
加藤殿(9)

室町の加藤某が拘銭を支払ったかわりに、足利義藤(のちの義輝)が「二町」の保護を保障する折紙を発給したことを示す史料である。依然として、拘銭↓折紙という個別の関係で町共同体の「平和」が確保されなければならない現状がしられる。

先にみた永禄五年の六角氏奉行人掟書でも、武士が「町々家々」を「礼銭」をとって「拘」えることを「慥於申合輩者、不及是非」としている(10)。このように武士と町共同体の両者合意の上での保護関係の契約は容易にはなくなかったのである。

だが、こうした関係を打破することなしには、非分の完全な抑止、洛中「平和」の実現、公的で一元的な支配関係の確立は望めない。町共同体と統一政権の課題は明らかであった。

(1) 今谷前掲論文注序章(1)。

(2) 『室町頭町文書』「結城山城禁裏修理要脚請取状」弘治二年八月八日など。

(3) 『室町頭町文書』「三好長慶掟書案」、町触一五二。

(4) 『鳩拙抄』「六角氏奉行人連署掟書案」、町触一八二。なお、本掟書は、京都の町共同体宛に出された法令で、密告を奨励し、密告者に褒美を規定した最初のものである。

(5) 『室町頭町文書』「三好長慶書状」、町触一五三。

(6) 『室町頭町文書』「今村慶満・多羅尾綱知連署状」、触一六五、同「今村慶満書状」、触一六六。

この他、夫役賦課に対して逐電して抵抗した例もしられる(『兼右卿記』永禄八年二月十日条)。

(7) 今谷前掲著書注序章(1)。

(8) 『清和院町文書』「鳥養貞長書状」、町触一五六。

(9) 『室町頭町文書』「香川政利・朽木広綱連署状」。

(10) 前掲史料注(4)。

第2節 織田政権の京都支配

永禄十一年(一五六八)、信長の入京によって成立した織田政権は、三好政権期がはじめた、町共同体の自律的権能の利用を継続して押しすすめた。

(老) 并

盲目千代都事、於覚弁私宅、為耆婆 松原新右兵衛尉所被令殺害之条、既被付覚弁之上者、至彼兩人者、随見合可被加御成敗、若令徘徊者早可致注進、有許容者可為同罪之由、被仰出候也、仍執達如件、

永禄十二

閏五月十四日

貞遙 在判

(諏訪)

晴長 在判

下京中(1)

ここでは、松原新右兵衛尉ほかの殺人犯の注進を命じ、許容したならば同罪としている。三好政權までの法令は、その町共同体に属する成員に違法者が出たならその注進を命ずる、いわば自己浄化を求めただけであったのに対し、ここでは、共同体内の監視機能を利用して、直接その共同体とは関係ない犯罪者の指名手配まで行っている(2)。

この他、座的な集団の商業・流通上の特権維持を命じる法令を町共同体宛に出したり(3)、共同体の地子銭収納機能を利用して洛中地子銭の広範な管理をはかったり(4)したことは、戦国期や三好政權期権力の継承といえる。

一方、権力支配の論理も一層進化し、町共同体の利用を目指す織田政權は、その自律性を奨励する法令さえ発した。

(裏) 条々

新在家絹屋町

一内裡惣堀⁵南江二町、近衛を限、東ハ高倉を限、西者烏丸を限、二町たるへし、惣構者下京
二可准事

一寄宿・陣取免除之事

地子銭者、野畠分たるへき事

一町中之儀者、為各法度を定可申付事

一非分課役除候事

右之条々、不可有相違者也、仍所定如件、

(織田信長)

元龜四年七月 日 彈正忠 御朱印(5)

第三条では、「町中之儀ハ為各法度を定、可申付事」とのべている。ここには、権力の法を遵行する主体として町共同体が成長するようにとの期待がこめられているといえよう。

急度申候、夜前、御町衆、拙者陣所於近辺、大豆手毎^二被引取上候事、如何候哉、当陣衆之儀も
(藉)

堅成敗被申付、乱暴無之候処^二、余狼籍候条、拙者自身罷出、既^二一人雖捕候、存知者^二候之条、

先指上候、早々彼者共可被引渡候、若於兎角者、悉存知候間、從此方可掬取候、各被召連、言語

(織田信長)

道断候、当座^二成敗不仕由候ハ、彈正忠折檻候、只今可被相渡候、恐々謹言、

九月九日

大代対馬守
久慶(花押)

室町頭南
月行事御中(6)

ここで大代久慶は、狼藉を働いた町人の身柄の引渡しを室町頭南町の要求している。町人の抵抗に対しては実力による捕縛を示唆するなど、その態度は前代より強硬になっているといえよう。これは、「当陣衆之儀も堅成敗被申付、乱暴無之候」と、信長方の武士の市中での乱暴抑止が前提となっている。権力が武士の乱暴を押さえているのだから、町人の狼藉も不当だとの論理構成をとっているといえよう。

また織田政権期にも、三好政権期に初めてみられるようになった、支配命令と保護の条項が同居した掟書がみられる。

追加

一 寺社・本所領当知行之地、無謂押領儀停止事

一 請取沙汰堅停止事

一 喧嘩・口論之儀、堅被停止訖、若有違犯之輩者、任法度之旨、可有御成敗事、付、合力人同罪

一 理不尽入催促儀、堅停止事

一 直訴訟停止事

一 訴訟之輩有之者、以奉行人可致言上事

一 於当知行之地者、以請文之上、可被成御下知事

永禄十二正月十六日
(マコ)

(織田信長)
弾正忠(7)

ここでは、喧嘩・口論を禁止する一方で、武士による理不尽な催促や請取沙汰を禁止している。さらに奉行人を介さない「直訴訟」を禁止していることは新しい動向として注目される。

こうした織田政権の達成は、永禄十二年の撰銭令に表現された。

精撰追加条々

(六ヶ条略)

一 銭定違犯之輩あらハ、其一町切^二可為成敗、其段不相届ハ、残惣町一味同心に可申付、猶其上^二至ても手余之族にをいてハ可令注進、同背法度族於告知ハ、為褒美要脚伍百疋可宛行之事、
永禄十二年三月十六日
(織田信長)
彈正忠(朱印)(8)

第一に、撰銭令違反者の制裁は個別町の責任とされ(「其一町切^二可為成敗」)、個別町で解決できなければ惣町(上京中・下京中)で解決するものとし(「惣町一味同心に可申付」)、さらにそれでも自律的に解決できなければ権力が成敗するという姿勢をみせている(9)。

こうして権力は、町共同体がその自律性によって違法者を自己浄化するよう求めるだけでなく、それから重層的な自律性の上に自らを位置づけていたのである(10)。

この永禄十二年の撰銭令に關して、町共同体が書いた初めての請書が残っている。

精撰之御制札^并追加御文言之旨をもつて、料足之取遣の段、為年寄町中^へ可申付由、被仰出候間、

不可有油断候、此儀相背候ハ、日本大小神祇、殊^{二ハ}法華三十番神御罰を蒙申者也、

組定

一 信長御折紙可有御取之事

一 其町々ノ年寄衆、連判させらるへき事

一 諸口より米上候様ニ御佗言事

(永禄十二年)

己 卯月八日の寄合也、(11)

前半の文書は、同年二、三月の兩撰銭令(12)を年寄の責任で町中に伝達せよとの命令を受け、町組の寄合において年寄衆が油断なく遵行することを誓い、連判した起請文の案文である。権力の法令をただ単に機械的に伝えるのではなく、町共同体の重層的な自律性によって責任をもって遵行する姿勢を示すものといえよう。

法令に対して町共同体が請書を出すようになったことは、都市支配の新たな段階の到来を示すが、

違反した場合、神罰のみを想定して権力の制裁は予定していない。また、同じ寄合では、洛中への米の円滑な流通を要求する行動の実施をも取り決めている。町共同体による法令の遵行が、権力の町人保護と密接な相互関係をもつべきであるとの認識の存在が改めて明らかとなろう。

ただ一方で権力は、法令違反者を発生させた町の町役人に連帯責任も課しはじめている⁽¹³⁾。都市京都支配における権力と町共同体の関係は、相互に矛盾をふくみつつも、急速に形を整えつつあったのである。

元亀四年(一五七三)、織田信長は、足利義昭を孤立させるべく上京を焼討ちにした。また最近では、信長が築いた二条城は、上京と下京に分裂した洛中を統一する都市プランのもとに立地させられたのであり、信長の都市改造の意図を高く評価すべきであるという指摘もある⁽¹⁴⁾。

こうした都市政策もふくめ従来は、織田政権の強権支配、革新性を主張するのが研究の主流であった。だが、町共同体支配の実態をみる限り、織田政権は前代の三好政権の成果を吸収し、確実に発展させてはいるが、その支配政策の独自性を過度に強調することはできないように感じられる。

(1) 『慢頭屋町文書』「室町幕府奉行人連署奉書案」、町触二〇三。

(2) 藤木久志氏は、戦国期の村が自検断の一環として指名手配を行ったことを明らかにしている(前掲著書第二章第2節(22))。織田政権が、こうした面でも共同体の自律性にもとづく慣行を利用していたことがわかる。

(3) 『慢頭屋町文書』「室町幕府奉行人連署奉書案」永禄十一年十一月二十九日(町触一九六)は、上下京地下人中宛に、「左衛門府領洛中洛外塩商買」に関して「六人百姓」の特権保障の奉書が出たことを「存知」するように命じている。

(4) 『慢頭屋町文書』「織田信長朱印状案」元亀四年七月朔日(町触二一一)には、「地子銭之事、如前々、万此方奉行人收納可令馳走」とある。

(5) 『上下京町々古書明細記』「織田信長掟書案」、町触二一七。

(6) 『室町頭町文書』「大代久慶書状」、町触一八八。

(7) 『慢頭屋町文書』「織田信長掟書」、町触一九七。ほぼ同文の掟書が、『仁和寺文書』九にもみえる。

(8) 『室町頭町文書』『織田信長撰錢令』、町触二〇〇。

(9) 「其一町切^二可為成敗」の部分「一町切りに処罰する」、つまり一町全体に連帯責任をかける」と解する説もあるが(脇田修『織田信長』、中央公論社、一九八七年など)、本稿のように町共同体の自律性を利用しようとしたものとすべきであろう(朝尾直弘「惣村から町へ」、『日本の社会史』六「社会的諸集団」、岩波書店、一九八八年)。

(10) 元亀元年、禁裏六町の火事に際し、失火者を出した一条町の月行事が木下藤吉郎によって梟首せられた(『言継卿記』元亀元年十二月七〜八日条)。これは、自律性を欠如して「平和」を乱した個別町に対して、本来なら上級の町共同体が行うべき制裁を権力が代行したものといえよう。

(11) 『慢頭屋町文書』『下京某組請状』、ならびに組掟案^一、町触二〇一。

(12) 前掲史料注(8)など。

(13) 『慢頭屋町文書』『朝山日乗掟書案』年末詳十二月二十二日には、「御法度野代物、撰過しあら^一、定置町之長共^二闕所たるへき事」とある(町触二〇七)。

(14) 玉井哲雄「近世都市空間の特質」(吉田伸之編『日本の近世』九「都市の時代」、中央公論社、

一九九二年)。

第四章 「公儀」支配の論理

第1節 中世都市社会の解体

1 空間構造の改変

豊臣秀吉の京都改造は、都市の空間構造の根本的変容をもたらした。そこには四つのポイントがあったといわれている。

第一は聚楽第の建設である。秀吉の居住空間であると同時に全国支配の拠点となる城郭＝聚楽第が

築造されるとともに、その周辺には全国の豊臣大名の京都屋敷が建ち並んだ⁽¹⁾。近年の発掘成果によれば、聚楽第の堀は幅三〇mを測る広大なもので、また聚楽第本体はもとより、周辺の大名屋敷いずれもが金箔瓦を使用する豪勢なものであったという⁽²⁾。

第二は公家町、寺町の設定である。戦国期には、内裏を中心としつつも公家の邸宅は上京一帯に散在していた。そうした公家宅を秀吉は集中させた。

寺院についてはその政策はより明確であった。戦国期、洛中には法華宗寺内をはじめ、浄土宗・時宗などの寺院が広く展開していた。秀吉はこれらの寺院の多くを、鴨川沿い、御土居内側のいわゆる「寺町」と、上京北の「寺之内」に集中させたのである⁽³⁾。これはそれぞれの寺院が門前の町屋住人と取り結んでいた政治的・経済的関係を切断し、寺院をより純粋なたちでまとめようとするものであった。中世都市社会の単位の一つが寺院と門前住民との間の関係にあることからすれば⁽⁴⁾、中世都市の明確な否定であるといえよう。

第三は、南北方向の小路の貫入である。

秀吉は、上京・下京の内部ならびにその周辺において、平安京成立以来の条坊を東西に分断する形

で南北小路を通した。これは、戦国期に洛中で多くみられた辻子を政策的に、全京都的に継承・拡大したもので、都市経済の活性化策であるといわれている。

しかし、下京の中心部（祇園会山鉾町にほぼ重なる）については南北小路の貫入はなされなかった。また新しくできた町並みが両側町を前提としていることにも注意しておきたい⁽⁵⁾。

第四は、御土居の建設である。

鴨川沿いの地域では洪水対策の意味もあわせもったが、京都全体としては、中世の複合的な都市構造の解消を目的とするものであった。上京・下京はもちろん、北野社・大徳寺・東寺の門前など、中世段階では独立した、別個の都市空間を形成していた寺社門前を空間的、視覚的に京都にふくみ込ませ、秀吉の支配下に位置づけようとしたものである。

またこれは、戦国期における上京・下京の惣構を発展的に継承したものである。都市共同体が中心となって構築した惣構を否定し、都市京都を外敵から保護する主体として権力が自らをアピールする意図を伴っていたといえよう⁽⁶⁾。

こうして聚楽第を中心とする「城下町」京都が誕生した。豊臣秀吉の京都改造とは、空間構造面で

の中世京都の解体、近世的統一であったのである。

しかしこのような空間の改変が単にそれのみで可能であったわけではもちろんない。空間の改造と密接にかかわるかたちで中世的な都市社会構造の解体が進められたのである。

2 都市領主の否定

豊臣政権⁽⁷⁾が、中世京都の都市領主を否定したことはすでに多くの研究が明らかにしている。

貴族や寺社に対しては、中世的な得分の一覧を提出させた。こうした得分は洛中の土地の地子銭や座役を中心としたが、豊臣政権はそれらを否定し、それにみあう替地を洛外に与えていった⁽⁸⁾。

その結果、洛中の土地は内裏・公家地や寺社境内地を除いて、すべて豊臣政権の一円直轄地化された。また座の解体にともない、商工業における座特権も否定され、原則として自由な商工業活動が可能となった⁽⁹⁾。こうして土地、商工業をめぐる中世的な都市領主権はすべて否定されたのである。

空間構造の改変を除けば、豊臣政権による京都の近世都市化という従来、以上のような土地領主・座の否定のみから語られてきた。しかし第一章での分析を思いおこせばいま一つ、中世的な社会構造として主従制の問題が残されていることに気づかれる。

だが、権力が京都における主従制を否定する法令そのものを出すわけではない。それはまず町における奉公人の居住禁制というかたちをとった。

禁制

六町

一切諸役 井 徳政事

一 寄宿之事

一 諸奉公人、不寄上下居住事

付、於為奉公人者、在京之時々号宿、構居所事

右、当町中者、禁裏様依為御近辺、従先々任免許旨、永不可有相違者也、仍所制如件、

(羽柴秀吉)

天文十三年三月 日

(花押)

ここでは対象が六町であるため禁裏近辺であることが理由とされているが、第三条とその付則にみ

られるような奉公人の居住禁止は、京都市中で広く一般化されてゆく政策であろう⁽¹⁾。

しかしこれは単なる住み分けの問題ではない。いまだ区別が明確でなく、相互に流動的であった奉公人・牢人と町人とをそれぞれ身分的に分別し、確定するための意識的な政策であった⁽²⁾。もはや町人でありながら、被官・奉公人として武士と個別の関係を結ぶことは許されなくなったのである。こうして権力は、城下町にみられるように、京都においても兵と商工の分離を行った。

以上みてきたように、中世的な都市社会の解体は領主権力内部の闘争、それによる権力総体の自己変革という形態をとって行なわれた。土地・生業などの中世的な支配権によって、都市領主が得ていた錯綜した権益は否定された。これは単に支配体制の改変のみならず、領主と百姓・座人などが取り結んでいた中世的な秩序の破壊、そうした秩序に立脚する中世的な都市社会構造の最終的な解体をも意味した。ここに豊臣政権は、領主権力として洛中で唯一の支配権、ならびにそこから得られる権益を基本的に独占することに成功したのである。

しかし、武士が都市社会の中でさまざまな権益を求めて私的な活動を行うこと、そうした武士と結びついて都市民が自己の権益をのばそうとすることは容易には否定できなかった。だが、こうした関

係が残る限り、豊臣政権は京都において都市民や町共同体を保障し、社会的諸問題を解決する権能を独占できず、公権としての確立が完成しなかったのである。

豊臣政権の課題は、武士と奉公人をどのようにして都市民から引き離し、町共同体をどのような方法で一元的に支配するかにかかっていた。

(1) 足利健亮『中近世都市の歴史地理』(地人書房、一九八四年)。

(2) 森島康雄氏(京都府埋蔵文化財調査研究センター)談。高橋徹「『聚楽第考古学』に光」(『朝日新聞』一九九三年三月十九日夕刊)参照。

(3) 伊藤毅「中世の都市と寺院」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』I「空間」、東京大学出版会、一九八九年)など。

(4) 第一章第1節参照。

(5) 玉井哲雄前掲論文注第三章第2節(一)参照。

(6) 但し、最近の発掘調査の成果によると、豊臣政権期、下京の惣構が直ちに全面破壊されたわけ

ではなく、堀の埋め戻しは十七世紀初頭までの長い時間をかけて行なわれたという(下京区豊園小学校跡地発掘現場から出土した、下京惣構について。山本雅和氏(京都市埋蔵文化財研究所)の談)。

(7) 本章では、羽柴・豊臣政権の性格を段階的に解明するにはいたらない。そこで以下、一括して「豊臣政権」と呼ぶことにする。

(8) 小野見嗣「京都の近世都市化」(『社会経済史学』一〇一七、一九四〇年)、吉田伸之「公儀と町人身分」(『歴史学研究』別冊、一九八〇年)など。

(9) 播磨良紀「楽座と城下町」(『ヒストリア』一一三、一九八六年)など。

(10) 『川端道喜文書』「羽柴秀吉禁制」、町触二三一。

(11) 時代が下がるが、元和九年(一六二三)の板倉重宗の黒印状では、「重而奉公可仕と存牢人」、
「従主人合力を取、京都二居住之牢人」は追放し、「其牢人、向後奉公仕間敷候旨 并 余之牢人拘置間敷之由」の一札を取り、「年久商いたし、妻子を持、在付候牢人、其儘可指置」と命じている(『妙心寺文書』「板倉重宗黒印状」元和九年九月二十三日、町触三三四)。

(12) 本稿では、武士の内、現在京都を統治する政権の配下にあるものを奉公人、そうでないものを牢人とする。戦国期には京都を支配する勢力が著しく入れ替わったため、両者は固定したものはなかったが、豊臣政権期以降、京都の安定統治が確立するのにもない、両者は基本的に固定してゆく。

第2節 都市法とその特質

第1節でみたように、中世的な都市支配・領主権や社会構造が否定されたことにより、京都においては町共同体が都市社会の唯一の基礎単位となり、また支配の対象となった。では、こうした状況をうけて、町共同体に対する支配の実態、その方法はいかなるものとなったのだろうか。

町共同体支配を検討する第一歩として、本節では豊臣政権期、洛中の町共同体宛に発給された法令の内容、施行方法、罪科規定についてみることにする。

なお、分析にあたっては、室町幕府法、三好政権など戦国期諸権力の法、織田政権法などからの展開に注意を払う。従来、豊臣政権期の法令をこうした視点から個別に検討する作業は余りなされていない⁽¹⁾。そこで、第三章までの内容と重複する点もあるが、比較を行うため煩をいとわないこととする。

1 法令の内容

天正十一年六月、豊臣政権は七ヶ条の掟書を洛中洛外に発布した。第一条で「新儀諸役」を免除した後、第二、三、五、七条は喧嘩口論・博奕・牢人居住を禁じたり、出火責任や訴訟方法を規定したりする条項となっている。ところがこうした一般的な条項とは別に第四条は、「諸奉公人」が町人に対して「非分狼藉」を犯した場合、奉行に申告するように命じている⁽²⁾。

また天正十四年、下京中に出された掟書でも、第二条から第五条に町人・町共同体が守るべき火の用心・掃除・夜番などに関する一般的条項を載せる一方、第一条では「諸国在京衆」の町人に対する押買・「狼藉非分」を申告するように命令している⁽³⁾。

このように豊臣政権は、洛中の町人・町共同体にさまざまな命令を下したり、その行動に制限を加える一般的な条項(A条項)と、奉公人などの非分狼藉を禁止し、非分があれば申告するように命ずる

表12 町共同体宛法令一覧Ⅱ (豊臣政権期)

No.	年月日	文書形式	宛名	備考	出典
16	(天正二〇)・六・二七	綴田家宿老中書状	上下京中	「はじめに」注(2)	小西康夫氏所蔵文書
15	〃・〃・〃	羽柴秀吉宛書	洛中洛外	史料A	今村具雄氏所蔵文書
14	〃・〃・〃	前田玄以宛書	(下京中)	史料D	綴田屋町文書
13	〃・〃・〃	〃	(上京中)	No.3とはば同文	冷泉町記録
12	〃・〃・〃	〃	下京中	史料F	綴田屋町文書
11	〃・〃・〃	〃	下京中	史料F	上下京古書一十五
10	〃・〃・〃	〃	下京中	大仏殿石垣普請に際し職者・年寄・子供動員	同 右
9	〃・〃・〃	〃	上京下京之	(京中屋地子免許の軍巧料カ)	上立売親町組文書
8	(一九九)・〇・三	牧野右兵衛請取状	老中へまいる	No.10とはば同文	同 右
7	〃・〃・〃	〃	(上京)	第二章注(9)	同 右
6	〃・〃・〃	〃	上京	No.10とはば同文	上下京古書一十五
5	〃・〃・〃	〃	(下京カ)	No.10とはば同文	綴田屋町文書
4	〃・〃・〃	〃	下京中	史料G	上下京古書一十五
3	〃・〃・〃	〃	与助	史料H	同 右
2	〃・〃・〃	〃	下京中	書物を明日六角堂で渡せ	上立売親町組文書
1	〃・〃・〃	〃	下京中	捜査令	上下京古書一十五

〔表注〕

・禁制・礼状等をのぞく。
 ・「出典」覧の「上下京古書」は、「上下京町々古書明細記」の略。
 ・No.13は町共同体宛ではないが、宛先の与助が町役人の一種と推定されるので収載した。

条項(B条項)の大きくわけて二種類の条項からなる法令を發布した。のちにみるようにこれらA条項とB条項は密接な関係を有していたが、行論の展開上、B条項の内容・意義についての考察は第3節以下にまわし、ここではA条項の分析からはじめたい。

豊臣政権期の一般的法令として第一に多いのは、喧嘩・博奕・盗賊・放火・「悪党」等を禁じて罪科の規定をしたり、牢人や不審者の検挙を命ずる、治安維持の条項である(4)。

室町幕府の法令の中には、博奕をはじめ、喧嘩・盗人・放火等を禁止した法令が断片的ながらもしばしば現れる(5)。一方、「牢人衆許容」や「敵方」への内通を禁ずる町共同体宛法令は、戦国末期の三好政権期からみられた(6)。こうした点から、この種の条項は豊臣政権独自のものでないことになる。

一般に放火等は町共同体にとっても好ましくあらざるものであり、この点で権力と共同体の利害は一致する可能性をもつ。但し、「悪党」・不審者の概念は一定ではなく、両者でそれが一致するとは限らない。権力は政権維持の見地から「悪党」を規定し、町共同体は構成員保護のために内部の違法者を「見隠」しする傾向が強い(7)。何が「悪党」とされたかは法令の文面だけからでは十分うかがい知れないが、その規定に際しては権力の恣意性が強く出され、町共同体との矛盾を深めていたことは

間違いない(8)。

第二に目だつのは、町共同体の自律的規制を具体的に求めていく条項で、火の用心・夜番・掃除などを油断なく行うように命じ、街路に物を干すことを禁じている(9)。

戦国期権力は、検断・法令遵行など、権力支配とかかわる面で、町共同体の自己規制を求めたが、その自律性にまでは介入できなかった。しかし織田政権は、「町中之儀ハ為各法度を定可申付事」とし、町共同体に「町中之儀」一般に対する責任をもたせた(10)。これをさらに具体化したのが豊臣政権期の条項である。

ところで火の用心や夜番は広義の治安維持行為であり、掃除等も都市の秩序維持をはかるものであることから、町共同体の利害と直接矛盾するわけではない。しかし織田政権期のように「町中之儀」を共同体の「法度」に任せるのではなく、具体的に法令で指示しはじめたことは、町人の生活に密着した問題まで権力の法が介入する段階が到来したことを示す。

第三に、奉行人経由の訴訟を命じ、「女を以申来公事」を裁許しないとしたり、また売買・質入等の取引に際して文書主義を強制したりする条項がみられる(11)。

実効性の有無を別とすれば、権門の口入を排し、奉行人を通して訴えることを命じる条項は室町幕府法にもしばしばみられるが(12)、それが町人をも主要な対象に加えたことに訴訟制度の整備がうかがえる。また裁判・貸借・商売などに関する条項は中世的慣行の「合理的」否定をめざしたものと評価できよう(13)。

以上みてきたように、当該期の一般的な法令条項(A条項)の内容は、前代までのものに比べてより精緻になったといえよう。治安維持条項はさておき、町共同体の自律的規制を具体的に指示する条項や裁判・商取引に関する条項には従来みられなかったものが多く、権力の介入が一層進んでいることがわかる。豊臣政権は、これらの点において戦国・織田政権期権力の成果を確実に継承し、展開することに成功しているのである。

2 施行と罪科

本項ではまず、当該期の法令の施行方法をみる。

戦国期の後半、洛中の町共同体を宛先とする法令が出現し、やがて上京中・下京中に宛てて市政に關する普遍的法令がしばしば発せられるようになっていく。この段階でも依然として「百姓中」・「座中」宛の法令はみられるが、権力の洛中支配の上で町共同体宛法令の重要性は漸増し、織田政権期にはそうした傾向が一層進んだ。

これをうけて豊臣政権期には「百姓中」宛の法令がみられなくなり、「座中」宛のものも一部を除いて消滅した⁽¹⁴⁾。そして法令は基本的にすべて町共同体宛となる。京都の都市民は、法令施行の面において、基本的に町共同体に属する「町人」としての側面のみで権力によって掌握される段階に到達したのである⁽¹⁵⁾。

ではどのような制度によって権力は町共同体に法令を施行しようとしたのであろうか。室町幕府は「町人」としての連帯責任で違法者を摘出させようとした。三好政権期には、権力は町共同体宛の法令を発給し、共同体の自己浄化を求めて法令の遵行をはかった。さらに織田政権期には、法令の遵行を一層確実にするために、町役人の責任で町中に申し触れよとの命令が発せられた。これに対し、町

組の寄合において年寄衆が油断なく遵行することを誓っている。こうして権力は、町共同体の自律性による自己規制を法令遵行において発揮させる政策を進めてきた。

豊臣政権期には、より正確に法令を遵行する体制が生まれた。

天正十二年の掟書では、「奉公人」の「悪儀」は直訴するとの起請文を書き、その案文を提出するように命じている⁽¹⁶⁾。そしてこの命令をうけて同年、前田玄以宛に町共同体が起請文を書いた⁽¹⁷⁾。掟書の第二条からみて、起請文正文は共同体が保管し、案文のみを玄以に送ったのであろう。

そのことを裏づけるのが同年正月の別の起請文である。違法行為が「露顕」するかまたはそれを「隠置」いたならば神罰を蒙るとし、下京饅頭屋町の三十九名が署判している⁽¹⁸⁾。ここでは案文が権力に提出されたかどうかは不明だが、正文が饅頭屋町に伝わったことからみて、この当時、一般に起請文正文は町共同体に保管されたと考えられよう。

ここに権力は、町共同体に法令を遵行することを命じるのみならず、そのことを誓う起請文を書かせ、案文を権力に提出させるようになったのである。起請文の作成にあたっては、織田政権期と違って権力の要求にもとづく側面が強まり、またその案文を提出させるなど制度的に整備されていること

が注意される。

次に、当該期の法令にみえる罪科の規定について検討しておく。

違法が発生した際、違法者本人が罰せられることはいつの時代もかわりない。それぞれの時代相を表すのは連帯責任のとりせ方である。

戦国期の権力は、違法者の「隣三間」や同町の「町人」に連帯責任を課していたが、のちに違法によつては個別町全体を罪科に処すようになった。しかし、町共同体の側は町役人が連帯責任を有するとの意識にうすく、織田権力の法令に対して年寄衆が起請文を書いたときも違法者に神罰が当たることを表記するのみであった⁽¹⁹⁾。

この町共同体の意識は豊臣政権期になつても変化しない。現存する当該期の二通の起請文はその文末で、違法を行ったならば梵天・帝釈以下の神々の神罰を蒙るとする⁽²⁰⁾。その中に祇園・愛宕・北野の神々や弥陀・法華が現れることは、この起請文が中世以来の洛中町人の宗教観に立脚したものであることを示す。これに対して権力は、違法者を出した町共同体の「年寄共」、「月行事迄」罪科に処そうとした⁽²¹⁾。

しかし結局、豊臣政権期において、町役人まで連帯責任があることを明記しているのは権力側の法令だけであり、町共同体の起請文にはそうした文言は出てこない⁽²²⁾。町人は起請文に書かれた自分達の神々の神罰には規制されても、権力の設定した罪科には容易に従おうとしなかったのである。

やがて徳川の治世期になると、町人は神罰のみに規定された中世的、一揆的な共同体観を後退させ、権力の法令に対する町役人の連帯責任をより一層強く認識するようになる⁽²³⁾。豊臣政権期は、罪科の規定をめぐって権力と町共同体がせめぎあう過渡期といえよう。

従来、土地制度や役賦課の検討から、豊臣政権は前代の権力に比べてより強力に洛中を支配したとされてきた。これまでの本節の分析によつて、それが法令の内容や性格からも確かめられたといえよう。

しかし、こうした権力側の支配制度の変化だけを一面的に評価し、それが統一政権の強制力によつてのみもたらされたとみることはあまりに皮相である。制度は複雑なコースをたどった実態の一つの結果にすぎない。次なる課題は、こうした支配制度の変化を導いた、豊臣政権における権力と町共同体関係の実態を説明することにある。

(1) 徳川政権初期の「板倉氏新式目」と戦国大名分国法との関連については、中田薫「板倉氏新式目に就いて」(『法制史論集』三上、岩波書店、一九四三年)が分析している。

(2)

掟 洛中洛外

- 一新儀諸役等、一切不可在之事
- 一喧嘩・口論輩、双方可為成敗、但^(仕カ)懸者雖在之、令堪忍、對奉行於相理者、則可為存分事
- 一火事儀、至自火者其身可処罪科、若付火為分明者、遂糺明可隨其事
- 一諸奉公人、對町人非分狼藉族於^(在カ)之^(者カ)、不寄仁不肖、無用捨奉行可申事
- 一諸勝負停止事
- 一洛中洛外諸牢人、秀吉不相知輩、不可居住事
- 一諸事、聞奉行人、以別人令訴訟者、可為曲事
- 但、奉行、若於相紛子細慥者、依事可直訴事
- 右条々、堅定置上者、聊不可有相違者也、仍如件、

(一五八三)
天正拾一年六月 日

(羽柴秀吉)
筑前守(花押)

(『今村具雄氏所藏文書』「羽柴秀吉掟書」、町触二二六)

(3)

- 一今度 御讓位・御即位付、諸国在京衆、自然對町人、押買・狼藉非分之族等於有之者、更々如置目、無用捨可申聞事
- 一火之用心等事、例式雖不可有油断、猶以今度諸国衆在京中相たしなむへし、若出す者於有之者、懸別之置目之外、一廉可加成敗之事
- 一掃除以下、堅可申付之事^(寝)
- 一町之夜番之儀、兩方釘貫にねすに在之而往還之人を相改、無油断可相勤之事
- 一諸勝負之儀、堅雖為御停止之儀、今度諸国衆入京之儀候間、自然仕者於有之者、其宿として可申聞、於不然者其宿共に可成敗之事

右条々、若於油断之町人者、堅可加成敗之状如件、
(一五八六)
天正十四年十一月朔日

(前田)
玄以判

下京中

(『饅頭屋町文書』『前田玄以掟書』、町触二三六)

(4) 前掲史料注(2)の第二・三・五・六条、注(3)の第五条、左記掟書の第一条など。

覚

一下京中園子小路^二至迄、弥念を入、諸牢人、其外徒なる者共可被改、然者検使を可出事
一対洛中、此方奉公人下々共^二悪儀於申懸ハ、誰々の事^二よらす、可有直訴との誓紙之事、
付、案文可出事

一年始・八朔兩度之樽錢之外、一切此方への音信、不可在之候事

一去年六月以来、諸事申付様、迷惑なる儀於在之ハ、不被残心底可有訴訟、様躰開届、可随
其事

一如此申出上、不及訴訟、なにの色もなく、無政道なりなと、取沙汰於有之者、聞出し次第、
其者可成敗事

以上

(前田玄以)

(天正十二年)

(『饅頭屋町文書』『前田玄以掟書案』、町触二三〇)

(5) 室町幕府法追加法一〇〇、一八六、三三七、三四〇、三四二条など(佐藤進一・池内義資編『中
世法制史料集』二「室町幕府法」、岩波書店、一九五七年)。

(6) 前掲史料注第三章第1節(3・4)など。

(7) 第二章第2節参照。

(8) 天正十二年の佐久間道德事件がその一例となる。これは、道德が謀反を企てたとして、道德ら
が居住していた一条町・実相院町町人が検断をうけた事件で、両町町人は逃散して抵抗したが、
多くは捕縛され、朝廷の取りなしで解放された(『兼見卿記』同年五月十一日条など、『大日本史
料』同日条参照)。

(9) 前掲史料注(3)の第二・三条、左記触状など。

町々辻子小路二至迄、掃除之儀、無油断之様、為月行事可申触、
并 大道二物を干候事、可為

禁制候、若無沙汰候処有之ハ、其町之月行事迄、可令成敗候也、

九月十八日

(前田)

玄以書判

下京中

(『神田家記録』『前田玄以触状案』、町触二六一)

(10) 前掲史料注第三章第2節(5)。

(11) 前掲史料注(2)第七条、左記掟書①第一条、掟書②など。

① 掟 下京中

一 公事篇之儀付而、論人・訴人共^二礼錢以下、一切不可出之、若下々申次者^二至る迄、礼物出儀於歴然者、取者之儀者不及申、出候者共^二可為曲事事

一 対洛中町人、奉公人、若非分狼藉於申懸者、即可申上候、自然申聞儀如何与思惟之内、從此方於聞出者、被申懸者共^二可為曲事事

一 女を以申来公事^二おゐてハ、一切不可裁許、但女之身^二うけたる至公事者、可及糺明事
右如件、

文禄五年
三月八日

(石田三成)
治部少輔

(『饅頭屋町文書』『石田三成掟書案』、町触二五四)

② 定 上京

一家屋敷一所持候者、二所^へ書入、借錢・借米不可仕事
(言葉) (借貸)

一 借錢方之事、証文之外、ことはの契約を以かりかす事不可仕、并^号預状、利足之員数のせ
(弁) (載)

一 諸商売人売買物之事、当座^二とりやり不仕外、懸錢以下書物を以可相究、ことはの約束不可信用事

付、すあいを以取やりの事も、書物を以可相究事

(者欠カ)

右、被相定上、若於違背之輩ハ、双方可被処殿科由、被仰出如件、
(前田)

天正廿年五月十二日

玄以判

（『親九町組文書』『前田玄以掟書案』、町触二五一）

（12）室町幕府追加法二〇八・三〇三など（前掲注5）。

（13）横田冬彦氏は、近世の領主法は、「在地におけるさまざまな集団の掟や規範、慣習を総括し、その小集団なるが故の狭隘性を克服し、かつその最先端をとりこんで、より普遍的なものとして先取りのに打ち出すが故に、様々な在地の掟・規範・慣習に対する優越性を主張しえた」としている（『近世村落における法と掟』、『文化学年報』（神戸大学）五、一九八六年）。

（14）『玄以法印下知状集』には多数の「座中」宛安堵状を載せるが、検討を要するものも多い。

（15）戦国・織田政権期には、個々の問題について、その解決を命じる個別町宛の法令がみられたが、豊臣政権期になると、管見の限りこうした法令がみえなくなる。徳川政権初頭にまた個別町宛の法令が復活するが、豊臣政権期だけみられない理由については不明である。

（16）前掲史料注（4）第二条。

（17）敬白 起請文之事

（前田玄以）
一 対洛中洛外、民部法印御家中奉公衆上下共二、七ヶ条之御置目之通を被背、公事篇之儀、

其外諸事 二 至迄、被相紛、非分狼藉之族、被申懸仁於在之者、不寄多少之儀、於誰々之儀も無用捨直訴可仕事、

一 去年六月以来、同御家中衆下々至迄、聊被背御置目、非分狼藉被申懸候衆無之事

一 忝被召寄、御直談御直談にて、何れも町人覚悟之まゝに被遂御相談、被仰付儀忝存候間、
（事欠カ）

聊以背御意あしき儀御座候者、令用捨隠置御座有ましき之事

右条々、若於違背仕者、梵天・帝尺・四大天皇、惣而日本国中大小之神祇、殊祇園牛頭天皇
（宕）
（族）

・愛宕之権現・八幡大菩薩・天満大自在天神○部類眷属、神罰・冥罰■可罷蒙者也、仍起請如件、
（年十二欠カ）

于時天正十二月七日

（前田玄以）

民部卿法印

（本文中「○」印ニ挿入スルモノト思ハレル——著者注）
井三十番神・法華八軸・阿弥陀如来来世まで

（『饅頭屋町文書』『饅頭屋町町人起請文案』）

（18）從玄以様被仰出条々、若衆達之悪党、喧嘩、諸勝負、盜賊、火付等事、於露顕不及是非、少

(タマ) (積)

於隱置者上者、梵天・帝尺・四大天王・八幡大菩薩・春日大明神、殊^{二ハ}祇園牛頭天王・面

(宕)

々氏御神・愛宕權現・北野天満天神・弥陀善逝・法華八軸妙典、信罰・冥罰可蒙罷者也、

(一五八四)

天正十二

正月十九日

三条烏丸饅頭屋半町

与左衛門(略押)

(三七名連署略)

左衛門(花押)

以上

(『饅頭屋町文書』『饅頭屋半町町人起請文』)

(19) 前掲史料注第三章第2節注(11)。

(20) 前掲史料注(17・18)。

(21) 前掲史料注(9)、左記直状など。

公儀御用等并政道方之儀ニ付申出候事、諸事下京之者共令油断候、種々沙汰之限^二候、自今

以後、油断之輩無用捨可申上候、五組之内雖為何之与、惡事從此方聞出候ハ、年寄共可為

曲事候間、万事不可有用捨候也、

二月十二日

(前田)
玄以

与助

(『上下京町々古書明細記』十五「前田玄以直状案」)

(22) 但し、法令に対する起請文以外では、前田玄以に町人の由緒を報告した「冷泉室町西面町人書

上」の文末で、二名の行事が「此外一も無御座候、若御座候者、可有御成敗」とするのをみるこ
とができる(『冷泉町記録』、文禄二年極月十三日)

(23) 管見の限り、法令の請状の中で町役人の連帯責任を明記したものは、『冷泉町記録』「年より
・行事連署請状写」慶長十二年閏四月二十九日が初見である。

第3節 非分狼藉と政道

1 京都奉行の限界とその克服

天正十年六月、織田信長・信忠没後の支配のあり方を相談するため、尾張清須城に会した織田家の宿老中〔1〕は、京都の「上下京中」宛に一通の書状を認めた。

（織田信長・信忠） （三法師） （可欠カ） （由欠カ）
今度 御兩殿様不慮之儀付而、城介殿若子様、為御宿老中、奉尊天下之儀、被仰付候、然者、洛中政道方、先奉行裁許、於順路者、可為如其置目候、若非分族於在之者、被成御改、可被加御宥免之条、前後之儀無其憚可令言上候、為其尋遣之、恐々謹言、

（天正十年）
六月廿七日

（丹羽）
惟住五郎左衛門尉
長秀

羽柴筑前守
秀吉

池田勝三郎
恒興

柴田修理亮
勝家

上下京中〔2〕

「洛中政道方」については、先奉行（村井貞勝）の裁許が「順路」であったならばその通り継続し、「非分族」がいれば改めるので、はばかりなく言上せよ、とある。それでは「順路」とは何であり、「非分」とは何であったのか。それらによって規定される「洛中政道」とはどのようなものであったのか。

戦国期の武士は、直接的な暴力行為ばかりでなく、私的に因縁をつけて公家・寺社や町共同体に礼

錢・合力錢などを強要した。また彼らは「請取沙汰」と称して他人の訴訟に介入したりしていたが、これら私的な非分が、個々の武士の公的地位を利用したものであった点に中世社会の特徴がある。そしてこうした非分が、洛中「平和」を求める町人・町共同体にとって重要な問題となっていたこともすでに指摘した⁽³⁾。

権力がこうした武士の私的活動に対して制限を加え、具体的にその非分狼藉を禁圧しようとしはじめるのは三好政権期からである。さらに織田政権は、「堅成敗被申付、乱暴無之」状況を実現し⁽⁴⁾、請取沙汰や理不尽に催促を入れることを禁止していった⁽⁵⁾。

しかしこうした政策上の理念とは別に、豊臣政権初頭までの権力が実際に武士・奉公人の非分狼藉を抑止していたかというとはなはだ心許ない。

天正十年(一五八二)八月、秀吉は、京都奉行桑原次右衛門⁽⁶⁾に解任・召還を伝える書状の中で以下のように述べている。桑原を目付として京都に残して置いたのは「不謂族」・「狼藉人」を聞き届け、成敗するためであるのに、逆に自らが「事を左右二よせ、種々のまどかり申かけ」て地下町人を「迷惑」させている。また「領知方あらため」は諸方の知行の「差別」を知るべきためであり、「当

知行之所」は「違乱妨」があってはならない(のにしている)。さらに「京中預物以下」の「糺明」も

「悪逆人」を穿鑿することが主目的であるのに、「案内者」と号して「むさとまどハる」者がいると

いう。悪行する「徒者共」が横行するのは桑原による「成敗」が不届だからである。このようにして

「天下之ほうへん二の」り、「都鄙外聞失候へハ」悔やみきれないので召還する、というのである⁽⁷⁾。

ここに、当該期においても、権力の構成要素たるべきはずの奉公人が、戦国期と何ら変わらず町人等に対して非分狼藉を繰り返していることがわかる。その際、「預物以下糺明」を名目にしたり、「

「けんいをかり」るなど、公務、公的地位を利用して私的な非分を行う状況も戦国期と同じである。

しかもそうした奉公人の私的活動を抑止することがいかに困難であったかは、公権力を代表して「成敗」を敢行すべき京都奉行桑原自らが「種々のまどかり申かけ」ていることから推測されよう。

こうした事態に対して秀吉が「天下之ほうへん」⁽⁸⁾、「都鄙外聞」を気づかっているのは、権力支配を展開する上でこれが重大な障害であったことによると思われる。なぜなら洛中において当該期権力に要請されたのは、「平和」の実現による町人・町共同体の保護であったのだから。

翌天正十一年五月、新たに前田玄以が「京都奉行職」に任じられた。この玄以の就任に際し、織田

信雄が発した掟書の第三条には以下のようにある。

一 其方事、程隔候て、自然、讒言・云成等事在之者、直ニ申聞可随其、不申出以前者、如何様之取沙汰雖有之、聊不可氣遣事、(8)

もし「讒言・云成等」があつたら直接玄以の言い分を聞き、それに従うので、こちらから申し出る以前はどんな「取沙汰」があつても氣遣いしないでよいとする。

また同年六月、秀吉は玄以に三ヶ条の掟書を与えた。

一 於洛中洛外、諸奉公人、非分狼藉之族於申懸者、雖為誰々、其主不及届、糺明次第可有成敗、若知音・縁類難去など、て用捨之儀於有之者、其方可為越度事

一 諸事無用捨、有様之旨被申付者、諸人、我非分不弁、令偏執、如何様之族、秀吉申聞儀候共、其者を引合、糺明をとけ、可随其事、

一 京中在々諸奉公輩、被官、家来、或者無等閑とて、公事懸候儀ニ令方人事、甚以可為曲事、若左様之者於在之者、無用捨可被申聞事、

右条々、堅可被得其意者也、仍如件、

(羽柴秀吉)
筑前守

天正十一年六月日
(前田)

玄以

秀吉は、①「諸奉公人」の「非分狼藉」は「其主」に届けずに「糺明次第」に「成敗」せよ。「知音・縁類」だとして用捨することは「越度」である。②玄以が用捨せず、「有様之旨」を申しつける、と、「諸人」が自らの「非分」をわきまえずに「偏執」し、秀吉に讒言してくるかもしれない。しかしその場合はその者を引き合わせ、糺明する。③「諸奉公輩」が「被官、家来、或者無等閑」と称して「公事」に「方人」することは曲事なので報告せよ、と命じている。

京都奉行前田玄以にとっても洛中支配を展開することは決して容易ではなかった。それは第一に、奉公人が、「知音・縁類」や「被官、家来、或者無等閑」などの私的な関係を洛中の様々な階層と結んでおり、その利害に左右されたことによる。第二には、桑原と同様、玄以自身がそうした関係にとらわれて成敗を用捨しかねないことがある。さらに、たとえ玄以が公的な成敗を貫徹しようとしても、「諸人」(＝奉公人等)が自らの「非分」をわきまえずに、信雄や秀吉に玄以を讒言する恐れがあつた

のである。

これは、京都を支配する公権力の構成員であることを自覚すべき奉公人が、京都奉行をもふくめ、依然として戦国期以来の私的な関係に拘泥し、それによって得られる権益の追求をつづけていたことを示す。

ところがこれに対して豊臣政権は、まず京都奉行が私的関係によって成敗を用捨することを禁じた。その上で奉公人等の讒言を排除することを強力に保障し、京都奉行を盛りたてようとしている。これは中世的な諸権益、諸関係を破壊し、公的かつ公平な成敗を行わせることで京都奉行の、ひいては公権力の権威を一層高めようとするものである。

こうして豊臣政権は、奉公人の非分狼藉を成敗する、より強い志向性をもつものとして洛中に登場したのである(100)。

2 公権力と奉公人規制

天正十年六月、信長暗殺、光秀横死直後の『兼見卿記』に、「政道一段厳、洛中洛外安堵了」とある(101)。権力者が斃れて、洛中洛外は混乱状態に巻き込まれる危機に直面した。しかし新たな支配者の「政道」が厳しく、混乱は回避された。ここで「安堵」した「洛中洛外」とは公家・寺社・町・村などをさす。そして「政道」は、混乱に乗じて様々な乱暴を働きかねない武士たちに向けられていたといえよう。

天正十二年と推定される前田玄以掟書の第五条は、「如此申出上、不及訴訟、なにの色もなく、無政道なりなと、取沙汰於有之者、聞出し次第、其者可成敗事」とする。このように自分が言っているからには、「訴訟」もせず、(不満な)そぶりもみせないで、一方で「無政道」などと自分を批判する者は聞き出し次第成敗するというのである(102)。

ではこの「如此申出」た内容はいかなるものであったか。同じ掟書の前四ヶ条によるとそれは、「諸半人、其外徒なる者共」を町共同体が検挙すれば「検使」を出す。「此方奉公人下々共」が「悪儀」を申し懸けたら直訴せよ。年始と八朔の二度の樽銭の他は自分への音信は無用である。去年(天正

十一年（六月）以来、自分が「諸事申付」けたことに「迷惑」があれば「訴訟」せよ、というものであった。すなわち、権力はこうした条件を整えることによって、「無政道」という町人の批判を許さない状況が出現すると認識している。逆にいえば、町共同体による治安維持を権力が保障し、奉公人に「悪儀」を申し懸けさせず、権力が過剰な礼物を要求せず、町共同体の訴訟を聞き届けることが「政道」であることがわかる。

ここに武士・奉公人の非分と権力の「政道」との関係が鮮やかに示されている。

前項でもみたように、戦国期以来、武士は私的な権益追求のために非分を繰り返していた。これに対して豊臣政権は、京都奉行の私的活動を禁止するとともに、彼に強力な権威を付与して奉公人の非分を取り締まろうとした。当該期においては、このような奉公人以下の非分抑止がすなわち「政道」なのである。

ところで第2節第1項でみたように、当該期の法令の中には、治安維持を命じ、町共同体の自律性を求め、商取引の規制などを定める一般的な条項（A条項）とは異質な、奉公人の非分に関する条項（B条項）が含まれていた。これらは「政道」の条項とよべよう。

そこで、当該期の法令条項を中心に「政道」の内容をまとめてみることにする。

まず、最も多いのは奉公人等が「非分狼藉」・「悪儀」を申し懸けないようにとするものである（1）。「非分狼藉」の内容は様々であろうが、第一義的には、武力を背景に「預物以下糺明」と称して「打入」したり、「押買」したりすることをさすと思われる（14）。

実効性があったかは疑わしいが、武士の「非分」は、室町幕府以来の町共同体宛禁制で繰り返し禁止されてきた。「預物以下糺明」は戦国期に武士が町屋に「打入」するときの名目の一つであり、三好政権期には預物の「押執」が禁止の対象として現れた（15）。「押買」禁令は、洛中では豊臣政権期が初出だが、地方都市では商業空間の「平和」維持条項として前代からみられる（16）。

このようにこの種の条項は、戦国期以来の権力が制禁の主要な対象にしてきたものである。次に、「諸奉公輩」が「公事」の際に「被官、家来、或者無等閑」と称して「方人」することを停止している（17）。これは、奉公人がしばしば私的な関係から他人の「公事」（裁判）に介入していたことを示す（18）。

こうした行為は一般に「寄沙汰」・「請取沙汰」とよばれるもので、その禁令は戦国期の地方都市

にみられ⁽¹⁹⁾、洛中でも永禄十二年の織田信長掟書の中で禁止されている⁽²⁰⁾。洛中では比較的新しく出現した禁止条項といえよう。

第三に、年二回の樽銭以外は音信無用、公事の際の訴人・論人の札銭以下禁止という条項があげられる⁽²¹⁾。これも、京都奉行や奉公人が様々なかたちで町人・町共同体に札銭・礼物を要求しかねないことを示している。

戦国期の侍衆が不当な理由で町共同体に「札銭」・「合力銭」を強要していた例はすでにあげた⁽²²⁾。「案内者と号して諸方へむさとまとハるゝ」というのも同様のことであろう⁽²³⁾。こうした実態をうけてそれを制禁する条項が出されたのであろうが、町宛の法令としては前代にはみられない、豊臣政権に特徴的な条項である。

さらに権力は、「諸事申付様」に「迷惑なる儀」があれば「訴訟」せよ、「様躰」を聞き届けてそれに随おう、と述べている⁽²⁴⁾。これは、権力自身が「申付」けたことでも「迷惑」があれば申し出るようにとしたものである。こうした条項は前代には全くみられなかった。

以上のように、豊臣政権は「政道」に関する法令条項を詳細に発布した。それは、京都奉行から個

々の奉公人にいたる、様々な非分狼藉を規定し、その抑止をはかるものであった。その中には戦国・織田政権期権力の政策を発展的に継承したものもあるが、豊臣政権独自の条項も多い。直接の武力を伴わない非分や権力自身による「迷惑」を訴訟するようにさせるなど、「政道」の貫徹を一層進めていることがわかる。こうした「洛中政道」の積極的な展開が豊臣政権の京都支配の上での重要な特徴であった⁽²⁵⁾。

豊臣政権は内なる闘いに勝利した。すなわち、権力内部の階層間の矛盾を止揚し、奉公人の私的な権力行使を抑制して、京都においては豊臣政権Ⅱ「公儀」に権力を一元化したのである。そして豊臣政権は、「政道」によって「平和」を統轄する唯一の権力として洛中社会に臨んだのである。

しかし、権力がこれほど執拗に奉公人の非分狼藉を抑止し、「政道」を貫徹しようとしたのは何故であろうか。単に町人・町共同体の歛心をかうためだけであったとは思えない。豊臣政権に特徴的なこの「政道」の裏に潜むものが何であるのかを見極めておく必要があるだろう⁽²⁶⁾。

(1) 『大日本史料』十一―一、天正十年六月二十七日条参照。

(2) 『小西康夫氏所藏文書』「織田家宿老中連署状案」。

(3) 第二章第3節第2項参照。

(4) 前掲史料注第三章第2節(6)。

(5) 第三章参照。

(6) 桑原が京都奉行であったことは、『兼見卿記』天正10・8・13条に、「自羽柴筑州使者、京都奉行別人申付候由案内也」とあることなどよりわかる。

(7) 急度申遣候、仍今度、為目付京都残置候事ハ、したく不^(慮)■族共可在之候条、左様之狼藉人聞届、堅令成敗、神妙ニ可申付為ニて候処、さハなくして、事を左右ニよせ、種々のま^(纏)とハり申かけ、地下町人ニよらず、迷惑せしむる由、風説さまく^(慮)也、於事实者、言語道断さたの限ニ候、付置候其詮なき事候間、早々可罷帰候、天下之はうへんニのり候事、口惜題目候、今度領知方あらため之事も、諸方之知行共入交候間、其差別をしるへきためにて候条、勿論、公家領・寺社本所領、何も当知行之所、少も違乱妨不可在之候、京中預物以下、糺明申付候儀も、地下町人等草のなひきたるへきニ、天下をくつ返すほどの悪逆人を取もち徒なる輩を、

且ハ可相撰ためにて候、又^(長岡兵部大輔藤孝カ)■兵者共も、案内者と号して、諸方へむさとまとハる、様ニ其間候、是又かたく停止候様可申届候、古田左介者共も、辺外辺内ニ打散候て、悪行共在之様ニ相聞候、是ハよも左介存候て仕候とハ不存候、成敗ゆるかせなるニより、徒者共けんい^(権威)をか^(重然)り、悪名をきせ候と令推量候、各不屈覚悟ニより、都鄙外聞失候へハ、千々満々後ニくやミてもとり不被返候、右之趣共いか成共、誠とハおもハす候へ共、かたちのなき事ハ申ちらすましく候、所詮、早々此方へ可罷帰候、為其七郎左衛門・弥兵衛申付、差上候、恐々謹言、^(天正十年)
八月七日
筑前守 秀吉判

桑原次右衛門とのへ

(『立入文書』「羽柴秀吉書状案」)

(8) 一京都奉行職事、申付之訖、然上、公事篇其外儀、以其方覚悟、難落著仕儀有之者、相尋筑前守、何も彼申次第可相極事^(者欠)

一於洛中用事有之者、信雄以墨付、何時も可申出候、不然者、下々申越候共、不可信用事

一其方事、程隔候て、自然、讒言・云成等事在之者、直ニ申聞可随其、不申出以前者、如何様之取沙汰雖有之、聊不可氣遣事

右条々、可成其意候也、

天正拾壹年

五月廿一日

(前田)
玄以

(織田)
信雄 判

(『古簡雜纂』『織田信雄掟書写』、町触二二五)

(9) 『本圀寺宝蔵目録』『羽柴秀吉掟書案』、町触二二七。

(10) 天正十一年に秀吉が出した二通の掟書では「諸奉公人」の「非分狼藉」を京都奉行前田玄以に報告し、玄以が「其主」に届けずに「諸奉公人」を「成敗」するように命じている(前掲史料注(9)第一条、第2節(2)第四条)。ところが、天正十二年の玄以掟書では「此方奉公人」のみの、町が出した起請文では「民部法印御家中奉公衆」のみの「非分狼藉」の報告命令に後退している(前掲史料注第2節(4)第二条、同(17)第一条)。秀吉は奉公人一般の「成敗」を京都奉行である

前田玄以に期待したが、玄以にとっては、自らの主従制下にならない「諸奉公人」の「成敗」までは、当初やはり困難であつたのだらう。

(11) 『兼見卿記』天正十年六月十七日条。

(12) 前掲史料注第2節(4)第五条。

(13) 前掲史料注第2節(2)第四条、同(4)第二条など。

(14) 前掲史料注(7)、第2節(3)第一条など。

(15) 第二章第3節第2項、第三章第1節参照。

(16) たとえば、『円徳寺文書』『織田信長掟書』永禄十年十月日(楽市場宛)信長文書の研究七四(勝俣鎮夫「楽市場と楽市令」、『戦国法成立史論』、一九七九年、東京大学出版会、参照)など。但し、『武家事紀』中「柴田勝家等連署禁制写」永禄11・10・12第二条で「押買・押売」等を禁じているが、この禁制は「洛中洛外」宛の可能性もある。

(17) 前掲史料注(9)第三条。

(18) 前掲史料注第2節(17)第一条で、「公事篇之儀、其外諸事」至迄、被相紛、非分狼藉之族、被

申懸仁於在之者」とある「公事篇之儀」も、同様なことをさしていよう。

- (19) 『興正寺由緒書抜』『安見直政掟書案』永禄三年三月日(富田林道場宛)(峰岸純夫前掲論文注第二章第3節注(23)参照)。

- (20) 前掲史料注第三章第2節(7)第二条。「請取沙汰」が武力をとまなう行為でありえたことは、「乱妨・請取沙汰已下之於狼藉者、不能御届、可被討留候」(前掲史料注第二章第3節(24))とあることからわかる。

- (21) 前掲史料注第2節(4)第三条、同(11)①第一条。

- (22) 第三章第3節第2項参照。

- (23) 前掲史料注(7)。

- (24) 前掲史料注第2節(4)第四条。

- (25) これらの法令条項によって、非分狼藉が実際に抑止されたかどうかは不明とせざるをえない。しかし、徐々に減少したと推定して大きな誤りはなからう。

- (26) 京都奉行桑原氏宛に召還理由を述べる手紙(前掲史料注(7))や、前田玄以宛の掟書(前掲史料注

(9))が、町人・町共同体など巷間に伝わったということは、これらを権力が意識的に流布させ、宣伝効果を狙っていたことを推測させよう。

第4節 政道と町共同体

前項でみたように、豊臣政権は町共同体に対して権力自身や奉公人による「迷惑」・非分狼藉を積極的に訴訟するように求めた。しかし権力はただ単に町人の自由な訴訟を保障したわけではなかった。第一に、「政道」に関する条項がそれ自身独立した法令として発布されたのではないことを忘れてはならない。

「政道」の条項(B条項)を載せる豊臣政権期の町共同体宛法令は現在四通みられるが、そのうち三通までが一般的な法令条項(A条項)をもふくむものである⁽¹⁾。このことは、三好政権以来の権力と同様に当該期権力も、町共同体に対して、奉公人の私的な非分狼藉を抑止して「政道」という保護を展開するのときあわせに、一般的な支配法令を遵行させようとしていることを示す。

豊臣政権の独自性は他の点に見いだされるべきである。

まず豊臣政権は、奉公人が「悪儀」を申し懸けたら「直訴」するとの「誓紙」を町共同体に書かせて、案文を提出させている⁽²⁾。これは奉公人の非分を町共同体が訴訟するように強制するものである。また、豊臣政権が「公儀御用等并政道方之儀」について命じたことを「下京之者共」が「油断」している。「悪事」を権力が聞き出したら「年寄共」に「曲事」とするので、「油断之輩」は用捨せず⁽³⁾に申し上げよと述べている。この「政道方之儀」を「公儀御用等」となれば、年寄に連帯責任を課すことで、町共同体に「油断」なからしめようとしているのである。

さらに、奉公人に「非分狼藉」を「申懸」けられた町人がそのことを豊臣政権に「申聞」かそうかどうか迷っているうちに、権力がその「非分狼藉」の発生を「聞出」したならば、町人も共に「曲事」とするという⁽⁴⁾。ここには町人の訴訟の自由はない。町人・町共同体は訴訟を強制され、躊躇することは「曲事」とされたのである。

その上で豊臣政権は、「如此申出上、不及訴訟、なにの色もなく、無政道なりなと、取沙汰於有之者、聞出し次第、其者可成敗事」とする⁽⁵⁾。権力は奉公人の非分狼藉を抑止し、もし発生したら訴訟するようにと町共同体に保障を与えてきた。これだけ条件を整えてやっているのに権力を「無政道」

などと批判することは許さないというのである。

豊臣政権は、権力自ら、ならびに権力を構成する奉公人への厳しさの現れとして「政道」を貫徹しようとした。しかし権力はそれを保障するだけではなく、その監視を町共同体に求め、訴訟を強制した。そしてこうした条件を実現した上で「無政道」との批判をかわしたのである。個々の「迷惑」や非分狼藉に矛盾を矮小化させ、権力支配そのものへの根本的な批判を封じ込めようとしたといえよう

(6)。

しかもこれはかたちとして武力によって強制的に行われたものではなかった。前田玄以に出された起請文の一条は、町人(町役人)が召し寄せられ、「御直談」にて、すべて「町人覚悟」の通りに「御相談」をして仰せ付けられたことは「忝」(かたじけない)ので、少しでも「御意」に背く「あしき儀」があれば用捨して「隠置」いたりしない、としている(7)。

同じ起請文の前二ヶ条から考えて、ここで権力が仰せ付けた内容が、奉公人の非分抑止という「政道」であったことは間違いない。そしてそうした「政道」の貫徹を町共同体は「忝」と認識している。

戦国期以来、武士の非分にさらされつづけた町人・町共同体は洛中の「平和」を待ち望んでいた。

それを豊臣政権が最終的に実現したのである。もちろん、この文言をそのまま町共同体の真意と見なすことはできない。しかし町共同体側に「忝」と感ずる契機があったことは確かであり、それが権力のねらい所でもあった。

豊臣政権は、町共同体の望む「政道」を貫徹し、それを町共同体に監視させる体制を作り上げた。そして、このことによって支配の「正当性」を獲得して批判を封じると共に、本来の目的である一般的法令(A条項)を遵守させていくのである。

だが、豊臣政権の「政道」にはもう一つ重大な意味がこめられていた。

豊臣政権が京都支配を行うにあたって、意を注がねばならなかったのは、武士が私的に町人や町共同体と関係を結ぶ、戦国期以来の洛中社会の実態であった。

豊臣政権期初頭の奉公人も戦国期の武士同様、洛中において「知音・縁類」、「被官、家来、或者無等閑」など様々な私的関係を複雑に取り結んでいた(8)。そしてこの関係は当該期の町人・町共同体にとってもその権益を守る有効な手段となりえた。町人・町共同体は礼銭その他によって奉公人に権

益の保護を求め、奉公人はもとより京都奉行も課税・裁判などの場面で私的に利害を誘導したからである。町人・町共同体の權益を侵すとそれらと結ぶ奉公人に讒言されかねないため、京都奉行は成敗貫徹の意欲を鈍らせかねなかったのである（一）。

これに対して豊臣政権は「政道」を押し進めた。奉公人の非分狼藉の取締り、洛中「平和」の実現を大義名分に、奉公人と町人・町共同体が取り結んでいた複雑な私的保護関係そのものまでとりくずそうとした。「公事」への「方人」の禁止、樽銭・礼銭の抑制（二）がこのことを物語る。

奉公人と町人・共同体の関係はいわば両刃の剣であった。それは非分狼藉の温床であると同時に、私的な權益保障の手段でもあったのである。ところが豊臣政権は、このうち前者に焦点をあて、奉公人の非分を「政道」によって抑止していった。しかしこれは同時に、後者の面で、町人・共同体の權益確保の一つの拠点であった奉公人との私的な結びつきを骨抜きにしてゆくことをも意味したのである。

ここに、豊臣政権の法令が奉公人の非分狼藉の抑止、「政道」の貫徹にあれほど躍起になり、町共同体に起請文までかかせて訴訟させた真意が隠されている。もはや洛中「平和」は、個々の奉公人と

の私的關係によってではなく、「公儀」によって守られるべき時代となった。

京都で唯一、公的な権力としての豊臣政権がこうして完成するのである。

（1）前掲史料注第2節（2・3・11①）。

（2）前掲史料注第2節（4）第二条。なお起請文提出のシステムについては第2節第2項参照。

（3）前掲史料注第2節（21）。

（4）前掲史料注第2節（11）①第二条。

（5）前掲史料注第2節（4）第五条。

（6）豊臣政権期には、奉公人と牢人を法理上、明確に区別するようになる。そして、奉公人は、権力配下の者であるからその非分は権力の責任で抑止するが、牢人は権力と無関係とし、治安を乱すものとして町共同体の責任で摘発させるのである。これは、洛中「平和」の実現にあたって、権力の義務を縮小し、町共同体に責任を転嫁する巧妙な施策であるといえよう。

（7）前掲史料注第2節（17）第三条。

(8) 前掲史料注(9)第一・三条など。

(9) 第3節参照。

(10) 第3節参照。

終章 近世京都の誕生

第1部においては、中世後期京都の社会構造を確定した上で、その中から近世的な町共同体が確立してくる過程をみた。そしてこの町共同体を支配の基盤とするため三好・織田政権がどのような支配を展開したか、豊臣政権が中世的な都市支配・社会構造を否定する一方で、「公儀」としてどのような論理で京都支配を行なったかを分析してきた。

中世後期の京都においては、朝廷・公家、寺社、武士など(都市領主)が、それぞれ土地、商工業を支配し、都市民を主従制で編成していた。こうした支配関係を基礎に中世的な都市社会の構造が形成されていたが、それら相互の関係はきわめて錯綜しており、モザイク状、あるいは散りがかりな様相を呈していた。都市京都を支配する公権たるべき室町幕府は、こうした社会構造に規制され、各都市領主の支配の補完、都市領主間の利害の調整など、きわめて限定的な支配しかできなかった。これ

は、公権に対応すべき公民としての「都市民」が中世京都にはいまだ成立していなかったことにも原因があると考えられる。

十五世紀末以降、都市領主権の衰退という事態をうけて、都市民は生活の場や生業を自律的に安定させる必要に迫られていった。そして十六世紀初期には、土地・家屋の共同管理、生業の連帯保障、一揆的な結合という三条件をきっかけに個別町（両側町）が確立した。成員を相互に保護すると同時に、全体の利益を侵す成員には厳しい制裁をも課す共同体であった。

個別町が複数集まって町組や惣町を組織し、重層的な「公」秩序を形成していった。これは、中世的な社会構造において分裂していた諸側面を町を単位に統合したもので、都市社会の新しい基礎構造となるものであった。

こうして戦国末期の京都においては、中世的な都市領主・社会構造と、町にもとづく近世的な社会構造が並存することになった。中世的な領主支配の方法によっては町共同体を支配できなかったが、一方で、町共同体独力では、中世的な社会構造を否定することも不可能であった。特に、都市に堆積された富の収奪を企図する武士（將軍から下級の被官まで）が、狼藉・請取沙汰を行ったり、合力金を

強要したりする非分行為を繰り返し、都市の「平和」を乱していたことが大きな矛盾となっていた。

戦国末期に登場した三好政権は、町を積極的に支配の一環に組み込もうとした。その際、町が直面していた武士の非分を抑止することで支配の「正当性」を確保しようとしたのである。三好政権を継承した織田政権や豊臣政権も、同様の論理で都市支配を進めたが、その方法は次第に整備されたものとなってゆく。

町共同体が本来もっていた自浄能力を支配にも発揮させ、町の責任で町内の違法行為を摘発させた。また権力が、重層的な町共同体の上に立つ「公儀」であることを認識させていった。特に豊臣政権は、中世以来の都市領主権を否定し、中世的な社会構造を解体させ、洛中においては、町のみを唯一の社会構造の単位と認め、支配の基盤にすえたのである。

最終的に豊臣政権にこのような支配が可能となったのは、権力が武士・奉公人の非分を強力に取り締まる「政道」を貫徹し、京都に「平和」をもたらすことができたからに他ならない。但し、奉公人の非分抑止は、武士と都市民の私的結びつきという中世的な人的関係を最終的に否定することでもあったのである。

こうして、中世的な都市構造が解体し、「公儀」と町共同体が唯一、直接対峙する近世京都が成立したのである。

第1部での考察は、自由都市論をはじめ、従来の中近世移行期の京都研究とは、方法においても、結論においても大きく異なる点が多い。そこで、序章での提起をも念頭において、簡単にふりかえっておきたい。

本稿で最も重視した視角は、中世から近世への移行を連続的に分析することであった。こうした視角を採用することによって、都市京都にとっての三好政権の意義をはじめて明らかにすることができた。三好政権は、武士の私的な非分を押さえられなかったため都市の「平和」の実現にはいたらなかったが、町共同体を都市支配の基盤にすえる志向は近世的なものの源となり、織田・豊臣政権に積極的に継承されていたのである。

織田・豊臣政権については、強権的な京都支配を展開したという側面のみが重視されすぎてきたきらいがある。だが室町幕府と統一政権との間に三好政権をおくことによって、統一政権が従来考えられていたほど革新的であったわけではなく、中世末期社会の矛盾を克服する過程で統一政権がはたし

た役割がむしろ明確になったといえよう。

ところで、従来の自治都市研究の多くは、都市共同体と権力との直接的な関係のみをあつかってきた。だが本稿では、権力の一員であるべきはずの武士の私的な活動や都市民との個別的なつながりを重視し、その展開を追跡した。その結果、戦国期の都市社会における武士の活動、人的つながりの重要性和近世権力による否定の意義が明らかになった。

だが、右のような点にのみ権力―都市民の関係を集約することには異論があるかもしれない。確かに具体的に実証できた事象は、都市社会の一段面にすぎない。しかし、こうした切口に権力―都市民関係の集中的な表現をみてとることも可能であろう。

また本稿では、権力と都市民を直接対立のみで説明しない方法論をとったこともこれに関係しよう。権力と都市民の「もたれあい」、都市民・共同体による権力への規制を重視した。

これらの視点にたつてはじめて、織豊政権による京都支配の統一は、領主権力内部の変動のみによって実現したものではなかったことがわかる。それはいくつかの点で都市民の動向に規定されたものであったのである。

一つには、複雑で錯綜した中世的な都市社会構造を克服して、都市の統一支配を可能とする新しい社会構造を町共同体が用意したということ。もう一つには、町共同体が新種の強力な都市民衆組織に成長したため、中世的な分裂した領主支配の連合では支配が貫徹できず、領主権力総体として統一権力を求めていったということ。三番目の点として、領主権力の統一はある意味で、安定した都市生活を送りたいとする町共同体が権力に対する要求を貫徹させたことを示す。領主の分裂、特に武士による非分行為による都市生活の破壊がこれによって抑止され、都市の「平和」が実現したからである。

中世社会の中で自生的に発生した町共同体が、地域の諸問題に一定の責任をはたしうるまでに成長し、近世の社会制度の中に確固たる地位を築いたことを積極的に評価する姿勢も必要であろう。こうした姿勢は、日本固有の中世都市、近世都市像の追究を行うものといえ、日本都市の限界論、自由都市「敗北」史観からの脱却を可能とする道筋の一つとなりうるものである。

近世権力は出発点において、都市がかかえる問題を解決することで支配の「正当性」を確保し、町共同体の自律性を前提とする支配方式を採用した。そのため町に対する絶対的、恣意的な支配権を発揮できず、あくまで「公儀」としての支配を展開せざるをえなかったのである。

本稿では、京都を具体例として、中近世移行期の都市社会構造のモデルを提示した。特に、近世都市成立において、町共同体の形成がどのような意義をもったかに注目することとなった。

京都ほど都市共同体が発達した例は他にはほとんどみられない。しかし、当該期の都市民・共同体に普遍的な動向の最先端がここに突出して表現されていると考えれば、他の都市では見えにくいそれらの動向を検討する際の数多くのヒントが得られるといえよう。特に「政道」という言葉で追求された都市生活の「平和」、公平な政治・裁判の実現に対する、京都の都市民の切実な志向は、中近世移行期の他の多くの都市住民にとっても共通の課題であったはずである。

首都であるがゆえの特殊性を見きわめた上で、第一部での分析、近世京都の成立の普遍性を正しく評価してゆかねばならない。

第
Ⅱ
部

都
市
と
寺
院

序章 研究史

―近年の研究から―

日本の中世都市のほとんどが寺院とわかちがたい関係を取り結んでいたことは周知の事実である。そうした都市と寺院のかかわりについてはもちろん長い研究史が存するが、一九八〇年代以降、新たな潮流が生まれ、現在の研究動向はこれに規定されている。そこで本節では、そうした動向について瞥見しておきたい。

序論でもふれたように、八〇年代の中世都市史研究を切り開いたのは網野善彦氏である。氏は、中世都市の「自治」（あるいは「自由」・「平和」）を支える原理として「無縁・公界・楽」を発見し、そうした原理が発現されるもっとも典型的な場として寺社門前に注目している。なぜなら寺社門前は神仏の支配する「無主」の場であり、「無縁」の原理が潜在しているため、市立てが行われ、「無縁」の輩が集まるからである（一）。

網野氏の議論を一層つきつめたのが勝俣鎮夫氏である。勝俣氏によると、楽市場の多くは門前市、寺内町などで、これらは神仏の支配する聖域であった。その住民は寺社の仕事をし、神仏に奉仕することによって普通の商工業者ではなくなり、俗権力の課税を免除される。また楽市場に出入りする物資は仏物・神物になる。なかでも寺内町は絶対唯一神である阿弥陀仏が支配する純粋性の高い空間で、仏が市場内全員の主人となっている。これに対して戦国大名や織田政権は、それらのアジール性を限定的に保障する楽市令を發布したが、徐々にその都市特権を制限していった、とする⁽²⁾。

網野氏の研究の問題点については序論でもみたが、ここでは、勝俣氏もふくめ、その楽市場像が理想的にすぎ、現実の都市との間ですりあわせをする必要性があることだけを確認しておきたい。

中世都市と寺院との関係については近年、建築史学の分野でも注目すべき研究が発表されている。これら伊藤毅・宮本雅明氏の研究についても詳細は序論で紹介した。中世の自治都市においては、寺院（＝都市領主）ごとに独立した空間が複合して一つの都市を形成しているが、それは決して統一のものとれた構成をとらないこと、統一政権によって寺院の地位が否定され、都市の統一が実現すること、などが議論の骨子である⁽³⁾。これに対して、都市民の志向が空間構造を規定した側面を捨象する方法に

疑義があることも、序論ですでに述べておいた。

以上のように近年の研究を総括できるならば、都市と寺院の関係を探る際、今後どのような視座が有効であろうか。

まず第一に、都市と寺院の関係を考えるについては、網野氏らのように寺院と都市民を全く一体化させ、何の矛盾もはらまないと考えることはできない。また逆に、宮本氏らのように領主である寺院のみによって都市構造が形成されるとし、都市民の志向を無視するのも誤りである。都市における寺院と都市民・共同体のかかわりを、できる限り多様な側面で、具体的に検討してゆく作業が多とされよう。

網野氏の「無縁・公界・楽」、あるいは宮本氏の伽藍中軸線に規定された町並みなど、寺院と都市を考えてゆく上で重要とされた理念のもつ意味を軽視するわけにはいかない。だが、理念を現実と見誤り、理念の説明でこと足れりとすることもできない。寺院のもつ理念と都市の現実の間には当然、数多くの矛盾があり、そうした矛盾の中にこそ当該期の都市社会の本質がふくまれているはずである。いま一つのキー・ワードは歴史的变化である。網野氏らの理解では、原始以来の理念の衰退過程が

中世都市の歴史であり、近世の成立とともにその理念はほとんど死滅するとされる。また伊藤（毅）・宮本氏など、建築史学からする中世の都市構造論はそうした構造を固定的に考え、その変容を追跡する視角に乏しい。そして、近世都市へと根本的に変化する、その主体としては統一政権を待たねばならないのである。

しかし、一口に都市と寺院のかかわりといっても、中世を通じ、すべての都市において均質であるはずがない。時代の変化、都市の性格にしたがって、寺院との関係のあり方がどのように変容するかという視点が重要であろう。中世におけるそうした実態を分析した上でこそ、中近世移行期の変化の意味が真に理解できるのである。

はなはだ簡単に漠然としてはいるが、中世、そして近世への移行期における都市と寺院をめぐる論点を取りあえずこのように設定した上で、以下、二章にわたり具体的な分析を試みてゆきたい。

(1) 網野『無縁・公界・楽』（平凡社、一九七八年（増補版一九八七年））。

(2) 勝俣「売買・質入れと所有観念」（『日本の社会史』四、岩波書店、一九八六年）、同「数入り

と駄込寺」・「楽市場」（週刊朝日百科日本の歴史二八『楽市と駄込寺』、朝日新聞社、一九八六年）。

(3) 伊藤「中世都市と寺院」（高橋康夫ほか編『日本都市史入門』Ⅰ、東京大学出版会、一九八九年）、宮本「空間志向の都市史」（同右）、同「尼崎」・「堺」（『同右』Ⅱ、一九九〇年）。

この他、伊藤氏は同稿の中で、寺院を「境内」系と「寺内」系に区別し、従来、あいまいなままに議論されてきた寺院と町屋の関係を定義づける一つの指針を示したり、洛中洛外における宗派別の寺院立地の指摘をするなど、興味深い分析を行っている。

第一章 大山崎の展開と寺院

— 平安— 織豊期の都市構造 —

はじめに

本章で取り上げる大山崎について、私たちはすでに先学の豊富な研究成果を有している。

石清水八幡宮神人による油商業については豊田武、脇田晴子、今井修平氏らの研究をあげることが
できる⁽¹⁾し、大山崎のさまざまな共同体や宮座についての本多隆成、小西瑞恵、脇田晴子、田端泰子、
高牧實氏らの論稿もある⁽²⁾。これら先行研究はいずれも八幡宮・地主神などと、荏胡麻油の特権的商
業や都市共同体の関係を明らかにし、大きな成果をあげている⁽³⁾。

だが中世の全期間を通して、油商工業とのかかわりだけで都市大山崎の発展を説明できるわけではない。「油神人の都市」として大山崎を描くことは可能だが、それだけで中世大山崎の全体像を示したことはないのである。

本章では、古代・中世から近世まで、この地に数多く立地しつづけた寺院に注目することで、都市大山崎の展開を新たな側面から考察してみたい。中世後期、大山崎が神領とされ、都市民が神人として特権を拡大していった時期、都市民と寺院はどのような関係を取り結んでいたのであろうか。またそれに先立つ古代・中世前期や、のちの大山崎の近世化の過程で、都市民や寺院によって形成される都市構造はどう変化してゆくのであろうか。

ここでいう「都市構造」には三つの意味を与えておきたい。第一は空間構造の意で、建物や田畠山林、道路・橋梁などによって形成される景観、平安京・京都との位置関係などをさす。二つ目は都市支配の構造の意味で、国家的支配や土地・人の分割支配、また都市共同体に対する支配など。都市構造の第三は都市共同体のあり方で、座、神人中、惣中などさまざまな集団によって構成される組織構造をさす。

ところで序章でも述べたように、中世都市の特徴の一つとして、その寺院との深い関わりが指摘されている。しかし一口に都市と寺院の関係といっても、その具体的あり方は時代により、場所により異なるはずである。本章では、中世の都市構造と寺院のかかわりの変化を時代を追って検討するとともに、都市の近世化の中で寺院が置かれた位置についてもふれることとなる。

なお、本章作成にあたっては、『大山崎町史』本文編・史料編⁽⁴⁾から、史料の所在をはじめ多大の示唆を得たが、以下ではいちいち記さないこととする⁽⁵⁾。

(1) 豊田著作集三『中世の商人と交通』（吉川弘文館、一九八三年）、脇田『日本中世商業発達史の研究』（御茶の水書房、一九六九年）、今井「大山崎油座の近世的変貌」（『神戸女子大学史学』三、一九八四年）など。

(2) 本多「中世末・近世初頭の大山崎惣中」（『日本史研究』一三四、一九七三年）、小西「地主神の祭礼と大山崎惣町共同体」（『日本史研究』一六六、一九七六年）、同「中世都市共同体の構造的性質」（『日本史研究』一七六、一九七七年）、脇田「自治都市の成立とその構造」（『日本中世

都市論』、東京大学出版会、一九八一年）、田端「中世大山崎の惣結合」（『中世村落の構造と領主制』、法政大学出版局、一九八六年）、高牧「中世末大山崎の祭祀と頭」（『聖心女子大学論叢』七五、一九九〇年）など。

(3) この他、吉川一郎『大山崎史叢考』（創元社、一九五三年）も貴重な先行研究となっている。

(4) 大山崎町役場、一九八一年（史料編）・一九八三年（本文編）。以下、『町史』と略す。

(5) 中世では、地名としては「山崎」の方が普通であったが、本章では史料上の表記を除き、当該都市域をあらわす表現として「大山崎」を用いる。

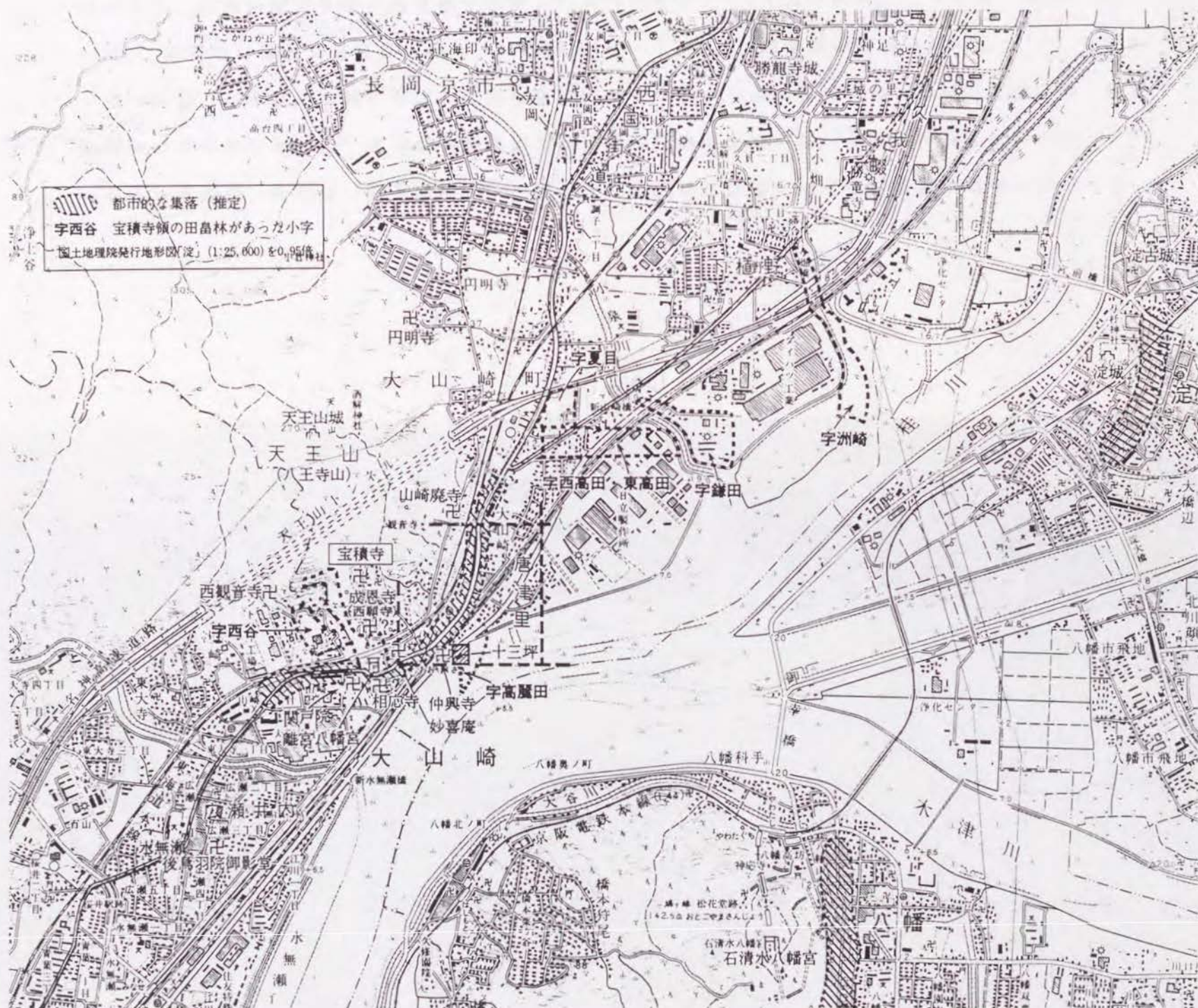
図II-1 大山崎とその周辺

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より



図Ⅱ-1 大山崎とその周辺

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より



第1節 平安前期の大山崎

1 大山崎の立地と律令国家

山崎の名は、早く白雉四年(六五三)の『日本書紀』に見える⁽¹⁾が、そこが一躍脚光を浴びるようにするのは、行基が淀川を跨ぐ山崎橋を架橋してからである⁽²⁾。『行基年譜』によると、神亀二年(七二五)、行基はこの地に山崎橋を架け、天平三年(七三一)には、山崎院を造営したという⁽³⁾。次項でみるように、大山崎の複数の寺院が行基の開基伝承をもつことから考えると、これらの所伝を一概に否定することはできない。大山崎が奈良時代から交通の要衝であったことはまちがいなからう⁽⁴⁾。

やがて長岡京・平安京に都が移ると、山城・摂津の国境に位置する大山崎は都への主要な出入口と

して重要視されるようになるが、その第一の意義は、軍事・交通上の結接点であるところに求められる。国家的な異変・反乱に際し、朝廷が大山崎に兵を派遣し、駐留させた記事は、大同五年（八一〇）から天慶三年（九四〇）にかけてしばしばみられる⁽⁸⁾。これは西国と平安京を結ぶ水陸の交通を扼す位置に大山崎があったことによる。またこの地は、西国の諸国・諸荘園から都の朝廷・公家・寺社へ納められる物資の陸揚げ、中継ぎ地としての機能も負っていた。

平安京の出入口という意味では、そこが境界の祭祀の行われる場であった点にも注目したい。京のいわば「裏鬼門」にあたる当地では、疫神祭や四界祭などが開催されている。こうした祭祀は『延喜式』で最初に確認され⁽⁹⁾、ケガレが京へ侵入するのをせき止める場として、イデオロギー的な意味でも大山崎が平安京の境界の地であったことがわかる。西国から帰還した追捕使の祓えが当地で行われたり、刀伊の捕虜の入京をここでとどまらせようとしたりしたのも同様の意味をもっているだろう⁽¹⁰⁾。のちの時代も大山崎の軍事・交通上の地位に変わりはないが、こうしたイデオロギー的な意味での重要性に当該期の特徴を求めることができる⁽¹¹⁾。

こうした大山崎に律令国家は様々な施設を整備していった。山崎橋は長岡京造営後は国家の管理下に入り、朝廷は造山崎橋使を任命し、橋守を置くなど、橋の修造・維持に注意を怠らなかつた⁽¹²⁾。山崎津については、長岡京造営物資の陸揚げ港として建設され、都が平安京に移ったのちも西の外港として大いに賑わったと推定されている。おそらく山崎橋同様、国家によって整備・管理されたものと思われる。また当地には、山陽道第一の宿駅として山崎駅が設置されていたことが確認され⁽¹³⁾、戦略上の要請から山崎関が随時固められた⁽¹⁴⁾。

さらに嵯峨天皇などは当地の風光を好み、河陽離宮をつくって弘仁二年（八一）から承和十二年（八四五）にかけて行幸を繰り返した⁽¹⁵⁾。貞観三年（八六一）には山城国府がこの離宮に移転され、延喜八年（九〇八）、離宮院の建物が山城国司管理下に移されている⁽¹⁶⁾。九、十世紀の大山崎は、律令国家の直接管理下にある橋梁・港湾・駅・関・離宮・国府などの一大集中地だったのである。

こうした場が都市的な様相を呈するのは時間の問題であった。九世紀から十世紀にかけて、大山崎で酒造が行われたことや遊女がいたことなどが確認される⁽¹⁷⁾。斉衡二年（八五五）には、大山崎の火災で三百余家が消失したという⁽¹⁸⁾。

朝廷は九世紀の半ば以降、大山崎の在地神である酒解神・山崎神に官位を与え、厚遇している⁽¹⁹⁾。

九世紀後半には犯罪者検挙のため、当地に検非違使が派遣された。検非違使の検察を避けて京中を逃れた「奸猾之輩」が「山崎・与渡・大井等津頭」に多数おり、これを取り締まるためという⁽¹⁷⁾。やがてこうした検非違使の行動は「津廻」として形式化し、大山崎で刀禰とよばれる在地の役人の報告を受けるようになった⁽¹⁸⁾。だが十世紀も後半になると、住民の闘乱を契機とする放火によって在家が焼亡する事件がつづくようになる⁽¹⁹⁾。大山崎が平安京近郊の都市的な場として発展していったため住民の移動・交流も活発になり、犯罪者の巢窟となりかねない様子がうかがいしられる。

平安京と西国を結ぶ大動脈の喉元を扼し、西国からの大量の物資の陸揚げ港であり、しかも平安京から一定の距離を保つという立地。こうした地理的条件に、山城と摂津の国境というイデオロギー要素も加えて、大山崎は平安前期、都市的な空間として発展を遂げていった。橋・港・駅といった国家管理の施設が集中する当地には、やがて都市民とよぶべき人々が集まり住み、日常的な交流の中で賑わいと喧噪を高めていったことであろう。

こうして都市的な発展を遂げつつあった大山崎には、また多くの寺院が創設された。

2 寺院の草創

相応寺 九世紀半ば、朝廷によって建立された。貞観八年(八六六)に定められた四至は「東至橋道、南至河崖、西至作山、北至大路」と表現されている。北を播磨大路(西国街道)、南を淀川の河岸で区画され、東は「橋道」(播磨大路から分かれて山崎橋にいたる)に接する、大山崎随一の要地に立地していたことがわかる⁽²⁰⁾。

相応寺のこうした立地の意味はその負わされていた機能から説明できよう。西海で藤原純友の乱が盛んであった天慶三年(九四〇)正月、朝廷の命をうけた僧定玄は相応寺で不動法を修し、内乱の鎮圧を祈った。そしてその翌月には、山崎関に警固使・兵士が派遣され、西国の乱に備えている⁽²¹⁾。この一連の事件は、イデオロギー的、軍事的に平安京の西の守りの要に位置する大山崎の中でも、相応寺が国家護持の最も主たる役割を担わされていたことを象徴的に示しているのである。

西願寺(のちの成恩寺) 安貞二年(一二二八)の太政官符によると、山門妙香院は永祚二年(九九〇)、

御祈願所になったが、西願寺はその妙香院の別院であった⁽²²⁾。康平六年(一〇六三)にも、西願寺は妙香院の別院として確認できるという⁽²³⁾。次章でみる十三世紀初頭と同じ位置にあったとすれば、播磨大路に面し、橋道よりやや北東寄りに立地したことになる。

慈悲尾山寺(西観音寺、信善谷) 天平十八年(七四六)、聖武天皇の祈願所として行基が開基したという⁽²⁴⁾。同寺については、十一・三世紀の数通の譲状が残っており、康平五年(一〇六二)の僧忠覚譲状では、鎮護国家のための草創であることが強調されている⁽²⁵⁾。十三世紀以降と同様、当該期も山門末寺で⁽²⁶⁾、大山崎の西寄り、天王山の中腹に坊舎が展開していたものと想像される。

宝積寺 神亀四年(七二七)、聖武天皇の勅願によって行基が開基したと伝えるが、確実な初見は長保五年(一〇〇三)である⁽²⁷⁾。先述した康平五年(一〇六二)の慈悲尾山寺の譲状では、宝積寺は石清水宮寺・円明寺・宗成寺の住僧らとともに「一門嫡弟」として奥に署判し、譲状の内容を保証している。のちに大山崎の中心部山寄り、西願寺(成恩寺)の裏山に占地するが、当該期の位置は特定できない⁽²⁸⁾。

円明寺・宗成寺(修成寺) 円明寺は大山崎の集落から北約2kmの位置にあり、大山崎の都市域内にふ

くまれるとはいえない。しかしあとで詳しくふれるように、本稿で中心的な検討対象とする宝積寺にきわめて関連深い寺院であることから可能な限り取り上げておくことにする。

この円明寺と宗成寺の史料上の初見は、先述の康平五年(一〇六二)の慈悲尾山寺の譲状である。両寺が、すでにこの段階で石清水宮寺・宝積寺などとならぶ、大山崎地域の有力寺院であったことが推定されよう。なお、宗成寺の正確な位置は不明である。

以上、大山崎に建立された寺院の姿を平安時代中期まで追ってきた。これら寺院の多くは天皇や朝廷と深い結びつきを有し、また山門系であることが確認できるものもある。国家管理の都市、平安京の西方守護の要としての大山崎の位置がこれら寺院の性格を規定していたといえよう。その意味で、大山崎の諸寺院は程度の差こそあれ、都市大山崎支配のため、律令国家によって政策的に立地させられたものといえよう。

律令国家の首都平安京にとって交通上、軍事上、イデオロギー上の重要点である大山崎には、橋梁・港湾・国府などが整備されていた。それらとやらんで甍を競う国家護持の寺院も、朝廷による都市支配の一翼をになっていたといえよう。平安前期の大山崎は、諸施設と寺院が密集する、国家の直轄

都市であつたのである。

- (1) 『日本書紀』白雉四年是歳条(『町史』史料編一頁、以下、「町史1」と略す)。
- (2) 但し、当地域には白鳳期の寺院も存在した(林亨「古代における大山崎地域所在の諸施設に関する一考察」、『水無瀬野』Vol. III No. 6、一九九一年)。
- (3) 『行基年譜』(町史1～2)。
- (4) 館野和己「律令制下の渡河点交通」(『新しい歴史学のために』一六六、一九八二年)。山崎橋・山崎院の位置については、林前掲論文注(2)。
- (5) 『日本後紀』弘仁元年九月戊申条(町史7)、『貞信公記抄』天慶三年二月二十五日条(町史28)など。
- (6) 『延喜式』卷三 神祇三 臨時祭(町史22～23)。
- (7) 『本朝世紀』天慶四年八月七日条(町史28)、『小右記』寛仁三年四月二十五日条(町史35)。
- (8) 高橋昌明「境界の祭祀」(『日本の社会史』二、岩波書店、一九八七年)参照。

- (9) 『類聚三代格』卷一六 道橋事(町史11～12)。
- (10) 『類聚三代格』卷一八 駅伝事(町史6～7)、『延喜式』卷二八 兵部省(町史24)。
- (11) 『貞信公記抄』天慶三年二月二十五日条(町史28)。
- (12) 『日本後紀』弘仁二年閏十二月甲辰条(町史7)、『続日本後紀』承和十二年二月壬寅条(町史10)など。

- (13) 『三代実録』貞観三年六月七日条(町史14)、『朝野群載』卷第四 朝儀上(町史21)。
- (14) 『日本後紀』大同元年九月壬子条(町史6)、『日本紀略』永延二年(九八八)九月一八日条。
- (15) 『文徳実録』斉衡二年十月癸巳条(町史11)。

- (16) 『続日本後紀』承和六年四月甲子条(町史8～9)など。
- (17) 『三代実録』貞観十六年十二月二十六日条(町史17)。
- (18) 『親信卿記』天延二年閏十月二十五・二十六日条(町史32)。
- (19) 『日本紀略』天禄三年閏二月二十一日条(町史31～32)など。
- (20) 『三代実録』貞観八年十月二十日条(町史15)。現地比定については、林前掲論文注(2)。

(21) 『貞信公記抄』天慶三年正月二十二日条(町史27-28)。

(22) 『門葉記』74所載「太政官符」(鎌倉遺文三七二〇)。

(23) 「妙香院庄園目錄」、「町史」本文編一五三頁。

(24) 『離宮八幡宮文書』「大山崎寺改帳」元禄五年(一六九二)六月(町史231)。

(25) 謹辞 讓与慈悲尾山寺一処事

合

四至 限東龍尾際 限南高峯
限西大谷 限北遠久良谷頭

右、件山寺、元者、往古聖人為鎮護国家・利益衆生、所草創・建立無縁山寺也、仍為忠覚師資相承処也、爰雖有受法弟子其數、於觀円者、自生(秀)十一歳出家之後、更無相離此寺、又水菽給仕尽忠、善惡教訓莫相違、□□□覺(忠)考齡已滿九旬、余命有限、因之、山寺一所并□仏本尊顕密聖教房舎内財資具、相副庄園公驗・所々施入帳、永以所讓渡也、不可有敢以窄籠、若有致妨論之輩者、永非門弟、可擯奇也、興隆仏事、勤修法花八講、不可有闕怠矣、仍為後日沙汰、注事状、以付属如件、謹辞、

康平五年二月 日

老耄僧忠覚 在判

件山寺一所并房舎資具、所讓与之明白也、仍依為一門嫡弟、加署名之、(署)

石清水権寺主僧 在判

次所々住僧同加判之 円明寺住僧 在判

宝山寺僧入縁 在判

宗成寺僧 在判

(『石清水文書』六一拾遺五〇(京都大学所蔵)「僧忠覚讓状案」(町史38-39))

(26) 『勝尾寺文書』「四条天皇宣旨案」暦仁元年(一一三八)十二月三日(鎌倉遺文五三四六)によつて、山僧の相伝領であつたことがわかる。

(27) (前略)

真言無本寺

一 八幡宮御社領之内寺領

補陀落山
宝積寺

六拾壹石三斗五升

九百六拾五年已前、神龜四_{丁卯}年、為聖武天皇之御祈願所、則行基菩薩開基也、

八幡宮社僧

寺家六ヶ寺

覺昇坊

一 六百九拾一年已前、長保四_寅年、中興幸盛、開基

自性院

一 六百八拾九年已前、寛弘元_{甲辰}年、中興乘源、開基

大仙院

一 六百八拾五年已前、寛弘_五戊_申年、中興乘靜、開基

(マ)
多門院

一 六百九拾三年已前、長保二_{庚子}年、中興榮通、開基

無量寿院

一 六百九拾八年已前、長徳元_{乙未}年、中興源榮、開基

松之坊

一 七百年已前、正暦四_{癸巳}年、中興榮俊、開基

(後略)

(「大山崎寺改帳」(前掲注(24)))

『続本朝往生伝』(町史33-34)。

なお、『色葉字類抄』(平安末期成立)の宝積寺の項には、「天平年中行基菩薩造之寺敷」とある。

但し、宝積寺は、史料中では宝寺、宝山寺と出てくることも多い。

(28) 林亨氏(大山崎町教育委員会)は、宝積寺が行基の山崎院の後身であり、平安年中まで山崎橋の
たもとにあったと推定している(同氏談)。

第2節 権門の都市分割と寺院

1 都市支配の変容

淀川水運の開発によって、平安時代中期以後、新たに淀津が賑わいを呈するようになる。そして応
徳三年(一〇八六)、白河上皇が鳥羽殿を造営する頃には、鳥羽や淀が都と西国を結ぶ中継基地として
圧倒的な地位を占めるにいたった。そのため平安京からより遠く、港湾として拡大発展するための地
形条件が十分でなかった山崎津は急速に衰退していったものと思われる。

一方、律令国家の衰えは山崎駅の廃絶をもたらし、山崎橋も承平五年(九三五)に確認されるのを最
後に(1)、その再建の企ては挫折した。加えて検非違使の津廻や境界祭祀が行われることもなくなる。

こうして十世紀の後半以降、国家によって維持・整備されていた諸施設が大山崎から次々と姿を消し、検断やイデオロギー面での管理も行き届かなくなってゆく。律令国家の振興政策によって発展を遂げてきた都市大山崎は、国家による直接的な支配関与を減少させていったのである。

しかし大山崎が都市として衰退に向かったわけではもちろんない。その地が播磨大路（西国街道）の主要な宿駅であることは変わらないし、交通量の増大にともないその重要性はむしろ増していった。鎌倉前期の清水坂非人は京都を中心として幹線交通路をおさえ、畿内近国一円にわたる非人支配権を奈良坂と争ったが、その主要メンバーの内に「山崎吉野法師」がいたことは、大山崎が依然として交通上の拠点であったことを示す一例といえよう⁽²⁾。

律令国家の管理を離れた平安中後期から鎌倉時代、大山崎は他の畿内港湾都市同様、諸権門によって分割支配されたものと推定される。当地には、永承三年（一一〇四）に摂関家の散所が、建長五年（一二五三）に近衛家の散所があったことが確認できる⁽³⁾。しかも、検非違使・刀禰という律令国家の都市支配組織が摂関家によって私的に再編されたといわれる。京都の主要外港の地位を失ったため、淀や大津のように諸権門の大規模な倉庫群が存在したとは考えられないが、淀川や播磨大路沿いにはか

なりの数の倉庫が建ち並び、交通運輸業者（舟運業者、馬借・車借）が集住していたものと思われる。そして大山崎の土地は摂関家を中心とする公家・寺社などに占有され、その住民は散所雑色や寄人などに編成されていたのであろう。

寛徳二年（一一〇四・四五）、隣接する摂津国水無瀬荘の土地を山崎住人が購入し、問題となっているが、この事件は大山崎に富貴の者が多かったことを示す⁽⁴⁾。こうして富裕化していった大山崎住民の姿は、『信貴山縁起』⁽⁵⁾や『宇治拾遺物語』巻八⁽⁶⁾に描かれる「山崎長者」に象徴的に表現されているが、彼らも権門に仕える有力者の一人であったろう。ここに都市民もその萌芽的な姿を現すのである。

ところで十三世紀初頭には大山崎で荏胡麻油の生産が確認される。正治二年（一一二〇）、「油売小屋」が史料に見えるし⁽⁷⁾、離宮八幡宮に伝わる最古の古文書は貞応元年（一一二二）、大山崎神人の不破関通過を承認する国司下文である⁽⁸⁾。大山崎神人の荏胡麻油商圏が早くも美濃国まで拡大していたことがしられる。脇田晴子氏などによると、遅くとも十二世紀後半には大山崎で荏胡麻油の生産が増え、石清水八幡宮の神人化することでその生産・販売特権を獲得していったものとされている⁽⁹⁾。但し、大山崎住民の神人化、油神人の特権強化が一気に進むのは十三世紀末を待たねばならない。

律令国家の直接的な保護・支配下からはずれた大山崎は、その交通上の立地条件に注目した摂関家をはじめとする諸権門に分割され、都市民もそれら権門に分属した。荘園公領制の展開は物資の交通をより活発にしたため、大山崎の都市的成長は進み、都市民の集中が一層高まったものと推定される。では国家の直接的な関与が低減し、都市支配の形態が変わった大山崎において、寺院はどのような機能をはたしたのであろうか。

2 権門所領と寺院

a 権門の寺院支配

関戸院 山崎関に関連する施設で、その付属の建物に起源を有するものと推定される。治安三年（一〇二三）、関預藤原公則が藤原道長を歓待している⁽¹⁰⁾、嘉保二年（一〇九五）には関戸院を領所とする源経信が西国への赴任の途中宿泊している⁽¹¹⁾。これらの例から、関戸院は公家が所有・管理し、そ

の宿泊・休憩に供される施設であったことがわかる⁽¹²⁾。

成恩寺（西願寺） 西願寺は、先にみたように十、十一世紀には山門妙香院末寺であったが、妙香院校の良快は師檀関係にあった兄九条良平に同寺を譲った。以下、安貞二年（一二二八）の太政官符によると、良平は当寺を成恩寺と改名し、回廊・鐘楼・大門などを造立した。そして鎌足以下祖先の影像を安置し、当寺の「俗官・僧官共、当左相後胤之仁」が嗣ぐように定めた。さらに、当寺とは別に浄土院に阿弥陀仏を造立し、修成寺を復興し、これら二寺と成恩寺に阿闍梨を置いた。その上で朝廷から太政官符を得て、寺域を「東限溝口谷、南限播磨大路北、西限西谷西峰、北限八王寺山南谷」と確定し、寺域内の不入権を獲得したのである⁽¹³⁾。こうして西願寺は九条家の寺＝成恩寺にその姿を変えた。

ところが寛喜年中（一二二九～三二）、良平は、成恩寺を洛中九条坊門万里小路に移転してしまった（成恩院と改名）。しかし弘安二年（一二七九）、今度は一条実経が東福寺末寺として大山崎に成恩寺を創建した⁽¹⁴⁾。実経は良平の兄良経の孫であった関係から旧成恩寺の寺地を譲られたのであろう。こののち長く成恩寺は東福寺末で、一条家の寺として相伝されてゆく。

円明寺 建暦三年(一一二三)の天台座主慈円の所領譲状に、山門無動寺管轄下の寺院として見え⁽¹⁵⁾、承久元年(一一一九)には、「院御惱御祈」のため愛染王法が修されたことがわかる⁽¹⁶⁾。

ところがその後、当寺は西園寺家の「円明山莊」と呼ばれるようになり、寛喜二年(一一三〇)には西園寺公経が当寺を訪れ、翌年には九条道家が当寺を方違に利用している⁽¹⁷⁾。この前後に当寺は公経から道家へ譲与されたい⁽¹⁸⁾。建長二年(一一五〇)、道家は円明寺山庄等を息一条実経に譲り⁽¹⁹⁾、のちに円明寺殿と呼ばれる実経は弘安七年(一一八四)、当寺で西大寺叡尊から受戒されている⁽²⁰⁾。こうして円明寺は一条家の寺として相伝されてゆくのである。

修成寺 成恩寺の条でみたように十三世紀前半、九条良平によって復興されたが、十三世紀の後半には、石清水八幡宮の神官の家に相伝されている。文永十一年(一二七四)の宮清処分状では宮清から尚清に与えられ⁽²¹⁾、永仁五年(一二九七)の譲状では山(栗林)とともに尚清から宮一若に譲与されているのである⁽²²⁾。九条家が成恩寺を洛中に移してから当寺の所有権が神官家に流入したものであろうか。

西観音寺(慈悲尾山寺) 建長四年(一一五二)、当寺と、西接する摂津国水無瀬莊との間で境界相論が

発生した。和与の命令を伝える座主宮令旨が、「中堂執行」に対し西観音寺への下知を令していることから、当寺が山門支配下の寺院であったことがわかる⁽²³⁾。また当寺は永仁四年(一二九六)、宝積寺と山林相論を交えるが、その間の史料を参照しても、当寺が摂関家や石清水八幡宮などと関係をもったことは確認できない⁽²⁴⁾。

以上、十一〜三世紀における大山崎の寺院を取り上げてきた。その結果、西観音寺を除き、摂関家や石清水八幡宮の神官家などがそれら寺院を取り込み、イエの寺として再編・相伝してゆく様子が共通してみられた⁽²⁵⁾。寺家衰退の原因は様々であろうが、都市支配の変化がそこにある寺院の性格をも変えたといえよう。

b 宝積寺と西園寺・一条家

建暦三年(一一二三)の慈円の譲状の中で、宝積寺は円明寺と同様、無動寺管轄下の寺院としてあらわれる⁽²⁶⁾。貞永元年(一一三二)には、寺全体に大きな被害を被る火災に遭ったため、翌天福元年(一

二三三)、本尊十一面観音像が新造されることになり奉加が集められた。奉加帳によると、延暦寺の山僧が奉加の主導的役割をはたした。奉加参加者のうち地名記載が付された者はすべて洛中であり、奉加者のほとんどは洛中の庶民と推測される(27)。山僧の力によって洛中を中心に奉加がなされ、観音像が造立されたといえよう。当寺が山門の強い影響下、保護下にあったことを示す(28)。

ところが嘉禎四年(一二三三)、西園寺公経が当寺に対して祈禱命令を出している(29)。西園寺家の領主権は仁治二年(一二四一)、一層はつきりする。この年、宝積寺の寺僧にかかる雑事を免除されるための運動が、天台座主慈源(九条道家息)と山僧澄舜暨者によっておこされた。九月十九日付の西園寺公経御教書は雑事免除を家司藤原永光に命じたもので、同月二十三日付の某下文で免除が決定したらしい(30)。下文の発給者は不明であるが、少なくとも免除権(雑事賦課権)の一端が公経にあったことはまちがいない(31)。

西園寺家が宝積寺に対する領主権をどのようにして獲得したかは明らかではないが、その一つのきっかけは貞永元年の宝積寺の炎上に求められるだろう。炎上後の復興に山僧が尽力したことは確かだが、その数年後の嘉禎四年、西園寺公経が宝積寺に祈禱命令を出していることは、公経が宝積寺再興

に一定の影響力を及ぼしたことを推測させる

これより四十年後の弘安四年(一二八一)、女房三位家政所下文によって、宝積寺に西谷一所が寄進された(32)。この文書の端裏には「一条殿御教書」とあり、女房三位とは一条実経の娘萬秋門院と推定される(33)。但し、端裏書からも明らかなように、宝積寺への事実上の寄進主体は一条実経であった(34)。さらに永仁四年(一二九六)、西園寺公経との山林相論に際し、一条内実(実経の孫)が宝積寺の住侶を召し上げている(35)。これは、宝積寺の領主としての一条家の行為とみられ、宝積寺が一条家に相伝されていることがうかがえる。

こうして、律令期以来、国家の庇護を受け、山門の影響下にあった宝積寺も十三世紀の間に、朝幕政治の中で重きをなした西園寺家・一条家の寺に変化し、相伝されていたのである。

c 都市景観と寺院の機能

以上の考察をふまえ、十一・十三世紀の大山崎の都市景観がどのようなものであったのか、想像して

みたい。

播磨大路の両側から淀川にかけては倉庫が建ち並んでいたであろう。これは摂関家を中心とする諸権門がそれぞれ占地したもので、大小の倉敷が入り組んでいたものと思われる。倉庫とやらんで目立つのは大小の寺院である。相応寺や成恩寺は四至の一边を播磨大路とし、広い敷地を境内としていた。また関戸院や仲興寺も大路から遠くないところに立地していた⁽³⁶⁾。さらに宝積寺や西観音寺は大山崎の北方、天王山の中腹に位置して周辺の山林を領した⁽³⁷⁾。

このような景観復元に大過ないとすれば、中世前期の大山崎は、播磨大路沿いに倉庫や寺院がある程度密集し、また山際にも寺院とその門前が展開していたことになる⁽³⁸⁾。全体として統一された都市を想定することは困難で、中世都市特有の錯雑し、複合的な空間構造を示していたといえよう⁽³⁹⁾。

ところで先にみたようにこの頃の寺院の多くは摂関家や石清水八幡宮の神官家などの支配下にあった。当該期の都市民を形成する散所雑色や八幡宮寄人たちの多くはいまだ独立した屋地を有さず、倉敷の一角やこれら寺院の境内・門前などをあてがわれて散居していたものと思われる。また寺院が権門の倉庫機能を担っていた場合もあったであろう。淀など他の港湾都市にくらべて、大山崎において

寺院の占める位置が卓越していることもこのことを裏づける。

摂関家をはじめとする諸権門が大山崎諸寺院の領主権吸収を進めた背景には、倉庫を確保し、交通運輸業者を掌握しようとする、都市支配の意図があったといえよう。大山崎の寺院は、当該期の都市支配のための最も重要な構成要素だったのである。

(1) 『土左日記』承平五年二月(町史25~26)参照。但し、山崎橋の修復命令は天慶八年(九四五)までみられる(『貞信公記抄』天慶八年十二月一日条、町史30)。

(2) 大山喬平「奈良坂・清水坂両宿非人抗争雑考」(『日本中世農村史の研究』、岩波書店、一九七八年)。

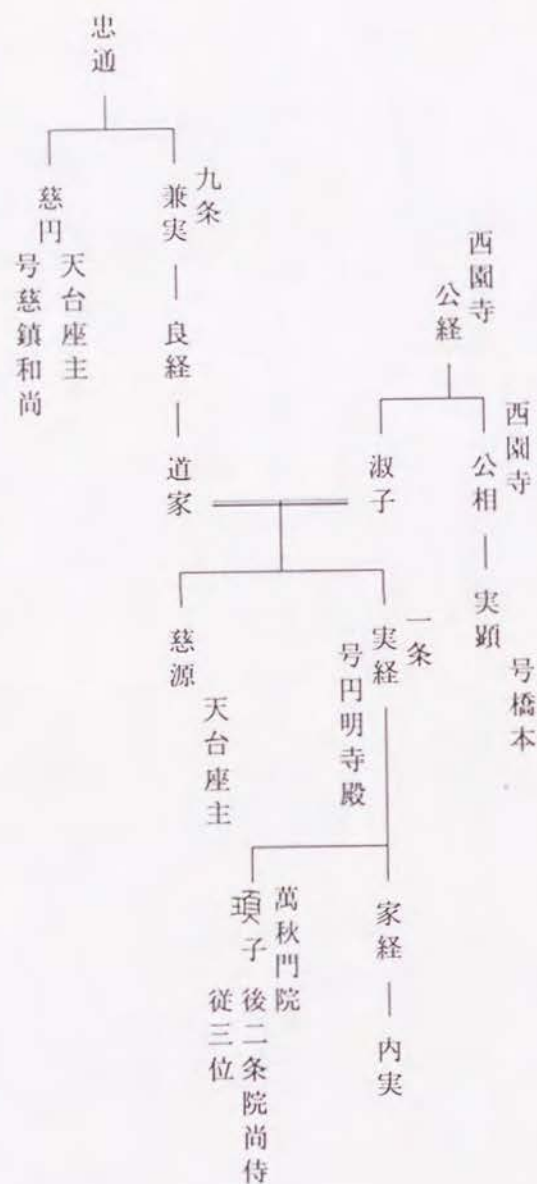
(3) 『宇治関白高野山御参詣記』永承三年十月十一日条(町史37~38)、『近衛家文書』「近衛家所領目録」建長五年十月二十一日(町史66)。

(4) 『内閣文庫所蔵文書』「関白家政所下文案」寛徳二年五月十八日(町史37)。

(5) 十二世紀半ばの成立と考えられている。

- (6) 町史51。
- (7) 『明月記』正治二年十二月二十三日条(町史59)。
- (8) 『離宮八幡宮文書』一(以下、『離宮』一と略す。文書№は『町史』史料編による)「美濃国司下文」貞応元年十二月日。
- (9) 脇田前掲論文注はじめに(2)など。
- (10) 『扶桑略記』第二八 治安三年十月三十日条(町史35~36)。
- (11) 『為房卿記』嘉保二年七月二十二・二十四日条(町史41~42)。
- (12) 脇田前掲論文注はじめに(2)。平家都落ちの時には、関戸院に「玉の御輿」をすえて男山を拝んだという(『平家物語』巻第七、町史46~47)。
- (13) 前掲史料注第1節(22)。
- (14) 『京都府の地名』(平凡社、一九八一年)「成恩寺跡」。
- (15) 『華頂要略』五十五上 古文書集五「慈鎮所領讓状案」(町史61)。
- (16) 『光台院御室伝』承久元年八月条(町史62)。

- (17) 『明月記』寛喜二年六月二一日条、同三年二月二七日条など。
- (18) 建暦三年に円明寺を譲った慈円の兄九条兼実の孫が道家であり、また公経の娘淑子の夫が道家であることなどが相伝の理由であろう。(左記系図参照)



- (19) 『九条家文書』 「九条道家初度惣処分状」 建長二年十一月日(町史65、66)。
- (20) 『感身覚生記』 (京都大学文学部史学科閲覧室所蔵)。
- (21) 『石清水文書』 六(菊大路家文書三一) 「後善法寺宮清処分帳」 文永十一年七月日。
- (22) 『石清水文書』 六(菊大路家文書四五) 「善法寺尚清処分帳」 永仁五年六月日(町史73、74)。
- (23) 『西観音寺文書』 「座主尊覚親王宮令旨」 (建長四年)六月三十日(町史66)。
- (24) 『宝積寺文書』 「覚禅書状写」 永仁五年四月十九日(町史73)、表Ⅱ-1の№21。『宝積寺文書』
については以下、「『宝』№21」のように注記する。
- (25) 九世紀には、平安京の西の守りの要たる大山崎の立地を象徴的に示していた相応寺は、十二、
三世紀、校校別当を定められる寺院として史料に散見するだけとなり、その性格については不詳
である(『兵範記』嘉応元年八月二十七日条(町史44)、『玉葉』承久二年三月二十五日条、川端新
氏の御教示をえた)。
- (26) 前掲史料注(15)。
- (27) 『町史』史料編美術資料。但し、大山崎の住民が全くふくまれていなかったとは断定できない。

表Ⅱ-1 『宝積寺文書』一覧

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より

№	年月日	文書名	出典	写	№	年月日	文書名	出典	写
①	嘉応2・7・21	散位源朝臣某地売券	京：天		53	康暦2・10・13	見忠等連署田地売券	京：人	
②	元暦元・11・5	源末友田地売券	京：天		54	至徳元・12・19	比丘尼見悦田地売券	京：天	
3	(嘉禎4?)・閏2・27	西園寺公経御教書写*	尊：書	(案)宝	55	嘉慶2・8・29	後円融院院宣	東	尊：書*、宝
④	康永2・6・18	沙弥妙道山手寄進状案	京：人		96	年未詳・8・18	教真書状	宝◆	尊：書
⑤	貞和2・8・26	藤原房俊田地売券	京：天		97	年未詳・8・26	某書状	宝◆	尊：山
⑥	貞和2・8・26	藤原房俊田地売券	京：人		98	年未詳・9・28	範国奉書写	宝◆	尊：山
47	貞和4・6・18	足利直冬書下写*	尊：書		99	年未詳・11・11	兼直々書状	宝◆	尊：山◆
48	観応元・4・26	僧亮盛畠地売券	京：天		100	年未詳・11・20	某書状写*	尊：山◆	尊：山
⑨	貞治2・6・1	覚賢田地寄進状案	京：地		101	年未詳・12・2	某書状写*	宝◆	尊：山
⑩	(貞治2～6)・8・6	下野殿寄進田年貢注文	京：地		102	年未詳・12・13	某院宣案	宝◆	
51	応安6・11・28	比丘尼見成畠地寄進状	京：天		103	年月日未詳	某書状案	宝◆	
52	永和4・11・18	藤原氏女田地寄進状	京：天						

注1) ○印は、本書に写真が収載されてあるもの。

2) 花押が写しとられてある写には※印を付す。

3) 京大所蔵分(京)は卷子名(天・地・人)を、尊経閣所蔵分(尊)は東名(書・山と略す)を記載する。京：古は京大別置分、宝は宝積寺現蔵分、東は東大宝積寺文書、西は西明寺文書、森は森川文書、正は正田種信文書を示す。

4) ◆印は、『大山崎町史』史料編に採用されていないもの。

5) 宝積寺現蔵分に含まれる、近世以降の文書類は省略した。

表II-1 『宝積寺文書』一覧

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より

№	年 月 日	文 書 名	出 典	写	№	年 月 日	文 書 名	出 典	写
①	嘉応2・7・21	散位源朝臣某地売券	京：天		53	康暦2・10・13	見忠等連署田地売券	京：人	
②	元暦元・11・5	源末友田地売券	京：天		54	至徳元・12・19	比丘尼見悦田地売券	京：天	
3	(嘉禎4?)・閏2・27	西園寺公経御教書写*	尊：書	(案)宝	55	嘉慶2・8・29	後円融院院宣	東	尊：書*、宝 (案)宝
4	(仁治2)・9・19	西園寺公経御教書案	宝◆	尊：山					
5	(仁治2)・9・19	沙弥理澄書状案	宝◆、	尊：山	56	明德5・2・22	性源田畠寄進状	京：天	
6	(仁治2)・9・20	藤原永光書状案	宝◆	尊：書	57	応永元・12・23	左衛門尉有忠奉書写*	尊：書	(案)宝
⑦	仁治2・9・(23)	某下文	京：古	尊：書*	⑤⑧	応永2・3・20	広安入道畠地寄進状	京：人	
8	(仁治2・9?)	某書状(後欠)	宝◆		59	応永5・3・28	山城国守護奉行人連署奉書写*	尊：山	
⑨	寛元4・2・25	宝積寺僧連署田地売券	京：天		60	応永5・3・28	山城国守護代進行状写	尊：山	
10	正嘉元・10・10	山崎長者等山寄進状	宝	宝*	61	応永5・4・1	山城国乙訓郡代施行状	森	尊：山*
11	正嘉2・7・8	沙弥修覺田地売券	京：天		62	応永5・4・8	山城国乙訓郡代施行状	森	尊：山*
⑫	弘長元・4・26	尼清阿弥陀仏田地作手売券	京：人		63	応永5・7・4	下司・公文連署起請文案	宝	尊：山
⑬	弘長元・4・27	清原時高田地所当売券	京：地		64	応永5・12・8	足利義満御判御教書	森	尊：山*
⑭	文永6・9・23	道蓮房寄進田八講僧膳注文	京：天		65	応永5・12・23	室町幕府管領畠山基国奉書写*	尊：山	
15	(正元2～ 文永8)・6・9	西園寺実顕御教書写*	尊：書◆	宝	66	応永5・12・26	室町幕府管領畠山基国奉書写*	尊：書	
⑮	建治2・12・一	僧信聖他連署曳流田請文	京：人		67	広永6・12・15	足利義満御判御教書写*	尊：書	宝
17	弘安4・正・23	女房三位家政所下文写*	尊：山	(案)宝	68	応永11・8・25	宗伯屋地売券	京：地	
⑮	弘安4・2・8	僧尊親田地売券	京：人		69	応永13・7・22	比丘尼宗春茶園寄進状	正	
⑮	正応元・12・9	中二郎・左近衛門連署利銭請文	京：人◆		70	応永13・11・27	室町幕府管領斯波義重奉書写*	尊：書	
20	永仁2・7・29	清原則時畠地寄進状	京：人		71	応永16・7・28	ひこ太郎田地売券	京：人	
21	(永仁4)・3・15	一条内実御教書写	尊：山		72	応永24・4・22	原道成山手公事安堵状写*	尊：山	
22	(永仁5)・4・19	覚禅書状案	宝	尊：山	⑦③	正長元・11・2	室町幕府管領畠山満家奉書	京：古	尊：書*
②③	(永仁5?)・7・18	院主法眼尊親申状案	京：人◆		74	永享9・3・10	彦太郎大夫田地寄進状	京：地	
②④	永仁6・7・17	沙弥道覚立願状	京：地		⑦⑤	嘉吉2・3・5	善阿ミ田地作職請文	京：地	
②⑤	徳治3・7・18	佐伯氏女田地放状	京：地		76	文安元・12・25	源盛田地売券	京：人	
26	正和3・6・11	御ちい屋地売券案	京：人		77	文安6・4・17	比丘尼見隆田地寄進状	京：地	
27	文保元・8・?6	尊聖田地寄進状	京：地		⑦⑧	文安6・7・極	源盛畠地寄進状	京：地	
②⑧	嘉暦元・6・18	平繁成備前国長田莊本家職寄進状	京：天◆		79	寛正6・正・11	比丘尼祥由田地寄進状	京：地	
29	(嘉暦元)・7・21	散位カ某奉書写*	尊：山		80	文明11・9・14	沙弥道運畠地寄進状	京：人	
③①	元徳2・4・22	照舜畠地売券	京：人		81	明応8・12・一	清繁禅尼畠地寄進状	京：地	
③②	元徳2・5・3	尼善阿畠地寄進状	京：地		③③	文龜元・5・一	水無瀬某田地売券	京：地	
③③	元徳3・8・10	阿闍梨静珍田地売券	京：人		③④	大永7・8・28	宝喜坊貞吉他連署畠地売券	京：地	
33	元弘3・3・27	赤松円心書下写*	尊：書		84	享祿3・正・29	安養坊三位良法カ他載売券	京：地	
34	(元弘3?)・12・23	赤松円心書状	東	尊：書*	③⑤	天文7・正・24	清金畠作職売券	京：地	
③⑤	建武2・2・18	尼教阿田地売券	京：天		③⑥	天文20・5・16	慧集喝食料足寄進状	京：天	
36	建武2・5・3	成恩寺住持請文	宝		③⑦	弘治元・12・15	道清畠田作職請文	京：地	
37	建武3・正・23	足利家執事高師直奉書写*	尊：書		88	(元龜2)・5・6	盛苔カ地子請文	京：地	
38	建武3・正・30	阿蘇宮令旨	西	尊：山*	89	天正3・12・17	為名奉書写*	尊：書	(案)宝
39	建武3・6・1	足利尊氏カ寄進状写	宝		③⑨	寛永6・11・25	津田貞次・同勝蔵連署田畠・屋敷売券	京：人◆	
40	建武3・6・1	足利尊氏カ書下写	宝		91	寛永9・正・5	津田貞置田地売券	京：人◆	
41	建武3・10・21	足利家執事高師直奉書写	宝		92	年未詳・3・28	備中守助勝奉書*	尊：書◆	(案)宝
42	建武4・12・27	散位カ某奉書案	宝	尊：山	93	年未詳・卯・25	證意カ書状写*	尊：山◆	
43	建武5・6・3	上杉重能禁制写*	尊：書		94	年未詳・5・10	快俊カ書状写*	尊：山◆	
④④	康永2・6・18	沙弥妙道山手寄進状案	京：人		95	年未詳・8・12	證意カ書状写*	尊：山◆	
④⑤	貞和2・8・26	藤原房俊田地売券	京：天		96	年未詳・8・18	教真書状	宝◆	
④⑥	貞和2・8・26	藤原房俊田地売券	京：人		97	年未詳・8・26	某書状	宝◆	尊：書
47	貞和4・6・18	足利直冬書下写*	尊：書		98	年未詳・9・28	範国奉書写	宝◆	
48	観応元・4・26	僧堯盛畠地売券	京：天		99	年未詳・11・11	兼宜カ書状	宝◆	尊：山
④⑨	貞治2・6・1	覚賢田地寄進状案	京：地		100	年未詳・11・20	某書状写*	尊：書◆	
⑤①	(貞治2～6)・8・6	下野殿寄進田年貢注文	京：地		101	年未詳・12・2	某書状写*	尊：山◆	
51	応安6・11・28	比丘尼見成畠地寄進状	京：天		102	年未詳・12・13	某院宣案	宝◆	尊：山
52	永和4・11・18	藤原氏女田地寄進状	京：天		103	年月日未詳	某書状案	宝◆	

注1) ○印は、本書に写真が収載されてあるもの。

2) 花押が写しとられてある写には※印を付す。

3) 京大所蔵分(京)は巻子名(天・地・人)を、尊経閣所蔵分(尊)は東名(書・山と略す)を記載する。京：古は京大別置分、宝は宝積寺現蔵分、東は東大宝積寺文書、西は西明寺文書、森は森川文書、正は正田種信文書を示す。

4) ◆印は、『大山崎町史』史料編に採用されていないもの。

5) 宝積寺現蔵分に含まれる、近世以降の文書類は省略した。

なお、この奉加帳については、西川杏太郎「仏教信仰資料としての仏像像内納入品」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』、一九七〇年)参照。同論文については、元興寺文化財研究所の方々の御教示をえた。

(28) また承久二年には、「宝積寺西谷林」が石清水八幡校校祐清(?)から田中女房に譲られており、神官家の影響があったこともわかる(『石清水文書』一一一六九「校校祐清カ譲状」承久二年十二月日)。

(29) 『宝』No. 3「西園寺公経御教書写」(嘉禎四年)後二月二十七日(町史64)。

(30) 『宝』No. 4「西園寺公経御教書写」(仁治二年)九月十九日、No. 7「某下文」仁治二年九月(二十三日)(町史64)。この他、No. 5・6・8も関係史料。

(31) この事件に関する文書の多くは年欠であるため『町史』史料編にはほとんど収録されていない。以下、未収録史料を載せておく。

I (『宝』No. 4)

(端裏書)

「今出川殿御教書案 陸奥入道殿奉書」

座主御房御教書并山僧澄舜解狀如此、子細見于狀候、任先度御下知之旨、於宛催雜事之者、早可令免除給候由、^(カ)所被仰下候也、恐々、

九月十九日

(藤原永光)

進上 前木工権頭殿

沙弥理澄 在判

II (『宝』No 5)

(端裏書)

「今出川殿御教書案 陸奥入道殿奉書」

山僧澄舜申宝積寺間事、委申入候、免除狀申進之候、以此旨可然様可令披露給候、恐惶謹言、

九月十九日

沙弥理澄 奉

III (『宝』No 6)

宝積寺間事、座主御房御教書并澄舜解狀給預了、不日申賜下知狀候了、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

九月廿日

(藤原)
前丹波守永光

IV (『宝』No 8)

以此旨申入候之処、寺事自本可有御口入候之処、指事不候之間、無何思食過候了、澄舜堅者、御教書事も先於此御所申御沙汰候き、然上御代官之由令申候之間、細々其寺令□候き、令逝去上ハ定寺も (後欠)

なお、藤原永光が公経の家司であることは酒井宏治氏の御教示による。

(32) 『宝』No 17「女房三位家政所下文写」弘安四年正月二十三日(町史70-71)。

(33) 前掲系図注18参照。

(34) 宝積寺の領主権が西園寺家から一条家へ移動した経路は二つ考えられる。①円明寺と同様、西園寺公経から女婿の九条道家を経て、その息一条実経(母は、公経の娘淑子)に伝領されたか、②

公経から娘淑子を経て、その息実経に伝わったかであろう。いずれにせよ淑子を介する母系を基礎に相伝されたことはまちがいない。

(35) 『宝』No.21「一条内実御教書」永仁四年三月十五日(町史73)。

(36) 仲興寺は十二、三世紀に存在が確認される寺院で(『宝』No.2「源末友田地売券」(町史47)など)、小字高麗田の西側にあったが、これは播磨大路南沿いにあたる(図II-1参照)。

(37) 近世の絵図を見ると、両寺の参道沿いに数ヶ所の子院が描かれているが、中世ではより多くの院坊や民屋が門前に立ち並んでいたのではなからうか。(「山崎通分間延絵図」一(東京国立博物館所蔵「五街道分間延絵図」、東京美術、一九七八年)など)。

(38) なお、林亨氏によると、近世大山崎の町並みのうち北半の地域(高橋バス停付近以北)については、中世末期にいたるまで居住痕があまり検出されないという。西国街道沿いの都市域の広がりは、中世においては近世以降よりある程度短かったものと考えられる。

(39) 保立道久「宿と市町の景観」(『季刊自然と文化』一三、一九八六年)、同「萱津宿」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』II「町」、東京大学出版会、一九九〇年)、西岡虎之助「荘園に

おける倉庫の経営と港湾の発達との関係」(『荘園史の研究』上、岩波書店、一九五三年)、脇田前掲論文注はじめに(2)参照。

第3節 室町幕府の成立と大山崎

1 神人在所の確立

前章でみたように、中世前期の大山崎は諸権門の所領が錯綜し、都市民もそれぞれの領主に様々な形態で仕え、全体としての統一性には乏しかった。先述のごとく、鎌倉時代前期にはすでに大山崎に油商人がおり、石清水八幡宮神人としての特権をえて活動を開始していたが、当地には他に散所雑色なども多く、この段階では神人はそうした多様な身分の一つに過ぎなかったであろう。

ところが十三世紀末から十四世紀前半にかけて大山崎の八幡宮神人が神輿を入浴させたり、八幡宮に閉籠したりする事件がつづく⁽¹⁾。事件の原因や経過はそれぞれ異なるが、大山崎の神人がこの時期、

急速に力をつけていったことはまちがいない。このことは一方で、多くの都市民の神人化を加速させたものではなからうか⁽²⁾。神人たちは、八幡宮に日使頭役をはじめとする神事奉仕を行い、燈油を調達するかわりに、荏胡麻油製造・販売の独占権を認められ、朝暮その他の諸公事や関料を免除された。

そのため特権を目指して神人となるものは油商工業者に限らなかったにちがいない。

こうして成長していった神人組織に、はじめて公的な権限を付与したが、明德三年（一三九二）の足利義満御教書である。

（義満）
（花押）

八幡宮大山崎内、東限円明寺、西限水無瀬河、依為日使大神事等重役神人在所、自往古以来、惣所不勤公方課役也、爰以関戸院、号摂州内、成違乱^{云々}、太不可然、早任先例、於山崎者雖為向後諸事、可停止守護綺者也、就中内殿御燈油荏胡麻諸関津料并兵庫嶋升米以下、固可止其妨状、下知如件、

明德三年十二月廿六日⁽³⁾

ことは、大山崎の西端にある関戸院に対し、摂津守護代と思われる内藤弾正左衛門尉が段銭以下を催促したことに始まる。これに反発した大山崎神人が幕府に訴えて御教書が発せられたのである。

この御教書が画期的であるのは以下の三点による。第一は、大山崎の領域を東は円明寺、西は水無瀬河までと公権力が明示して、確定したこと。これは実態としての都市域を上まわるものであったが、西側については山城・摂津国境をまたいで発展していた大山崎の現状を追認したものとなっている。

第二は、大山崎を「日使大神事等重役神人在所」として明確に位置づけたこと。これは公権力が、神人によって構成される都市として大山崎を初めて認知したことを示す。もちろん当該期までに都市民の多くが神人になっていたという事実が背景にあったろうが、この御教書が出されて以降、有力都市民の神人化が一層進み、身分面での統一性が高められたであろうことを推測させる。御教書の意義の第三は、「不勤公方課役」、「可停止守護綺」という不入権を確定したこと、である。

ここに大山崎は神人の都市としての第一歩を踏み出した⁴。

当該期の大山崎では、摂関家をはじめとする諸権門は直営の倉庫を経営するかわりに、倉庫業者に

その業務を代替させるようになり、また交通運輸業者などもなかば独立した形で営業を開始していたろう。そして雑色や寄人などの身分を離れたこれらの人々が神人に結集していったものと想像される。義満はこうした現状を踏まえ、神人中に公的な権限を与えて掌握することにより、都市大山崎を積極的に支配してゆく方向性を打ち出したのである。

しかし、一片の御教書によって権門支配の寺院が直ちに退転に追い込まれたわけではない。確かにこれら寺院の倉庫機能も低下し、境内・門前住民が神人に変化していったかもしれない。だが依然として諸寺院は大山崎の中でかなりの面積を占め、境内・門前や街道沿いの屋地、周辺の田畠から地子・公事を徴収する土地領主としての地位を維持したのである。

大山崎は、土地所有面では寺院の領主権が卓越し、都市民は神人中として幕府に公的に承認されて一定の自治権を有するという二重構造の都市として出発することになった。時あたかも南北朝合一の三ヶ月後のことである。

2 宝積寺の展開

a 幕府への接近

鎌倉中後期以後、一条家の寺として伝領されてきた宝積寺も、南北朝内乱勃発とともにその渦中に巻き込まれてゆく。元弘三年（一一三三）三月、淀・大山崎を拠点に六波羅攻撃をつづけていた赤松円心から宝寺僧衆中宛に、祈祷を賞する書下が届いた⁽⁵⁾。『宝積寺文書』の中では、これが武家発給の最初の文書である。ついで建武三年（一一三六）正月、天皇方と足利方の京都争奪戦の折には、足利方から寺内安堵の禁制をもらい、天皇方から軍勢への馳参を賞する令旨を得ている⁽⁶⁾。京都から西国への交通の要衝大山崎にある宝積寺にとって、中央政界の動向に無関係であるわけにはいかなかったのである。

同じ建武三年の六月、九州から東上した足利尊氏は入洛の直前、宝積寺に対して河内国石川藤王丸井一族跡を寄進し、さらに同日付で宝積寺の寺僧に観音経を毎日三三巻勤行するように命じている⁽⁷⁾。

貞和四年（一一三四）には、紀州に発向する足利直冬が祈祷命令の書下を遣わしている⁽⁸⁾。八幡に進出した南朝方に対し、大山崎はしばしば幕府方の前線基地となった。そして宝積寺も、この内乱の中で幕府と深い関わりをもつようになっていったのである。

嘉慶二年（一一三八）⁽⁹⁾、宝積寺は勅願所に指定された⁽¹⁰⁾。これは後円融上皇の院宣によるものであったが、その背後に足利義満の意図を見て誤りではあるまい。十年後の応永五年（一一三八）⁽¹¹⁾、のちに詳しくみる山林相論に勝利した宝積寺に対して義満の御判御教書が発給され、堂舎・山林の領有が安堵された⁽¹²⁾。また翌年には、義満は宝積寺に大内義弘追討のための祈祷命令を発している⁽¹³⁾。

南北朝内乱から室町幕府の安定期を迎えて、宝積寺は幕府・將軍との結びつきを強めていった。では宝積寺と、本来の領主であった一条家との関係はどのように変化したのであろうか。

b 一条家からの自立

建武二年（一一三五）、西谷畑・山林などをめぐって宝積寺と、隣接する成恩寺の間で紛争が発生し

た。詳しい事情は不明だが、西谷の知行権・山境、成恩寺の管領権が問題となっている⁽¹²⁾。両寺は領主(一条家)を共通にしていたため、従来は山林などの所領についてさしたる争いを生じなかったものと思われる。ところがこの時にいたり、宝積寺はそれぞれの寺領の境界を明確にするとともに、成恩寺の管領権にまで介入しようと企てているのである。これが、宝積寺が武家との接触をはじめたまさにその時期にあたっていることに注意しておきたい。

宝積寺と成恩寺(西願寺)の山林相論は数十年後、再発した。「宝積寺文書」には、応永五年(一三九八)三月から四月付で、宝積寺等の山林以下について、西願寺の違乱を停止し、寺家雑掌に沙汰付けるように命ずる山城国守護・守護代・乙訓郡代らの文書が残っている⁽¹³⁾。

(かな起請)

この相論の経過を伝えるのが、同年七月の「下司・公文之かなきしやう」である。これによると、宝積寺と成恩寺(西願寺)の相論を我々沙汰人(成恩寺の下司・公文)が積極的ににおしたと將軍義満は考えているが事実誤認である。すでに將軍の御教書が下され、本所(一条家)から將軍御教書通りの沙汰があったのだから我々に異存はない。宝積寺も「うちてら」であるから、疎遠には思わない、と起請している⁽¹⁴⁾。

義満の御判御教書(現存せず)をうけて、すでに両寺の領主である一条家が宝積寺勝訴の決定を下していた。しかし義満は、下司・公文が相論を主体的におこなったのではないかと疑い、追及する姿勢をみせた。そのためあわてた下司らが本状を提出したのである。相論にあたって、義満が強い主導権を発揮して、宝積寺に有利な裁定を行っていることがうかがいられる。

そして決定的な御判御教書が出された。前項でもふれた、同年十二月の義満の御教書である⁽¹⁵⁾。幕府によって宝積寺の寺領は最終的に確定され、以後、幕府管領奉書によって安堵されつづけたため、宝積寺が山林相論を交えることはなくなった⁽¹⁶⁾。さらに西願寺との相論の翌年、これも先にみたように義満は宝積寺に「凶徒退治」の折衝を命じた⁽¹⁷⁾。一方、この後、宝積寺と一条家の関係を示す文書は『宝積寺文書』から全く消えさる。一条兼良が文明十二年(一四八〇)に記した『桃華葉』は、宝積寺について「進巻数之外、無殊得分」と記すのみである。

宝積寺は室町幕府へ接近するのと反比例して鎌倉時代以来の領主一条家と距離をおくようになっていった。一方、幕府、なかでも將軍義満は積極的に宝積寺の取り込みを図っていたといえよう⁽¹⁸⁾。幕府(義満)との直接的なつながりによって権益を確保しようとする宝積寺のありようは、義満から一

定の自治権を得た大山崎の神人中の運動とまさに同じ方向性をもっていたといえよう。逆に、義満は神人中同様、宝積寺を掌握することで都市大山崎支配を意図していたのではなからうか⁽¹⁹⁾。

3 都市寺院の変貌

室町幕府の成立をうけて宝積寺が新たな展開をとげてゆく一方、平安期からつづく、大山崎の他の諸寺院はどのような動向を示すのであろうか。

成恩寺(西願寺) 先にみたように応永五年、成恩寺は宝積寺との山林相論に敗れたが、当寺はその後一条家の寺院として存続しつづけた。応永二十五年(一四一八)に亡くなった一条経嗣が「成恩寺殿」、文明十三年(一四八一)に没した有名な一条兼良が「後成恩寺殿」とよばれている事実からもこのことは確認される。しかしその衰勢はおおうべくもなく、天文三年(一五三四)、茶園の領主としてあらわれる⁽²⁰⁾のを最後に、元禄年間の復興まで当寺に関する史料は失われるのである。

円明寺 宝積寺とともに西園寺家から一条家に伝来した当寺も、一条兼良の『桃華葉』では「于今雖有管領之称、乱世已後、寺家顛倒、有名無実也」とされた。江戸時代初期には薬師堂が残るのみであつたという。

(補)

相応寺 応長元年(一一三一)、秦助長が「相応寺惣追捕使職三分一」を宛行われている⁽²¹⁾。助長は、大山崎の有力都市民である井尻氏で、永徳二年(一一三二)には、童石丸が惣追捕使職相続を認知されたが、この童石丸も井尻氏の一族と推定される⁽²²⁾。

康応二年(一一三九〇)に作成された相応寺領の目録は妙悟庵宛であつたが⁽²³⁾、この目録が井尻家に伝来したことからみて、惣追捕使に任命された井尻氏が、相応寺の所職・権益の一端を獲得したことが推定されよう。

関戸院 当院については十二世紀以降、その詳細は不明であつたが、文安元年(一四四四)、再び史料

(補)

に登場する。円理が「円満院御領関戸院」の沙汰人田所・惣追捕使の重代相伝の地である屋敷を関戸保の越後殿に売ったのである⁽²⁴⁾。永禄五年(一五六二)には、関戸院は円満院領として幕府から安堵されている⁽²⁵⁾が、近世以降についてはよくわからない。

以上、平安期以来の諸寺院について十四世紀以後の姿を瞥見してきた。これら寺院についての当該期の史料は極端に少なくなり、いずれも詳細は不明である(26)。ただ、摂関家などに勢力の基盤を求める寺院の多くは成り立たなくなっていたのであろう(27)。これは一条家から離れて幕府と結びついていった宝積寺の繁栄と対照的でさえある。

そしてしばしば惣追捕使職などにかかわって、衰退する寺院の権益を都市民が引き継いでいることに注目される。都市大山崎の主人公が寺院から都市民へと変化していたことは、もはや誰の目にも明らかであった。

- (1) 『仁部記』弘安二年五月三日条(町史70)など。
- (2) 田良島哲「中世淀津と石清水神人」(『史林』六八―四、一九八五年)参照。
- (3) 『離宮』六〇「足利義満袖判御教書」。
- (4) 脇田前掲論文注はじめに(2)を参考にした。
- (5) 『宝』No.33「赤松円心書下写」元弘三年三月二十七日(町史80)。

- (6) 『宝』No.37「足利家執事高師直奉書写」建武三年正月二十三日(町史83)、『西明寺文書』(『宝』38)「阿蘇宮令旨」建武三年正月三十日(町史83―84)。

なお、後者は『西明寺文書』(東京大学史料編纂所影写本)の中にふくまれているが、尊経閣文庫の『宝積寺文書』の中に原本の写がとられており、もとは『宝積寺文書』の一部であったがわかる。但し、『思文閣古書資料目録』善本特集第三輯(思文閣出版、一九九一年)掲載の同文書の写真を見る限り、偽文書の疑いも払拭できない。

- (7) 『宝』No.39「足利尊氏カ寄進状写」建武三年六月一日(町史84)、同No.40「足利尊氏カ書下写」建武三年六月一日(町史84)。

- (8) 『宝』No.47「足利直冬書下写」貞和四年六月十八日(町史86)。

- (9) 『宝』No.55「後円融院院宣」嘉慶二年八月二十九日(町史97)。

- (10) 『森川文書』(『宝』No.64)「足利義満御判御教書」応永五年十二月八日(町史101)。

なお、『森川文書』(東京大学史料編纂所影写本)の中の数点も、尊経閣文庫の『宝積寺文書』の中に原本の写がとられており、もとは『宝積寺文書』の一部であったことがわかる。

(11) 『宝』Na 67「足利義満御判御教書写」応永六年十二月十五日(町史102)。

(12) 『宝』Na 36「成恩寺住持請文」建武二年五月三日(町史83)。

(13) ①『宝』Na 59「山城国守護奉行人連署奉書写」(町史99-100)

善以・宗全(守護奉行人)↓牧新左衛門入道(善□、守護代)

②『宝』Na 60「山城国守護代遵行状写」

(牧新左衛門入道)善□(守護代)↓林垣藏人入道(信阿)・遠藤丹後入道(永富)(ともに乙訓郡代)

③『宝』Na 61「山城国乙訓郡代施行状」

(洲江)頼安・(林垣)沙弥信阿(ともに乙訓郡代)↓(宛名なし)

④『宝』Na 62「山城国乙訓郡代施行状」

(遠藤)永富(乙訓郡代)↓(宛名なし)

今谷明「増訂 室町幕府侍所頭人並山城守護補任沿革考証稿」(『守護領国支配機構の研究』、法政大学出版局、一九八六年)参照。但し、人名・職名など、一部訂正した。

なお、これらの文書によって、宝積寺と共に修城寺(修成寺)の山林以下も寺家雑掌に沙汰付けられている。

(14) (貼紙) (かな起請)

「案文とも同 下司・公文之かなきしやう
正文在之」

(宝 寺) (西願寺) (沙汰) (興行) (公方)
たからてらとさいくわんしとのさたの事、さた人としてこうきやうしたるよし、くはうにお
(儀) (判) (教書) (本)
ほしめされ候、さらにそのきなく候、すてに御はんの御けうしよをなしくだされ候て、ほん
(旨) (任) (間) (僻) (宝)
しよよりそのむねにまかせて御さたある事にて候あひた、さた人のひか事なく候、たからて
(氏寺○内寺) (上) (疎遠) (思) (向後) (衍々)
らもうちてらにて候うゑハ、もともそゑんにおもい申さす候、きようこうもうしろめたなき
(条) (偽)
事あるましく候、もし此てういつはり申候ハ、
(八幡) (菩薩) (罰) (蒙) (起請文) (状)
はちまん大ほさつ、てんしの御はつをかうふるへく候、よてきしやうもんのしやうくたんの
ことし、

応永五年七月四日

国宗在判

(『宝』No.63「西願寺下司・公文連署起請文案」、町史100～101)

(15) 前掲史料注(10)。

(16) 『宝』No.65「室町幕府管領畠山基国奉書写」応永五年十二月二十三日(町史101)など。

(17) 前掲史料注(11)。

(18) 『蔭涼軒日録』文明十七年九月十八日条によると、「三聖寺末寺宝積寺」は康暦元年(一三七九)に足利義満から摂津国島上郡芥河内の所領を寄進されたという。三聖寺は臨濟宗東福寺内の寺院であり、ここでいう「宝積寺」が大山崎の宝積寺かどうか確証はない。しかし摂津国芥川は大山崎からほど近く、寺領を与えられたとしても不思議ではない。

(19) すでに十三世紀半ばには、宝積寺が大山崎都市民の中心寺院として信仰を集めはじめていたこと(第4節参照)を、義満は当然知っていただろう。

(20) 『正田種信文書』「円隆坊栄直茶園売券」天文三年十二月晦日(町史157～158)。

(21) 『井尻松子文書』「預所沙弥某相応寺惣追捕使職宛行状」応長元年八月五日(町史76)。

(22) 『井尻松子文書』「前美作守菊々敦相応寺惣追捕使職宛行状」永徳二年十一月十一日(町史96)。

(23) 『井尻松子文書』「相応寺領目録」康応二年三月二十一日(町史97)。

(24) 『井尻松子文書』「関戸院田所惣追捕使円理屋敷売券」文安元年閏六月二十五日(町史110～111)。

(25) 『円満院文書』「室町幕府奉行人連署奉書」永禄五年八月二十日(町史163)。

(26) 十四世紀後半の修成寺については、「鎮増私聞書」に若干の記載がある(『兵庫県史』史料編中世四、兵庫県、一九八九年)。なお、この史料については、石田善人・小林基伸両氏から御教示をえた。

(27) 元来、摂関家などとの結びつきが強い西観音寺については、当該期の動静はわからない。しかし第5節で見るように、大山崎内での近世初頭の高い地位から類推すれば、室町・戦国期も一定の寺格を保っていたものと想像される。

第4節 自治都市の発展

1 都市民の成長と宝積寺

大山崎の都市民と宝積寺のつながりは、十三世紀半ばに初めて確認できる。正嘉元年（一二五七）、長者・安主・執行などが連署を加え、山を宝積寺に寄進した。この山は昔、「キロメキノ尾」とよばれていたが、今は「長者尾」と号するといふ⁽¹⁾。従来の研究から明らかなように、ここで署名をしている長者（六名）・執行・安主などによって鎌倉期大山崎の「長者中」は構成されていた⁽²⁾。「寄符志」^(付)として「各現世安穩・後生善処、兼又為有思先亡後滅幽霊、出離生死、往生極楽」が挙げられており、宝積寺が長者らの信仰対象になり、「長者中」の寺院として位置づけられていたことがわかる。

永仁二年（一二九四）には、清原則時が後生菩提のため重代相伝の畠を宝積寺に寄進している⁽³⁾。寄進主体の則時も、寄進状に連署している則助とともに清原氏で、右の山寄進状にみえる長者・執行清原氏と同族であろう。

このように宝積寺は、一条家の寺院であった鎌倉時代半ば、すでに大山崎の有力都市民の信仰をも集めはじめていたのである。

ところで、『宝積寺文書』に含まれる寄進状類の内、権門勢家によらないものは一八通を数える（表Ⅱ-2）。正嘉元年の長者中のものを除き、寄進主の俗姓がわかるものを挙げると清原・中村・井上・井尻など、いずれも大山崎の有力都市民である。またそれぞれの寄進の目的は先祖供養、現世安穩、後生菩提などであった。なおこのうち一五通までが十四、五世紀に集中している。

次に『宝積寺文書』中の売券についてみると、その宛先（買主）が宝積寺（またはその寺僧）であるのはむしろ少数で、清原・河原崎・津田・松田・井上ら大山崎の有力都市民が宛先のものが多い（表Ⅱ-3）。こうした売券に載せられた土地について、必ずしも宝積寺への寄進状が伝わっているわけではないが、これらがのちの寄進によって宝積寺の所有に帰したがために、売券も宝積寺に残されたと考え

表II-2 『宝積寺文書』(京大所蔵分)の寄進状類

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より

	年 月 日	寄進主(連署者)	寄 進 先	物 件 種 段・歩	所 在 地	本 所 負 担	目 的	備 考 (添付文書・得点)
a	永仁2・7・29	清原則時 連)同則助	観音	畠 1.	字弥嶋畠	仲興寺	後生菩提	cf. 表1-k
b	文保元・8・?6	権少僧都尊聖	八講田	田 1.	殖野	山門	後生菩提	
c	元徳2・5・3	尼善阿弥陀仏	毎年十月十七 日八講料所	畠 1.120	長畠		後生菩提	
d	康永2・6・18	沙弥妙道	八講田・観音 観音	宝積寺山手	宿後 宝積寺前嶋	光明寺	後生菩提	一期之間領知作
e	貞治2・6・1	覚賢(下野殿)		田 1.			現世安穩・後生菩提	
f	応安6・11・28	比丘尼見成 連)舎弟民部四郎		畠 2.			二親後生菩提	
g	永和4・11・18	藤原氏女 連)権律師賢清	本尊(=観音)	田 1.	字履形	関戸院	有志	本券数通
h	明徳5・2・22	性源	鎮守御供料	田 1.	白水道祖前 岸畠	一条家(小塩領) 光明寺 大原野神社	後生菩提	
i	応永2・3・20	広安入道 連)口入人性源		畠 1.240			後生菩提	
j	応永13・7・22	比丘尼宗春	観音	畠(田?)1. 畠 2.	方丈山(上壇)	西願寺	後生菩提	夏・秋麦加地子1200文 地子150文、正田種信文書
k	永享9・3・10	船橋保彦大郎大夫	毎年三月十一 日大般若料処	茶園 1所 田 1.			先孝先妣御菩提 現世安穩・後生菩提	
l	文安6・4・17	比丘尼見隆	如法経道場	田 .120	円明寺東ウラ 石田八角之前	東大寺 (円明寺?) 一条家 年貢1石5斗 (小塩領願行名)	有志	
m	文安6・7・極	源盛	涅槃講田	畠 1.				
n	寛正6・正・11	比丘尼祥由	仏供灯明	田 2.180				
o	文明11・9・14	中村井上沙弥道運	法華蠟燭田	畠 .120	今養寺 前嶋	仲興寺 嶋抜方 本役油4合	後生菩提	売券1通、地子300文 文書5通 現物請取らず
p	明応8・12・一	茂齊清繁禅尼 連)井上宗在	宝積寺	畠 1.				
q	天文20・5・16	施主慧集喝食 (井尻六郎左衛門)	本堂軒柱造営	銭 10貫文				

注) 享徳元年の平家成興の田・畠・茶園・茶

(注) 基暦元年の平家成徳の田舎の寄進状をのぞく

表II-3 『宝積寺文書』の売券類

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より

	入札元・日	小振領主・年	田 畠	山 畠	所 在 地	買 入 金	備 考
w	大永7・8・28	宝喜坊貞吉 連)栄俊・請人川北 五郎左衛門	津田与五郎	畠 1所	(四至あり) ソウク田ノ下	1.7	成恩寺 被物銭段別10文
x	享祿3・正・29	金剛庵檀那安養坊 三位良法カ 連)請人紹秀	松田与藤三	藪 1所		1.3	
y	天文7・正・24	清金 連)うけ人栄清	井上惣二郎	畠作職 1所	(清水?)はくといん	3.	清水くわん内清金 120文
z	寛永6・11・25	津田喜左衛門尉貞 次・同勝蔵	宝寺盛雄房	畠 1所 屋敷1所 田 4所	上ノ田 伍位川ノ三右衛門屋敷 たでじま	丁銀 495匁	口入極楽坊家永
α	寛永9・正・5	津田喜左衛門貞置	宝寺寺僧衆	田 1所	字塚田	丁銀 187匁	

表II-3 『宝積寺文書』の売券類

仁木宏『京都大学文学部博物館の古文書第8輯 大山崎宝積寺文書』より

	年 月 日	売主(連署者)	買 主	物 件 種 段・歩	所 在 地	価 格 買.	本 所 負 担	備 考 (添付文書・得分)
a	嘉応2・7・21	散位源朝臣某	僧勝賀	地 口4丈 奥7.25丈	清水寺塔本北辺法楽院内	絹6疋		
b	元暦元・11・5	源末友	清原江太	田 120	唐津里十三坪(四至あり)	7.	地子10斗3升	
c	寛元4・2・25	宝積寺寺僧3名 (院主有慶他)	宝寺刑部公	田 1.180	字加矢田(四至あり)	8.	関戸院 所当油段別3升、 口油3合(庄升)	寄進状・紛失状
d	正嘉2・7・8	沙弥修寛 連)嫡子菅原俊隆・ 次男草賀部利光・ 三男草賀部利延	勝龍寺	田 7.	槻本里廿二坪・廿九坪 (四至あり) 平方里四坪 (字洲崎、四至あり)	70.	根本中堂 段別所当米1斗	本券文3通
e	弘長元・4・26	尼清阿弥陀仏 連)清原時重	式部	作手田 1.120	唐津里十三坪(四至あり) (こいらい)	6.		本券
f	弘長元・4・27	清原時高 連)嫡子僧	田主式部	所当田 1.120 (油3升)	(こいらい)	4.		油は十合升
g	建治2・12・一	僧信聖 連)六人部末永・ 六人部末村		田 1所	字九坪	20.		本券2通 本銭返し
h	弘安4・2・8	僧尊観	刑部入道	田 1.120	こいら	12.		次第証文4通
i	徳治3・7・18	佐伯氏女 連)清原為清	大進阿闍梨御房	田 1.120	こいらい			質流れ
j	正和3・6・11	御ちい		堂地1所	清水信濃堂院内	20.		
k	元徳2・4・22	照舜 連)嫡子惟康	山崎船橋保比丘尼 善阿弥陀仏	畠 1.120	字長畠、ツキカ本廿坪 (横)	6.	山門 本所当麦1斗宛 (山定升)	cf. 表2-c
l	元徳3・8・10	阿闍梨静珍 連)弟子信珍・源珍	律師御房尼御前	田 1.120	字越來、唐津里十三坪	4.		手継証文等7通
m	建武2・2・18	尼教阿	宝積寺修二月檀供 田	田 1.120	字越來、唐津加里十三坪	4.		手継証文9通
n	貞和2・8・26	藤原房俊 連)嫡子初若丸	溝口之治部左衛門	田 1.	字大溝	15.	石清水八幡宮(俗別当方) 用途100文 円明寺 米3斗(6合升)	本券5通
o	貞和2・8・26	藤原房俊 連)嫡子初若丸	溝口之治部左衛門	田 1.	字大溝	15.	石清水八幡宮(御供田) 円明寺 米3斗(6合升)	本券5通
p	観応元・4・26	僧堯盛 連)舍弟堯性	宿伊賀	永作手畠 1.240	字ヒウチ畠(四至あり)	12.6	光明寺 所当5斗(庄升?)	本券6通
q	康暦2・10・13	見忠、他2名		田 1.	かまた	3.	一条家(小塩莊ミつとき名)	加地子3斗2升
r	至徳元・12・19	比丘尼見悦	山崎蔵内南明庵祖 鑑庵主	永作手田 1.	字高田	5.	大原野神社(公事名)	本券文5通
s	応永11・8・25	てんにやの宗伯		家下地	清水北坂	150.		
t	応永16・7・28	ひこ太郎	さこ	田 1.	なつめなわて	5.	大原野神社	
u	文安元・12・25	源盛	井尻保原原崎	永作田 2.	字大溝		大原野神社 段別286文	本券文3通
v	文龜元・5・一	水無瀬某・奉行		田 2.	広瀬井内字ヤフノウシロ (四至あり)	5.	後鳥羽院御影堂 被物銭段別10文	
w	大永7・8・28	宝喜坊貞吉 連)栄俊・請人川北 五郎左衛門	津田与五郎	畠 1所	ソウク田ノ下	1.7	成恩寺	
x	享祿3・正・29	金剛庵檀那安養坊 三位良法カ 連)請人紹秀	松田与藤三	藪 1所		1.3		
y	天文7・正・24	清金 連)うけ人栄清	井上惣二郎	畠作職 1所	(清水?)ほくといん	3.	清水くわん内清金 120文	
z	寛永6・11・25	津田喜左衛門尉貞 次・同勝蔵	宝寺盛雄房	畠 1所 屋敷1所 田 4所	上ノ田 伍位川ノ三右衛門屋敷 たでじま	丁銀 495匁		口入極楽坊家永
α	寛永9・正・5	津田喜左衛門貞置	宝寺寺僧衆	田 1所	字塚田	丁銀 187匁		

られる。これら売券のほとんどは十五世紀までのものであり、宝積寺への寄進は十五世紀末までにほぼ完了していたと推定してよからう。そしてその土地を宝積寺に寄進したのは、売券に買主としてあらわれる大山崎の有力都市民であることもまちがいない。

以上の分析によって、十四、五世紀、大山崎の有力都市民の多くが宝積寺に田畠を寄進していたことが確認された。寄進の目的から明らかのように、彼らは宝積寺の観音を信仰して先祖の菩提を弔い、自らの現世・後生のために寄進行為を行ったのである。当該期におけるこうした寄進急増の背景には、彼ら有力都市民の経済的実力の向上があげられよう。

十五世紀、大山崎油神人は、幕府の強力な保護によって独占的商圈を最大規模にまで拡大し、多大な利益をあげていた。他方、神人中の都市として位置づけられた大山崎には、前代以来の交通上の立地条件をいかして為替屋や旅宿が存在し、交通運輸業者（馬借・車借や舟運業者）も多かったものと思われる。このほか米商人なども輩出したが、これら有力都市民が富貴であったことは、彼らの中に酒屋・土倉も多く、大山崎が徳政一揆の襲撃対象になっていることから理解される。

このように都市大山崎が発展して有力都市民が経営上の余裕を獲得し、先祖や自らの菩提にまで関

心を向けるまでになったため、その多くが宝積寺に信仰のより所を求めていったのである。

ではなぜ宝積寺に、都市民の信仰をうけとめることができたのであろうか。当寺が鎌倉時代中期から彼らの信仰を一定度集めていたことがその理由の一つであることはまちがいない。しかしそれ以上に、当時の宝積寺が置かれていた政治的状況も重要ではなからうか。

鎌倉時代まで保護下にあった一条家からはなれて室町幕府に接近した宝積寺であったが、財政面での幕府の援助は不十分であり、いきおい他に基盤を求めなければならぬ。そこで、膝下である大崎都市民の信仰を一層集める努力をはじめたのではなからうか。逆に大崎の中で唯一、幕府の直接的な保護下にあったのが宝積寺であったため、その安定性が都市民に信仰対象として宝積寺の姿を浮かび上がらせることにもなったのだろう。

こうして宝積寺は、都市民が成長し、都市大崎が変化してゆく時期を、自らの基盤の転換によって巧みに乗り切ったのである。

2 信仰の重層化と寺院の発展

a 寺庵の簇生

平安期以来の寺院とは別に、十四世紀になると多数の新しい寺院が大崎に生まれてくる。

大崎出身の友山士偲は延文二年（一三五七）、当地に東福寺末の万年正統院を開基し、これを受けた門弟の万峰祖灯が地藏寺を興隆した。地藏寺の末として五ヶ寺尼寺や寺庵が大崎に建てられ、その内、円通庵（一三九六年）、清源庵（一四八六年）、景陽庵（一五五七年）、金蔵寺（一五九六年）などの開創年代がいられている。のちに千利休が作った茶室待庵で有名になる妙喜庵も十六世紀末、地藏寺末として開創されたといわれている。地藏寺の開基士偲はおそらく有力都市民の子弟と考えられ、

末寺寺庵の多くも同様、都市民の財政的援助によって開創したものであろう。

大崎都市民の新しい信仰の姿の萌芽を示すのが次の例である。文明九年（一四七七）、関戸正喜は父常心庵主・母慈宗大師の菩提、正喜・正繁逆修のため田地を花園妙心寺へ寄進した。そしてその条

表II-4 大山崎の寺院の開基年代

仁木宏「中世都市大山崎の展開と寺院」(『史林』75-3、1992年5月)より

時代	西暦	年数	寺院数
奈良時代以前	～ 793		5
平安時代	794～1184	(391)	13
鎌倉時代	1185～1332	(148)	1
南北朝時代	1333～1391	(59)	3
室町時代	1392～1492	(101)	5
戦国時代前期	1493～1531	(39)	6
“ 後期	1532～1567	(36)	13
安土桃山時代	1568～1599	(32)	11
江戸時代	1600～		3
合 計			60

表II-5 大山崎の寺院の建立・再興者

仁木宏「中世都市大山崎の展開と寺院」(『史林』75-3、1992年5月)より

年代	寺名	建立・再興者
推古天皇期	不言寺	摂津国垂水岩氏女
仁平4年(1154)	西観音寺	〔再興〕河内国八戸重忠
弘安2年(1279)	成恩寺	藤原(一条)実経
観応2年(1351)	真成院	薬師寺公義
応永3年(1396)	円通庵	松田一族
応永34年(1427)	岩上地藏堂	道詮(松田一族カ)
応仁年中(1467～9)	千光寺	六保社家
明応7年(1498)	瑞雲寺	井尻有叟
永正元年(1504)	引接寺	岩上町中
永正13年(1516)	勝幡寺	〔再興〕井上道西
弘治元年(1555)	大念寺	秦(井尻)長助
天正元年(1573)	安養院	一溪士等(松田秀量)
天正6年(1578)	洞雲寺	織田悦三
寛永12年(1635)	神照院	河原崎貞知

件として、「但、天下泰平時、御門中 仁 一字造立仕者、其時、彼寺字 江 可被付下者也」としている(6)。
 応仁・文明の大乱が終わって私が妙心寺内に寺院一字を建てたなら、この田地をその庵のものときせて欲しいというのである。この正喜の希望が叶えられたかどうかはわからないが、単に既存の大寺院に先祖菩提や現世安穩を祈るばかりでなく、大山崎の都市民が自らの寺院をもとうとしはじめたことは確認されよう。

元禄五年(一六九二)の「大山崎寺改帳」は、各寺院の宗派・本末、寺領石高、開基年代・人物など記したものである(7)。この改帳をもとに、大山崎の諸寺院の開基年代をまとめたのが表II-4である。信憑性に疑問の残る奈良・平安時代を除けば、圧倒的多数の寺院の創設が十六世紀、それも中期以降に集中していることがわかる。この時期が、大山崎において寺院建立ラッシュの時期であった。

同帳のうち、建立・再興者の俗姓がわかるもののみを取り出し、また「大山崎史叢考」(8)なども参考にしてまとめたのが表II-5である。十四世紀末以降、松田・井尻・井上など大山崎の有力都市民による建立・再興がみられるようになる。なかでも井尻家の寺である大念寺は建立直後の永禄元年(一

表II-6 大山崎の有力都市民

氏名	永禄11年 (1568)	天正17年 (1589)	慶長6年 (1601)
松田	39	11	8
井尻	23	10	11
津田	18	3	12
関	11	1	5
大西	10	3	3
中	9	1	4
関戸	8	2	6
井上	6		1
寺尾	5		
正田	5		2
河原崎	4	2	3
柴垣	4	4	4
中田	4		2
神戸	3		
嶋拔	3		1
谷	3		
中村	3		
三谷	3		1
敷	3		
その他	11	4	8
計	175	41	71

*永禄11年12月吉日「大山崎惣中運署状」の署名者(『離宮八幡宮文書』)
 天正17年12月晦日「杜家諸神人等持高目録写」の内、氏名の判明する者(『正田種信文書』)
 慶長6年9月24日「大山崎惣中掟書」の内、寺庵・法名等を除く(『離宮八幡宮文書』)

五五八)、勅願所の指定までうけている(一〇)。おそらくこうした傾向は、十六世紀の開基者不明の他の多くの寺庵についても当然あてはまるであろう。

これらの寺庵はその後も継続して都市民の保護をうけた。たとえば円通庵(地藏寺末)の場合は、大永二年(一五二二)、小塩荘内の「畚んつうあん」の田地について、「松田つしま」が「あつかい」を行っており(一一)、戦国期には、松田対馬守秀頼が「円通庵奉行」としてあらわれる(一二)。円通庵が都市民に松田対馬守家に相伝・保護されていることがわかる。

十五世紀末から十六世紀になると、幕府の衰退にともなって大山崎神人の独占権が脅かされ、油商業はかつての繁栄を失うという。しかし戦国期の社会変動は商品流通を活発化させ、交通運輸や商取引に携わる大山崎の都市民を刺激した。金融業者の役割は高まり、都市大山崎は全体としてより一層発展していったものと推定される(一三)。またこの頃になると、大山崎都市民の石清水八幡宮からの自立傾向が強まり、このことと関連して、神人中ではなく、より地縁的な組織である惣中が都市自治を担うようになっていく(一四)。

こうした状況の中で有力都市民の経済的成長は、彼らに家産・家名の継承に基づくイエ観念をもた

らし、そのアイデンティティの表現としてイエの寺庵の創設に踏み切らせたのではなかろうか。そして個々の都市民は、それぞれの寺庵を信仰の拠点とし、保護・整備を加えていったものと思われる。大山崎の都市と寺院の歴史は新たな段階を迎えたのである（14）。

b 惣庄寺庵筆頭

十六世紀になると、残存史料からみる限り宝積寺への田畠の寄進は激減する。これは前項でみたように、大山崎の都市民の志向がそれぞれのイエの寺院へ移行し、寄進もそちらへ集中するようになったことによる。では、平安時代に起源をもつ他の多くの寺院と同様、ついに宝積寺も衰退してゆく運命にあったのであろうか。

いまだ十五世紀の事象に属するが、寛正四年（一四六三）、大山崎惣中の正月のオコナイ行事に宝積寺の僧侶がよばれている（15）。これは当時、宝積寺が個々の都市民のみならず、大山崎の都市共同体全体の信仰をも集めていたことを示唆する（16）。

永正十六年（一五一九）、宝積寺の梵鐘が再興された。鐘銘によると、松田勘解由左衛門尉宗誠・買屋三郎右衛門宗吉・魚屋五郎衛門ら大山崎の有力都市民が檀那となり、「天下泰平、国土安穩、特庄内安全、十方檀那諸人快樂」のためにこの鐘を鑄させたという（17）。「庄内安全」を祈って宝積寺で日夜絶えることなくつかれる鐘の音は、中世大山崎に住む人々に特別な響きとして伝わったのではなかろうか。この鐘銘は、宝積寺が「庄内安全」を司る寺院であることを示し、それ故にこそ有力都市民がこうした鐘を当寺に寄進したのであろう（18）。

この鐘銘は、いま一つ重要な示唆を与えてくれる。元禄五年（一六九二）の「大山崎寺改帳」（19）によると、宝積寺の院坊の内、例えば覚界坊について「六百九拾壹年已前長保四寅年中興幸盛開基」とある。ところが幸盛は永正十六年のこの鐘銘にあらわれる人物であること（20）から、「寺改帳」の意図するところは「長保四寅年中開基、中興幸盛」であろうと推測される。同様の例は、自性院と乗源、大仙院と乗静、多門院と栄通、無量寿院と源榮、松之坊と栄俊についても確かめられる。これらの院坊は「寺改帳」で「寺家六ヶ寺」とよばれ、近世初期の宝積寺で最も有力な院坊であったが、そうした院坊がいずれも十六世紀初頭の人々によって中興されたということは、この時期が宝積寺にとって

空前の院坊中興ラッシュの時期であったことを意味する。

十六世紀が、大山崎都市民がそれぞれのイエの寺庵を建立したラッシュの時代であったことはすでに述べた。都市民のそうした志向が、宝積寺内の院坊の新たな建立、中興に向かったとしても不思議ではない。ここにあらわれる幸盛以下の人物については不詳だが、すくなくともその背後に有力都市民がいたことはまちがいないであろう⁽²¹⁾。

天文二十年(一五五一)、慧集喝食が、先天慧恩首座の一周忌頓証菩提追善のために宝積寺に十貫文を寄進し、本堂の軒柱を造営した⁽²²⁾。禅僧が真言宗であるはずの宝積寺に柱を寄進した理由は、この寄進状の端裏書からしられるように、慧集の俗名が井尻六郎左衛門であったことに求められよう。おそらく六郎左衛門のイエの寺院が禅宗で、出家して慧集と名乗っていたが、宝積寺の本堂造営にあたっては軒柱の寄進をかって出たものであろう。

十六世紀、大山崎の都市民が先祖菩提・後生安穩を祈願する対象はイエの寺院に移り、宝積寺においてもそのための院坊が新設・再興された。そして宝積寺は「庄内安全」を体现する寺院として位置づけ直され、梵鐘鑄造や本堂造営にあたっては都市民が多額の寄進を行っている。当該期の大山崎に

おいては、都市の中心寺院宝積寺に対する信仰(惣中として、個人として)と、それぞれの寺庵への有力都市民(イエ)の信仰が重層的に展開していたのである。

時は下って慶長六年(一六〇一)、大山崎の寺庵・神人が連判して「山崎惣中」宛に掟書をしたため、一味同心すること、何事も惣中へ任せることなどを誓った⁽²³⁾。この連判の筆頭で、六保・五保の隠居や上・下の若衆中に先んじて署名しているのが、西観音寺と宝積寺であった。この掟書の端裏には「山さき惣中かための連判」と記され、きわめて重要な定めであったことがわかる。

そうした掟書の中で宝積寺は、寺庵の筆頭であるのみならず、大山崎惣中の隠居・若衆中や有力都市民に先んずる存在だったのである。当時、大山崎の事実上の領主であった惣中と、ここに連署している都市民らの関係が不明であるため、惣中と宝積寺の相互関係も必ずしも明らかではない。しかし宝積寺が信仰面のみならず、政治的にも力量を認められ、大山崎惣中で重要な構成員の地位を獲得していたことはまちがいない。こうした近世初頭の宝積寺の地位は、戦国時代にはすでに設定されていたのである⁽²⁴⁾。

戦国時代末期、宝積寺は大山崎の中心寺院として、信仰上、政治上で不動の位置を占めていたので

ある。

(1) 宝積寺

寄進 山事

合巻所者 昔号キロメキノ尾
今号長者尾

在山城国乙訓郡山崎宝積寺

四至 限東谷 限南信善谷々頭横路
限西慈悲尾谷 限北皇子谷

右、件山者、先年比山主当神事間、□□役料 仁 長者中本券并引文等被出畢、仍安主散位長宗忠・執行散位菅原則高、付惚別、令領知処 仁、源平闘争以来、彼諸文等被引失畢、然間、紛失状立テ、長者・安主・執行加連判、為向後亀鏡、所令置明白也、爰以正嘉元年十月十日、当長者・安主・執行又加連署、宝積寺令寄進処実也、敢以不可有他妨者也、若彼山有証文謂輩出来者、可被盜犯処、但長者之所従等、此由不可来入、仍以寄符志者、各現世安穩・後生善処、兼又為有思先亡後滅幽霊、出離生死、往生極樂、相副紛失状、令寄進之状如件、

正嘉元年 丁巳
十月十日

長者散位一志則友(花押)

長者兼大行事散位清原(花押)

長者橘守□□(並カ)
(花押)

長者左馬允清原(花押)

長者左近将監菅原(花押)

長者清原宗時(花押)

執行清原時高

安主文章生長(花押)

源兼時(花押)

(『宝』No.10「山崎長者等山寄進状」、町史66)

(2) 脇田前掲論文注はじめに(2)など。

(3) 『宝』No.20「清原則時畠地寄進状」(町史72)。

(4) 大永七年(一五二七)の宝喜坊貞吉らの畠地売券によると、当該地の「本文書」は、先年の「宝積寺ろうもん火事之時、失」ったという(『宝』No.83「宝喜坊貞吉他連署畠地売券」大永七年八月二十八日)。貞吉らの身分は不明だが、宝積寺の楼門が土地権利の重要文書を預かり、保管する機能をもっていたのではないかと推測される。

(5) 『京都府の地名』(前掲注第2節(14))「地藏寺跡」。

(6) (端書)
「案文」

奉 寄進田地事

(帳)

各坪付字在之、納張
合巻町八段 別紙守在之、并本券六通
裏符者也、

右、彼田地者、津国下郡之内 并 上郡之内牟礼村 仁 散在在之、売得相伝之私領也、然而為父常心

(享)

文囿

庵主 嘉吉三年 母慈宗大師 永京九年 菩提 并 正喜・正繁逆修、本券之証状相副、花蘭妙心寺
十二月十三日 六月廿日

江 所奉寄也、但天下泰平時、御門中 仁 一字造立仕者、其時彼巻字 江 可被付下者也、仍為後証状
如件、

文明九年七月廿三日

関戸 判在
正喜

妙心寺侍者御中

(『妙心寺文書』「関戸正喜田地寄進状案」、町史122)

(7) 前掲史料注第1節(24)。

(8) 前掲注はじめに(3)。

(9) 『大念寺文書』「正親町天皇綸旨」永禄元年五月五日(町史162)。

(10) 『九条家文書』「小塩莊帳写」大永二年(町史152)。

(11) 『壬生家文書』一一八一「円通庵奉行松田秀頼書状」年末詳三月三日。なお、同文書の松田対馬守の花押は、『離宮』二九〇「大山崎惣中連署状」永禄十一年十二月吉日(町史712、京都大学

文学部博物館古文書室影写本)の同人の花押と一致する。

- (12) 大山崎の都市民・寺庵が金融業を営んでいたことは、以下の史料にあらわれる。文明十三年：中西・井上治部入道・実相坊・澄心庵宅蔵主・津田大炊助(『政所賦銘引付』)、山崎倉帯刀入道行心・信善谷西坊・実相坊・近聴軒(『賦引付』一)、天文十六年：柴垣平三宗恒など(『錢主賦引付』)(一部は町史126・159)。

- (13) 脇田前掲論文注はじめに(2)など。

- (14) 中世後期刊落における有力農民とその寺庵の関係については、竹田聽洲『民俗仏教と祖先信仰』(東京大学出版会、一九七一年)など参照。

- (15) 「童使年中行事覚書」(藤井光之助所蔵、『島本町史』史料編(島本町役場、一九七六年)501頁)。

- (16) 江戸末期の史料では、宝積寺・西観音寺住僧が惣中の祭礼に「御師」として参加していることが確認される(『大山崎史叢考』、前掲注はじめに(3)、335頁)。

- (17) (第一区) 山城国乙訓郡

山崎宝積寺

鐘之再興

- (第二区) 右、為天下泰平・国土安穩、特庄内安全・十方檀那諸人快樂也

永正十六年 己卯 六月十八日

院主阿闍梨

源榮

法印

乗静

法印

乗源

(第三区)

栄通

豪乗

栄俊

幸盛

(第四区)

源祐

侍従公

西座

慶善

勘解由左衛門尉

檀那松田藤原宗誠

買屋

三郎右衛門宗吉

魚屋

五郎衛門

大工神足掃部清原春広

(坪井良平『日本古鐘銘集成』(角川書店、一九七二年)による)

(18) 笹本正治『中世の音・近世の音』(名著出版、一九九〇年)参照。

(19) 前掲史料注第1節(24)。

(20) 前掲史料注(17)。

(21) 本項の最初でのべたように、十六世紀になると宝積寺に対する田畠の寄進が激減するかに見える。しかしいわゆる『宝積寺文書』が宝積寺本坊のみに伝来した分だとすれば、それに数倍する量の文書が各院坊に所持されていたかもしれない。十六世紀の段階で宝積寺に多くの院坊が出現したため、田畠の寄進がそうした新しい院坊に集中し、本坊には集まらなかったただけかもしれない。なお『雍州府志』五(寺院門下)は、最盛期、宝積寺には十二の院坊があったと伝える。

(22) (端裏書)

「井尻六郎左衛門尉殿本堂□柱造営寄進状」

宝積寺寄進料事

合拾貫文

右、意趣者、為先天慧恩首座一周忌頓証・菩提追善之状如件、

施主

天文廿年五月十六日 慧集喝食

(異筆、端裏書ト同筆カ)

「右、施入之料にて、本堂之軒柱造営也、現物此方へ不請取候、」

(『宝』No 86「慧集喝食料足寄進状」、町史161)

(23) (端裏書) (固)
「山さき惣庄かための連判」

定

一 今度山崎御検地被成御赦免候、あまねく忝存候、就其屋地子^二 何かと被申候仁雖在之、悉被返下上ハ、如前々地子米取やり可申候事

一 諸事一味同心可申候、於評議者多分^二 付可申候事

一 何様之儀とも惣中へまかせ可申事

右、条々

(西観音寺)

信善谷(花押)

宝積寺(花押)

六保隠居(花押)

上之若衆中(花押)

五保隠居(花押)

下若衆中

法花寺

靈松寺(花押)

(中 略)

慶長六年九月廿四日 寺庵
神人

山崎

惣中参

(『離宮八幡宮文書』「大山崎惣中掟書」、町史186-189)

(24) ハの掟書に表れる宝積寺の地位は第5節で検討するような、豊臣政権のてこ入れによってもたらされたともみることも可能である。しかしそれでは西観音寺を宝積寺より上位に置く理由が説明できない。やはり惣庄内での自律的な力関係によって位置づけられたものと考えたい。

第5節 城下町から近世都市へ

1 統一政權と大山崎

戦国の争乱の中で多くの軍勢が大山崎を通過し、ここに戦陣を構えた。また背後の天王山には、山城・摂津・河内三国に備えるべく山城が築かれた。『離宮八幡宮文書』に数多く残された禁制からは、都市共同体が諸勢力の間を奔走する姿が偲ばれるが、にもかかわらず大山崎は何度か兵火を蒙った。都市民が軍事力として動員されることも多く、その立地からいって大山崎が完全中立でありえるはずもない⁽¹⁾。こうした「自治都市」大山崎の複雑な性格については別に論じなければならないが、ただ都市として特定の勢力の支配下に完全に組み入れられたことが一度もなかったことはまちがいない。

ところが織田信長は畿内の他の多くの都市と同様、大山崎も直轄都市として位置づけていた。すでに天正六年(一五七八)、信長の西国出兵に際し、淀・鳥羽などとならんで「山崎の者共」が船を仕立てて京都まで信長を迎えに参上している⁽²⁾。翌七年には、信長は宝積寺に数日間逗留し、石清水八幡宮の修理や、信長に謀反した摂津荒木村重一族の処分などを令している⁽³⁾。そして天正八年、重臣佐久間信盛父子に対して信長が下した折檻状の一条には左のようにみえる⁽⁴⁾。

一山崎申付け候に、信長詞をもかけ候者共、程なく追失せ候儀、是も最前のごとく、小河かりやの取扱ひ紛れなき事、

ここで「小河かりや」の事とは、信盛が三河刈谷の水野信元の跡職を任されたのに、信元の旧臣を追放してその知行地を私蔵して利益をあげたことをさす。おそらく大山崎についても、信長から支配を任されていた信盛が私腹を肥すのに急であったため、「信長詞をもかけ候者共」まで没落したとして指弾されたのであろう。大山崎が織田政權の重臣の支配下にあり、また都市民の一部が信長と特別な関係を取り結んでいたことがわかる。

さらに年末詳の明智光秀・村井貞勝連署状は、信長軍通行の際の迷惑を訴えた大山崎惣中に応じて、

「当所南道筋」を「広作」するように指示し、「町道一円」留めたりはしないと述べている⁽³⁾。織田政権は、都市への狼藉を防ぐため西国街道のバイパス整備を令する一方、そのために「町道」を閉鎖して大山崎を衰退させたりはしないと書き添えることを忘れなかった。交通路を付け替え、都市そのものの移転さえ企てる統一政権に直面し、大山崎もその性格を変えつつあったのである⁽⁴⁾。

中世都市大山崎に終止符をうったのは羽柴秀吉である。

天正十年（一五八二）七月、信長亡き後の諸問題を討議する清須会議から帰京した秀吉は、早速、天王山に居城を築きはじめた。翌十一年六月、その居所を大坂に移すまで、天王山の山崎城が秀吉の本拠地であった⁽⁵⁾。一年にも満たない短期間ではあるがこの間、織田信雄や柴田勝家との覇権争いを繰りひろげた秀吉にとっては、政権の基礎がための重要な時期であった。勝家は山崎城の壮麗・堅牢な普請を目の当たりにして、秀吉は「天下の絶対君主たんとするが如くなる」有様であると批判している⁽⁶⁾。そしてこうした時期に、山崎城下の大山崎は羽柴政権の「首都」だったのである。

天正十年七月、支配を開始するにあたって大山崎宛に出した秀吉の掟書は、油座・麴座などの特権を認め、買得田畠を安堵し、理不尽の催促や徳政を免許するなど、都市大山崎が以前から有していた

権利や得点を保証する姿勢を示している⁽⁷⁾。また秀吉は、同年十、十一月、撰銭令や博奕禁制などの都市法令を矢継ぎ早に大山崎に出した。これらは羽柴政権の都市支配の一端を垣間見させてくれるが、⁽⁸⁾（隣）⁽⁹⁾（軒）後者で「となり七けん」の連帯責任を定めていることは、その支配が決してゆるやかなものでなかったことを示唆する⁽¹⁰⁾。秀吉は硬軟取り混ぜた法令によって、たくみに大山崎を城下町へと変貌させていった。

当時、大山崎には長岡藤孝など秀吉麾下の有力武将が仮寓していた⁽¹¹⁾。また秀吉の茶頭であった千利休と妙喜庵功叔との交友関係が知られ、秀吉もあるいは妙喜庵で茶会など開いたかもしれない⁽¹²⁾。さらに、天正十七年（一五八九）の「社家諸神人等持高目録写」の中に「御存知之者共」として関戸・津田・井尻などがあげられ、それぞれ御書、大鞭打、大つゝミ打、碁打などと注記されている⁽¹³⁾。これは、秀吉の山崎在城当時、その許に出入りして交流していた都市民が石高を扶持されたものと考えられている。

こうして戦国時代有数の自治都市大山崎は、羽柴政権の「首都」城下町として法制的に把握され、また一部の家臣団屋敷が置かれ、秀吉が茶会を催すような城下空間ともなった。そして都市民の中に

は、芸能を通じて秀吉の扶持を受けるものまで現れたのである。

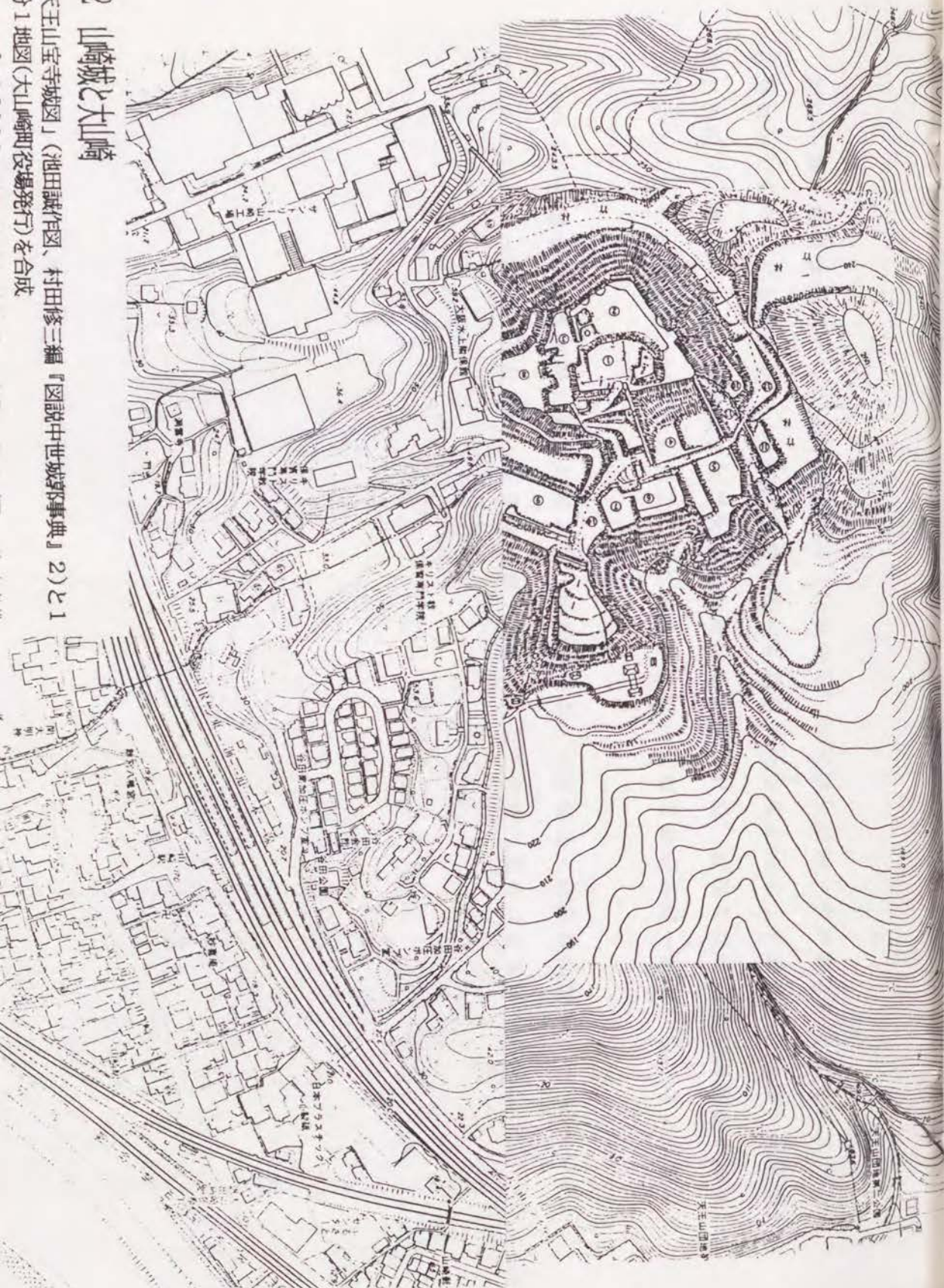
では何故、羽柴政権は自治都市大山崎をその支配に取り込むことに成功したのであろうか。この疑問を解く鍵の一つは山崎城と宝積寺の位置関係にあると考える。

2 山崎城と宝積寺

天王山頂に展開する山崎城跡の縄張り分析によると、東尾根側（現酒解神社がある側）に大手口が位置するという。そして、ここから大手道は現在のハイキングコースと同様、山麓の宝積寺に向けて下ったものと思われる（図Ⅱ-2）⁽¹⁴⁾。秀吉が通常、山上の居館にいたことは、秀吉訪問時の『兼見卿記』の記事からわかるが⁽¹⁵⁾、宝積寺が山崎城の全体的な構造の中に取り込まれていたこともまちがない。多聞院英俊がこの城のことを「山崎財寺城」とよんでいることは、この推量の正しさを示している⁽¹⁶⁾。

図Ⅱ-2 山崎城と大山崎

「天王山宝寺城図」（池田誠作図、村田修三編『図説中世城郭事典』2）と1
万分1地図（大山崎町役場発行）を合成





図Ⅱ-2 山崎城と大山崎

「天王山宝寺城図」(池田誠作図、村田修三編『図説中世城郭事典』2)と1
万分1地図(大山崎町役場発行)を合成

城郭と城下町全体のプランから考察すると、宝積寺が、広大な山崎城―大山崎城下町のまさに中心の位置を占めることがわかる。しかも①宝積寺が大手道の入口にあたるという防衛上の理由、②大山崎は地形上、狭隘であり、また都市民は軍勢の駐屯を忌避するため、町場内に多数の武家屋敷を確保しづらいという理由から、宝積寺の境内、院坊に秀吉直属の武将の多くが居を構えていたものと思われる（17）。

こうした宝積寺を羽柴政権は特別に遇した。前節でみた「社家諸神人等持高目録写」（天正十七年）は、秀吉によって認定された持高とその高主の一覧であるが、寺庵は四寺しか記載されていない。このうち宝積寺は筆頭に記載されているだけでなく、「宝寺別当坊」が別に取り上げられている（18）。また秀吉の関白就任（天正十三年）後の堀川近江守書状は、秀吉が尋ねたい子細があるので今日明日中に上洛するよう大山崎年寄中宛に命じ、宝積寺僧衆へも同じように申し入れたので、僧衆と申し合わせて上洛するようにとある。秀吉の尋問の内容はわからないが、大山崎惣中の年寄中とならぶ存在として宝積寺の僧衆が立ちあらわれている。これらはいずれも後の時代の史料だが、大山崎が城下町であった当時の状況を反映したものと考えて誤りはないだろう。

宝積寺のこのような地位は、同寺が山崎城・大山崎城下町プランの中心にあったという地理的条件によってもたらされたものである。しかしここで注意しておきたいのは、秀吉の山崎城築城にあたって偶然、宝積寺が利用されたというわけでは決してないことである。前章でみたように、戦国時代の大山崎において、宝積寺は信仰上、政治上の中心に位置した。羽柴政権はこのことに目をつけたのである（199）。

大山崎を支配する山崎城の大手、城郭・城下町の全体構造の中心に宝積寺をすえた上で、宝積寺に手厚い保護を与えることは、都市民に政治的な圧迫感を与えるのみならず、彼らに対して秀吉がイデオロギー的にも優位に立つことを意味した。そしてそれは、秀吉が大山崎を城下町として支配することにより「正当性」をもたらしただのである（200）。自治都市の中心宝積寺は、城下町の核として生まれ変わった。

天正十一年（一五八三）六月、全国制覇を目指す秀吉が大坂に去り、翌十二年三月には山崎城の天主が「壊取」られた（21）。大山崎は短かかった城下町の時代を終えたが、あとに残った都市はもはや中世都市、自治都市としての大山崎ではなかった。惣中が公儀権力から市政一般の運営をゆだねられる

一方、戦国期にはいまだ見られた諸寺院の土地領主権は完全に否定され、都市の二重構造は解消したものと思われる。こうして平安期以来の複雑な構造、支配関係の特徴とする中世都市大山崎は消滅し、公権力と都市共同体が直接かつ唯一対峙する近世都市が完成してゆくのである。

（1）南北朝以降の大山崎をめぐる合戦については、中井均「山崎城跡の構造と歴史」（『長岡京』三〇、一九八三年）に詳しい。

（2）『信長公記』天正六年五月十三日条。

（3）『信長公記』天正七年十二月十二日条。

（4）『信長公記』天正八年八月十二日条。朝尾直弘「『將軍権力』の創出（三）」（『歴史評論』二九三、一九七四年）参照。

（5）就今度御人数上下、卒爾之乱妨狼藉迷惑之旨申上候、然者、当所南道筋猛勢往還之様、可被広作之由候、雖然町道一町可被相留儀者、在之間敷候、殊寄宿御免許御下知朱印在之由候条、不可有異儀候、可被得其意事肝要候、恐々謹言、

明智十兵衛尉

六月廿一日

光秀（花押）

村井民部少輔

貞勝(花押)

山崎惣御中

(『離宮』三〇八「明智光秀・村井貞勝連署状」)

(6) 統一政權の都市改造については、序論第2節参照。

なお、大山崎町役場に保管されている明治年間の地籍図類を調査したが、「南道筋」の明確な痕跡と思われるものは見いだせなかった。

(7) この間の史料についても、中井前掲論文注(1)参照。

(8) 『日本耶蘇会年報』(町史176)。

(9) 条々 大山崎

一油之座之儀、従前々如有来、当所侍之外不可商買事

一買得田畠等之儀、如先規不可有相違事

一麴之座、是又如前々可令進退事

一理不尽之催促令停止事

一徳政免許之事

右、堅相定条、如件、

天正十年

七月廿一日

(羽柴秀吉)

筑前守(花押)

(『離宮』三一二「羽柴秀吉掟書」)

(10) 錢定之事

(南 京) (打 平)

一なんきん錢・うちひらめ錢、この二錢のほかハゑらむへからさる事

一右二錢之外ハ、三文立にとりやりすへき事

右、違犯のともから、速可処嚴科者也、仍下知如件、

(羽柴秀吉)

天正十年十月日

筑前守判

(『疋田家本離宮八幡宮文書』四三(文書No.は「町史」史料編による)「羽柴秀吉

撰錢令」)

定
(博) 突

一はくゑきの事、堅令停止上者、取沙汰ハ不及申、となり七けん可加成敗事
一此已前之おい於かせ、取やり不可仕事
(負置カ)

一はくちとりあつかひ之儀、見かくし、聞かくすともから、可為同罪事
(隠)

右、堅申付候上者、速可成敗者也、仍如件、

天正十年十一月日

(羽柴秀吉)
筑前守判

(『正田家本離宮八幡宮文書』四四「羽柴秀吉掟書」)

(11) 『兼見卿記』天正十年十月十九日条(町史175~176)。

(12) 『津田宗及他会記』天正十年十一月七日条(町史176~177)なり。

(13) 『正田種信文書』「社家諸神人等持高目録写」天正十七年十二月晦日(町史182~185)。

(14) 中井前掲論文注(1)、同「山崎城の構造」(『長岡京古文化論叢』、同朋社出版、一九八六年)、

「天王山宝寺城」(村田修三編『図説中世城郭事典』二、新人物往来社、一九八七年)。図II-2。

(15) 前掲史料注(11)

(16) 『多聞院日記』天正十年九月二十五日条(町史175)。『武功夜話』卷十でも、当城のことを「宝寺」とよんでいる。

(17) 「新修宝積寺絵図」(近世前期作)によれば、山崎合戦の際に秀吉麾下の武将が、勝家方との講和交渉の際には勝家配下の武将が、それぞれ極楽坊以下の院坊に寄宿したという(吉川前掲著書注はじめに(393頁)。

(18) 前掲史料注(13)。

(19) 大山崎に出陣した軍勢が宝積寺に駐屯することは戦国期からみられる(『大乘院寺社雑事記』文明十四年(一四八二)三月十一日条(町史125)なり)。

(20) 山崎城と宝積寺の関係は、信長の安土城と惣見寺の関係を連想させる。

(21) 『兼見卿記』天正十二年三月二十五日条(町史181)。

おわりに

江戸時代の大山崎は、中世の神人の系譜を引く有力都市民が社家中として幕府からその行政を委任されていた。諸寺院は、中世都市における領主の地位を失ったばかりでなく、その独立性、政治的実力まで喪失していった。そうした中で、宝積寺と西観音寺だけは社家中に組み込まれ、なお一定の自立性を保持しつづけたが、昔日の面影はない。こうして大山崎の諸寺院は幕藩体制に奉仕する寺院へと変貌をとげてゆく。

本章では、九、十六世紀の都市大山崎を舞台に、都市と寺院のかかわりを追究してきた。従来、神人の都市という側面が強調されがちであった中世大山崎について、寺院に注目することにより、別の角度からその姿を説明することができた。空間、都市支配、共同体のあり方など、都市構造の歴史的展開が、時代ごとの都市の性格を規定し、それが寺院のありよう、興亡ときわめて密接に関連するこ

とが明らかになった。

中世都市のもっとも顕著な特徴の一つは、寺院との深いかかわりにある。しかし関係のあり方は、時代により、都市の性格によりそれぞれ異なるのであり、そうした違いの意味を明らかにする分析が必要とされている。本章は、一つの都市を対象に中世を通して、そうした分析に意識的に取り組んだものといえる。

9c~11c

円明寺
卍

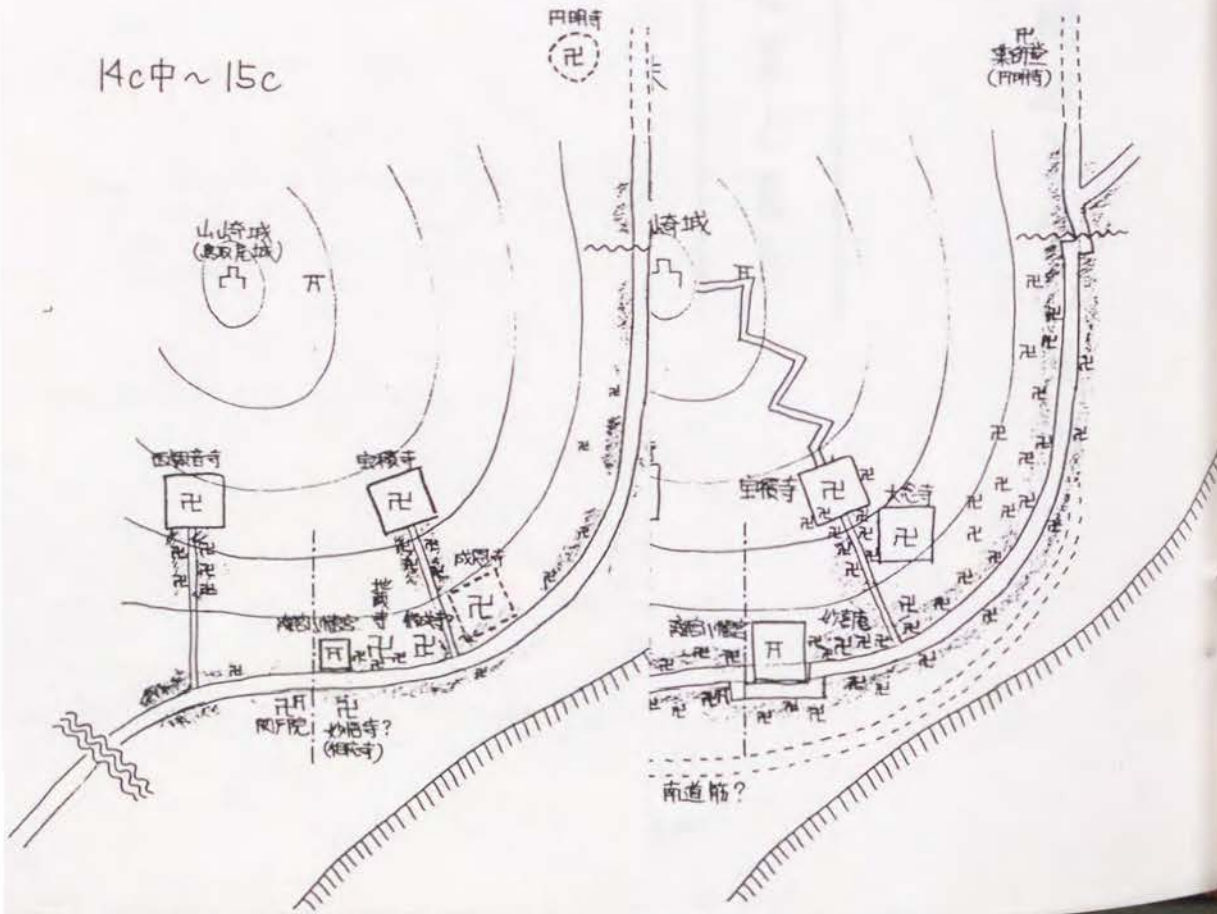
山崎の展開と寺院 (イメージ図)



14c中~15c

円明寺
卍

円明寺
(円明寺)



A hand-drawn map of the area around the Kofun of Prince Arima. The map shows the following features:

- Top Left:** A circle with a triangle inside, labeled "天王山" (Tennoyama).
- Top Center:** A circle with a triangle inside, labeled "天智王子社?" (Tenji Prince Shrine?).
- Top Right:** A circle with a triangle inside, labeled "円明寺" (Enmyō-ji).
- Right Side:** A vertical line representing a river, labeled "五位川" (Go-i River).
- Center:** A large circle representing a kofun, labeled "天智王子墓" (Tenji Prince Tomb).
- Left Side:** A circle with a triangle inside, labeled "西願寺" (Sai-gan-ji).
- Center-Left:** A circle with a triangle inside, labeled "宝積寺" (Hōshū-ji).
- Center-Right:** A circle with a triangle inside, labeled "山崎寺" (Yamazaki-ji).
- Center:** A circle with a triangle inside, labeled "河陽院宮" (Kōyō-in Miyako).
- Bottom Left:** A circle with a triangle inside, labeled "山崎寺" (Yamazaki-ji).
- Bottom Center:** A circle with a triangle inside, labeled "山崎寺" (Yamazaki-ji).
- Bottom Right:** A circle with a triangle inside, labeled "山崎寺" (Yamazaki-ji).
- Bottom Left:** A circle with a triangle inside, labeled "水無瀬川" (Minase River).
- Bottom Center:** A circle with a triangle inside, labeled "山崎橋" (Yamazaki Bridge).
- Bottom Right:** A circle with a triangle inside, labeled "山崎橋" (Yamazaki Bridge).

12c ~ 14c 初

A hand-drawn map of the Enryaku-ji temple complex in Kyoto. The map shows several temples and landmarks, including Enryaku-ji (延暦寺) at the top, and other temples like Hieizan-ji (比叡山寺), Hieizan-ji (比叡山寺), and Hieizan-ji (比叡山寺). The map also shows the Kamo River (鴨川) and the Kamo Bridge (鴨川橋). The map is dated 12c ~ 14c 初.

Hand-drawn map of the Kōchi area, showing the coastline, major roads, and various landmarks. The map includes labels for '山崎城 (奥取尾城)' (Yamazaki Castle (Okunake City)), '宝積寺' (Hōzokuji), '西明寺' (Seimeiji), '妙法寺?' (Myōhōji?), and '明王院' (Meiōin). The map also shows a river, a bridge, and a road with a dashed line indicating a boundary or route.

[illegible]

図II-3 大山崎の展開と寺院 (イメージ図)

第二章 大坂石山寺内町の構造とその展開

序節 寺内町研究の成果と視角

戦国期畿内を中心に発達した寺内町については、戦前以来多くの研究が積み重ねられてきた。その研究史には二つの大きな流れがあるといえよう。一つは都市としての寺内町に注目するもので、牧野信之助氏の古典的業績以来の伝統を有する⁽¹⁾。もう一つは一向一揆との関連で寺内町を取り上げる流れで、比較的新しい考え方である⁽²⁾。それぞれの流れは一九七〇年代の半ばまでに一応の到達点に達した⁽³⁾。

前者の到達点に位置する業績は、史料の比較的豊富な畿内寺内町を分析した脇田修・水本邦彦両氏の研究である(4)。寺内町民の出身地域や階層構成を明らかにし、寺内町を都市としての歴史的段階の中に位置づけた。さらに水本氏にあっては、寺内町の運営、寺内町内での一向宗寺院の地位等にまでその考察はおよんでいる。

後者を現在代表するのは、藤木久志、峰岸純夫、新行紀一、金龍静氏などの研究である(5)。

この説の中心をなすのは「大坂並」体制論である。すなわち、「大坂寺内」特権の波及によって地方諸「寺内」やその周辺農村の経済的發展が実現する。そしてこのことと周辺農民の門徒化によって、寺内町中心の地域的な経済的かつ宗教的結合が強まり、寺内町は一向一揆の物質的基盤となる。そこで統一政権は「大坂並」体制破砕の絶対的必要に迫られ、織田政権と寺内町の軍事的対決として石山戦争が勃発する、と考えるのである。

この議論の基底には寺内町を「仏法領」と見なす考えが横たわっている。つまり、寺内町とは「真宗を基礎とする精神的な共同体」であり(6)、「仏(宗祖・法主)に今世・後世まで託した、絶対支配下の領域」であり(7)、「内面的な仏法の世界が自生的に独自の秩序を形成する場」である(8)、とする

のである。こうして寺内町を自治都市の最高達成形態の一つとして高く評価する見方が生まれてきた。序章でみた、「無縁」の原理が最も明確に顕現する場として寺内町を考える、網野善彦・勝俣鎮夫氏の見解もこの延長線上にある(9)。

ところが、この後者の説に対しては疑問を禁じえない。摂河泉(摂津・河内・和泉)地域は有数の一向宗浸透地域であり(10)、また社会経済的にも最先進地帯であったため多くの寺内町が成立していた。しかしそれら摂河泉寺内町の大多数は、石山戦争に際して中立、ないし織田政権方の姿勢をとったのである。この事実を後者の説によって説明することは不可能である。

後者の説がこのような欠点を示すのは、寺内町における寺院と町民の関係についての十分な考察を欠いていたからであると思われる。そしてそのため寺内町の純粋性、自由さなどを過度に強調することになったのであろう。寺内町研究だけが、序論でみたような七〇年代の自由都市論の段階からいまだに脱却できていないのである。

では、現在、寺内町を研究するにあたって、いかなる方法論を用いるべきなのであろうか。序論で確認した都市史研究の現段階ともかわらせ、以下、いくつかの点にわけて述べてゆきたい。

寺内町の都市空間

序論でものべたように、城下町研究や建築史学の成果から、私たちは都市の空間構造を検討するこの重要性を学んだ。寺内町については従来、近世城下町の淵源を探る中で、その都市空間のあり方が注目されてきた。最近では玉井哲雄氏が、都市としての全体構成、細部の町割手法などの面で、寺内町は近世城下町的前提として位置づけられるとしている⁽¹¹⁾。また堀新氏は、山科寺内町にみられる平面構造の三区画(御寺内・内寺内・外寺内)が身分別区割りを形成しており、近世城下町はこうした区分を継承したと主張している⁽¹²⁾。

これに対して前川要氏は、近世の古絵図にみられる寺内町の町割は近世初頭に大規模な盛土整地をされたあとでできたものであると批判した。近世以降の寺内町の多くは短冊型地割と長方形街区のセットによって町割の基本が構成されているが、そうしたセットは織豊系城下町で独自に発生・展開したものであり、このセットが天正初年以前の寺内町に存在するはずがない。それゆえ、寺内町の町割の先進性をいうことはできない、というのである⁽¹³⁾。

寺内町の町割の多くが近世初頭に大規模な改変を受けたという前川氏の主張は、考古学的には確定

されていない。だが、歴史地理学や建築史学が近世の絵図や文書に依拠して描いてきた寺内町景観の多くについて、それらをそのまま中世までさかのぼらせることに疑義が生じたのはまちがいない⁽¹⁴⁾。

とはいえ、玉井・堀氏が注目した寺内町の空間構造、御本寺から内寺内・外寺内へと広がりをもち、市町を包摂し、全体を惣構で囲うような都市建設の手法は、やはり織豊系城下町に先行すると思われるべきであろう。

そもそも、序論で述べたように、一定以上の規模を有する中世後期の都市では、中核施設(実態的であれ、名目的であれ領主の居住空間)を中心とする同心円状に一つの空間が構成され、そうした構造が身分や職能の区別・階層性と連動していた。しかもそうした同心円が複数個集まって一つの都市を形成していたが、こうした都市空間のあり方は戦国期城下町にも共通するのである。

ところが小島道裕氏が示したように、織豊系城下町ではこうした構造を止揚し、大名の城郭を唯一の中心とする一元的な都市構造を実現していった⁽¹⁵⁾。一元的な構造への改変は、伊藤毅氏らの研究によると、秀吉による自治都市改造(京都・博多など)においてもみられる⁽¹⁶⁾。

問題は、このような都市における空間構造変容の時期にあたって、寺内町がどこに位置するかとい

うことである。従来、寺内町といえれば一向宗寺院を中心とする純粋な空間というイメージが強いが、寺内町には式内社などの神社や中心寺院以外の自他宗の寺院が存在する場合が少なくない⁽¹⁷⁾。こうした点からいえば、寺内町も中世都市に広く共通する複合的な空間構成を示すといえよう⁽¹⁸⁾。

このような寺内町の空間構造のあり方は、堺・博多など一般の中世都市とどこが同じで何が違うのか。また複合性を解決し、織豊系城下町の先駆といえるような動向を示すのか、などといった点について明らかにする必要がある。

このことにかかわって、寺内町の惣構を誰が構築し、維持していたかという問題がある。惣構は自治都市では都市共同体が築いたと考えられ、京都下京では町組と寺院が出資して補修したことを示す史料も残されている⁽¹⁹⁾。城下町の惣構建設主体をめぐる最近の議論も序論で紹介した。その都市を誰が防衛するかはその都市の「主権」を誰が担っているにかかっており、惣構論はより一層追究してゆくべき主題といえよう⁽²⁰⁾。

「大坂並」体制の実像

峰岸純夫・藤木久志氏らの「大坂並」体制論⁽²¹⁾は、寺内町研究に一時代を画す重要な論点を提供

した。しかし「大坂並」体制の実態はほとんど不明のままである⁽²²⁾。たとえば寺内町の都市特権はどのような過程をへて実現されるのか。都市民の寺院に対する期待はどのようなもので、寺院への働きかけはどのようなされたのか。さらにそうした寺内町特権が具体的にどのような成果を生んでいたのか。こうした検討からは、都市民(あるいは都市周辺の農民)が都市領主に対していただく普遍的な要求が垣間見えることだろう。

「大坂並」体制下の寺内町が、特に大坂近郊において衛星寺内町群ともよぶべきネットワークを形成していたことは本願寺・寺内町の大きな特徴である。こうしたネットワークが都市特権獲得にはたした役割はいかなるものか。市場経済圏の形成、周辺農村との関係などが政治・軍事面もふくめどのような状態にあったのか。しかしまた一方で、寺内町が摂河泉地域のなかで孤立した存在であったわけではないのであり、他の都市とどのような相互関係を取り結んでいたのかを追究することも忘れてはならない。

「寺の論理」と「町の論理」

はじめにみたように従来、寺内町を「仏法領」として理想都市視し、そこにおける一向宗寺院と都

市民の関係を不可分一体とみる見方が大勢をしめてきた。

これに対して堀新氏は、富田林において寺院と都市民は「ゆるやかな結合」関係にあり、決して一体化していない。この内部矛盾を織田政権につかれ、都市民の惣中が信長派に、寺院が反信長派に分裂した、とした⁽²³⁾。信長派・反信長派の単純な色分けは疑問だが、寺内町における寺院と都市民の矛盾関係を摘出した意義は大きい。

私たちは、寺内町における寺院と都市民を一体のものと決めてかかるのではなく、寺院、都市民・共同体それぞれの志向を分析することからはじめなければならない。そのなかで「寺の論理」と「町の論理」の違いがはっきりしてくるであろう。寺院と都市民・共同体が直面した矛盾をどのように解決していたのか、できなかったのか。「大坂並」体制が最も整備されていたはずの摂河泉において、石山戦争で多くの寺内町が本願寺方に立たなかったこと、寺内町が比較的スムーズに統一政権の都市政策のなかに位置づけられていったことを解く鍵はここにあると考える。

寺内町における都市領主(寺院)と都市民・共同体がかかえる共通の利害、また矛盾は、戦国期の門前都市や城下町の多くに共通する要素をもっているにちがいない。「寺の論理」と「町の論理」を分

析することは、当該期の都市一般の動向を解明するためにも一つの有効な方策となろう。

戦国大名・織豊政権と寺内町

本願寺・寺内町と戦国大名の関係については対立面が強調されすぎてきたきらいがある。戦国期社会の実態を読み解くためには少し違った側面からの分析も必要であろう。

まず一個の政治主体として本願寺・一向一揆を位置づけねばならない。戦国期畿内政治史の重要な局面で、管領細川氏や守護勢力は一向一揆の軍事力利用をはかり(実現にはいたらなくとも)、門徒に対する多様な協力依頼までふくめると、その事例は畿内周辺諸国にまでおよぶ。こうした大名権力からの期待・畏怖が本願寺の政治的地位を押し上げ、寺内町特権の獲得、門徒の権益保護を可能にしていたといえる。但し、権門寺院としての本願寺はきわめて保守的で、門徒の切実な要求を拒否して幕府や大名権力と妥協・迎合することもしばしばあった。「大坂並」体制はこのような政治力学、諸権門間のバランスの中でも分析する必要があるのである。

こうした直接的な関係とは別に、寺内町と大名・城下町は日常的に経済上のかかわりを維持していたはずである。寺内町が大名領国のなかで重要な経済中枢の役割をはたすこともあったろう。小島氏

らがすでに予想しているように、摂河泉地域などでは城下町の占める経済的地位は相対的に低かった(24)。これは大名の領国支配の不十分さを示すが、ここで私たちが求められるのは、城下町と寺内町を対立的にのみとらず、当該期の地域社会においてそれらが実現していた相互(補完)関係、その全体構造を検討する視点であろう。

しかし一方で、こうした補完関係は一時の状態を示すにすぎない。そこには多くの矛盾がふくまれており、その解決が織豊政権、また都市民の課題であったはずである。

藤木氏によると、統一政権は「大坂並」体制を最大のライバル視し、その解体に躍起になったという(25)。また堀氏は、織田政権が上洛以降一貫して、富田林における「大坂並」特権の否定を目指したとする(26)。こうした指摘は、岐阜加納「寺内町」に関する勝俣氏の理解とも共通する(27)。だが、織田政権の楽市令を寺内町解体策とする藤木・勝俣氏らの説は、すでに小島氏による的確な批判をうけている(28)。

「大坂並」体制と統一政権の関係を対立のみから解こうとする方法は、統一政権が「大坂並」体制の何を否定し、何を残そうとしたのかという命題に答えるすべを失わせてしまう。たとえば、寺内町

に与えられた都市特権条項から徳政免除や座役免除が次第に消えてゆくことについては、徳政令や座特権そのものが体制的、社会的に否定されたため、個別的否定を禁制として示す必要がなくなったとする見方もありえよう。織豊政権の全体的な政策のなかで「大坂並」体制変容のありさまを評価する必要があるのである。

そうした意味で注目すべきは堀氏が、富田林に都市特権を与える文書の宛先が寺院から惣中(都市共同体)に変化することを明らかにした点である(29)。これは統一政権が、寺院中心の中世的な都市から共同体を基礎とする近世的な都市へ、富田林の性格を根本的に変化させようと積極的な働きかけを行っていたことを示す。

伊藤氏らが京都・博多などで指摘し、筆者も第1部で京都に関して分析したのと同様、寺社と都市との中世的な関係を断ち切り、都市を構成する単位、主体として都市共同体を認め、それを支配の基盤にすえてゆく政策がここでもみられるのである。そしてその前提として、「町の論理」をかかげ、「寺の論理」との矛盾を深めつつあった都市民・共同体の志向があったことはいうまでもない。

以上のように寺内町研究の方法を設定できるとするなら、中近世移行期都市史研究の現段階がかか

える多くの課題を解決する鍵が、寺内町の中に隠されていることが理解されよう。寺内町を研究することは、移行期都市論を発展させる重要な方途の一つなのである。

もちろん、これらの方法、課題を本章ですべて取り扱うことはできない。しかし、可能なかぎりこうした問題関心に応えることによって、寺内町を一向宗のみに彩られた特異な都市とみるのではなく、当該期の多様な都市の中で比較検討するきっかけをつかみたい。

なお、本稿であつかう大坂石山寺内町の表記について最初にことわっておく。戦国・織田政権期の史料においては、この地の本願寺ならびに都市(寺内町)の表現として必ず「大坂」が使用され、「石山」は用いられない。のちの豊臣政権期の天満寺内町と区別するために「石山」の語を使用する方法も考えられるが、本章では以後、「大坂」表記を原則とする(300)。

(1) 牧野「中世末に於ける寺内町の発達」(『土地及び聚落史上の諸問題』、河出書房、一九三八年)、橋川正「天文日記と大阪」(『史林』一〇一一、一九二五年)、田中清三郎「石山本願寺寺内町に於ける本願寺の領主的性格」(『社会経済史学』一〇一六、一九四〇年)、今井修平「石山本願

寺寺内町に関する一考察」(『待兼山論叢』六、一九七三年)、永島福太郎「今井氏及び今井町の発達」(『社会経済史学』一〇一一、一九四〇年)、朝倉弘「織豊期における村落共同体の動向」(『史林』四五五、一九六二年)、橋詰茂「寺内町今井について」(『日本文化の社会的基盤』、雄山閣出版、一九七六年)、福尼猛市郎「近世寺内町の性質」(『紀元二六〇〇年史学論文集』、内外出版印刷、一九四一年)、同「封建再編成期における集落自治の一樣相とその変貌について」(『史学研究』五八、一九五八年)、沢井浩三「寺内町の形成とその性格」(藤岡謙二郎編『畿内歴史地理研究』、日本科学社、一九五七年)、中部よし子「寺内町の成立とその歴史的特質」(『近世都市の成立と構造』、新生社、一九六七年)など。

(2) 黒田俊雄「仏法領について」(『国史論集』一、読史会、一九五九年)、井上鋭夫「一向一揆の研究」(吉川弘文館、一九六八年)、朝尾直弘「前近代アジアにおける国家」(『日本近世史の自立』、校倉書房、一九八八年)、同「『將軍権力』の創出」(『歴史評論』二四一・二六六・二九三、一九七〇・七四年)、佐々木潤之介「統一政権論の歴史的前提」(『歴史評論』二四一、一九七〇年)、神田千里「石山合戦における近江一向一揆の性格」(『歴史学研究』四四八、一九七七年)な

ど。

- (3) この他、研究史については、金井年「都市史における寺内町」(『比較都市史研究』七一、一九八八年)、水本邦彦「畿内寺内町の形成と展開について」(京都大学近世史研究会編『論集近世史研究』、一九七六年)に詳しい。

- (4) 脇田「寺内町の構造と展開」(『史林』四一一、一九五八年)、水本前掲論文注(3)。

- (5) 藤木「統一政権の成立」(岩波講座『日本歴史』近世一、岩波書店、一九七五年)、同『織田・豊臣政権』(日本の歴史一五、小学館、一九七五年)、同「大名領国制論」(峰岸純夫編『大系日本国家史』二、東京大学出版会、一九七五年)、峰岸「一向一揆」(岩波講座『日本歴史』中世四、岩波書店、一九七六年)、新行「一向一揆の基礎構造」(吉川弘文館、一九七五年)、同「百姓・宗教・戦国大名」(『歴史評論』三五六、一九七九年)、金龍「蓮如教団の発展と一向一揆の展開」(『富山県史』通史編Ⅱ、富山県、一九八四年)など。

- (6) 峰岸前掲論文注(5)。

- (7) 藤木「大名領国制論」(前掲注(5))。

- (8) 金龍静「中世の宗教と一揆」(『一揆』四「生活・文化・思想」、東京大学出版会、一九八一年)。

- (9) 網野前掲論文注序章(1)、勝俣前掲論文注序章(2)。

- (10) 石田善人「畿内の一向一揆について」(『日本史研究』二三、一九五四年)、同「畿内真宗教団の基盤について」(『国史論集』一、前掲注(2))など参照。

- (11) 玉井哲雄「近世都市空間の特質」(吉田伸之編『日本の近世』九「都市の時代」、中央公論社、一九九二年)。

- (12) 堀新「近世の都市とはどんな都市か」(青木美智男・保坂智編『争点 日本の歴史』五(近世)、新人物往来社、一九九一年)。

- (13) 前川「近世城下町の成立」(『都市考古学の研究』、柏書房、一九九一年)。しかしこのセットが織豊系城下町から発生したとの実証はない。

また前川氏は、千田嘉博氏の研究(「織豊系城郭の構造」、『史林』七〇一二、一九八七年)を援用して、近世の古絵図に描かれた寺内町の防御施設(虎口、堀・土塁の折れ)が、大名城郭の編

年で天正年間後半以降のものであることを主張している。しかし山科寺内町に関しては、天文元年（一五三二）の陥落以後、再武装の機会はなく、近世の絵図に描かれた土塁・堀の様子が天文初年のものである蓋然性が高い。だとすれば、その施設は同時期の大名城郭のレベルを大きくうわまわることになり、寺内町の軍事技術が大名を凌駕していた可能性も残る。

- (14) 建築史学からする最新の成果は、伊藤裕久「在地寺内町の空間形成」(『中世集落の空間構造』、生活史研究所、一九九二年)である。同氏も、近世初頭の富田林・大ヶ塚の景観を戦国期までさかのぼらせ、きわめて計画的な都市建設がなされたという。しかし堅田などくらべて、寺内町だけが戦国期に統一的な町並みを実現できたとする十分な根拠は示されていない。

- (15) 小島「戦国期城下町の構造」(『日本史研究』二五七、一九八四年)など。序論参照。

- (16) 伊藤前掲論文注序章(3)など。序論参照。

- (17) 後述するように、大坂石山寺内町には生玉社や相国寺鹿苑院末の法安寺がふくまれていた。また摂河泉寺内町の多くでは本願寺直属の一家衆系の寺院と古くからの在地寺院がならび建っており、また氏神として式内社をふくみこんでいた。伊藤裕久氏によると、大ヶ塚寺内町は一向宗寺

院と念仏宗寺院の二つの中心をもっていたという(前掲論文注(14))。

- (18) 都市の清掃・葬送などの公共業務に従事する被差別民が、都市内からは排除されながらも都市のすぐ外側に住まわされるという立地は、中世都市の多くに見出されるが、寺内町の場合も例外ではなかった(脇田晴子「日本中世都市と領主権力」、前掲著書注第一章はじめに(2))。

- (19) 柴辻俊六「下京中出入之帳」(『早稲田大学図書館紀要』一四、一九七三年)。

- (20) 豊臣政権は上京・下京の惣構を解体する一方、京都全体を新たに圍繞する御土居を築いた。これは、都市京都の防衛を自らが担当することを宣言し、支配者としての「正当性」を主張する一手段であったと考えられている(第一部第四章第1節)。

- (21) 峰岸・藤木前掲論文・著書注(5)。

- (22) 「大坂並」文言を載せる富田林宛の禁制については、堀新「織田権力の寺内町政策」(『古文書研究』三三、一九九〇年)が詳細な検討を加えている。

- (23) 堀「富田林寺内町の成立と展開」(比較都市史研究会編『都市と共同体』上、名著出版、一九九一年)。

(24) 前川要・千田嘉博・小島「戦国期城下町研究ノート」(『国立歴史民俗博物館研究報告』三二、一九九一年)など。

(25) 藤木前掲論文・著書注(5)。

(26) 堀前掲論文注(22)。

(27) 勝俣「楽市場と楽市令」(『戦国法成立史論』、東京大学出版会、一九七九年)。

(28) 小島前掲論文注(15)、同「金森寺内町について」(『史林』六七―四、一九八四年)など。

(29) 堀前掲論文注(23)。

(30) 最近、吉井克信氏は、豊臣政権の大坂城下町が展開してゆく過程で、天満寺内町と区別するため、大坂城の位置にかつてあった寺内町を「石山」と呼ぶようになったのではないかとしている(吉井「大坂本願寺の所在地名―「大坂」表現から「石山」表現へ―、願泉寺史研究会報告、一九九三年一月)。

第1節 大坂寺内町の復元的考察

はじめに

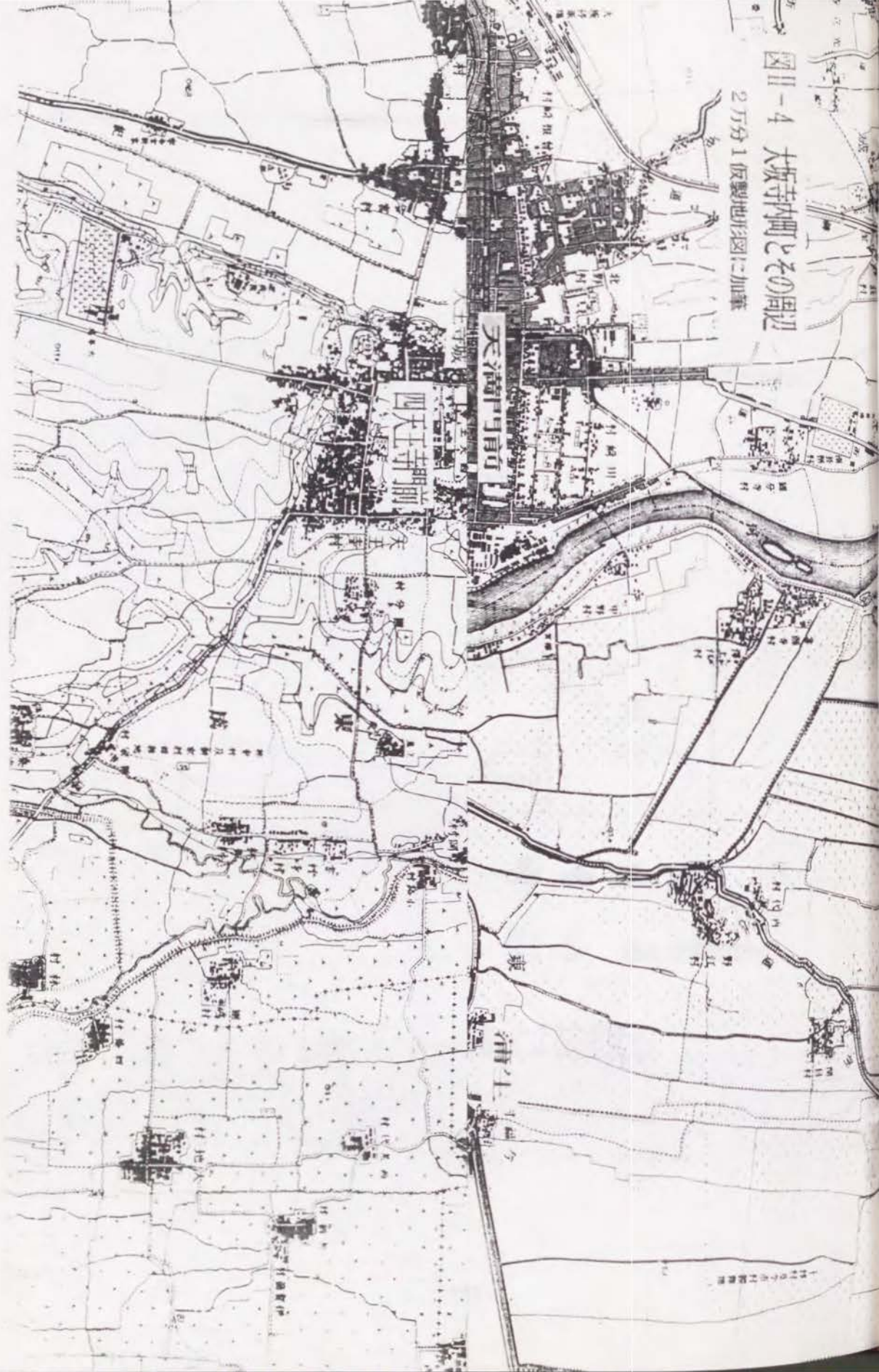
大坂寺内町は、上町台地の北端、大坂城の地下にあたり、現在も地中深く埋もれたままである。現大坂城(徳川期大坂城)のすぐ下にある豊臣期大坂城については絵図が残り、発掘も試みられていてその姿は次第に明らかになりつつある⁽¹⁾。しかしさらにその下に眠る寺内町については絵図もなければ、発掘もきわめてむずかしい。近年の中世都市研究で多用されている絵画史料、考古学の成果などを使うことが事実上不可能なのである⁽²⁾。

そのかわり私たちには、『天文日記』、『私心記』という稀有の日記史料が残されている。

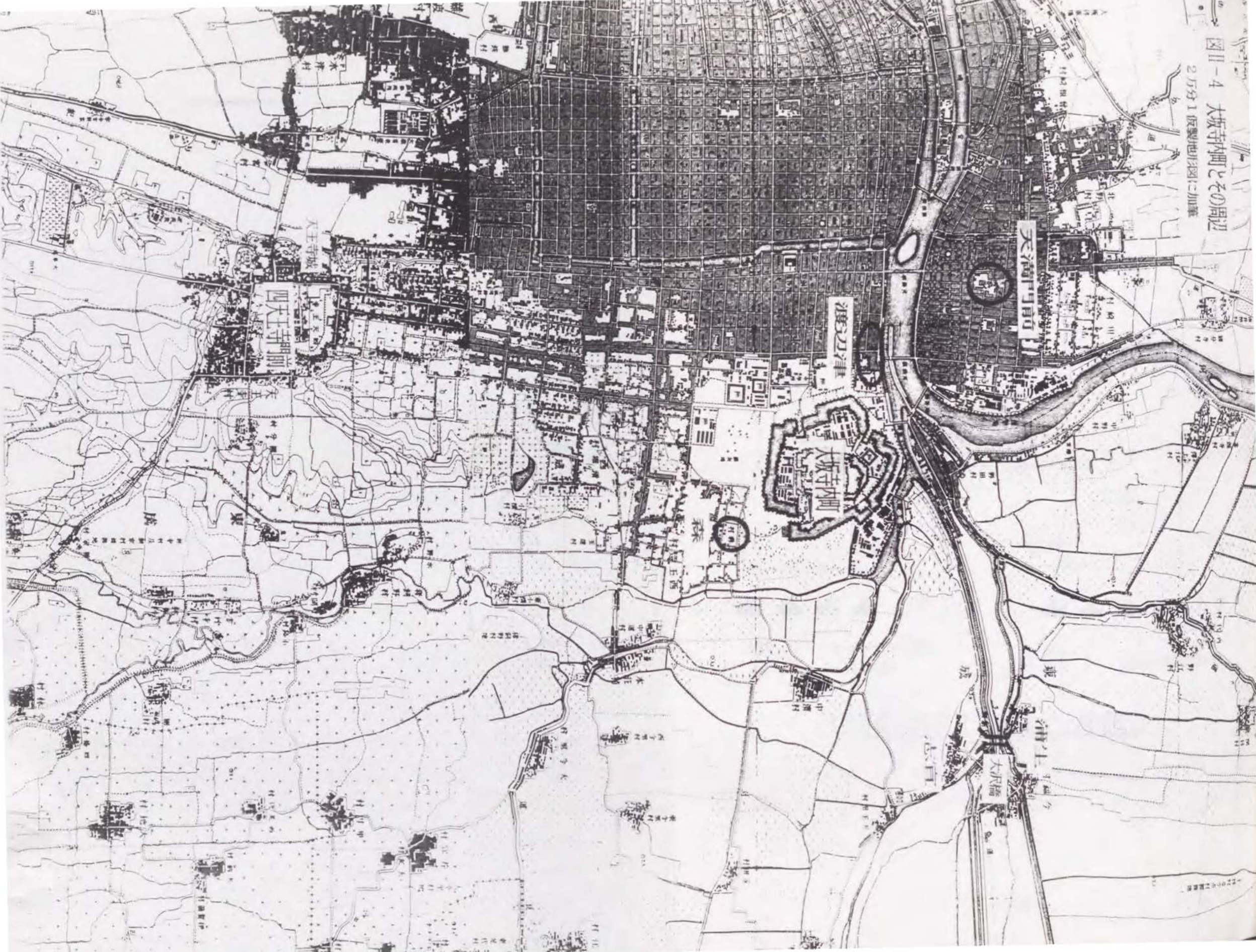
『天文日記』は本願寺第十代宗主証如光教の日乗で、天文五年（一五三六年）から天文二十三年までの分が残されている（途中欠年あり）。また『私心記』は、蓮如息で、本願寺一家衆の順興寺実従の手になり、天文元年から永禄四年（一五六一）にいたる（途中欠年あり）⁽³⁾。両日記は仏事や僧侶の動向、また本願寺「領国」であった加賀国の動静などに詳しいが、同時に、彼らが居住、支配する大坂寺内町とその周辺の様々な事象についても実に興味深い記事を書き留めてくれている。洛外の寺社門前を除けば、戦国時代の都市領主の日記が現存し、都市内外の実態がこれほど詳しくしられる例は他にない（4）。

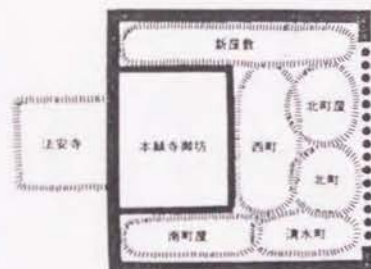
これらの史料を用いた大坂寺内町の復元研究は、当然、従来からも試みられてきた。その一つの焦点は寺内町の位置にかかわるもので、現大阪城の直下か、法円坂（大阪市中央区法円坂）付近かで岡本良一氏や山根徳太郎氏などが争った。しかし現在では、前者の説が定説となっている⁽⁵⁾。

いま一つの論点は、寺内町内部の構造、本願寺御坊や町々の配置がどのようなになっていたか、というものである。これについては近年、伊藤毅氏がその本格的復元を行い、図Ⅱ-5のような模式図を提示した⁽⁶⁾。大坂寺内町の内部構成の研究はほとんど前例がなく、また『天文日記』、『私心記』を



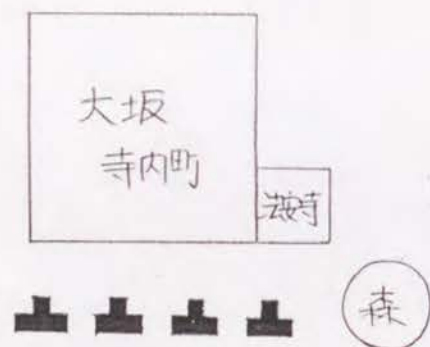
図II-4 大坂寺内町とその周辺
2 万分 1 仮製地形図に加筆



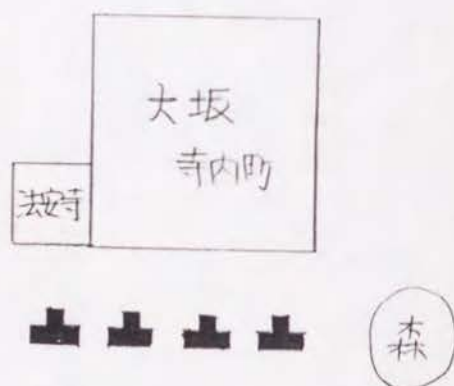


図II-5 大坂寺内町構成概念図(伊藤毅説)

伊藤「摂津石山本願寺寺内町の構成」(『近世大坂成立史論』、生活史研究所、1987年)より



図II-7 もう一つの可能性
(仁木説)



図II-6 通説(伊藤毅ほか)

大坂寺内町と法安寺 (『明宗跡書』による位置復元)

駆使した復元であったため、この図Ⅱ-5が現在、大坂寺内町の構造を示すものとして通説の地位を占めている(7)。

しかし筆者がみるところ伊藤氏の図Ⅱ-5には誤りが多く、全面的に書き改める必要がある。そこで本節では、同図を訂正してゆくかたちで、都市大坂の構成を描いてゆくことから始めたい。

(1) 佐久間貴士編『よみがえる中世二ノ本願寺から天下一へ大坂』(平凡社、一九八九年)など。

(2) 一般に「石山合戦配陣図」とよばれる絵図がある(岡本良一『大坂城』(岩波グラフィックス、一九八三年)二、三頁など)が、これは信憑性に乏しい。

但し、発掘については、本願寺時代と推定される瓦や堀、建物跡が検出されており(「特別史跡大坂城跡」(『発掘された大坂』、大阪市文化財協会、一九八四年)、鈴木秀典「本願寺と寺内町の手がかりを求めて」(前掲注(1))など)、今後の調査が期待される。

(3) 両日記は共に、『石山本願寺日記』(大阪府立図書館長今井貫一君在職二十五年記念会、一九三〇年)、真宗史料集成三『一向一揆』(北西弘編、同朋舎、一九七九年)に収載されている。史料集

成金は『日記』本の誤記箇所を訂正しているが、新たな誤植も多く、両本を対照させながら読む必要がある。本章では、この両本に加え、京都大学文学部史学科閲覧室架蔵の写本を適宜参考にした。なお両日記については、詳しい解題が史料集成本に載せられている。

(4) 洛外寺社門前の都市領主の日記としては、『祇園執行日記』、『東寺廿一口方引付』、『北野社家日記』などをあげることができる。

(5) 山根『大坂城の研究』研究予察報告一・二(一九五三・五四年)、岡本「石山本願寺と法安寺」(『日本歴史』三五〇、一九七七年)。論争の詳しい経過については、伊藤毅「摂津石山本願寺寺内町の構成」(『近世大坂成立史論』、生活史研究所、一九八七年)参照。

(6) 伊藤論文注(5)。なお伊藤氏の同書に対して、筆者は書評を行ったことがある(『建築史学』一〇、一九八八年)。

(7) 例えば、高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』1「空間」(東京大学出版会、一九八九年)の都市史図集など。

1 法安寺の立地

戦国期、大坂本願寺近傍に法安寺という寺院があったことが知られている。

法安寺は、聖徳太子が生玉明神の奇瑞に感じて志宜野に社殿・堂舎を建立したことに始まるという、以来、生玉(生国魂)社の神宮寺でありつづけた。寺伝によると、応永二十四年(一四一七)に再興されたが、第三世正教が本願寺蓮如に帰依して御坊の土地を寄進し、自らは近くに浄土真宗祐光寺を建てて移ったため、当寺は祐淳が継承したという⁽¹⁾。

法安寺は、天正八年(一五八〇)、本願寺が大坂を退去した直後の大火災で生玉社同様炎上したが、その後、再建されたい。しかし同十一年以降の大坂城築城にともなって生玉社とともに故地を追われ、慶長三年(一五九八)には、現在の生国魂神社(大阪市天王寺区)北側に移転したことが確認される。近代の神仏分離によって島之内(中央区)に移り、真言宗志宜山と号して現在にいたっている⁽²⁾。

中世に生玉社や法安寺があった志宜野(大阪市中央区城見、城東区鴨野西・東を中心とする一帯)は、

京都相国寺鹿苑院領志宜庄として『鹿苑日録』にしばしばあらわれる。ここは北から淀川、東からは新開池の水を集めた大和川(寝屋川)、南から平野川・猫間川などが合流する地点にあたり、上町台地(現大阪城の台地)北東端を除いてほとんどが低湿地であった(図Ⅱ-4)⁽³⁾。この志宜庄の南、現在の森之宮(鵜森宮)を中心とする一帯には森三ヶ庄とよばれる、同じく鹿苑院領の荘園があった(中央区森ノ宮中央、東成区中道、城東区森之宮付近)⁽⁴⁾。

ところで十六世紀の法安寺はこれら志宜庄・森三ヶ庄と同じ、鹿苑院の末寺であった。森三ヶ庄の年貢を法安寺に一旦納めようとした(『天文日記』天文五年六月三日条。以下、「5・6・3」と略す)、同庄の神事が法安寺で行われたりしている(6・5・4など)⁽⁵⁾。法安寺が、鹿苑院の在地支配の拠点であると同時に、森三ヶ庄民の結集の中心にもなっていたことが理解される。

それではこの法安寺と大坂本願寺・寺内町の位置関係はどのようになっていたのであろうか。

山根・伊藤氏ら従来の研究は、本願寺御坊・寺内町の西側に法安寺が接する考え、それが通説となっている⁽⁶⁾。その際、第一の根拠とされるのは次の『本福寺明宗跡書』である。

(天文二年)

(催)

A (前略)同年四月廿六日、木沢・日蓮宗京都を引もよおし、同廿九日に和泉の堺へ入津して、同五

二(天王寺)(広 芝)(小屋) (攻寄)

(土居) (法)

月二日 天皇子のひろしにこやをかけ責よせ、九日にも大坂殿のどいへつき、保安寺の南、森の里より西へ十二町か間を四万計のまうせい、こやをかけ、十九日の夜か保安寺のまへのへい十(切) (のちの三好長慶)

三間をきる、それもならずして六月廿三日、三善、千熊に扱をまかせて敵方悉く敗軍す、(後略)

これは天文の畿内一揆の時、本願寺に敵対した細川方(木沢長政)・日蓮宗徒の連合軍が、大坂御坊・寺内町を攻撃した際の記事である。「明宗跡書」については史料上の信憑性に疑問も残るが、従来の研究がこれを採用していることから、本項でも検討しておくことにする。

山根氏らの理解を図示すれば図Ⅱ-6のようになる。しかしこの文章だけからでは、図Ⅱ-7のように模式図を描くことも可能である(8)。「明宗跡書」からは、御坊・寺内町と法安寺の関係を決定づけることはできないのである。

法安寺の位置を示すものとして伊藤氏らに取り上げた『天文日記』の記事が次の二つである。

B 森三ヶ庄より申とて、正教、上野して、今日於法安寺神事候、然間、東の門あけ候てと申、くゞり木戸斗あけ候ても成候ハゞ明候へと申付候、仍くゞりばかりあきたるとて候、(7・正・8)

C 法安寺東堀より其下の岸迄令買得候、仍七十貫二申定、今日渡之、売主野口小法師也、取次上野也、祐光寺成其扱也、(8・12・25)

史料Bは、森三ヶ庄から、法安寺で神事があるので「東の門」を開けて欲しいと言ってきたのに対し、証如は「くゞり木戸」だけならかまわないと許可を与えたことを示している。

伊藤氏らは、この「東の門」、「くゞり木戸」を御坊の門と考え、寺内町東側にある森三ヶ庄民が御坊の東門を通過して向かう法安寺は、当然、御坊の西側に存在するとみたわけである。しかし、もし法安寺へ向かう庄民が御坊東門から入ったとすれば、今度は御坊の西側の門から出なければならぬことになるが、西門に関しては問題となっていない。そもそも寺内町外の住民に対し、不用心にもわざわざ本願寺権力の中核部を通り抜けることを許可するであろうか。図Ⅱ-6のような位置関係なら、庄民には少しだけ南側を迂回してもらえばこと足るのである。

こうした疑問はこの「東の門」、「くゞり木戸」を御坊(寺院)の門と考えたことに発するが、文脈

上、これらは寺内町(都市)の門とみることも可能である。

大坂寺内町全体を囲う惣構の出入口に門があつてそれらの門を通らなければ外部との交通が不可能であること、夜間はそれらを閉鎖し、天文初年段階では、それらの門の鍵を本願寺が管理していたことが知られている(9)。

法安寺がどこにあるにせよ、もし寺内町の惣構外にあるならば、森から法安寺までの交通は自由であり、証如は「東の門」の開放を拒否することも可能であつたろう。だがここで庄民があくまで「東の門」の通行を要求し、証如が「くゞり木戸」に限定をつけながらもそれを許可せざるをえなかったのは、その門を開けなければ庄民が法安寺に到達しえなかったからである。つまり法安寺は大坂寺内町(惣構)の内側に囲み込まれていたのである。

のち天文七年に、本願寺と鹿苑院の間で借地契約が成立し、法安寺は形式的にも最終的に大坂寺内町にふくみ込まれることになるが(7・11・6など)(10)、それ以前においても空間上、法安寺が惣構内にあつたことは明らかである。例えば、天文五年には、森三ヶ庄の年貢の麦を祐光寺か法安寺かのいずれかに収納したいとの申し入れに対し、証如は「二ヶ所ともに寺内之事候間、可然□申、二ヶ所(祐光寺・法安寺)(様)」

(納)

にておさめさせぬやう二申て帰し候へ」(5・6・3)と拒否している。

こうした点から判断して、史料Bをもとに、法安寺が寺内町外西側にあつたとする解釈は成立する可能性を失うのである。

次に史料Cについて検討する。これは本願寺が「法安寺東堀より其下の岸迄」を七〇貫文で購入したことを示している。伊藤氏らは、「其下の岸」を寺内町(御坊)の惣構外側の「岸」(堀の立ち上がり?)と理解しているようだが、それでは堀底だけの購入のために七〇貫文も支払うことになる(11)。

ところがこの前日には、「森三ヶ庄惣社・田地以下土井・堀二成候、又拝殿も此方へ取候ツるとて候、然者其方ニ以扱百廿五貫二相定、今夕代物渡之」(8・12・24)とある。寺内町惣構の土居・堀を拡張するため森三ヶ庄の惣社や田地を取り崩し、惣社の拝殿を惣構内に取り込む保障として、本願寺が一三五貫文を森三ヶ庄(鹿苑院)へ支払ったのである。この二日つづきの記事を関連させて考察する必要があろう。

先述したように法安寺は森三ヶ庄の莊園支配の拠点であると同時に、庄民の信仰・結集の場でもあ

った。こうした法安寺が森三ヶ庄と離れて、大坂寺内町の反対側(西側)にあったと考えるのがそもそも無理である。

ところで上町台地の東側には猫間川が北流し、近世の森村の集落はこの猫間川の堤防沿いに展開していたという(13)。ここで法安寺を森三ヶ庄(近世の森村周辺)から遠くない地に求めるならば、史料Cの「其下の岸」とは猫間川の川岸(堤防)をさし、台地上の法安寺の「東堀」と猫間川の間を本願寺が購入したことになるのではなからうか。史料Cをこのように解釈すれば、本願寺による東南方(森方面)への寺内町拡張政策のあらわれとして、前日の別の土地購入ともあわせて合理的に理解できるのである。

以上、御坊・寺内町と法安寺の位置関係をめぐって従来使用されてきた史料をもとに、図II-6の解釈は誤りで、図II-7のように考えるべきであることを指摘してきた。そこで今度は、伊藤氏らは別の史料で法安寺の位置を確認したい。

天文二十年十二月、債権取り立てをめぐって森祐光寺正教の被官らが木村弥太郎らを打擲・刃傷する事件が発生した。その場合は仲裁が入っておさまったが、遺恨をふくんだ木村方が正教を襲撃しよう

としてことは大きくなった。

D (前略) 其後、自彼党、正教へ既取懸人数、法安寺北橋きわ寄集を、細江小三郎門口事候間、出合

(木村)

(際)

支之處、南町屋新左衛門親子・其外若衆出候て、曲事之通申之、悉散也、(20・12・14)

(際)

正教を襲撃するため木村方が「法安寺北橋きわ」に集まったところ、そのすぐ前に住んでいた細江がそれを制止し、南町屋の老若衆が出て木村方に引き取らせた、というのである。祐光寺正教を襲撃する木村方が「法安寺北橋きわ」に集合したということは、祐光寺がその近辺にあったことを示す。しかも森三ヶ庄との深いつながりを考えれば祐光寺が、森からそれほど遠く離れた場所にあったとは考えられない(13)。

ところで「法安寺北橋きわ」が「門口」であった細江小三郎は本願寺の内向きの諸事を担当する中居衆と推定されるが(14)、中居衆の屋敷が寺内町外にあったとは考えにくく、「法安寺北橋きわ」が寺内町内にあたることがわかる。

以上、史料Dより、法安寺は祐光寺と共に、やはり森三ヶ庄に近接する地域にあること、法安寺の

すぐ北は寺内町内である蓋然性が高いことを指摘した。

伊藤氏が描く図Ⅱ-5が成り立たないことはもはや明らかであろう。法安寺は、寺内町の惣構の内側(寺内町内)で、森三ヶ庄に近接する、寺内町南東端あたりにあったと考えられるのである。

では、伊藤氏が図Ⅱ-5で示した、寺内六町の配置は正しいのであろうか。

(1) 『難波別院由緒記』(一九一三年編、『津村別院誌』(一九二六年)所収)。森正教は『天文日記』にしばしば登場する人物であり、彼が直接、運如に帰依したとは考えにくい。この間の伝承には時代的な錯誤があろう。

(2) 以上、「法案寺」(『大阪府の地名』、平凡社、一九八六年)による。

(3) 「志宜庄」「鴨野村」(同右)参照。近世以降、鴨野の地名は平野川北東に限定されるが、古代・中世の志宜野は上町台地北端の一部もふくんでいたらしい。

(4) 「森村」(同右)参照。

(5) この他、森で開催中の猿楽の演者を法安寺に宿泊させようとしている例(7・4・26)などがある。

る。

(6) 山根・岡本・伊藤前掲論文注はじめに(5)。「石山本願寺」(『大阪府の地名』、前掲注(2))など。

(7) 笠原一男『真宗における異端の系譜』(東京大学出版会、一九六二年)所収。

(8) 「保安寺の南の森の里より西へ」と読むなら図Ⅱ-7しか考えられない。

(9) 盆行事に際し、南町屋の町民が夜間開門を打診してきたが、証如はそれを拒否した(後掲史料

L)。町屋に鍵の管理権が移るのは、天文七年四月以降である(7・4・25)。なお、惣構については第3項であつかう。

(10) 第2節第1項参照。

(11) のちに本願寺が法安寺の寺域全体を購入しようとした時でさえ、二〇〇貫文余の値であった(6・5・5など)。

(12) 山根前掲論文注はじめに(5)。なお、森の立地については第2節第3項で検討する。

(13) 森三ヶ庄の麦年貢を祐光寺または法安寺に納めようとした事例(5・6・3)などがある。

(14) (21・4・30)では、細江小三郎は証如の命令を酒奉行に伝えている。

2 御坊と寺内六町

『天文日記』にはしばしば「寺内六町」という表現がみられ、それが北町、北町屋、南町(あるいは南町屋)、西町、清水町、新屋敷であることはすでに確定されている⁽¹⁾。ところが大坂寺内町にはこれら「六町」以外に、「檜物屋町」、「あをや町」などの町名もみえる。

ところで『私心記』に次のような記事がある。

E 朝、早々天神ニテ風流見物候、三好一番ニ「能」二番スル也、入はヲトリ也、其後、十町ヨリナハナ風流アリ、七時過ニハテ候、アカ・「アコモ」行候、今夜モ堺モ留候、風流金蘭等無尽期事也、(天文十三年七月二十五日条、以下、「私13・7・25」と略す)

従来の研究では、ここで「十町ヨリナハナ風流アリ」という部分を取り上げて、大坂には計十町あったと考え、六町以外の四町とは何かという議論を繰り返してきた⁽²⁾。しかし大坂寺内町に十町あったとする根拠はこの条項のみである。

ところで、右に掲げた記事を載せる、『石山本願寺日記』所収の『私心記』は西本願寺所蔵のものであるが、これは順興寺実従の直筆ではなく抄本である。そしてこれとは別の抄本が堺真宗寺に伝来している⁽³⁾。しかもこの二つの抄本は採用している記事にかなりの齟齬があり、一方で載せられている事件が他方では全く記録されていないことも多い。

そこで真宗寺本で、当該日前後の記事を見ると、二十四日には、「堺行候、宿堺御堂了誓所也」、二十六日条には、「朝、町見物候、朝飯茶々所ニテ土治相伴、七時ヨリ帰候、乗物也」とある。つまり実従は、二十四日に堺へ行き、二十六日に大坂に帰っているものであり、問題の史料E(二十五日)は堺に滞在中なのである。そう考えると史料E文末の「今夜モ堺モ留候」⁽⁴⁾とは、実従がこの夜も堺に宿泊したことを示すことがわかる。また史料E冒頭の「天神」とは堺北庄鎮守菅原神社のことで、「一番ニ「能」二番」を行った「三好」とは、堺を兵站基地として利用していた阿波三好氏の一族という

ことになる。

こうして大坂寺内町に「十町」を想定する必然性は全くなかったのである。

では、もう一度、寺内六町にたちもどり、伊藤氏の復元図(図Ⅱ-5)を批判しながら相互の位置関係を推定してみたい。

【北町】

まず北町に関する史料をあげる。

F 子刻二大坂北町岸端家廿八間、至丑刻焼留候、(8・正・12)
(坂)

G 北町惣道坊日本一之鼻□景趣為歴覧可相越之由、町衆望申間、女房衆迄行也、(16・8・10)
(場カ)

史料Fより、北町が「岸端」に面していたことがわかる。また史料Gでは、北町惣道場から「日本一之鼻□景趣」とよばれる、すばらしい景色が見えるという。

大坂寺内町には「寺内之浦」があり、「舟付」の設備があった(20・4・6)。ここには堺から回送

された「唐船」が乗入れし(16・10・1)、細川晴元の娘が頼如(証如息)の妻としてここから奥入れした(私弘治3・4・11)。また証如はここから新開池(摂津国東成郡・河内国若江郡)へ「遊回」に出かけた(20・4・6)。こうした点から「寺内之浦」は淀川・大和川合流地点付近に設けられていたものと推定され、寺内町がその北端部で川端まで達していたことがしられる(4)。

史料Fの「岸端家」の「岸」とはこれらの川縁をさすと考えられ、「岸端家」をもつ北町は「寺内之浦」近辺の淀川・大和川端をふくむ地域に想定できる。それはまた寺内町全体の中で北西部を構成していたことになる(5)。

しかし伊藤氏は、史料Fの「岸端」を台地東側の崖部と考え、史料Gの「景趣」を大坂から東方を見た景色と理解し、北町は寺内町東部に展開すると想定している。だが「日本一之鼻□景趣」とは台地突端からのパノラマとみたほうが妥当性が高いのではなからうか。

【新屋敷】

伊藤氏が北町を寺内町東側に設定せざるをえなかったのは、北町より先に寺内町北部を新屋敷でお

おってしまっていたことに原因がある(図Ⅱ-5)。そこで次に新屋敷について検討する。

G 新屋敷之町人二上野して申出様、新屋敷西口之わきの堀、未ほりかけておき候、早々堀を堀立、
(下間頼慶) (脇) (堀) (堀)

則へい付べきよし申出なり、(5・正・29)

H 寺内新屋敷就角要害之儀悪敷候間、近所の衆雇、ほかすべき由、以兵庫、乗順・定専坊二申付候、
(下間)(光徳寺)
(6・2・7)(6)

I 新屋敷北堀出之、以後土居之用二則北ノ畠ノ土取之候、其本役為新屋敷可出之段、無調法候間、
為此方出之候様ト以注文申候、(7・3・28)

J 從鹿苑院被申候とて興禪軒より、志宜庄内、寺内衆出作内無沙汰候、有坪悉注来、又新堀二成分
(居)
井 其土井につき候土取、其田地荒、無出作分兩巻記来候、(7・9・5)

史料Gからは、新屋敷には「西口」があり、その脇を堀・堀で防御をかためていること、史料Hからは、新屋敷北西角の「要害」について、堀を掘って(堀にたまった土を「ほかす」の意か)修復して

いること、史料Iからは、新屋敷には「北堀」があったことなどがわかる。

さて史料Iより、この「新屋敷北堀」を拡張し、土塁を築くために北側の田畠の土を取ったことからその田畠が荒れ、その分の「本役」を本願寺が負担せよとの要求が寄せられていることがわかる。

この要求の主体が鹿苑院であったことは史料Jからわかり、しかもそれらの田畠が志宜庄に属したこともしられる。志宜庄の場所については第1項でみた通りであり、それに南接する新屋敷が台地突端北東部にあったことが明らかになるのである。

ところが、本願寺や新屋敷(町共同体)がこの鹿苑院からの要求を拒絶したため、鹿苑院の要請をうけた山中藏人(？)が介入してきた。山中は、もし新屋敷が荒廃田畠の補償をしなければ「大沢橋」で所質を取ると圧力をかけている(8・4・29)。この記事によって新屋敷から寺内町外へ通じる主要交通路上に大沢橋があったのではないかという推測が成り立つ。一方、大坂から上洛する烏丸光康を見送りに、本願寺殿原衆が大沢橋まで出かけたという記事がある(私24・5・3)。この二つの史料をあわせて考えると、大坂から京都方面へ向かう主要陸路(淀川左岸)は、新屋敷を出てから大沢橋を渡り、北河内方面へとつづいていたことが推定されるのである(8)。

この推定が正しいとすれば、新屋敷が大坂寺内町北東隅を占めることは一層確かとなる(9)。

ところで伊藤氏は図Ⅱ-5に示したように、新屋敷は寺内町北東部のみならず、北部一帯を占めていたとするが、その根拠は、新屋敷に「西口」(史料[G])、^(乾)「就角」(史料[H])があったことだけである。しかし新屋敷の「西口」が必ずしも寺内町の西口にあたるとはかぎらず、新屋敷からの出入口が東西に二つならんでいれば、そのうち西側の出入口を「新屋敷西口」とよぶ可能性がある。また氏は最初から、図Ⅱ-5のような模式的な正方形を念頭においているため、「乾角」といえばすぐ寺内町の北西角と判断したようだが、新屋敷が北に張り出していると考えれば、その「乾角」はかならずしも寺内町の「乾角」と一致しない。新屋敷が寺内町の北部一帯を占めていたという氏の想定 of 必然性は高くないのである。

伊藤氏のように、寺内町の北部一帯を新屋敷でおおうのではなく、寺内町北西部に、「寺内之浦」をかかえ、淀川端に面する北町、北東部に、台地北東端を起点に、志宜庄を侵食しつつ広がる新屋敷を想定した方が蓋然性が高いといえよう。

では、新屋敷は南はどこまで延びるのであろうか。天文六年の事件がそのヒントを与えてくれる。

(御坊・寺内町) (由)

鹿苑院の意をうけた中坊(木沢長政被官)が本願寺に、「森庄内田畠、為此方相押、堀にしたるよし」

を抗議してきた。これに対し本願寺は、「森田畠之儀、新屋敷衆ニ尋可申候」と返答している(6・3

・24~26)。こうしたやりとりが前提となつて、第1項でみたように、森三ヶ庄(法安寺東側)の一部を

本願寺が買得して惣構内に繰り入れるという事態にいたるのである(8・12・24、史料[C])。

ここで森庄内の田畠についても遼乱の主体が新屋敷衆であったということは、新屋敷が、森付近にまで延びていたことを示す。つまり新屋敷は大坂寺内町の東端で、志宜庄と森三ヶ庄に接する、南北に細長くつらなる町であつたのである。

【北町屋】

北町と新屋敷の間に北町屋があつた。

(高)

K 新屋敷檜物屋町之水落候方ハ、北町屋落候を、去年從北町屋、其町ニ土たかく置候間、北町屋へ

(木履) (足駄)

ハ不落候処ニ、当月中旬比之雨ニ檜物屋町にハ水多、ほくり・あしたなどにてても難往来候処、(後

新屋敷に属する檜物屋町から北町屋へ水が流れ落ちていたのに、北町屋側が土を高く盛ったため水が落ちず、檜物屋町が水びたしになったという。このことから、新屋敷檜物屋町と北町屋が隣接していたのは確かである。

だが、伊藤氏(図II-5)と筆者では、新屋敷・北町の推定地を異にするため北町屋の位置も全く違ってくる。筆者は、北町屋を新屋敷(東)と北町(西)にはさまれた寺内北部に想定することになる(100)。なお、伊藤氏は史料Kなどにより、新屋敷檜物屋町と北町屋が道一本をはさんで接しており、それぞれ両側町を形成していなかったとしているが、その根拠は不明である。

【南町(屋)】

次に南町(あるいは南町屋とも)について検討する。

従南町屋申事にハ、盆にハ從河内、夜、此方へ各到来候間、門をあけて入候はんか、又如何と申

(大坂)

(開)

候間、用心之折節候間、門をうち、入候まじく候よし申候、自余の口々も同前ニ申候、(5・7・

13)

盆には本願寺参詣のため、夜間、寺内町に入ろうとする門徒が多かったが、本願寺は、「用心之折節」という理由で開門を許さなかった。南町には主に河内方面から門徒が入ってくることに注目したい。

戦国期段階の大坂周辺の交通路についてはもちろん不明だが、近世の街道からさかのぼらせて考えると、森村を東へ抜けた奈良街道が中河内の村々を結び、大和へつづいていたものと推量される。だとすれば、南町を寺内町の南東部に設定してまちがいなからう(111)。

(兼幸)(に)

M 願証寺奥□のりて御堂の前被通候、御堂の門の内へハ不入、門外にて奥をたて、それより定専坊前へ廻、南町屋へ出、茶毘候、(後略)(5・5・6)

これは願証寺兼幸の葬送の記事であるが、御堂から出た葬列は定専坊前から南町へ入っている。定

専坊の位置は不明だが、南町が本願寺に近接してあったことは確かであろう。

【清水町】

(実孝)

N 朝、飯貝殿御下候、堺マデ也、△御宿へ参候テヨリ、清水口迄送り申候也、(私13・関11・10)

清水口とは清水町にあった、惣構の出入口と考えられ、堺に下向する飯貝実孝が清水町を経由していることがわかる(13)。大坂から堺へ向かうには上町台地上をまず四天王寺まで南下するルートが一般的で、この道は大坂寺内町南西部を起点とするだろう。すなわち清水町は寺内町の南西部にあったと考えられるのである。

筆者のこうした南町屋・清水町の位置復元は、伊藤氏の図II-5と異なる。同図では、河内方面に面するはずの南町屋が寺内町南西、天王寺・堺方面に面する清水町が寺内町南東になっているが、これでは東西の位置関係が逆であろう。南町屋を東、清水町を西寄りにおくべきである。

ところで伊藤氏は次の史料をもとに、清水町が北町と接していたとする。

O 寺内二号十六人番匠、町之諸役不致之由、自北町清水町と就構坪事、家役日記、左右方上之其時申之間、則彼十六人へ

様躰尋之処、(後略)(21・2・25)

「十六人番匠」は「町之諸役」を勤めていないと北町が主張したため、本願寺が実態解明に乗り出したこと示す記事だが、ここでは割書の部分が注目される。北町と清水町が「構坪事」について相論となり、「家役日記」(書き上げ)を「左右方」(相論の双方、北町と清水町)から本願寺へ提出した時、「十六人番匠」の「町之諸役」勤仕が問題となったのである。

伊藤氏は、「構坪事」とは北町・清水町両町の境界部分で発生した何らかの相論(土地争い?)とみているようである。しかしここでは、両町が本願寺に「家役日記」を提出していることから明らかに、両町の役勤仕の内容が争点となっている。だとすれば清水町と北町が隣接している必要はなく、図II-5のように両町を相接した位置に措定する必然性もうすいのである(13)。

【西町】

伊藤氏は大坂の西端に御坊を置き、それを寺内町(町屋)がコの字型に取り囲むプランを想定している(図II-5)。

伊藤氏の根拠の一つは、本願寺が大坂に移ってくる前の本拠地である山科からの類推である。確かに近世の絵図にもとづく復元研究によると、山科の西端に御坊があり、東に向かって町屋が展開している(一)。しかしこれは当該地が地形上の制約をうけたためで、大坂が必ずしも同様の条件下にあるとはいえない。伊藤氏自身、山科寺内町にあった内寺内、外寺内の区別が大坂ではみられないことを指摘しており、両者のプランが類似のものであったという保証はない(二)。

伊藤氏の根拠の第二は、史料B・Cである。つまり法安寺のすぐ東側に御坊があり、法安寺は寺内町外にあるのだから、寺内町西端の御坊と堀をへだてて接していたはずだというのである。しかし氏の比定する法安寺の位置が誤りであることは第1項で述べた。

このように、伊藤氏のコの字型の復元プランはその根拠を失ったのである。

ところで伊藤氏は、先にみたように大坂の西端に本願寺を想定したため、西町を御坊の東側に置かざるをえなくなった。氏のあげた「戌刻半時ニ火事行候、西町・北町百四五十間焼候、当坊近所迄火

(軒)

来候」(5・間10・15)という記事からみて、西町・北町・当坊(御坊)が相接近した位置関係にあった

ことは確かである。しかしこれとて、御坊の東側に西町があったことを証明する史料とはいえない。

(証如・慶寿院)

(ヨリカ)

P 御祝之後、西町ヤクラへ○御出候、諸勢打出候、見物我等参候、中嶋 三吉孫二郎、今朝退出候

云々

、仍中嶋へ河内衆少入候テ放火候、(後略)(私15・9・9)

(和泉)(通)

(摂津)

Q 泉勢トホリ候ヲ西町ニテ見物候、自津国退候也、(私21・6・26)

(一存)

(町欠カ)

昼、又十河自津国退候、西屋蔵ニテ見物候、(後略)(同翌日条)

第3項でみるように、当時、大坂寺内町には櫓とよばれる建造物が数多くあった。これは望楼の(一)ときもので、その上に登ると寺内町内外がよく見渡せた。史料Pでは、証如や実従らが「西町ヤクラ」へ上り、摂津国中島における大名同士の戦闘を見物している。史料Qでは和泉勢や十河氏が摂津から退陣するのを見物しているが、おそらくこれは中島から堺・和泉方面へ向かう諸勢が、上町台地西直下の熊野街道を南下するのを見たものであろう(二)。

伊藤氏(図Ⅱ-5)のように西町を寺内町の中心部に想定すると、寺内町外の様子を遠望するのにわざわざ西町の櫓に上る理由がなくなる。寺内町西側を通過する軍勢は御坊からが一番よく見えるはずだからである。ところが実従らはわざわざ西町まで出かけて見物しており、その櫓が寺内町外西側を見るのに適する位置にあったことを示唆する。すなわち図Ⅱ-5とは違って、西町は御坊の西、寺内町最西部にあったと想定されるのである。

以上、二項にわたって、伊藤氏の復元プラン(図Ⅱ-5)を批判しながら、御坊、寺内六町、法安寺の位置関係を推定してきた。その結果、同図は全面的に書き改める必要があることがわかった。そこで、これまでの分析をもとに筆者なりの復元プランを示しておく(図Ⅱ-8)〔1〕。

(1) 伊藤論文注はじめに(5)。

(2) 同右参照。

(3) 真宗史料集成本の「解題」(前掲注はじめに(3))参照。

(4) 第2節第3項参照。



図Ⅱ-8 大坂寺内町復元図

(5) 『私心記』によると本願寺は、天文五年十月から閏十月にかけて「北町屋口堀」の整備を急いでいる。これは二ヶ月ほど前に、門徒が立て籠っていた摂津国欠郡中島(大阪市北区・福島区付近)が陥落したことに関連しよう。中島は大坂の北西に広がっていたが、ここが武家方(細川晴元方)の手に落ちたことにより、淀川をはさむとはいえ、寺内町は北西方面からの脅威に直接さらされることになったのである。「北町屋口堀」の整備はその備えであったと推定される。

なお、『私心記』は北町と北町屋を必ずしも明確に区別しておらず(私14・4・12など)、この「北町屋口」が北町にあったのか、北町屋にあったのかは判断できないが、いずれにせよ両町が寺内町北西、中島に面して存したことの傍証となろう。

(6) これが「新屋敷乾、角要害」にかんする記事であることは、(6・3・6)に関連条項があることよりわかる。

(7) 摂津国守護細川晴元のもとで欠郡(東成郡・西成郡・百済郡・住吉郡)北守護代をつとめる山中藤左衛門政重の一族。管内支配の実務担当者とされる(石田晴男「両山中氏と甲賀『郡中惣』」、『史学雑誌』九五―九、一九八六年)。以下、山中氏の活動については、同論文参照。

(8) 第2節第3項参照。

(9) 摂津国西成郡国嶋(東淀川区柴島)などで行われた戦闘を「新屋敷屋蔵」^(槽)から見物していること(私18・3・1)も新屋敷の位置をしる手がかりとなる。

(10) 北町屋が北町同様、川端まで広がっていたか、新屋敷のように川まで一定の距離があったかは、史料がなく、不明とするよりない。

(11) この点については伊藤氏も言及しているが、南町の想定場所は筆者と異なる。

(12) 清水町が惣構に面していたことは、清水町の堀掘削の記事(私3・2・3)からも推定できる。

(13) 『天文日記』中、この他に「坪」が問題となった例が一つだけある。加州番衆が法安寺内の不審な動静として、土居を切り崩して道をつけること、寺中に「人の見しらざる仁体」^(知)がいることとならんで、「坪などもそこね候」ことをあげている。この記事と関連させて考えれば「坪」と

は何らかの要害のことで、「坪を構える」とは要害の作事をさすのではなかろうか。もしそうならば「構坪事」とは要害構築の人足役負担をめぐって北町と清水町が相論をおこしたことをさすといえよう。

(14) 岡田保良他「山科寺内町の遺跡調査とその復原」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八、一九八五年)。

(15) 前川要氏が、近世絵図にもとづく山科寺内町復元プランに疑問を呈していることは、すでに紹介した(前川前掲論文注序節(13))。

(16) 私18・6・19では逆に、軍勢が堺から中島に進撃する様子を「西町矢蔵」から眺めている。

(17) 図II-8を作成するにあたっては、第2節で行う分析も参考にした。

3 寺内町の景観

第1、2項では、大坂寺内町の空間構成の大枠の復元を行った。そこで本項では視角を変え、寺内町の景観、特に地上構築物のあり様がどこまで具体的に描けるか、試みてみたい。

a. 構

戦国期における構カマキの語が軍事的な要害、すなわち堀、土塁・土居などをさすことはあらためて説明を要しない⁽¹⁾。都市大阪を周辺の集落・田畠と物理的、視覚的に区別し、また軍事的に防衛するのが寺内町のもっとも外側にある構、いわゆる惣構である。この惣構が政治的な意味でも重要な存在であったことは次のような史料からも理解される。

(細川晴賢)

R 従右馬頭、馬一疋 青毛 来、為使並河来也、於構外令請取之、両方共以不入于寺内之通、申聞畢、

(15・6・6)

この時、細川氏綱・畠山方と細川晴元・三好方の間で摂津・河内方面の軍事的緊張が高まっていた。そのため証如は氏綱方である晴賢の使者(並河)を大坂の中に呼び入れることが、晴元方への敵対行為と映ることを危惧し、「構外」で使者に應對したのである。

では、この惣構はどのような構造をもつものであったのだろうか。すでに史料G・Jでみたように、新屋敷北部では堀を掘り、土居を築く作業がつづけられていた。そのため新屋敷北側の志宜庄の田畠

は堀にされたり、土居の土を取ったりされて荒廃していた。また、惣構の出入口近辺に、重点的に要害がほどこされていたこともみた(史料G)。

こうして大坂の北東、志宜庄方面では、惣構の築造によってなしくずし的に寺内町の領域が拡張されていた。惣構の構築がすなわち寺内町の拡大でもあったのである。惣構は決して固定された、動かないものではなく、まさに都市拡張の最前線に位置していたといえよう(2)。

ところで大坂寺内町の構(要害)というところ、それは外周をめぐる惣構だけに限らない(3)。たとえば史料Dには「法安寺北橋」がみえるが、これは法安寺を囲む堀にかけられた橋であろう。また「葬の奥、御堂門前にてかきすえたる」とて候へ共、(中略)番屋の前橋のへんにてかきすゑべきよし」(6・8・2)、(寝殿)(奥)、「震殿南之門ト橋ノ間ヨリコシニ乗候」(私23・8・22)などという記載からは、御坊の周りにも堀がめぐらされ、橋が架けられていた景観を想像することができる。さらに「生玉屋敷堀之普請、自今日始之」(13・4・8)と、生玉社も堀に囲まれて区画された空間であったことがわかる。このように大坂の内部でも御坊・法安寺など、権力の中核や半独立的な領域のまわりには堀がめぐらされ、内側に土塁を築く構が構築されていたらしい。

しかし防御施設としての構はそれだけにはとどまらなかった。

S 蓮如之時、当年五十六年二成候、其時六人二仰付之、町之番屋、(槽)やぐら、(塀)橋、(釘貫)屏、(釘貫)くぎぬき、(釘貫)為

此衆仕之、(21・2・25)

これは史料Oにつづく部分で、十六人番匠たちが自らの特権の由来を主張している。「橋」・「屏」・「くぎぬき」などを惣構に属するものと理解することも不可能ではないが、この相論では十六人番匠の町共同体に対する貢献度が問題となっており、これらの構築物は町管理下にある町の構とみた方がよからう。

町屋を画するように塀・釘貫がある情景から、私たちはただちに『洛中洛外図』に描かれた京都の姿を思い出す(4)。また最近の京都市内での発掘調査によって、戦国時代の洛中では上京・下京の惣構とは別に、無数の堀が町なかに縦横に掘り進められている様子が明らかにされてきた(5)。同様のことは堺でもいえる。戦国時代堺の北・東・南を画するいわば惣構の堀とは別に、町中にほとんど無秩序に多数の堀が掘られているのである(6)。

このようにみえてくると、戦国期畿内の都市では共通して、都市全域を囲う惣構とは別に、都市内部をさらに小さく区画する構（地上の土塁・釘貫と地中の堀）が発達していたことに気づかされる。恐らく大坂の場合も、そうした構が寺内町内に張りめぐらされていたのであろう。

最後に、もう一度惣構にもどって、惣構の「切れ目」、大坂寺内町と外部世界との接点にあたる門と港についてふれておく。

惣構の門の構造についてはもちろん詳細がわかるわけではない。しかし史料Bでみたように、森三ヶ庄方面に開く「東の門」は「くぐり木戸」をもつほど立派であった。またそれらの門には丈夫な鍵をかけることができたらしく、天文年間中頃までは、夜間はその鍵を本願寺が一元的に管理していた（7・4・25以下）。

戦国時代の一般的な港湾施設がどのようなものであったのか、現段階では絵画史料や発掘成果によっても十分に明らかにされているとはいえない。ただ、大坂の立地から考えて、北町にあった「寺内之浦」が決して貧弱なものではなかったことは容易に推測される。そこには「舟付」があり（20・4・6）、「唐船」の停泊を可能とするほどのものであった（10・10・1）のである。なお、「寺内之浦」には本

願寺所有の船も多数繫留されていたことだろう（5・8・9）。

b 番屋と櫓

大坂には二種類の番屋があった。一つは御坊内にあるもので、御坊で催される宗教行事の時間管理を行ったり（18・11・19）、御坊の門や倉の脇でその警備にあたったり（6・4・3、20・11・11）する施設である。

これらとは別に、ここでは「六町」のそれぞれに設置されていた「町之番屋」に注目する。

T 今朝六町の番屋／＼に札を打候、判者、上野計、其子細者、火付井盗人・博奕、此ヶ条也、其段於告知者、代物可遣之由也、（7・9・14）

都市領主本願寺による寺内町支配の高札が番屋の前に打たれたことを示す記事である。史料Sでみたように、これら「町之番屋」は十六人番衆らによって造られ、六町それぞれの核の位置を占めてい

たのである。

また大坂には各所に櫓が建てられていた。西町の櫓については史料P・Qで詳しくみたが、その他に新屋敷にも櫓があったことが確認される(私18・3・1)。おそらくこれらも、十六人番衆らの手によって各町に設置されていたのであろう。

櫓の主たる任務は大坂近郊の「遠見」を行うことで、西町・新屋敷の史料もそれにかかわる。永禄七年(一五六四)には、大坂を訪れた山科言継が櫓から川漁の様子を興味深く眺めている(7)。

こうした「町の櫓」とは別に、本願寺の有力な家臣(内衆)の宿所(私宅、後述)にも櫓が建てられており(15・8・5)、都市大坂は櫓が林立する景観を呈していたものと想像される。台風の大風で「寺中之櫓悉吹倒之、只五相残」(10・8・11)という記載からも、こうした推定が裏づけられる。なお、この記事からは、櫓がさほど丈夫な建造物でなかったこともしるることができる。

c. 宿所・道場

本願寺に仕える僧侶や俗人(内衆)などのうち、宗主証如に血縁の近い一家衆や下級の使用人などは御坊内に住居を与えられていた。しかし有力な僧侶や上級の内衆は御坊の外に、「宿所」とよばれる独自の屋敷を構えた。

宿所の存在が確認できるのは、一家衆では、興正寺(15・8・5など)、教行寺(11・4・29など)、恵光寺(11・10・25)⁽⁸⁾など、大坂近郊に寺院・門徒組織などをもつ有力なもの。また古くから大坂御坊をもち立ててきた「大坂六人坊主」と称する、定専坊(9・7・22など)、光徳寺(11・3・10)、浄照坊(15・3・16)、祐光寺(史料D)、浄恵(8・閏6・23など)などである。

大坂を訪れた京都の公家はしばしばこれら僧侶の宿所に宿泊しており(教行寺、11・4・29など)、これらが十分な荘厳・設備を有していたことが推測される。しかし宿所は単なる住居、宿泊施設ではなく、「御堂」や道場を備え(興正寺、15・8・5、私2・10・17)、それぞれが一個の寺院として完結した構造をもっていたものと思われる。なかでも定専坊の宿所は、御坊の傍らに位置し(5・5・6など)、道場・本尊(私永禄2・3・19)の他、座敷・客殿を有する立派なものであった(9・7・22など)⁽⁹⁾。

なおこの他では、九条西光寺(北町、8・間6・19)や興正寺端坊(13・間11・19)、須江光専寺(6・9・3)などが大坂に「家」・「宿」をもっていた。

本願寺の内衆のうち、最も有力であった下間氏の一部も宿所をもっていた。これは下間頼資(5・正・26など)、真慶(6・正・7など)、兵庫助(16・6・12など)、頼遠(15・8・5)などについて確認できる。これらの宿所も、主殿の他に「西座敷」を有し(真慶、8・間6・6)、数寄座敷を建て(兵庫助、15・3・21)、「屋敷之櫓」を備える(頼遠、15・8・5)など、独立した屋敷構えを誇っていた。

また本願寺に仕える綱所衆(藤井、5・5・2)、中居衆(井上又七、11・12・20)、中間(23・正・7)のなかには、御坊の外に私宅を構えるものもいた。

これらの宿所・家が御坊の外、寺内町のどのあたりにあったかはほとんどわからない。定専坊など一部は御坊に隣接していたようだが、他はある程度散在していたものと思われる。

さて、僧侶の宿所を別にとすると、大坂寺内町において、信仰の核たるべき道場としては、意外にも「北町惣道場」を確認するのみである。

これは別名「日本一鼻之道場」(5・6・15)とよばれるもので、上町台地の最突端部付近にあったと推定される。九条植通が大坂に滞在している期間は、その宿所として本願寺に召し上げられた(5・12・13)が、基本的には北町の共同体の施設であった。公家の宿所に宛てることのできるほどの規模をもち、天文十六年、証如が招待されて訪れた際には、「年寄分廿余人」をはじめ、「町衆男女」多数がこいで証如を出迎えた(16・8・10)。

d 町屋

寺内町の大部分が都市民の居住する町屋であったことは言をまたない。しかし都市領主の日記のみしか残らないという制約上、大坂寺内町においてはそうした町屋の具体像、町並みのあり方などについては多くを不明とせざるをえない。

U (前略)其以後、又源六処へ差懸候処に、町人の宿へ片衣一ツにて走入、二階へあがりて居たる間、
(村瀬勘八など)
(越) 其宿へ是の衆行、二階ニ麦をかりて置たる中ニかゞミ居たる処ヲ、清水、麦共入のけて彼源六居
(突) たる処を麦こしニ二刀つき、則生滅也、(5・5・2)

これは御坊で、相論に対する本願寺の裁定を批判する「悪言」を吐いた源六などを、本願寺の被官らが成敗したときの様子を活写した記事である。源六が逃げ込んだ「町人の宿」には二階があり、そこには刈られた麦が置かれていたことがわかる。当時、京都においてもそれほど一般的ではなかった二階屋がすでに大坂でみられるのである。

(娘)

(婿)

Ⅴ (前略)又四郎ハ衛門四郎むすめと夫婦二なり、むこなり、(中略)此儀ハ、先年、衛門四郎冠落大事に煩候時、衛門四郎申事ニハ、又四郎事、むすめと於無別儀者、又四郎二跡を可讓候、むすめ相のき候やうなる事候ハ、不可有其儀と申讓状出候て、又四郎夫婦ハはや本の屋ニをき候へ共、冠落取なをし候間、又四郎夫婦をハ奥二座敷をつくり置、また衛門四郎ハ本家候つる処に、去年六月廿日ニ衛門四郎打死候事候、又四郎ニ讓候段無紛候よし、又四郎申候、(後略)(5・4・26)

これは史料Ⅱの惨劇の前提となった相論に関する記事である。重病に陥った衛門四郎が、娘と「無別儀」ことを条件に婿又四郎に一旦、「本の屋」を讓ったが、病状が回復したため衛門四郎は、又四

郎夫婦のために敷地の奥に座敷を造ってやり、自らは「本家」に復帰した、という。

当該期の都市民衆の家族がどのような居住形態をとっていたかは、京都や堺でさえほとんどわからない。そうした意味で、この史料はきわめて興味深い示唆を与えてくれる。

最近の都市考古学の成果によると、間口が狭く奥行が長い一般的な町屋においては、時代の変遷にともない、はじめはゴミ捨て場などとして利用されていた裏の空閑地に新屋が建てられ、都市全体として稠密化が進むことが指摘されている(10)。洛中洛外図においても、その製作年代の推移に伴い、共同施設(井戸・便所など)のための場であった町ウラが、オモテの町屋個々に分割され、蔵などが建て込んでゆく。戦国・織豊期の畿内都市の多くに共通するこうした現象の原因の一つを、この史料は物語っているといえよう。

この他、当然のことではあるが、寺内町民のすべてが家持ちであったわけではなく、借屋もあったことがしられる(6・6・25など)。

(1) 「カマエ(構へ)……囲い、防壁、または、設備。」(『日葡辞書』)。

(2) 大坂の東南方、森三ヶ庄方面では、このなしくずし的な寺内町拡大を確定する手段として、本願寺による土地買得が行われていたことはすでにみた(6・3・24、8・12・24、史料C)。

(3) 但し、『天文日記』の本文中で「構」という時は必ず惣構である。

(4) 高橋康夫「応仁の乱と都市空間の変容」(『京都中世都市史研究』、思文閣出版、一九八三年)など。

(5) 堀内明博「戦国期の京都」(『清須』研究報告編、一九八九年、東海埋蔵文化財研究会)など参照。その後も陸続と戦国期の堀は発掘されつつある。

(6) 續伸一郎「中世都市堺の都市景観」(同右)など。

(7) 『言継卿記』永禄七年七月二十七日条。

(8) 但し、恵光寺は一家衆の僧が入寺する以前から大坂に宿所を有していた(6・6・3)。

(9) この他、浄照坊には「数寄座敷」があった(15・3・16)。

(10) 續伸一郎「『中世都市堺』の成立と展開」(シンポジウム「中世都市の成立と展開」基調報告、

一九九二年、鎌倉市)など。

おわりに

はじめに述べたように、本節の目的の第一は、今や通説の地位を得たかにみえる伊藤毅氏の大坂寺内町復元図(図II-5)の誤りを正すことにあった。その結果、御坊・寺内六町・法安寺などは図II-8のような配置であることがわかった。また第3項では、戦国期大坂寺内町の立体的な都市景観を可能な限り復元してみた。

こうした基礎的な研究をもとに、第2節以下では、大坂寺内町をとりまく社会的な関係の分析を進めてゆきたい。

第2節 大坂寺内町の空間構造

はじめに

第1節では、天文年間の大坂寺内町において、御坊、寺内六町、法安寺などが、図Ⅱ-8のように展開していたことを明らかにした。

しかし都市が形成する空間構造は、都市内部のみならず、その周辺の空間まで説明してはじめて全体像を明らかにしえる。しかもこうした都市内・外の空間構造はお互いに密接な関連を有していたはずである。また、都市空間の構造は決して固定的なものではなく、時代の推移にともない当然、その様体を変えてゆくはずである。

ところで、序論でみたように、近年の織豊期城下町論や建築史学の自治都市論は、都市構造は領主権力が「上から」一方的に形成するかのごとく理解している。こうした視角の是非を問うことも本節の課題としておく。

本節では、大坂寺内町内外の空間構造を、その形成主体、時期的変遷に注目しながら検討してゆく。その際、建築史学などが対象としてきた物理的な空間構造のみならず、都市が成立するための社会的基盤となっている交通路、周辺田畠などについても考察にふくめることとする。

1 法安寺と生玉社

a. 法安寺の寺内町化

法安寺が天文初年以來、空間的には大坂寺内町南東にふくみ込まれ、寺内町内の一角を占めていたことはすでに第1節で詳しくのべた。ここでは、本来独立した空間であったはずの法安寺(境内)がど

のような過程をへて社会的にも寺内町に組み込まれてゆくかを追ってみたい。

第1節でみたように、法安寺は、相国寺鹿苑院の所領で、大坂南東にあった森三ヶ庄の政所的な機能をはたしていた。同寺がこのような地位にあったため、天文初年においては、本願寺は同寺に対する直接的な介入を行えなかった。法安寺が土塁を崩して道をつくったり、寺中に「人の見知ざる仁体共」がいても、本願寺としては番衆に警戒を命じるより他になかった(6・1・21)。法安寺は、空間的には大坂寺内町内にふくまれていたが、法制的には独立の領域を形成しており、治外法権だったのである。

このことは防衛面からいっても、本願寺にとって危険であった。天文一揆蜂起の時には、大坂を攻撃した細川方・法華衆勢は、「大坂殿のどいへつき、保安寺の南」より攻めかけ、「保安寺のまへのへい十三間をきる」までにいたったため、大坂は落城の危機に陥った(1)。東・北・西の三方を断崖と川や低湿地で守られる天然の要害Ⅱ大坂にとって、台地つづきの南側は防衛上のアキレス腱であった。その南東の重要地点を占める法安寺が支配下に組み込めていないことは、寺内町全体の軍事的な完結性からも問題であったのである。

そこで本願寺は、法安寺を実質的にも寺内町に組み込むための工作を開始した。天文六年(一五三七)の春から冬にかけ、本願寺は、幕府の有力者で本願寺とも親密な木沢長政などを介し、法安寺の買得を策した(6・3・26、6・5・19など)。ところが結局、この売買交渉はうまくゆかず、翌七年、本願寺と相国寺鹿苑院の間で賃貸契約が成立したのである。

賃貸の条件は、①法安寺寺内は鹿苑院が希望したならいつでも返却する。②堂塔・伽藍・塔頭などには手を加えない。③現存の要害の他、寺領などには手出ししない。④衆僧などの人事には介入しない。⑤地子銭として毎年十貫文を納める、というものであった。貸与の理由は「就乱世、為要害」であるという(2)。

このように当初の賃貸条件は本願寺にとって決して満足できるものではなかった。しかし一旦、寺内町に組み込まれてしまうと、法安寺の独立性がなしくずしにされてゆくのは時間の問題であった。早くも翌天文八年、本願寺から鹿苑院へ宛てた書状には、「法安寺内民家等事、可罷退之旨、可被申付之由、度々寺僧へ雖相届候、及異儀之間、唯今急度申付候」とある。他史料も参照すれば、本願寺が法安寺の寺僧や「百姓」の抵抗を押し切って、民家(行者家)の撤去を強行しようとしていること

がしられる(3)。

天文十年正月には、法安寺寺家の使いが本願寺を訪れ、「境内二住居事候間」、年始の礼物を「自当年、毎年可出之由」を申し述べた(10・1・17)。これは、法安寺が大坂寺内町(「境内」)に組み込まれたことを認めたもので、実際、この後、法安寺は年頭の礼を欠かさなかった(11・1・9、12・1・8など)。さらに、財政が逼迫してきた鹿苑院にとって法安寺の地子銭十貫文は大きな魅力となったようで、年末を待たず、鹿苑院が本願寺にその早期納入を懇願することもしばしばであった(10・9・3、12・7・11など)。

こうして本願寺と鹿苑院・法安寺の力関係はいつしか逆転してゆく。ただ、この後は、法安寺について『天文日記』などの記事も少なくなり、詳細は不明である(4)。

以上、本来、独立した空間であった法安寺を、本願寺が大坂寺内町に取り込み、その一部と化していく経過を追ってきた。天文年間以前、法安寺は森三ヶ庄の政所として、また生玉社の神宮寺として当地域の政治・信仰の中心であり、大坂御坊・寺内町とは隣接するものの別個の空間を形成していた。ところが天文一向一揆の過程で寺内町が防備をかため、惣構を拡張・整備する中で、空間的に寺内町

に組み込まれたのであろう。その後、本願寺は買得(実現せず)、賃貸などの方法で法安寺への介入をはかり、天文十年代後半には法制的にも事実上、法安寺の寺内町化を完成させていたと考えられる。

こうして本願寺は積極的な政策によって法安寺を吸収、一元化することに成功していったのである

(5)。

b. 生玉社と本願寺

大坂寺内町がかかえ込んだ異質な空間としてはいま一つ、生玉(生国魂)社をあげることができる。

生玉社は古代以来つづく神社であったが、これも法安寺と同じく、天文初年以後は大坂に組み込まれていたらしい。「生玉者、少島を平地直之、土井少築之」といった改変を加えられたり(12・12・1

5)、「生玉屋敷堀之普請、自今日始之」と本願寺による普請が行われたりしている(13・4・8)。

元来この地域の鎮守であった生玉社は、大坂寺内町民の信仰も集めていた。天文十五年の遷宮の際には、「六町衆、能二番充、合十二番有之、見物数万人^{云々}」という盛況ぶりであった(15・6・7)。

この遷宮をとりはからったのが本願寺であった。本願寺は遷宮のための「柱立」を行い(私15・5・

(京都)

21)、「吉田方者也 神官 兩人召下、致其調」させた(15・6・5)。永禄十年にも、本願寺が費用負担して、

生玉社の遷宮行事を注意深く執行していることが吉田家の記録からうかがわれる(6)。

このように本願寺が生玉社の整備を怠らなかつたのは、都市民の信仰上の結集核である同社を整備することによって、領主支配の正当性を確保せんと欲したからであろう(7)。ここでは本願寺は、一向宗の宗主としてより、大坂寺内町の都市領主としての相貌をより鮮明にしているのである。

天文初年段階では独立し、異質な空間を形成していた法安寺・生玉社を、本願寺はやがて大坂寺内町に組み込んでいった。武力によって強制的に吸収するのではなく、貨貨を契機に既成事実を積み上げていったり、遷宮の環境整備を行うなど、きわめて慎重に、しかし積極的な政策によって一元化を進めている。しかもその際、一向宗宗主の立場を二の次にして、寺内町における他宗寺院の存続を許し、寺内町民の信仰を集める神社をもり立てるなど、都市領主としての本願寺の地位を高める政策が採用されている点、注意しておきたい。

(1) 『本福寺明宗跡書』(前掲第1節第1項注(7))。

(2)

預里 中、志宜森内法安寺分事

一彼寺内被預置之上者、雖為何時、可任寺命事

一堂塔并伽藍、現在之坊中・同勤行等、不可有異儀事

一只今要害之外并御寺領・同坊領已下、不可致競望事

一衆僧已下、為寺命可為御進退事

一地子錢、毎年無懈怠拾貫文、可寺納申之、若於難渋者、即可有御改易事

右条々、申定上者、雖為一事、不可有相違、仍為後証請文狀如件、

定專坊

戊戌 天文七年十一月三日

正博

下間上野法橋

運秀

鹿苑院
納所禪師

院主 在判

預ケ申、志宜森内法安寺分事、就乱世、為要害預ケ可申之由懇望之条、申合候、然間、地子
錢毎年拾貫文宛、無懈怠可有納所、万一於難渋者可改易申者也、仍狀如件、

天文七年 戊戌 十一月三日

納所瑞伯 在判

侍真梵照 在判

侍衣芳桂 在判

下間上州法橋御房

(『鹿苑日録』天文七年十一月十一日条所収「定専坊正博・下間連秀連署法安寺
預かり状案」「鹿苑院主袖判法安寺預け状案」)

(7・11・14)参照。

(3) 『鹿苑日録』天文八年八月二十七日条。その他、同年三月八日、九月七日条など。

(4) 岡本良一氏は、永禄七年(一五六四)、法安寺の失火によって大坂が大火にみまわれた責任をと

らされ、法安寺は寺内町を追放されたとしている(前掲論文注はじめに(5))。しかし、こうした
事実史料上、確認できない。

(5) 天文初年以前においては、森三ヶ庄の「麦之所務」は、祐光寺に納められていた。ところが、
天文五年以降、証如は、祐光寺も大坂寺内町にふくまれることを理由にこれを拒絶している(5・
6・3)。このことから考えれば、大坂寺内町が法安寺という異質な空間を積極的に解消しなけれ
ばならなかったのは、そこが一般の寺内町とは違って、宗主の居住する、全国の本山となったこ
とにも理由があったといえよう。

(6) 『兼右卿記』永禄十年二月三日・四月二十八日条。

(7) 天文十五年には、遷宮の二日後、六町衆がわざわざ証如のために、御坊内で「生玉遷宮之能」
を再現して見せている(15・6・9)。

2 寺内六町の構成

寺内六町はそれぞれ空間的な町域を形成するとともに、宿老・若衆からなる自治組織をもつ共同体でもあった(1)。

都市領主本願寺と六町が対峙する公式の、最も儀礼的な場は、毎年正月元旦、六町の老若が本願寺宗主(証如)の所へ新年の挨拶にまかり出る時である。この時、本願寺は六町を横並びに平等にあつかっている(2)。

こうした史料の影響からか従来は、六町はいずれも均質的なものであると考えられ、それぞれの「個性」を検討することはなかった。また大坂寺内町においては、六町は御坊建設当時からとの所与の前提であり、その形成過程を考察しようとする試みは省みられえしなかった。

しかし、本願寺がいつも六町を横並びに認識していたわけではない。天文十七年、御坊御影堂の基礎工事に際し、各町が拠出させられた「町之役」の比率は、新屋敷・西町・北町屋・南町・清水町

3・2・1・1・1であった(17・8・2)(3)。また六町対抗の綱引き行事に際しては、新屋敷は「他町三程有之」とされている(20・正・15)。これらは各町の規模(人口)を前提にした数字であり、町との人口の相違を本願寺も認識していたことを示す。

大坂寺内町には六町以外にもその名を伝える小町がある。横町が北町に所属することはすでに伊藤穀氏が明らかにしている(4)。また、「北町喧嘩アリ、中丁ヲ焼也」という記事(私4・5・26)から、中町も北町に属することがわかる(5)。檜物屋町はしばしば「新屋敷檜物屋町」と記され(私4・5・21など)、新屋敷にふくまれる。しかし同町は新屋敷と並列的に示される場合もあり(16・3・8)、ある程度独立した町でもあったようである。この他、大坂には青屋(あをや)町があって新屋敷に属したと推定される(6)。

このように、判明する限り北町や新屋敷には一、二町の小町がふくまれていたことがわかる。これらは本願寺に直接把握される「六町」よりレベルが下の町と考えられ、親町に対する枝町、あるいは町組に対する個別町のような存在であろう。もちろん、たまたま史料に登場した以上の四町がすべてではなからうが、北町や新屋敷にこうした町が集中していることに注目しておきたい。

表II-7 大坂寺内町民一覽

年 月 日	町 名	氏 名	出身地・坊主	備 考
天文 5. 1. 2	南町屋	与四郎		茶屋
4. 26	種物屋町	又四郎		又四郎
	北町屋	与三郎		又四郎
5. 2	種物屋町	又四郎		光永寺(平野)
	(北町屋)	与三郎		光永寺(平野)
8. 27		左衛門		仏照寺(薄枕)、了賢(三番)
6. 1. 17	南町屋	(不詳)		了賢の子共
18		今井四郎兵衛		了賢の子共
2. 13	新屋敷	結屋(後家)		了賢の子共
19	南町屋	木村太郎左衛門	木村(摂津東成)?	了賢の子共
4. 15	北町屋	深江明道	深江(摂津東成)	了賢の子共
5. 29		木村藤右衛門	大坂六人衆、 仏照寺(摂津島下・薄枕)	了賢の子共
6. 25	新屋敷	木津屋専千世	木津(摂津西成)	了賢の子共
7. 25		田辺屋勘解由	田辺(摂津西成)	了賢の子共
8. 28	?	種屋		了賢の子共
9. 12	新屋敷	種屋包安	種屋(摂津東成)	了賢の子共
12. 21		北村		了賢の子共
8. 1. 12	北町	太郎左衛門		了賢の子共
4. 5	北町	明西		了賢の子共
		池島藤左衛門	池島(河内河内)	了賢の子共
18	?	木津屋了宗	木津(摂津西成)、 慈光寺(東)	了賢の子共
25	?	種屋包安	種屋、 慈光寺(河内河内・久宝寺)	了賢の子共
8. 5	南町屋	御前屋次郎左衛門	御前(河内河内)?	了賢の子共
9. 8. 5	?	平野宗次郎子	平野(摂津住吉)、 慈光寺(河内河内・宣徳)	了賢の子共
10. 1. 22	北町	明西		了賢の子共
5. 24	?	菊屋之宗左衛門		了賢の子共
6. 3		興神軒弟子同せう 円屋		了賢の子共
10		木村藤右衛門兄弟 三人	仏照寺(薄枕)、 明照寺(?), 大坂五人衆	了賢の子共
11. 2. 6		木村了尊	大坂五人坊主、 仏照寺(薄枕)	了賢の子共

項のもの。「?」は大坂寺内町民かどうか確定できないもの。
づく推定。「国名・郡名」を記載。

b. 六町の形成と展開

表II-7は、『天文日記』にあらわれる大坂寺内町民をまとめたものである。これらの町民も、偶然記録にとどめられた者であるが、この表から全体的な傾向をよみとることは誤りではなからう。町民のうち居住の町名がわかる者に注目すれば、清水町は皆無、西町が一例だけであり、圧倒的 대부분が北町・北町屋、南町屋、新屋敷である。これら四町に、相対的に多数の町民が暮らしていたことを示そう。

以上、必ずしもすべての事例を適合的に説明できるわけではないが、六町のうちでも北町・北町屋や新屋敷が比較的有力な町であるのに対し、清水町はさほど史料にあらわれない、小規模な町であることが理解される。そして、ひとくくりに「六町」とよばれ、本願寺との儀礼的な関係では横並びの町々が、町民数や付属する小町など、実はそれぞれ違う「個性」をもった存在であることがわかるのである。

表Ⅱ-7 大坂寺内町民一覧 (『天文日記』による)

平 月 日	町 名	氏 名	出身地・坊主	備 考
天文 5. 1. 2	南町屋	与四郎		茶亮亮
4. 26	榎物屋町	又四郎		又四郎の鼻
	北町屋	与三郎		南町屋の弟
	北町屋	源六		〃
5. 2	榎物屋町	又四郎		
	(北町屋)	与三郎		
	(〃)	源六		
8. 27		左衛門		
		珍阿弥		
6. 1. 17	南町屋	(不詳)		茶亮亮
18		今井四郎兵衛		
2. 13	新屋敷	結屋後家		
19	南町屋	木村太郎左衛門	木村(摂津東成)?	
4. 15	北町屋	深江明道	深江(摂津東成)	
5. 29		木村藤右衛門	大坂六人衆、 仏照寺(摂津島下・薄杭)	藤右衛門の子
		木村善左衛門		
6. 25	新屋敷	木津屋専千世	木津(摂津西成)	
7. 25		田辺屋勘解由	田辺(摂津百済)	
8. 28	?	養師屋		
9. 12	新屋敷	横並包安	横並(摂津東成)	土地を与えられる
12. 21		北村		医師
8. 1. 12	北町	太郎衛門		
4. 5	北町	明西		明西代
		池島孫左衛門	池島(河内河内)	
18	?	木津屋了宗	木津(摂津西成)、 慈光寺(堺)	
25	?	横並包安	横並、 慈光寺(河内赤川・久宝寺)	
8. 5	南町屋	御厨屋次郎左衛門	御厨(河内若江)?	
9. 8. 5	?	平野宗次郎子	平野(摂津住吉)、 慈光寺(河内若江・萱振)	
10. 1. 22	北町	明西		
5. 24	?	菊屋之宗左衛門		
6. 3		興福軒弟子岡せう 円屋		証如の円屋を与える
10		木村藤右衛門兄弟 三人	仏照寺(薄杭)、 明照寺(?), 大坂五人衆	
11. 2. 6		木村了尊	大坂五人坊主、 仏照寺(薄杭)	

間3. 9		木村藤右衛門		
9. 26	?	もちや新左衛門		
10. 13	新屋敷	五郎兵衛	光徳寺(大坂)東賢、 安満(摂津島上)津敷	
11. 7	北町	明西後家		
12. 1. 7	南町屋	木村了尊		
3. 26		木村藤右衛門		
6. 8	西町	正善	光永寺(摂津住吉・平野)	
28		木村与三子		与三は藤右衛門の三男
8. 5	?	御厨次郎三郎	御厨(河内若江)?	二郎左衛門の子
10. 25	新屋敷	住吉屋	住吉(摂津住吉)	京一衆殿の旅館
12. 26	?	腹巻屋		島が法安寺の良下にある
13. 2. 29		山口屋		
4. 6		木村藤右衛門		
9	?	菊屋宗左衛門		
12	?	木津屋善四郎	木津教羅	
5. 12	?	奈良了尊	奈良(大和添上)	
		もちや新左衛門		
8. 22		新五郎		
10. 7		木村藤右衛門		
15. 2. 25		荒川屋四郎衛門	荒川(河内赤川)、 八尾(河内若江)明照、 興正寺(大坂)	
3. 29		木村藤右衛門		
4. 7	?	平野屋空了	平野、光永寺(平野)	
22		木村藤右衛門	津専(仏照寺伯父)	
5. 9	新屋敷	与三左衛門	真宗寺(堺)	高三代官
8. 4	榎物屋町	五郎兵衛娘	津敷(安満)	六人兄の菩提供養
9. 5		坂東屋宗二郎	慈光寺(平野)	
10. 9	南町屋	屋敷外七		
16. 3. 8	北町屋	与三左衛門	慈光寺(久宝寺)	
	〃	二郎兵衛	興正寺	
	〃	又左衛門	津敷(安満)	
	榎物屋町	六郎二郎	出口(光善寺)	
	新屋敷	又三郎	興正寺	
	〃	宗二郎		
	北町屋	徳師屋八郎衛門	今小路(?)	
4. 4		木村藤右衛門		
5. 23		木村藤右衛門	光徳寺(大坂)、光永寺(平 野)、正教(森)、津専(薄杭)	親善五郎の追善供養
		・孫次郎・龜松		
17. 3. 6	?	中嶋吉宗	中島(摂津西成)、 定専坊(摂津西成・三番)	

6. 10	?	桑屋藤左衛門		
12. 4	?	仙屋新左衛門		
18. 3. 4	?	荒川屋藤左衛門	荒川(河内赤川)、 明照(八尾)	
26		木村藤右衛門		
5. 5		正善	光永寺(平野)	
20. 2. 12	?	八文字屋		
5. 10		木村藤右衛門	仏照寺(薄杭)、了賢(三番)	
12. 14	(南町屋)	木村了尊、 孫左衛門・宗左衛 門・孫六入道・孫 太郎		了尊の子共
21. 10. 18	?	御厨二郎左衛門、 〃 次郎三郎兄弟	御厨(河内若江)?	
	?	吉田五郎兵衛	吉田(河内河内)?	
	?	園分屋喜三郎	園分(摂津東成)?	
11. 5	(北町)	深江明西	深江(摂津東成)	
	?	池嶋孫左衛門	池嶋(河内河内)?	
22. 間1. 14	?	若江や藤右衛門	若江(河内河内)、 津敷(安満)	
3. 2	北町	八郎衛門		定善の子、親類も寺内居住、 元は日向国住人
5. 26		西了		
23. 3. 16	北町屋	さい八の八郎衛門		八郎衛門の弟
	?	善四郎		
5. 7		木村屋藤右衛門	津専(薄杭仏照寺)、 了賢(三番)	
7. 23	?	油屋津円		津円の子

※ 町名欄について、無記入は居住町名不明のもの。「?」は大坂寺内町民かどうか確定できないもの。
※ 出身地はすべて、姓・屋号などにもとづく推定。「国名・郡名」を記載。

では、このような町々の「個性」はどのようにして形づくられてきたのであろうか。

六町の形成過程について具体的に追究することはかなりの困難をとまなう。なぜなら、本願寺が大坂に移転し、『天文日記』、『私心記』など、寺内町に関する詳細な史料が現れる天文初年にはすでに六町体制が確立していたからである。

六町のうち新屋敷については、その名称からして新規に開発された町であることがわかる。こうした開発がどのような権限にもとづいて行われたかは不明だが、本願寺による土地取得^(ベツ)、町割^(ヘリ)などが前提であったと考えると誤りはあるまい。

ところがこの新屋敷が、六町の中でも規模の大きい町と想定されることは先に述べた。

(居)

(鹿苑院)

寺内新屋敷北土井之用ニ、其辺之畠田等土取之間、地荒畢、其年貢為領主催促之間、為彼町、此方へ申事ニハ、地子銭出候てと申候、^(マツ)承申候返事ニハ、此段以前ニ無其理候、殊他町などにも堀^(堀)縁をかき候へ共、不及其儀条、無覚悟之通、申出之處、不申案内段誤存候由、強而雖度々申、無

謂之旨仰出訖、然当年、自山中藏人申入趣者、雖無等閑、かやうの儀さへ難渋候、無曲候、然者、於大沢橋所質可取之候由申候通、自町人申候間、米五石七斗一升八合壹勺代壹貫參百文申付遣候、

使者左衛門大夫也、(8・4・29)

新屋敷が惣構構築のため、その外側に広がる志宜庄の田畠を荒していた事実を示す史料である。鹿苑院や山中蔵人の抗議をうけているのはあくまで新屋敷町人であり、惣構の修築がかなりの程度、新屋敷の主体性のもとに行われていたことがわかる。そして新屋敷からの度重なる要請をうけ、また山中蔵人による所質奪取をさける意味からも、本願寺は地子銭を支払うことにしたのである(9)。

『鹿苑日録』には、「志宜庄之内、大坂外城（マヤノ）仁（に）構之儀」という史料もあり(10)、新屋敷が「大坂外城」と認識されるような存在であったことが理解される。

この他、新屋敷は森三ヶ庄方面にも進出しており(6・3・24-26)、天文年間も次々と拡張をつづける、最も発展性の高い町といえよう。これは、第1節で少しふれたように、新屋敷が北河内・京都方面を結ぶ主要陸路に接続したことに起因すると思われる。

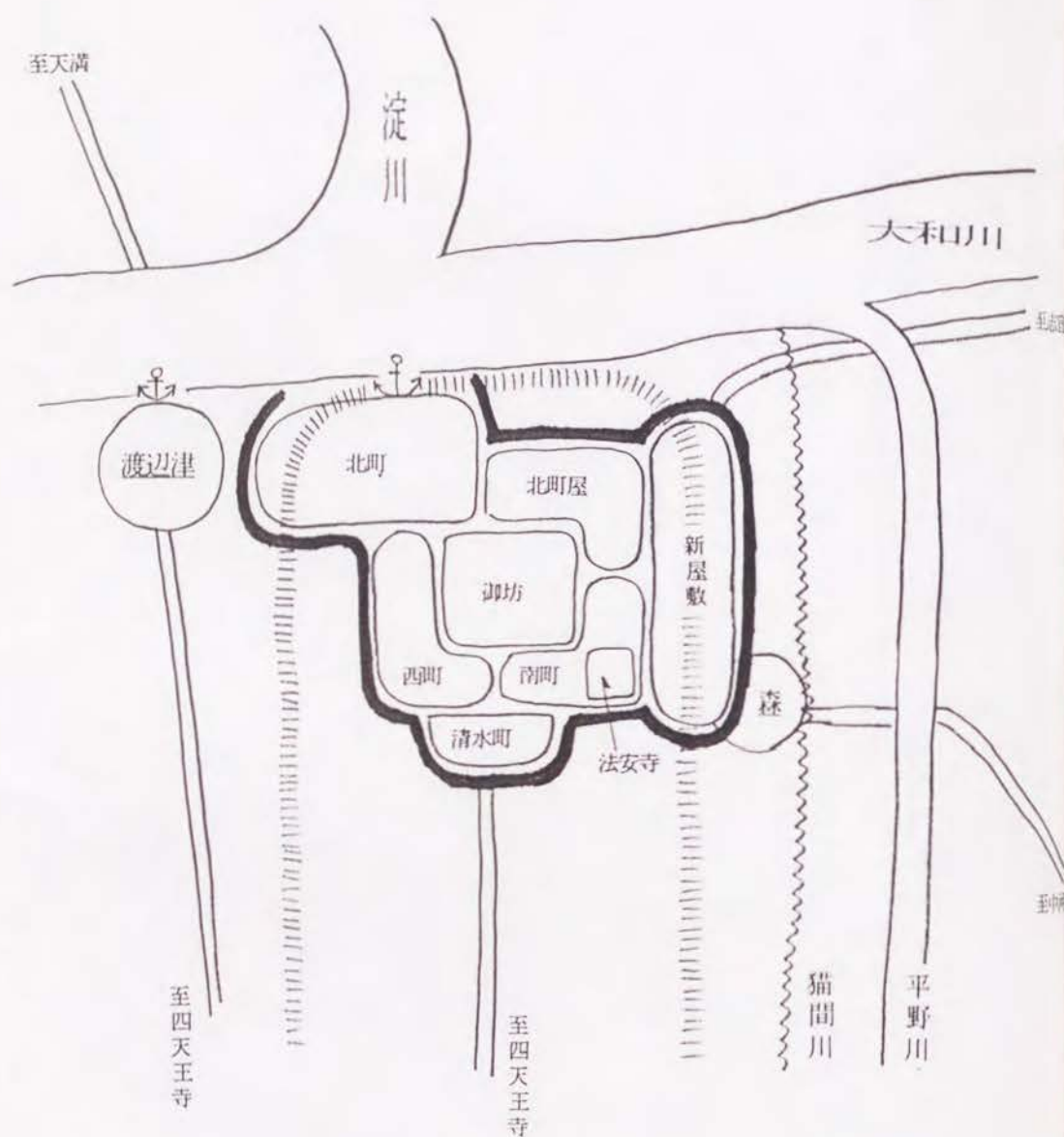
新屋敷とともに、その町名に方位をふくまないのが清水町である。同町も新屋敷と同様、新しく形成された町ではないかとの推測をさせる。実際、これも第1節でみたように、清水町は大坂から天王

寺方面への出入口にあたり、新屋敷と同じく発展の可能性を有していた。しかしaで示したように、同町は比較的小規模な町であったようである。町の開発がまだ新しく、町民も十分集まっていなかったであろうか。

こうした意味からいえば、渡辺津に近く、また「寺内之浦」をかかえて瀬戸内・淀川航路に接続している北町・北町屋も急速に発展していったはずである。北町に小町が二町以上ふくまれているのもそうした理由による。北町と北町屋はしばしば混同されており、伊藤氏が指摘しているように本来、両町は同一の町であったのだろう。しかし、町の発展にともなって町域・人口が拡大し、一町としての適正規模を越えたがために、北町と北町屋に分割したのではなかろうか。

南町が中河内方面への街道との接点に位置していたことも第1節でみた。その意味で同町が拡大する要素はあった。しかし同方面への出口にあたる森集落近辺が新屋敷にふくまれるなら(11)、その発展性は閉ざされていたといえるかもしれない。

残る西町については詳細は不明である。同町はaでみた史料で二町分の「町之役」を納めているが、上町台地西側の断崖に面し、展開の方向性をそれほどもっていなかったのではなかろうか。



図II-9 大坂寺内町とその周辺

これまでの考察を前提とするならば、六町の展開過程は以下のように想定できる。

大坂寺内町が成立した時は、北町・西町・南町の三町のみであった。このことは、三町の町名がいずれも方位をふくむ、単純なものであることから推測される。渡辺津に近いとはいえ、寺内町の領域は基本的に上町台地上に限られ、法安寺にも相接するだけであつたろう。

やがて大坂が都市として発展してゆくと、渡辺津に向かって拡大した北町が北町屋と分割され、「寺内之浦」も整備されてゆく。天王寺方面では清水町が新たに台地上に形成され、さらに台地北東部では、京都方面への交通増大をうけて新屋敷が営まれた。こうして形作られた六つの町がいつの段階かに「寺内六町」として整理され、天文初年を迎えたのであろう。そして天文一揆前後には、法安寺が南町に包摂されるかたちで寺内町内に組み込まれたのである。

ところが天文年間に入っても新屋敷では一層町域が広がり、惣構が周辺の田畠を侵食して拡張されていった。おそらく北町などでも事情は同じであつたろう。こうして大坂寺内町の六町は、固有の発展経過、段階を示しながらも、外部との交通に便宜がある地域を中心に、継続的に発展していったのである(図II-9)。

こうした都市の空間構造の形成・発展に際し、都市領主本願寺がその条件整備につとめたことは想像にかたくない。寺内町外の領主から土地を購入・賃借し、町割を施す。紛争が発生した際には外部の領主・権力と交渉するなどしている。しかしその前提として、惣構の拡大を進めた新屋敷に代表される寺内町民の動向を見落としてはならない。新屋敷の例ほど直截的ではないとしても北町や清水町など、外部との交通の便がある地域を中心に町域が発展するという事実は、こうした都市拡大が都市民の志向の表現であることを明確に示しているといえるのである。

(1) 第3節第1項参照。

(2) この他、仏事の際に、「町衆廿六人自一町六人ツ、」が呼ばれている例がある(22・12・17)。

(3) 北町の町衆は別の現場で使役されており、他五町との比較はできない。

(4) 伊藤前掲論文注はじめに(5)。以下、本項で伊藤氏の説といえば、特に断わらない限り、同論文をさす。

(5) 伊藤氏は中町が西町にふくまれるとする。その根拠は、①久宝寺や貝塚寺内町の「中之町」は

御坊の前面であるが、氏の復元では大坂御坊の前面(東側)が西町であること。②先にみた「町之役」の比率で西町が南町などの二倍であること(17・8・2)である。

しかし、第1節でみたように、西町は御坊の裏手(西側)にあたり、①は成り立たない。②に関しては、西町が二倍の「町之役」を負担していたからといって、たまたま名前の判明する中町がふくまれていた証拠にはならない。氏の説は説得的な根拠をもっておらず、「私心記」を素直に読む限り、中町は北町に所属していたと考えるのが妥当であろう。

(6) 青屋町の古比丘尼庵を購入した本願寺が毎年、「森のなにとやらん申者」に本役を支払う契約をしている(5・12・28)。伊藤氏は、①のちの大坂城北東の青屋口がこの青屋町を踏襲したものであると推定されること、②青屋とは染物業者あるいは青果業者であり、水辺に近いところか、流通に便利なところであったはずであることを理由に、青屋町は寺内町北東の淀川沿いで、新屋敷に属するとしている。

しかし、①本願寺・寺内町を否定したはずの大坂城が、寺内町時代の地名をそのまま採用するとは考えにくいこと、②水辺、流通の便だけからでは寺内町北西部の可能性もあり、北東部と特

定できないことから、氏の理由づけは採用しがたい。

森の住民に本役徴収権があったことから、青屋町は森からそう遠くない場所に求められる。森に近接するのは、南町と新屋敷であるが、後述するように南町は寺内町成立時からの古町であり、本願寺の土地所有権が確立していなかったとは考えにくいことから、森に近い新屋敷南部と考えるのが妥当であろう。

(7) 注(6)で推定したように、青屋町が新屋敷にふくまれるとすれば、古比丘尼庵の土地を本願寺が購入し、またその本役を本願寺が支払わねばならない理由の一端も推定できる。新屋敷は六町の中でもっとも遅く寺内町に組み込まれたため、本願寺の土地支配権も完全なものでなく、本所が寺内町外に存在する土地がまだたくさん残されていたのであろう(第3節第2項参照)。

(8) 本願寺が大坂近郊の有力門徒兄弟に「新屋敷西地面、奥へ十間ツ、百坪」を賦与した事例がしられる(6・9・12)。「天文日記」中、本願寺が寺内町内の土地を配分したことを示すのはこの一例だけであるが、本願寺による新規開発地という新屋敷の性格にかかわるのかもしれない。

(9) この史料から今井修平氏(前掲論文注序節(1))や伊藤氏は、地子銭を領主Ⅱ山中藏人に支払っ

(居)

たと理解している。しかし志宜庄について「新堀二成分 井 其土井につき候土取、其田地荒」と抗議していたのは鹿苑院であり(7・9・5)、ここでは領主Ⅱ鹿苑院から要請を受けた山中藏人が守護権力として強制執行を示唆したもので、地子銭は鹿苑院に納めたと考えられる。

(10) 天文六年七月晦日条。

(11) 法安寺の北、祐光寺付近でおこった紛争に際し、南町の老若衆が制止に出動していることから(20・12・14)、法安寺の北側が南町にふくまれている可能性が高い。一方、先にもふれたが、新屋敷の町民が森の田畠を堀にしていること(6・3・24-26)から、新屋敷が森近辺までおよんでいたことも確かである。

天文八年、本願寺は、法安寺の東堀から森の惣社付近までを買得している(8・12・24・25)。ここで獲得された土地が新屋敷・南町のいずれに所屬させられたかは不明である。ただ、森近辺が上町台地東下の低地にあたることからみて、台地上を中心とする南町より新屋敷に与えられた可能性が高いと予想しておきたい。

3 都市周縁の構造

大坂寺内町は上町台地の北端を中心に立地する都市であるが、その周縁の景観はいかなるものであったのか。大坂は田畠が広がる中に屹立する都市なのか。

従来の研究においては、大坂寺内町を単一の都市として、そのみで完結する分析を行ってきた。中近世移行期の当該地域を分析した伊藤氏の研究でも、大坂寺内町と四天王寺門前町という二つの「点」を、「線」で結び、「面」に展開させたことに豊臣政権の大坂城下町の意義を認めている。しかし戦国期の大坂は一つの「点」にすぎなかったのであろうか。

森

森は、大坂寺内町の南東に位置する集落であった。鹿苑院領森三ヶ庄の中心集落で、その政治、信仰の核が法安寺であった。ところがその法安寺が第1項でみたように、大坂寺内町に組み込まれてゆ

くという事態に直面し、森の空間的な位置はどのように変化したのであろうか。

森には祐光寺という一向宗寺院があった。明応五年（一四九六）、法安寺の住持が、蓮如に帰依して大坂御坊の土地を寄進し、自らは祐光寺を建てて移ったという伝承がある（一）。天文年間においても森祐光寺正教は大坂御坊内における実力者の地位を維持し、三番浄専坊、大坂光徳寺などとならんで

「大坂六人坊主」などとよばれた（7・4・18など）。

この森祐光寺の寺地は大坂寺内町内にあった。祐光寺と法安寺は「二ヶ所ともに寺内之事候」と記され（5・6・3）、「法安寺北橋きわ」付近に祐光寺があったことがわかっている（20・12・14）。

このように森と関係の深い法安寺・祐光寺が惣構内に立地することから、森の集落そのものも寺内町ときわめて近接した場所にあったと考えられる。

（居）

天文八年には、本願寺が「森三ヶ庄惣社・田地以下土井・堀二成」し、「拝殿も此方へ取」った代償として一三五貫文を支払い、また「法安寺東堀より其下の岸迄」を七〇貫文で購入している（8・12・24、25）。いうして惣社が立地する、おそらく森集落の中心部までが寺内町に組み込まれることになった。集落内を縦断するように寺内町惣構の土塁・堀が走り、その外側に、残された森の集落が展

開するような景観を想定できるであろう。

天文二十三年（一五五四）九月、証如死去後の混乱を見透かしたように、三好氏一族十河氏の配下が森に「種々乱妨」をはたらいた（私23・9・26）。大坂に隣接する「都市」的集落として発展していた森の富を狙った行為といえよう。

渡辺津

上町台地の北端西側、台地の下に淀川に面して渡辺津があった。ここは熊野街道の起点として、京都から和泉・紀伊方面への交通の要衝であった。と同時に、瀬戸内航路を運ばれてきた荷物がここで淀川をさかのぼる舟に積みかえられる、中継都市でもあった。

しかし中世後期の渡辺については史料も少なく、その実態はほとんどわからない。そうした意味で、明応二年（一四九三）、興福寺門跡尋尊が描いた「御陣図」は貴重である。これは当時、河内を中心に対峙していた足利義材方と畠山義就方双方の陣容を描いたものだが、天王寺から北上する道が淀川に達する地点に「ワタナヘ」の表記がある（2）。十五世紀末の時点で、渡辺津がいまだ、交通上の要衝であったことが理解される。

蓮如が大坂御坊を建設した時、その地は「虎狼ノスミカ」であったといわれる（3）。確かに上町台地の丘上はそうであったかもしれない。しかし、そこが膝下に要港渡辺をかかえる場所であったことを蓮如が考慮にいられていなかったとは信じられない。

では十六世紀なかば、天文年間の大坂と渡辺の関係はいかなるものであったろうか。天文一揆の際、細川方は天王寺から出撃して高津（西成郡）・渡辺などを焼討ちに行っている（私3・3・10、4・6・1）。これは大坂に籠城する本願寺方に対する示威行動であった。

ところでこの渡辺には一向宗の寺院が存在した。天文五年、本願寺領の徳政免除が問題となった時、摂津關郡守護代山中政重が本願寺に対し、「渡辺三ヶ寺預、寺中買得分」については徳政令適用を免除するとの書状を届けた（7・6・9）。他に史料がなく詳細は不明だが、一向宗の三寺院が渡辺にあったことが確認されよう。

さて、『天文日記』と『私心記』にしばしば「上手堂」という地名が出てくる。

天文五年には、天王寺方面から進出した木沢・山中氏らの軍勢が上手堂に陣を構え、「中嶋へ川ヲ越、貴入」った（私5・7・29）。同十五年には、中島の三好方を威嚇するため天王寺方面から進軍し

てきた遊佐長教方が上手堂までやってきたので、証如が上手堂まで樽を贈ったりしている(私15・8・25)。これらの記事より、上手堂は中島の対岸にあり、天王寺方面(南方)から中島(北方)への渡河点にあたることがわかる。天王寺から北上する軍勢は熊野街道を通るはずであり、上手堂とはまさに渡辺津のことであるとわかるのである。

天文十六年には、「上手堂之下河」に停泊していた唐船を見物に行った証如が、そのついでに天満社に参詣している(16・9・3)。大坂↓上手堂↓天満の位置関係を示す事例といえよう。『天文日記』や『私心記』に「渡辺」がほとんど現れない理由は定かではないが、当時、本願寺の僧侶はそこを一般に上手堂と呼んでいたようである(4)。

天文十七年、証如は「上手堂石」を調達するため尽力している(17・9・21)。この石が上手堂とよばれる堂舎のためのものか、港湾施設を整備するためのものか史料からはわからない。しかし本願寺が上手堂(都市の中心寺院、あるいは港湾都市)に対して積極的な保護の手を差しのべていることは確かである。

本願寺は天文九年以来、堺の客衆中が運営する唐船の権利の一部を与えられていた(5)。普通、唐船

は堺に入港するが、天文十六年には初めて上手堂に入港し、唐人中と証如の間で礼物のやりとりも行われている(16・8・13、20)。こうした関係によって同年、先にみたように証如は上手堂の唐船見物に出かけたわけだが、上手堂に唐船をよび寄せるといふ行為は、本願寺がなんらかの権限をその地に有していたことを前提とすると考えられる。

ところが証如が見物に行った直後、唐船は上手堂よりさらに淀川をさかのぼった大坂寺内町の港に入港する(6)。これは本願寺が、より権限をおよぼしやすい港に唐船を移動させたことを示す。「寺内之浦」については第1節でもみたが、大坂寺内町の港として淀川航路・瀬戸内航路を結び、また河内の一向宗地帯と水路でつながる重要な役割をはたしていた(7)。

つまり大坂寺内町は、内港にあたる「寺内之浦」と、外港にあたる渡辺津(上手堂)を擁していたわけである。但し、「寺内之浦」が本願寺の一元的な支配下にあったのに対し、渡辺津は決してそうではなかった。そこは、中島への渡河点として武士や一般貨客が集結する地でもあったのである。

天文九年には、「北之河辺」で喧嘩した寺内町民が山中藏人の家臣を殺害する事件が発生した。犯人が逃亡したので、本願寺は彼の家の資材を「河縁」で焼き、それを山中方も「見使」を出して確認

し、事件はおさまった(9・3・22、4・20)。天文十二年にも同様の事件が「河縁」で起こり、「相当之儀」のため同じく「河縁」で寺内町民である犯人の家財が焼かれた(12・8・5)。後者の事件で、松井十兵衛ら「中島衆」が調停に立っていることより、この「河縁」とは渡辺津付近をさすと考えられる。渡辺津は、寺内町民や大名被官の武士たちが入り乱れる繁華な都市空間であったのである。

こうして大坂寺内町はその北西で、渡辺津という、本願寺の主権が完全にはおよばない、別個の都市空間と隣接していたことになる。渡辺津が戦国最末期まで大坂からは独立した空間であったことは、元亀元年(一五七〇)の野田・福島攻めの際、天満が森、難波などとならんで渡辺に織田信長方が陣取っていることから確認できる(8)。とはいえ、本来は独立し、別個の都市であった渡辺津が、天文年間以降の大坂寺内町の勃興に圧倒されてその勢力圏に一定度組み込まれ、外港的機能を負わされていたことも確かである(9)。

渡辺から対岸の中島に渡ってすぐのところの中島天満宮があり、戦国期、その門前には一定の集落が形成されていた。本願寺の僧侶は梅見物や蹴鞠にしばしば天満宮を訪れており(私2・9・16、私4・2・14など)、そこが「遊覧」の場となっていたことがわかる(23・3・7)。大坂寺内町民もしばし

ば天満門前に出かけたらしき、天文六年には、木沢・田辺方の被官と刃傷沙汰をおこしている(6・10・2)。

戦国期の天満については高島幸次氏の研究がある。氏は、天満門前町が本願寺の「準寺内町」的性格を備えていたとするが(1)、渡辺津にくらべても本願寺の影響力は小さく、そうした評価は適当とはいえない。しかし、大坂寺内町に近接する都市的な空間として相互の関係も緊密であり、大坂の発展にともなって戦国末期にかけて変容をとげていったものと想像される(11)。

志宜 大坂寺内町北東部には新屋敷があったが、その外側には志宜庄が広がっていた。第1節でふれたように、新屋敷を出た街道は、大沢橋を渡り、淀川左岸を京都方面へとつづいていく。では、この大沢橋はどこに架かっていたのであろうか。

上町台地北端から淀川左岸に出るためには当時、大和川を北へ越える必要があった。大沢橋とはこの大和川に架けられていた橋と考えられる。近世以降なら大坂城北西部の京橋ということになるが、戦国期には、新屋敷との位置関係からみてもっと東側で淀川を渡河していたことになる(12)。

ところで近世の鴨野村は、淀川の合流点より東へ約2 kmさかのぼった大和川左岸(南側)にあった。

文禄三年に検地をうけており⁽¹⁶⁾、同村が戦国期までさかのぼることはまちがいなからう。ここが中世の鹿苑院領志宜庄の中心地と考えられる。

天文十六年、本願寺から近江六角氏への礼物が、中島衆(三好方)によって蒲生で略奪され、「寺内衆」が反撃に「打出」す事件がおこった(私16・4・21)。六角氏への礼物であるから、大坂から京都方面へ向かっていたと考えられ、その途上に蒲生が位置することになる。蒲生は、大和川をはさんで志宜の対岸(北側)にあたる。

これらの事実を総合すると、大坂と京都方面を結ぶ街道は志宜と蒲生の間で大和川を渡っており、大沢橋はここに架かっていたのではないかと推測されるのである。

志宜では、志宜庄代官(額田氏)⁽¹⁷⁾が勧進猿樂を行っており(7・4・10)、勧進場で寺内町民と「河内衆」(三好方被官)の「喧嘩」が発生したこともある(私永禄2・4・2)ことから、そこは一定度、武家の権限がおよぶ地であったことがわかる。だからこそ山中氏は大沢橋で所質を取ることができたのである(8・4・26)。本願寺の殿原衆が大沢橋まで見送りに出かけたのは、そこまでが大坂の勢力圏内との認識があったからであろう(私24・5・3)。礼物の略奪が大沢橋の対岸、本願寺の影響

力の薄まる蒲生で発生する必然性もここにあるのである。

天文十五年、本願寺は(志宜)三ヶ庄代官に対して、大沢橋下流の川を堰いて、大坂寺内町の船を繋留できるよう許可を求めている。大和川上流への舟運の便を考えてのことであろう。志宜・大沢橋付近が大坂の影響下に入り、外港として組み込まれつつあることがわかる。

このように志宜は、大坂から京都方面への陸路の、また大和川をさかのぼって河内一向宗地帯への舟運の交通の要衝という立地条件を負っている。本願寺の影響力はある程度ここまでおよんでいたが、基本的に志宜は寺内町と武家の入り組み地であり、すぐ外側は武家の支配領域であった。志宜は志宜庄の中心地であると同時に、勧進芸能が催されるなど、「都市」的空間としての発達が推定され、まさに「境界の都市」の趣を呈していたのである⁽¹⁸⁾。

四天王寺門前 大坂の南方3km余にある四天王寺門前町の戦国期の様相については、伊藤毅氏の分析がある⁽¹⁹⁾。ここは渡辺津や森・志宜などとはくらべものにならない大都市で、大坂寺内町とならびたつ存在であった。

天王寺門前が大坂にとって重要であったのは、それが堺・和泉方面への陸上交通路上に位置してい

たからである。堺には有力な一向宗寺院・門徒が多く、堺との交通の確保は大坂にとって切実な課題であった。しかし四天王寺に隣接する天王寺城(1)には、摂津国欠郡守護代が常駐しており(2)、天王寺門前は基本的に武家の支配下にあった。

天文十三年には、天王寺の役所(関)を通過する、大坂寺内町関係の荷物・人についての関銭が問題となり、本願寺が交渉してその確定を行っている(13・12・23)。このように、天王寺の武家勢力は大坂寺内町の富に注目し、その収奪の機会を狙っていた。大坂と四天王寺門前の間には一種、緊張関係が生まれていたものと思われる。

天文二十二年、ついにその緊張の糸が切れた。寺内町の馬を拘束した岡七郎兵衛に対し、「寺中輩悉打出」し、寺内町民がその返却を要求した。四天王寺の寺僧が調停を試みている最中、岡方の攻撃をうけたため町民側が応戦し、「四天王寺?」「東方」から攻め入って岡家を焼討ちにしたのである。本願寺は町民側に理を認め、紛争の事情を至急、三好長慶をはじめとする畿内各地の武家に告げ、その理解を求めた(22・3・17) (3)。物流に関する問題を自力救済の武力発動によって解決しようとした大坂寺内町民と、その立場を弁護する都市領主(4)本願寺の見事な連携プレーといえる。

ともあれ、四天王寺門前が、近接する大坂寺内町と密接な、時には緊張関係を伴うような位置に立地していたことが理解されよう。

寺内町の内と外

以上、本項では森、渡辺津、志宜、四天王寺門前という、大坂寺内町周辺の四つの「都市」的空間を取り上げ、その実態をできる限り詳細に復元することにつとめた(図II-4参照)。四集落はそれぞれ規模、都市化の度合、大坂からの距離などが異なり、それに応じて本願寺・大坂寺内町の影響力にも差が生じている。

しかし四天王寺門前を除く三つの集落には共通点が多い。大坂寺内町に近接する交通の要衝で、本願寺・寺内町と武家の勢力がそれぞれ出入りする入り組み地である。そのためしばしば寺内町民と武家被官の「喧嘩」が発生し、また本願寺僧や寺内町民の参加を期待した勧進芸能が催される。しかしこうした性格は決して固定的なものではなく、本願寺・寺内町の支配力が確実に浸透しつつあったのである。

ところで、渡辺津と志宜が、おのおの寺内六町の北町・北町屋と新屋敷に対応していることを思い

おこされたい。第2項でみたように、これらの町は六町の内でも最も発展性が高い町々であり、これはそれぞれが瀬戸内海・淀川航路や京都への街道に接続していたからである。つまり、大坂寺内町における北町や新屋敷の拡大傾向が、その外側に隣接する渡辺津や志宜に対する本願寺・大坂寺内町の影響力の強化と連動しているのである。寺内町における都市発展のベクトルが惣構を突き破り、周辺の「都市」的空間にまで影響をおよぼしたと評価できよう。同じことは、清水町と四天王寺門前、南町屋あるいは新屋敷南部と森の関係についてもある程度あてはまろう。

だとすれば、近接する「都市」的空間に対する大坂寺内町の影響力の拡大、寺内町内のベクトルの进出は、寺内町の自己発展、都市民の志向の発露ということができよう。これはたとえば、四天王寺門前との緊張状態が町民の切実な利害関係によって発生していたことなどからも明らかである。そして、こうした空間構造の展開の背景に、本願寺の積極的な意志のはたらき、保障があったこともまちがいない。

都市民の志向、それをうけた本願寺の政策がいまって、戦国期大坂寺内町内外の空間構造を形造る力となっていたのである。

(1) 前掲史料注第1節第1項(1)。

(2) 『福智院家文書』、『大阪府史』第四卷(大阪府、一九八一年)口絵。

(3) 『拾塵記』。

(4) 渡辺津には重源が建立した浄土堂があったが、これは、前掲の明応二年「御陣図」にも「浄土堂」と記載されている。ジョウド、ドウとジョウズ、ドウという音の親近感より、上手堂とはあるいは浄土堂のなまりかもしれない。

(5) (9・4・26)などによると、証如は堺停泊中の唐船を京都の貴族に見物させている。これは、本願寺が唐船に一定の権利を有したことを前提としよう。具体的な権利内容は不明だが、客衆中が「五駄荷所并一人之乗前」の提供を証如に申し出たことがあった(8・2・4)。

(6) 証如は細川右馬頭(藤賢カ)等に対して、「今度、唐船、寺内へ乗入之儀、相意」の礼として「唐物」を贈っている(16・10・1)。

(7) 大永四年(一五二四)、伏見から乗船した三条西実隆は大坂で上陸し、奥で天王寺へ向かった

(『実隆公記』大永四年四月一九日条、『高野詣真名記』)。なお、彼は帰京時は渡辺から乗船している(『高野山道の記』)(以上、鶴崎裕雄氏の御教示による)。永禄九年(一五六六)には、備中国新見荘から京都へ上る使者が、淀川をさかのぼる船に大坂から乗船している(『教王護国寺文書』二七七一)。

天文二十年、新開池(河内国茨田郡・若江郡)へ遊覧に出かける証如は、「河端舟付」から舟に乗り、帰りは「寺内之浦へ令帰津」しめている(20・4・6)。

(8) 『信長公記』元亀元年八月廿六日条。

(9) 「河浜」での勸進能に際し、本願寺が棧敷を打ち、証如が連日見学に出かけたこともあった(8・4・9・13)。

(10) 高島「戦国期の本願寺と天満宮」(『日本の社会と仏教』、永田文昌堂、一九九〇年)、同「戦国・江戸初期の大阪天満宮」(『大阪天満宮史の研究』、思文閣出版、一九九一年)。

(11) 戦国期には「摂州天満本泉寺」という一向宗寺院があり、石山合戦の時には大坂に籠城したという(『石山退去録』、高島論文注(10)参照)。

(12) 川幅が広く、淀川の水の流れの影響も受ける近世京橋の位置に架橋する技術は、まだなかったのはなからうか。

(13) 「鴨野村」(『大阪府の地名』、前掲注第1節第1項(2))参照。

(14) 額田氏が志宜庄代官であったことは、『鹿苑日録』によって天文十二年頃まで確認される。

(15) 鴨野が大坂にとって重要な地点であったことは、石山合戦の際、当地に本願寺の端城が築かれていたこと、大坂冬の陣で当地をめぐる激戦が戦われたことなどからも理解される(前掲注(13))。

(16) 伊藤「四天王寺門前町の構成」(前掲著書注第1節はじめに(5))。

(17) 四天王寺西側に接する字北ノ丸、中ノ丸、南ノ丸がこれにあたると推測されている。

(18) 石田前掲論文注第1節第2項(7)参照。

(19) 今日未刻已前、於天王寺岡七郎兵衛、此方寺内之馬留置之由候間、為取返、寺中輩悉打出之、及其理寺僧衆候処、自彼方、此方者一人打取之間、不及是非相破、即自東方攻入、二三人打取之、岡家令放火、即各打掃也、此段者、自先年理不尽二荷物不可留之由、既十河民部大夫令出状、其去年、窪佐渡・十河亀介、以芝田以事次、理不尽荷物相留候者、可取返之通、

相理置候条、以其筋目如此申付也、即三好・窪・亀介(長慶)京へ申・薬師寺・寺町・丹下・走井・

安見等へも此儀及案内也、安宅在津之間、十九日比二案内候、(冬康)

4 交通路と周辺田畠

以上、3項にわたって、大坂寺内町とその周辺の物理的な空間構造を検討してきた。従来、都市の空間構造論といえば、このような物理的な配置をさすのが一般的であった。

ところで、都市が都市として機能するためには、都市(惣構)内部の諸問題を解決するだけでこと足るわけでない。しかし、中世都市論の多くは、都市の支配関係や共同体などを中心にあつかい、都市と外部世界との関係については余り注意を払ってこなかった。もちろん、都市と農村の相互関係に注目する研究はわずかながら存在するが、都市と別の都市を結ぶ交通路や、都市住民の所有する都

市周辺田畠の問題を、都市論の中で検討した例はほとんどない。だが、これら交通路や田畠は都市の成り立ちを保障するいわば「生命線」であり、こうした「生命線」をそれぞれの都市がどのようにして確保していたかは十分検討に値する課題であろう。

そこで本項では、大坂寺内町について、大坂と他都市を結ぶ交通路がどのような制約をうけ、それをどのように解決していたのか、寺内町民が所有する、大坂近郊の田畠の権益をどうやって守っていたのか、概観してみることにする。そしてその際、これら交通路、田畠の問題を都市空間の中に位置づけ、新しい空間構造論を提起したい。

a. 「大坂通路」の確保

石山合戦さ中の天正四年(一五七六)頃、織田信長は大坂包囲網の要であった荒木村重に対し、一通の書状を送った。その中で信長は、「(精)せいを入、一人も不出候様可申付事専一候」、「大坂通路河上・(油)陸路事、堅可相留候、聊不可有由断候」と述べている。(三)

もちろんこれは包囲戦争の中での指示であり、一般化することはできない。しかし、都市大坂を困窮させるには「大坂通路河上・陸路」を閉鎖することが一番であることは広く認識されていたにちがいない。逆に、本願寺・寺内町にとっては、「大坂通路」の確保が緊要の課題であったのである。

中世、特に戦国期の畿内においては、武家による交通の遮断がしばしばみられ、その多くは、いわゆる所質の形態をとった。所質とは、債務者や紛争当事者と同じ「所」の住人だというだけの理由で、債権者や紛争の対抗者から人質にとられたり、差押えをうけたりすることである⁽³⁾。

大坂寺内町もしばしば所質の被害にさらされた。新屋敷町民が志宜庄の田畠を荒したのにその保障をしようとしなかった時には、守護方の山中藏人が大沢橋で所質を取ると新屋敷に申し入れしてきた^(8・4・29)⁽⁴⁾。寺内の川那部三郎左衛門と三好方の矢野内藏助が住吉で喧嘩し、その「公平な」解決を求めた三好・矢野方が「当山^并 往還輩可被相支」という行動に出たこともあった^(7・3・24)⁽⁵⁾。いずれの場合も、武家方は所質を取られることが本願寺・大坂寺内町にとってダメージが大きいことを計算した上で、自らの要求を受け入れさせるために所質を切札として使っている。実際、これに対して本願寺は、不満を抱きつつも武家の要求に従っているのである。

本願寺が、所質による交通妨害の解消に努力している例は、寺内町住人が当事者となっている場合に限らなかった。被官が堺で殺害されたため、「対彼津輩、可有相当」とし、「堺衆、此方へ往返儀をとどめようとした河内畠山方に対して、本願寺は「此方仏事中、無其煩之様」要求し、容れられている^(13・関11・4)⁽⁶⁾。

このように大坂寺内町に出入りする貨客の交通を確保するため、本願寺は武家との交渉を行って、所質を防ぐ努力を怠らなかった。天文二十年には、十河一存から「被官人、請取沙汰、又所質、又携路次輩在之者、即申越之者、速可加誅伐」という起請文を得ている^(20・12・30)。

ところで、戦国期の畿内を中心とする地方には、交通路上に無数の関所が設定され、関銭の支払いが交通の大きな妨げになっていたといわれている。このことは大坂寺内町を出入りする人や荷物について、決して例外ではなかった。

これに対して本願寺は、そうした関銭を少しでも軽減しようと働きかけを行っていた。大坂・天王寺間の関が問題となった時には、「坊之荷物」と「手振」の町人には関銭を取らず、「寺内之荷」の

み課税対象とするよう、交渉に成功している(13・12・23)。(4)。天王寺の関銭については、この他にも本願寺がその確定に努力していることを示す史料がみられる(20・11・11～13)。

このように関銭の多寡についての問題がおこった時に関の領主と交渉するだけでなく、本願寺は毎年、恒例の礼銭を京都方面への交通路上の関所に送っていた。

（光徳寺）
自当坊、毎年年始二、河面・陸地役所々々へ料足遣候分記で、以周防、乗順申候間、遣候へと申出候、(6・正・6)

毎年の年始に、淀川と陸路上の役所(＝関所)へ大坂御坊から礼銭を遣わすのが慣例であったことがわかる。この前年には、同じ光徳寺乗順が、「河内路七つの役所、分而十一所へ式百文ツ、毎年、当坊、明日四日二遣之由」を申し入れている。「大坂六人坊主」の光徳寺が証如に要請していることからこの慣例は、証如が移ってきて大坂が本山となる天文初年をさかのぼる以前からのものであることがわかる。なお、「陸地役所」とは、淀川左岸、北河内の京街道上の関所と思われる。

この他、毎年正月、本願寺は淀・伏見の関所の有力者に礼銭を送り(6・正・7など)、さらに逢坂

関や大津・坂本の関所にまで礼銭を支払っていた(5・6・9、8・2・27など)。こうした礼銭は、関銭の代納、あるいは関銭減免要請の意というよりは、本願寺・寺内町に関する貨客の円滑な交通を願う、という趣旨のものであろう。

ここで、坂本・大津―逢坂―伏見・淀―淀川―大坂というルートは、本願寺領国であった加賀から年貢・公事などを上納してくる道筋にあたっている。その意味で、本願寺がこのルートの維持に懸命となるのは、遠隔地に所領をもつ領主としての行為であるともいえる。しかし、大坂―京都間の淀川沿いの関所への正月の礼銭が、天文初年以前からの慣例であったことから明らかなように、これは大坂寺内町の都市領主としての義務でもあったのである。

以上にみてきたように、本願寺は、大坂寺内町に出入りする人や荷物の交通をできる限りスムーズにし、寺内町が都市として一層興隆するよう努力を重ねていたのである。

大坂寺内町の都市民がどのような経済生活を営んでいたか、その詳細は不明である。しかし、表Ⅱ 17に明らかなように、町民の多くは大坂近郊の農村出身と推測され、中にはいまだそうした出身地になにがしかの基盤をもっている者もいたであろう。また相対的に都市には富貴の者が多く、都市周辺田畠の加地子得分を集積していたに違いない。さらに、こうした有力者に限らずとも、志宜庄はじめ、周辺の田畠に出作する百姓が寺内町に居住していたことも確認できる(8)。

本願寺や寺内町住人が口にする食料の多くが、商品流通によって大坂へもたらされたものであることはいうまでもない。しかし都市民が実際に耕作して収穫したり、得分として収奪したりして得る米銭は、寺内町の生活や経済を支える、決して無視できない要素であったろう。その意味で、町民が何らかのかかわりをもつ田畠は大坂寺内町の「生命線」の一つであった。

だが、惣構内とは違って、町外に展開する田畠に対する寺内町民の権益は決して安泰とはいえなかった。特に戦国期、収奪を強化していた武家諸勢力は、様々な名目で領国内の田畠への介入をはかっていた。

天文五年には半済が行われようとした。摂津守護代の山中方から、
(御坊) 井(得) 買徳ま
天文五年には半済が行われようとした。摂津守護代の山中方から、「欠郡又爰許迄の年貢

て」半済をかけるという通知がきたのに対し(5・6・4)、本願寺はその取り消しを要求した(5・6・5)。そこで山中政重は、「当坊寺領又寄進などの儀」は免除するかわりに、「町人などの儀ハ申付候へと」と改めて要求してきた(5・6・12)。寺内町民が半済を支払うように本願寺が命令せよ、というのである。しかし結局は、本願寺の交渉の甲斐あって、「当坊領、又寺内の面々の領之儀、相除候」ということになったのである(5・9・3)。この間、本願寺は山中方はもちろん、幕府要路へしばしば礼物・樽銭を贈与した。

ついで天文七年、今度は徳政が問題となった。同じ山中政重から「欠郡徳政」を通知された本願寺は、摂津守護細川晴元に交渉し、「徳政之儀、大阪寺内相除之由、下知」を獲得する(7・8・27)。ここで「大阪寺内相除」の意は、「於大坂寺内者、縦雖為郡中共、被免除」ということであった(7・9・1)。つまり御坊や寺内町民がもつ、欠郡中の債権については、徳政を免除されたのである。

さらに天文九年、欠郡に段別米二升宛が課せられた。山中政重が、「寺内出作分之衆可出之由」を通知してきたのに対し(9・11・7)、本願寺は「諸公事免許」を理由に支払い免除を要請している(9

このように摂津守護代山中氏は、半済・徳政・段別米などの手段で、大坂御坊・寺内町の得分を侵そうとしてきた。これに対して本願寺は、御坊のみならず、寺内町民の權益をも守るため、守護権力との交渉を繰り返している。その結果、町民が権利を有する田畠については、摂津欠郡一円規模で寺内町民の債権や得分などが保護されたのである。

ところで、守護など武家による田畠の違乱は、こうした賦課や徳政によるものにとどまらなかった。直接的な違乱はしばしば關所というかたちをとった。

天文六年、北町屋の深江明道が西坊から購入した田地が、西坊跡職關所にともない、山中政重に召し上げられる事件がおこった。明道はこの田地から御坊へ「毎月廿八日の蠟燭一挺ツ、出」していることを理由に關所を逃れようとした。御坊に仕える河野新六が交渉したが、結局、關所を免除することとで解決したのである(6・4・15、6・11・4) (60)。

このように、關所などによって武家に押領された寺内町民の田畠が、大坂御坊への寄進地であることを理由に、処分が撤回された例もしばしばみえるのである(16・12・29など)。

以上、みてきたように、大坂寺内町民が權益を有する、惣構外の田畠について、武家権力から様々

な違乱が加えられるのに対し、本願寺がその權益護持のために力を發揮していることが理解される。

都市を支配する領主権力が、都市民がもつ都市外の權益を保障することについては、従来、京都の徳政免除をめぐる語られる程度で(1)、ほとんど検討されることはなかった。これは、史料上の制約というより、大部分の都市では、都市外の田畠の權益まで守る力をその都市・都市領主がもっていないかったことに起因しよう。そうした意味で、大坂寺内町の場合、本願寺のもつ政治的力量の意義は大きかったのである。

c. 都市の「生命線」

本項では、交通路と田畠という、従来の都市論では余り取り上げられなかった対象を検討してきた。しかしこれらは、都市がその都市としての機能を維持するために、是非とも確保しなければならない「生命線」であり、都市研究の重要なテーマたるべきであろう。そして、都市から他都市へとのびる交通路、都市周辺に展開する田畠の問題は、都市の空間構造論の一環として追究してゆかねばならな

いのである。

大坂と京都を結ぶ淀川・街道や、摂津・河内・田島には、本願寺の勢威が直接および、いわば大坂寺内町の延長ともいえる展開を示している。また天王寺・堺などを結ぶ主要交通路、摂津・河内に散在する御坊寄進地なども、大坂との緊密な関係下にあった。

ではなぜ、大坂寺内町が都市外部の権益まで保障できる力量を獲得したのであろうか。たとえば、堺や大山崎など、典型的な自治都市とされる畿内都市の大多数においては、こうした権益まで守ることはほとんど不可能であった。そうした意味で、大坂にとって重要であったのはやはり本願寺である。「生命線」は本願寺の積極的な対外交渉によって確保されていたのであり、そうした困難な交渉が可能であった源泉は本願寺の政治的力量であった。そしてここに、大坂寺内町に結集する都市民の期待も集中したのである。

(1) 脇田晴子「都市と農村の対立」(前掲著書注第一章はじめに(2))など。

(2) 折番委細披見候、仍大坂北口へ雑人共出候由二付而、申遣候処、中嶋辺へ不罷出候由二付、

城之者共返事之趣披閱候、猶以せいを入、一人も不出候様可申付事專一候、将亦、帰陣之後、

無相替儀候旨、得其意候、それ二ハ早々帰城候て、大坂通路河上・陸路事、堅可相留候、聊

不可有由断候、次、我々今夜ハ八幡二逗留候、自然珍事候者、可申越候也、謹言、

(天正四年カ)
六月四日

信長
御黒印

(村重)
荒木摂津守殿

(『古簡雜纂』五「織田信長書状案」、奥野高広『増訂織田信長文書の研究』)

(吉川弘文館、一九八八年、以下「信長文書の研究」と略す(六四四))

(3) 神田千里「所質」(『国史大辞典』10、吉川弘文館、一九八九年)参照。

(4) 前掲史料第2節第2項の本文中。

(5) 川那部三郎左衛門 与 四国矢野内蔵助、去年、住吉にて誼譚之儀、于今不事行候、前後、川三左衛門(捌)(悪) 左さはぎわろく候間、難成就候間、若井ニ談合させ候へバ、川三郎左、先隠形候ハでハ、不(下間真慶) 可成之候由申候間、其分、川三にも申聞、若井して木沢へ云遣候、就此段、上野、中坊迄遣

(6)

(畠山植長)

書狀、川三左公事、愚身一向不知候キ、申聞候へバ、任大様可相果由申出候儀、川三如何分
別候哉隠形候、然上ハ、当山 并 往還輩可被相支事迷惑之由申越候、

尾州へ、就先日、堺衆此方へ往返儀、彼方被官於堺生害之条、対彼津輩可有相当之□□沙汰
申遣 分別、以書狀令音信、之間、此方法事中、無其煩之様候者、可爲祝着之由、
之処

(久俊)

(7)

山中橋左衛門・同取次北屋へ令音信、子細者、於此方 与 天王寺之間ニ、寺中者手振にも難不
連了、当年始而取之由町人申候間、両山中へ相理之処、三郎太郎儀者、真壁不申聞、橋左衛
門事ハ、当年細川へ申披、始而関を立也、雖然、此方申候事ニ毎事相隨候条、成其意得之由
令返事間、遣之儀也、惣別ハ、坊之荷物にハ不取之、爲其、毎年四郎兵衛爲取次札執之、寺
内之荷にハ執之、手振に不執之、先規之定例也、
(取) (取)

(御坊留守衆)

(8)

新屋敷の町人が志宜庄に出作していながら年貢などを無沙汰していること(7・9・5)、「堀
きわの麦まで夜々盗」まれるのを理由に、惣構の門の鍵を「町へ申請度由言上」していること(7
(際)

・4・25)などからわかる。

(9)

(政重)

山中藤左衛門方、西坊跡職爲關所取候、其内、北町屋深江明道知行候、
是ハ西坊売、此内に
地ヲ置候

(御坊)

て毎月廿八日の蠟燭一挺ツ、出事候間、爲關所可取由申候条、此方へ寄進之由、明道申候へ
共、關所分ハ不相除儀候間、返付まじきよし山中申候、又やがて河内にて何とやらん申候、
(御坊)

西坊下地之内、少此方へ寄進候、是も色々主寄進之由申候へ共、山中不承引候間、此下地又
(由)

(証如)(下間真慶)

明道下地余も、可返付まじきよし山中申候間、河野新六、此方へも、上野にも不知して、色
(山中)

(山中)

々申候へ共、無承引候ツ、然者、山中申事にハ、關所之儀者不返付法候、然而、此方への儀
(尊カ)

(尊カ)

候間、山中、此方へ寄進すべきよし申候、此喚ハ正月よりの事にて候ツるよし、只今申候、
自此方、山中へ申事ニハ、此方分ハ少在之事候間、於其方用に被相立候へと申候、此下地之
(上)

(上)

儀、委聞候へバ、両所五段何歩とやらんにて候、とても此方へあがり候分ハ、百疋斗の事に
て候よし候間、如此返事申候也、(6・4・15)

(御坊)

爲此礼、山中藤左衛門、号關所分、此方田地之内、深江候哉、一段百六十歩之所取候へ共、
綿遣候

此方下地に候間相除之由申候条、喜悅之由、自上野方申させ候、此内、定専坊下地壹反候へ共、此方之分二申て候つる之由、申候、(6・二・4)

(10) 脇田前掲論文注(1)

おわりに

戦国期の大坂寺内町を舞台に、都市の空間構造の形成と変容を追ってきた。法安寺など寺内町内の異質な空間が否定されていったこと。寺内六町の発展が、寺内町外の交通路とのアクセスに規定されていること。大坂に近接する四つの「都市」的空間が、本願寺・寺内町の影響をうけ、徐々にその支配下にふくみ込まれつつあったこと。そしてこれらを結びつけるベクトルは、寺内町に発し、その惣構を拡大させつつ突き破り、近接の「都市」にまで至っていたことなどを明らかにしてきた。さらにいえば、大坂からのびる交通路や大坂周辺の田畠などの「生命線」確保にもこうしたベクトルが作用

していたといえよう。

このベクトルの力を支えていたのが寺内町の都市民の志向であった。そして大坂の場合、都市領主「本願寺は都市基盤の整備、近隣「都市」への影響力の行使、荘園領主・武家など外部勢力との交渉などを通じて、こうした都市民の志向を強力にバックアップしていたのである。

序論で紹介した城下町論や建築史による自治都市研究とは違って、本節では、戦国期の都市の空間構造は都市民の志向によって基本的に規制されているとの立場を採用した。もちろん、大坂寺内町の場合にも都市領主「本願寺の意義は大きい、領主権力によるいわば「上から」だけの空間構造論にくみすることはできない。中世における都市空間は、都市領主の意志と都市民の志向が融合したかたちで形成されるのである。

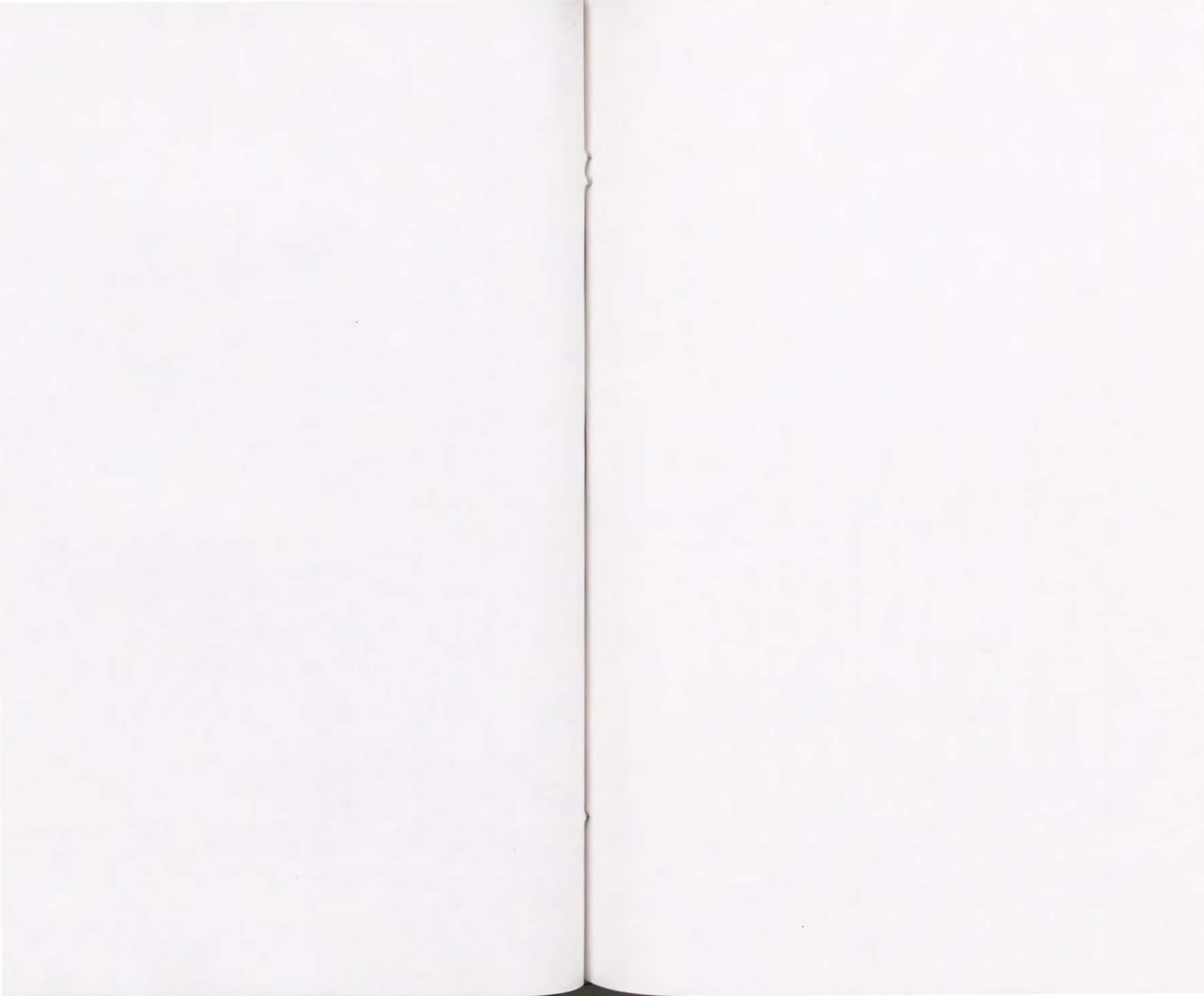
いま一つ、本節では、大坂と近接の「都市」空間を関係づけ、絶えず変化してゆく過程の中で描こうと試みた。従来、大坂寺内町は単独の都市として分析されてきたが、その都市構造は周縁部との相互関係で解くべきである。しかも都市内外の空間構造は決して固定的なものではなく、自己運動によって絶えず変化しつづけているのである。

戦国期から織豊期にかけて、城下町についてはその空間構造の変容が語られてきた。その一方で、自治都市の系列に属する都市の空間がどのような変化の方向性をもっていたかを明らかにした研究は少ない。両者を比較分析することは、当該期の都市全体を見わたすために是非とも必要な作業といえる。

ところで、従来、寺内町がかたちづくる空間構成といえ、¹「大坂並」体制論として、寺内町の都市ネットワークが強調されてきた²。しかし、一向宗、寺内町が政治・経済の真空地帯に存在していたわけではない以上、他種の都市との相互関係の中で寺内町の配置を解く必要もあろう。そしてそうした作業を経てはじめて、寺内町ネットワークの意味を真に明らかにすることができるのである。本節の第三の意義は、こうした新たな視角による研究の素材を提供したことに求められるだろう。

ただ、注意しておきたいのは、本節で説明してきたような本願寺と寺内町民の関係に何の矛盾もふくまれていなかったわけではない点である。実はここに、支配される寺内町民の積極的な要求と、都市支配の正当性を確保するため、都市の「公共性」を体现しようとする領主＝本願寺の緊張関係が表現されていると思われるのである。

(1) 峰岸・藤木前掲論文・著書注序節(5)。



第3節 本願寺の支配と寺内町

はじめに

これまでの二節では、大坂寺内町の空間構造の復元とその歴史的意義の分析を行ってきた。そうしたいわばハード面の考察を前提に、本節では、都市領主本願寺の支配と寺内町民の関係を中心に、ソフト面を説明してゆくこととする。

本願寺の支配やその寺内町民との関係については、序節でもみたように、宗教的なベールに包み込んで、実態を具体的に検討しようとしないう傾向が強かった。ここでは、都市領主としての本願寺の権力支配のあり方、六町共同体の自治の実像などを検討し、寺内町がかかえる矛盾を抽出する糸口をつ

かみたい。

1 六町の共同体

寺内六町にはそれぞれ、複数名からなる代表者集団が存在した(表Ⅱ-8)。

彼らは普通「年寄(衆)」と呼ばれ、その員数は町ごとに異なった。「町中」や「其外衆」・「町衆男女」とは別に「年寄」が、本願寺へ礼を送ったり、召し出されたりしていることから、彼らがそれぞれの町中を代表し、一般の町民と本願寺を媒介する役割をはたしていたことがわかる(し)。

しかし、彼らはこうした儀礼的な側面においてのみ代表者であったわけではなかった。

まず、天文五年の新屋敷檜物屋町と北町屋間の排水相論をみてみる。

従来、北町屋側へ流れ落としていた排水を北町屋(町共同体)に止められて湿潤になった檜物屋町では、若衆共が「水を北町屋へきりおとし候はん」と実力行使を主張したのに対し、宿老が若衆の自力

表II-8 町の老若一覽 (『天文日記』による)

年月日	町の老若	備考
天文 5. 6. 24	新屋敷・檜物屋町・宿老・若衆	北町屋と排水相論
11. 7. 27	西町年寄衆(十九人) 新屋敷年寄衆(八人)	誕生祝として、西町中より五種十荷、年寄衆一人廿疋宛 〃 新屋敷より五種十荷、年寄衆一人廿疋宛
12. 1. 7	清水町年寄共 北町年寄衆已下 南町屋年寄已下	誕生祝として清水町より五種五荷、年寄共廿疋、其外衆も礼 〃 北町より五種五荷、年寄衆已下廿疋 〃 南町屋より五種五荷、年寄已下廿疋、木村了専が百疋 〃 北町屋より五種五荷
13. 5. 12	六町衆老若	寝殿立柱に伴い懸水を賜う、召し寄せたか渠まらず
16. 8. 10	北町町衆年寄分廿余人	北町惣直場を歴覧する、町衆男女が自分礼、町衆年寄分を召し出す
18. 1. 1	北町・南町両長 <small>(27)</small>	両長が盃を飲む、町者が一町宛来る
20. 12. 14	南町屋新左衛門親子・其外若衆 南町屋年寄	木村屋の武力行使を抑止 本願寺に事情聴取される
23. 2. 22	一町へ年寄	町衆による能演技の礼に計六人を召し出す

救済をとどめ、本願寺へ調停を願ひ出ている。ところが本願寺は、北町屋側の主張を認めてしまい、「檜物屋町のうら」(裏)の溝を利用して排水するよう檜物屋町の宿老に申し付けてきた。そのため宿老は、「御掟之事候間、菟も角もにて候よし」を若衆に申し聞かせ、返事すると答えている(5・6・24)(22)。ここでは、宿老や若衆共が日常生活の中で町の権益を代表し、行動していたことが知られる。その際、宿老と若衆が意見を異にし、自力救済の実力行動に出ようとする若衆と、領主本願寺の裁定を仰こうとする宿老の対照が興味深い⁽²³⁾。

いま一つ、天文二十年に発生した、森祐光寺正教と木村了専方の紛争についてみておく。債権の取り立てをめぐる喧嘩で、木村弥太郎らが打擲されたことに憤慨した木村方は、多人数で祐光寺に「取懸」しようとした。しかし、「南町屋新左衛門親子、其外若衆」などが出て、木村方を押え、武力衝突にはいたらなかった。この事件を耳にした証如は、了専らに折檻を加えるとともに、南町屋の年寄も召し出して糺明する。証如は「取懸事、町中可為同心之」し、と思っていたが、年寄は「各罷出致制止之由候間、町中不存旨」を主張して、何とか連帯責任を免れている(20・12・14)(24)。

表Ⅱ-9 六町(惣町)のまとまりの例 (『天文日記』による)

年月日	六町	備考
天文 5. 9. 21	六町から	幕府との講和成立の祝として五種十荷
6. 7. 25	六町衆へ	田辺屋(殺人教唆)を見合いに従い誅伐せよ
13. 5. 12	六町衆老若	懸水を振舞うため召し寄せたが参集せず
15. 6. 7	六町衆	生玉社遷宮にあたり、能を奉納
6. 9	六町から	子供能を披露したい
17. 1. 14	六町から	綱引きを披露したい
21. 2. 25	六町へ・から	十六人番匠について尋ねる、返答する
3. 5	六町へ・から	勧進能取り立てを要請する、受諾する
3. 9	六町から	礼として十合一荷
23. 2. 22	六町から	証如の平癒祝に能を披露したい

ここでは南町屋年寄の新左衛門親子や若衆が、町の領域内で、町の住民が起こそうとした武力行動を未然に防止しているのである(5)。にもかかわらず証如は、木村方の行動は「町中可為同心」と思い込んでいた。これは、南町屋が一構成員の直面した問題に町をあげて対応する、一揆的な強固な町共同体を構成していたためで、年寄や若衆が共同体を代表して行動するのが常であったからであろう。以上の事例から、年寄と若衆が各町の意志を代表し、自治組織として機能していたことが理解される。

ところで寺内六町は、それぞれが別個にあらわれるだけでなく、「六町」というまとまりとしても史料上に登場する(表Ⅱ-9)。

たとえば、「六町」として証如に礼物を送ったり、能の上演を願い出たりしている(21・3・9、15・6・9)。また本願寺として「六町衆」に勧進能の「取立」を要請している(21・3・5)。これらのことから、「六町」とは、複数の町が連合した惣町で、六町の意志を代表する組織として本願寺もそれを認識していることがしられる。

しかし、多くの場合、「六町」としての機能は儀礼的なもので、恒常的な共同体としてどの程度実

態をともなっていたかは確認できない。いずれにせよ個別の町に比較すると、その結合力は見劣りするといわねばならない。

以上、史料的な限界は大きい、大坂寺内町に都市民の地縁的共同体が存在したことが確認できる。そして惣町(「六町」)は不分明であるが、個々の町としては明確な意志がその行動に反映されていることも確かめられた。ここに、都市領主本願寺からは独立した、都市民の志向の結集の場があったのである。

(1) たとえば、「就誕生事寺内衆礼事、◇清水町より五種五荷、又年寄共礼仕候、又其外衆も有之」(12・1・7)とある。

(2) 新屋敷檜物屋町之水落候方ハ、北町屋落候を、去年、従北町屋、其町ニ土たかく置候間、北町屋へハ不落候処ニ、当月中旬比之雨ニ、檜物屋町にハ水多、(木履) (足駄) ぼくり・あしたなどにも難往来候処、檜物屋町若衆共、水を北町屋へきりおとし候ハント申候へ共、宿老相留候間、此水、北町□へながし候やうニ被仰付候ハゞ忝可存候よし、先日申候つる間、北町屋□相尋候へバ、前々ながれ候はず候よし申候、然而、北町屋へ落候へバ番屋の前、一向大雨などの時

(期)
ハ番屋通路不合斯候ツルとて候ほどに、檜物屋町申事理運候間、檜物屋町へ理を付申事には、別に北町屋へ落し申候、檜物屋町の申事、理聞分候、雖然北町屋へ落候へバ、番衆の前ニ水たまり候て無通路候間、檜物屋町のうらにてさひわひみぞ有事候条、切付候へのよし申付候へバ、御掟之事候間、菟も角もにて候よし、宿□、(老) 此趣、若衆申聞候て、返事可申上由申婦候、

(3) 藤木久志氏は、戦国期の村落社会で、村間の調停役としてのオトナと、村の武力としての若衆を対比的に分析している(『戦国の作法』、平凡社、一九八七年)。大坂寺内町でも同様の役割わけがみえるのである。

(4) 木村屋了専、同子共 孫左衛門、宗左衛門、合五人、堅加折檻也、使中務丞也、子細者、昨宵、孫六入道、弥太郎 (貸) 祐光寺借屋ニ馬仕ニをかた与次郎と云者あり、彼ニ木村弥太郎、鳥目借シ置之處、既及逐電之由候間、弥太郎仕者、又令口入彦二郎 是も馬仕 兩人相越、彼与二郎道具取之處、又正教被官六郎衛門と云者、又其子出て、宿賃も有之間、此方へも可取之由候て互令相論、弥太郎方令打

擲、馬仕彦二郎をバ脇指にて頼を切処へ、里村井中務召仕者出合、両方へ引分之、其段相果也、其後、正教ハ三番了誓所より令帰宿之处、自了専方、為使定番を越し、正教事会手之儀候間、こらへ候まじき由申之也、其後、自彼党、正教へ既取懸人数、法安寺北橋きわ寄集を、細江小三郎、門口事候間出合、支之处、南町屋新左衛門親子、其外若衆出候て、曲事之通申之、悉散也、◇了専、同子共召寄、申事二ハ、於打擲之儀者当分先こらへ、以申事之上、可相果之处、上無二指懸之段、是一、又時分柄氣仕之折節也、是一、又昨晚、町二持口、又様躰共申出之处、立所ニ恣任雅意働、一段曲事之間、加折檻也、◇南町屋年寄召寄、右之通申顯之、取懸事、町中可為同心之と思之处、各罷出致制止之由候間、町中不存旨、聞扱之由、申出也、

(5) 祐光寺が南町の領域内にあったことは第1節第1項参照。また木村了専らが南町の町民であつたことは、(12・正・7)からわかる。

2 領主権と町自治

a. 土地所有権

大坂寺内町の土地に対する本願寺の権利の内容については、今井修平氏や伊藤毅氏の研究がある(1)。両氏は本願寺の土地支配権の不安定性を強調することと共通しているが、史料解釈の誤りも多いため、主に伊藤氏の研究を取り上げて、これを正してゆきたい。

伊藤氏は、大坂が摂津守護細川氏の分国内にあることから、寺内町の年貢は一定量、細川氏に納入されていたとする。

并

法安寺 寺内、年貢無沙汰之儀付而、細川下知以前来候ツ、上野失念、只今あげ候、(5・12・2

8)

(下間真慶)

(上)

この史料だけからは、①法安寺や寺内町の年貢を本願寺が細川氏に上納するよう命じた、②法安

寺・寺内町(の土地)の年貢収納権をもつ土地領主の要請をうけた守護細川氏が、本願寺に対して公権として領主への納入を命じた、③法安寺や寺内町の住民が、出作している寺内町外の荘園田畠の年貢を支払っていなかったため、土地領主の要請をうけた守護細川氏がその納入指導を本願寺に命じた、などと解釈することができる。

伊藤氏らは①とみたわけだが、法安寺は鹿苑院末寺であり、そうした法安寺の年貢を取得する権利を細川氏がもっているはずがないので①は成立しない。また、法安寺(の土地)の年貢収納権をもつのは鹿苑院であり、②の場合なら寺内町(の土地)からも年貢を鹿苑院に納めていたことになる。しかしこの条項の他に、そうした事実を示す史料は『天文日記』にも、『鹿苑日録』にも全く見ることができない。

ところで、新屋敷の町民が、惣構構築のため志宜庄や森三ヶ庄の田畠を荒したり、あるいは出作地の年貢を払わないとして、荘園領主である鹿苑院が本願寺に善処を要求してきた事例はしばしばみられる(6・3・24など)。天文八年には、新屋敷町民が志宜庄内の地子銭支払いを拒否している問題について、鹿苑院が守護代山中政重に解決を依頼し、政重が大沢橋での所質奪取をちらつかせて新屋敷

・本願寺の譲歩を引き出したこともあった(8・4・29)⁽²⁷⁾。

これらの事例を参照すれば、先にあげた史料(5・12・28)の場合も、③である可能性がより高いといえよう。

さて、伊藤氏は、寺内町内の土地所有権が錯綜していた例として次の二つの史料をあげている。

寺内あをや町の古比丘尼庵候、其地、此間連々あひしらひ候、~~世~~貫に申定由、上野申候間、買候
はんずるよし申付候、此地庵住スルしたの地までかひ候、又本役ハ八百文ツ、毎年森のなにと
やらん申者ニ出由申候、(5・12・28)

上野申事ニハ、山中佐介知行、高分五六反、西町・北町へ前二買候、其佐介、今度、從細川就闕
所、可相返由申候へ共、町衆種々迷惑由候へ共、(後略)(5・12・26)

前者の場合、寺内町内の土地であるにもかかわらず、本願寺が新たに買得し、買得後も寺内町外の人物に本役を払いつづけなければならないことがわかる。買得以前においては、本願寺はこの土地に対する権利をもたず、買得後も本願寺の所有権は限定されたものといわざるをえない。しかし第2節

でみたように、青屋町が新屋敷に属するとすれば、これは新開発の新屋敷の特殊事情であり、この一例をただちに寺内町全体におよぼすことには慎重であるべきだろう⁽³⁾。

後者の史料で闕所が問題となっている土地は寺内町外の田畠であり、これを西町・北町(共同体なし町民)が購入していたのである。寺内町内の土地に関する史料ではないため、伊藤氏の主張を補強する事例とはなりえない。

このようにみてくると、伊藤氏がいう、寺内町における土地所有権の錯綜性は、必ずしも卓越した現象ではないことがわかる。むしろ寺内町土地については、一部をのぞき本願寺がほぼ一円的に所有権を行使していたとみた方がよからう。

b. 本願寺の領主権と町

本願寺は大坂寺内町をどのように支配していたのか。今井氏や伊藤氏ら従来の研究は、本願寺の強権的な支配を想定している。しかし、六町共同体との関係など、支配の具体相については余り明らか

にされていない。

領域支配

本願寺は寺内町住人を追放する権限を有した。傷害事件をおこした者や、債権取り立ての譴責使を堺から招いてしまった町民などを、本願寺は強制的に大坂から退去させている(11・12・20、6・2・12など)。

寺内町民は町屋の建物を私有していたが⁽⁴⁾、犯罪を犯すなどした町民の町屋は、本願寺による闕所処分をうけた。

天文八年、北町にあった、山中藏人の内者^(要)北角氏の家を返却するように要求された本願寺は、「彼地此方に入候間、家を壊取候へ」と、藏人の申し入れを断わっている(8・12・14)。おそらく北角氏の家は何らかの理由で闕所処分にあっていたと思われ、本願寺は「彼地此方^(要)に入候」という理由で、町屋の建材のみの返付に応じたのである。闕所処分の根本に、本願寺の領域的な支配権があったことが確認されよう。

本願寺は、寺内町惣構の門の開閉権も掌握していた。これらの門は夜間や、近辺で戦乱があった時

には閉ざされ、門の鍵は本願寺の管理下にあった(5・7・13、5・8・10、6・2・25など)。

a) でみたように、寺内町内には一部、本願寺の土地所有権が貫徹できていない地域を残していたが、惣構の内側については本願寺の領域的な支配権が一円的におよんでいたのである。

ところが天文七年、門の鍵の管理をめぐって注目すべき変化がおきた。

六町之鍵、即町へ申請度由言上条、遣之候、其子細者、堀きわの麦まで夜々盗候、就此儀、出之也、(7・4・25)

寺内町民が耕作している、堀外の畑の麦が毎夜、盗まれる。これは惣構の門の鍵が本願寺に管理されているため、麦盗人が来ても、それを阻止するため町人が惣構の外へうって出ることができないからであるという。そこで鍵の管理を六町に移すよう本願寺に要請し、いれられているのである。

惣構の門の開閉権の根本が本願寺にあることは変わらない。しかし町共同体が一定度、権利をのばしつつあったことは間違いないだろう。

検断・民事裁判

検断面において、寺内町が守護不入であることはいうまでもない。

天文六年に摂津深江で発生した殺人事件の教唆者が大坂の田辺屋であることを知った守護代山中政重は、本願寺に対し、「遂糺明、可預成敗由」を要請せねばならなかった(6・7・25)。

ところが、政重の本願寺への働きかけに気づいた田辺屋が寺内町を逐電してしまった。そこで本願寺は、「於後々者、見合ニしたがひ可加誅伐」という命令を「六町衆にも申聞」かせたのである(6・7・25)。これは本願寺が、六町に対して検断命令を出したことを示す。六町それぞれの側に、「見合ニしたがひ可加誅伐」き権利と能力が認められていることがわかるのである。

また本願寺は、町内の番屋に制札を掲げた。

今朝、六町の番屋／＼に札を打候、判者、其子細者、火付并盗人・博奕、此ヶ条也、其段於告上野計知者、代物可遣之由也、(7・9・14)

各町の番屋は町の責任で維持管理され、そこには定番が詰めていたらしい(8)。このように各町のい

わば結集核にあたる番屋に、都市領主本願寺が制札を打つということは、本願寺の検断権の浸透、町人による制札の遵行という体制の存在を前提としよう。

以上にみてきたように、本願寺が大坂寺内町の検断権を最終的に掌握していることは間違いない。実際、本願寺に対する反逆者と認定されれば、その町民は本願寺の暴力装置によって厳しい制裁をうけたのである(5)。しかし、本願寺の検断権とは別に、ここではそれを下請けする例しかなかったが、各町独自の検断も存在したことを等閑視するわけにはいかないのである。

本願寺は大坂寺内町における民事裁判権をもっていた。町民間の様々なレベルの相論に対し、本願寺が判決を出したり、仲裁したりしている。判決に従わない場合には強制執行も行った(表II-10)。ただ、これも当然のことであるが、すべての相論が本願寺に持ち込まれたわけではない。先にみた、木村了専らによる祐光寺襲撃事件の場合、南町の年寄らがまかり出て、了専らの自力行動を抑えている。この時は、事件が証如の耳に入ったため大きくなったが、年寄らによって町レベルで相論が解決する可能性もあったといえよう(7)。

こうしてみていると、検断にせよ、民事相論の解決にせよ、町共同体が自律的に担っている部分は

表II-10 本願寺の民事裁判権 (『天文日記』による)

年月日	相論内容	相論当事者	経過判決その他
天文 5. 4.26	寺内町人御門四郎殿被	ひものや町又四郎 vs北町屋与三郎・源六	双方から事情を聴取し、御門四郎の誤状を有する又四郎を勝訴とする →与三郎・源六が判決について「悪言」を吐いたため、御坊綱所衆の誅伐
6.24	新屋敷増物屋町の排水	増物屋町vs北町屋	双方から事情を聴取し、現地を視察させた上で北町屋への排水を命ず →北町屋が命令を遵守しないため、御坊番衆による強制執行の構えを示す
6. 6.25	新屋敷木津屋跡被	祖母方vsよめ方	仲直りして息子専千世を協力して育てよ、左右方の質物以下の道具を出せ
21. 2.25	構平事	北町vs清水町	証提として家役日記を左右方から提出させる、(判決は不明)
〃	十六人番匠の町役	六町(北町)vs十六人番匠	双方から事情を聴取し、番匠が「町之用」に立っていないことを理由に町役勤仕を命ず

結構大きかったのではなからうか。『天文日記』などにあらわれる事件は、証如が直接あつかったものに限られるため本願寺が主管するのは当然である。そうした史料の限界性を忘れて、本願寺の強権支配、あるいは直接支配の浸透のみを強調することは誤りであろう。

夫役

本願寺が大坂寺内町にどのような賦課を加えていたかについてはよくわからない⁽⁸⁾。ただ、「町役」としての夫役を町ごとに徴収していたことは確かである。

天文十七年の御影堂築造にあたっては、「町衆、自一町二十人ヅツ」が動員され、使役されている^(17・8・2)。

ところで、天文二十一年に、十六人番匠とよばれる特権的職人と北町との間で相論がおこった。北町が、十六人番匠は「町之諸役」をつとめないと非難したのに対し、番匠たちは蓮如当時からの特権を主張し、また他町の仕事もしているので、町役は勤仕する必要はない、と反論している。しかし結局、本願寺は、十六人番匠が実態として「町々の用」に立っていないので、「如惣次、町役等」をはたすようにと裁定を下している^(21・2・25)⁽⁹⁾。

相論の過程から、各町では「家役日記」をつくり、町共同体が家ごとに「町之諸役」を課していたらしいことがわかる。町役には、本願寺から各町にかけられてくるものもあれば、町独自の労役や奉仕もあったであろう。そうした役を町内の誰に負担させ、また免除するのかわという裁量権は町にあり、「町之用」をはたしたならば「町役」は免除されえたのである。

ところが、「町之用」に立っていない十六人番匠が特権を盾に町役を忌避したため、ここでは相論となったのである。十六人番匠の特権を自力で否定しえず、本願寺の領主権の発動を仰がねばならなかった点は、確かに北町の共同体規制の限界である。しかし、蓮如以来の特権を主張する十六人番匠であっても、町役賦課の裁量権はあくまで町の側にあることを都市領主本願寺に認めさせた意義は決して小さくないだろう。

軍事権

天文一揆に際しては、「町衆」が、下間頼盛率いる「番衆」勢と共にしばしば摂津・河内方面へ出陣している^(私4・4・7など)。また天文一揆終息後も、大坂近辺で武家方の軍事行動がある時には、本願寺から「町へハ用心之事、堅申付」けたように^(5・7・25)、「町衆」の軍事力は本願寺内町防

衛の一方の柱であった。

しかし町民は、本願寺の軍事的命令下に完全に服するような存在ではなかった。天文四年、本願寺が細川方と講和する際、本願寺自身の講和調印とは別に「依通路之儀、町衆連署」が必要とされた(私4・9・3)。詳細は不明だが、町衆の軍事力が必ずしも本願寺と一体化していなかったため、講和に際して別個の確認が求められたのであろう。

天文一揆を戦っている最中も、「町衆」は下間氏麾下の「番衆」とは明らかに異なる軍勢を構成し、「町衆」だけで出陣したこともあった(私4・4・7など)。

以上、いずれも天文初年の例ではあるが、大坂寺内町の軍事力が必ずしも本願寺に独占されていなかった点だけ確認しておきたい。

本項では、本願寺が大坂寺内町で確保している様々な領主権を、できるだけ具体的に検討することによって町民や町共同体とのかかわりを概観しようとしてきた。きわめて不十分な分析ではあるが、一部の地域を除き、本願寺が寺内町における事実上唯一の領主として、一円的な支配権を掌握していたことは間違いない。

しかし伊藤氏らのように、本願寺の強権のみを強調することは誤りであり、本願寺の都市支配権を支える存在として町共同体が機能していたことも確認される。史料的に十分解明できたとはいえないが、多くの側面で、町共同体なしには本願寺の寺内町支配は貫徹しえなかったであろう。

(1) 今井前掲論文注序節(1)、伊藤前掲論文注第1節はじめに(5)。以下、両氏の説はこの両論文にもとづく。

(2) 前掲史料注第2節第2項(9)。

(3) 第2節第2項注(6)参照。

(4) 町屋が町民の私有物であったことは、それらが譲与の対象や借金の抵当となりえたことからわかる(5・4・26、6・2・12など)。

(5) 番匠が番屋の修築をすることが、番匠による町への貢献と認識されていること(21・2・25)、町民は番屋周辺が湿潤になることを強く忌避していること(5・6・24)、定番が町の有力者の手先として行動していること(20・12・14)、定番は町ごとにいること(22・3・2)などからこのよ

うに判断した。

(6) 前掲史料注第1節第3項史料Uなど。

(7) 前掲史料注第1項(4)。

(8) 地子を徴収していたように解釈できる史料もあるが(5・12・29、6・12・15)、詳細は不明である。

(9)

寺内二号十六人番匠、町之諸役不致之由、自北町清水町と就構坪事、家役、申之間、則彼十日記、左右方上之其時

六人へ様躰尋之処、蓮如之時、当年五十六年二成候、其時六人二仰付之、町之番屋・やぐら(櫓)

(塀)(釘貫)

・橋・屏・くぎぬき、為此衆仕之、此衆申合、雖為他町致仕事也、其談合を毎月十六日二仕

候由申之、◇此通六町へ尋之処、十六人衆仕候へバ、四時二罷出、七時二罷帰、こけらと号

し材木之きれ取て帰候間、町用にハ日賃之番匠を仕候、十六人ハしか(使カ)と不立其用之由申

候、◇今日、彼番匠共へ申出様、蓮如之時、六人之跡も五人ハ絶候処、十八人加候へ共、町

々之用にも不立候、殊五年にも十年にも不仕町南町屋事也 有之間、諸役ハせず、町之用にも不

立之時ハ、無其詮事候間、如惣次、町役等可致之由、以駿河申出了、(並)

3 「寺の論理」と「町の論理」

序節で紹介したように、「大坂並」体制論や寺内町Ⅱ「仏法領」説によれば、一向宗によって精神的にも強く結びつけられた寺内町寺院と町民は、その志向を一致させ、寺内町が一向一揆の基盤・拠点となつてゆくとされる。

確かに、本章全体を通じてここまでの分析では、本願寺と大坂寺内町が明確に矛盾する側面についてはほとんどふれてこなかった。しかし、都市領主である本願寺と、大坂寺内町の町民や町共同体が全く同じ志向性をもっていたとは思えない。本願寺がもつ「寺の論理」と、寺内町がもつ「町の論理」を一度腑分けして検討する必要がある。

「寺の論理」で第一に重要なのは、いうまでもなく仏法の興隆、浄土真宗の流布である。教線の拡

大や寺院の経済的繁栄などが具体的な目的とされよう。

しかし「寺の論理」はむしろ、一つの権門寺院として本願寺が戦国期の諸権門のバランス関係の中でどのように行動してゆくのか、という点に明確にあらわれる。天文一揆の敗北で辛酸を嘗めた本願寺は武家との融和を第一とし、畿内の諸勢力と親交を結んだ。また朝廷や延暦寺などとの関係を重視し、礼物の贈与を怠らなかつた。このような畿内政治社会における、中世的権門としての本願寺の立場を忘れてはならない。

これに対して「町の論理」の方は、寺内町の都市としての発展、都市民の経済力の獲得、町共同体の自律性の貫徹などに、その主要な志向性を発揮することになる。こうした意味では、大坂寺内町民のもつ「町の論理」は決して特別なものではなく、京都・堺など他の多くの同時代の自治都市、あるいは城下町の都市民とも共通する論理であつたにちがいない。

もちろん、大坂寺内町においては「寺の論理」と「町の論理」は、実際問題として不即不離であつた。都市領主としての本願寺が寺内町の発展を願い、積極的な努力を惜しまなかつたことは、第1・2節で詳しくみた通りである。

しかし時には、この「寺の論理」と「町の論理」が衝突する場面があつた。

北町屋の深江明道が、御坊への寄進地であることを理由に山中政重の闕所処分を逃れようとした時、本願寺は「此方分ハ少在之事候間、於其方、用に被相立候へ」と申し放ち、当初、闕所処分撤回を政重に要求しようとはしなかつた(6・4・15)。町民が本願寺の特権を利用して自らの土地所有を守ろうとしたのに対し、本願寺は守護権力に気兼ねして町民の希望を無視したのである。

こうした例は他にもあげることができ、本願寺が諸権門の中で安定した地位を維持しようとする志向と、都市民の本願寺に対する期待はしばしば矛盾を引きおこしていたものと思われる。寺内町が特権を獲得し、拡大をつづけることは、武家にとって必ずしも好ましいことではなかつた。なぜなら守護の介入を許さない都市が富貴を集めることは、それだけ武家の権力が制限されることを意味したのだから。

大坂寺内町の特徴は、都市特権の拡大、都市民の権益保護など、都市が発展してゆく起点に本願寺の強大な政治力が位置している点に求められる。都市領主としての本願寺の正当性は、戦国期社会においてこうした都市発展の基盤整備を行うことによってえられる「公共性」にもとづくものであると

いえよう。この点で「寺の論理」と「町の論理」は一致しているかのような相貌を示す。しかし、「寺の論理」と「町の論理」がその志向も、形成主体も異にすることより考えれば、両者は微妙なバランス関係の中にあつたといえよう。

「町の論理」の一層の展開をはかる寺内町民・共同体が、やがて本願寺・「寺の論理」の限界性に気づいた時、彼らは寺内町とは異なる都市のあり方を追求しようとする志向を働かせはじめるのである。

(1) 前掲史料注第2節第3項(9)。

終節 大坂寺内町の歴史的位罫

中世から近世への移行期の諸都市の中で、寺内町はどのような位置にあるのか。

網野善彦氏や勝俣鎮夫氏の理解によれば、原始以来の「無縁・公界・楽」の原理を色濃く残す典型的な中世都市であつた寺内町は、戦国大名や織豊大名の支配をうけるにいたり、その特権を否定され、自由を失つていったという⁽¹⁾。しかし本章での考察によれば、大坂寺内町の特権は、都市民の要求をうけた本願寺の政治的力量によって実現されている。たとえ両氏が説くような、中世都市に共通する原理を寺内町が内包していたとしても、それを現実のものとするためには、当該期の都市領主や都市民の要求・交渉が必需であつたのである。

しかも天文年間に関する限り、大坂寺内町は都市特権の面でも、空間構造の面でも成長過程にあつて、戦国期権力の介入をうけていない。都市として最盛の時代を迎えていたわけであり、都市原理(Ⅱ

無縁の衰退期という評価とは相いれないことになる。

いま一つ、峰岸純夫氏や藤木久志氏の「大坂並」体制論の理解⁽³⁾との違いについても述べておく。戦国期において、本願寺が獲得した特権が寺内町振興に大きな力となったという点に関しては異論がない。しかし、序節でも述べたように、寺院と都市民を不可分一体とみる「大坂並」体制論では、摂河泉の多くの寺内町が、石山戦争に際し、反信長方に立たなかった理由を説明することができない。確かに、本章の分析においても、本願寺と寺内町民は協力関係に立って、都市構造を形成していった。しかし第3節でみたように、都市民は町共同体を核に、本願寺から一定度独立した政治体を形成しており、必ずしも両者の志向が一致する必然性はない。「寺の論理」と「町の論理」は併別して検討しなければならないのである。

こうした立場からあえて、大坂寺内町を当該期の他種の都市と比較してみる。

宮本雅明氏によると、戦国期の博多や尼崎は、寺社を核とする複数の空間が並立的に複合した都市であるが、その運動方向は不明で、空間構造は固定的である⁽³⁾。これにくらべると、大坂では都市域内の異質な空間の克服に成功して統一的な都市を実現している。

次に、小島道裕氏が明らかにした戦国期城下町⁽⁴⁾とくらべる。戦国期城下町が惣構内の比較的集密化した都市域（給人居住域）と、その周辺の市町によって構成されているのと、大坂寺内町はよく似ている。しかしこの時期の城下町がこうした二元性を克服できなかったのにくらべて、大坂は近接する「都市」的空間も包摂しつつある。小島氏がいうように、城下町が統一的な都市空間を実現するのが安土以降であるならば、十六世紀半ばの大坂寺内町は都市の統一性、あるいは統一への志向性という点からいって、同時期の他の多くの自治都市や城下町より進んだ段階に到達していたといえよう。

こうした大坂の先進性は、都市民の志向を本願寺が保障するかたちで空間構造が形成されていたことに起因すると思われる。同レベルの寺社が並立する博多などと違って大坂では、本願寺の強力な政治力・経済力によって、都市内の統一や周辺「都市」空間への影響力の浸透が可能となった。同時に、戦国大名城下町のような主従制にもとづかない領主―都市民関係が、民衆の寺内町への求心力を高め、空間の統一を容易にしたものと思われる。

しかし、本願寺・大坂寺内町の強い支配力・影響力がおよぶのはせいぜい近接する「都市」的空間までであった。しかも、それらの空間を最終的に寺内町に吸収することはきわめて困難であったろう。

また、惣構を一步出た外部世界のほとんどは守護など武家公権の支配下にあった。所質の奪取、関所の設定、寺内町周辺田畠への違乱などに対して、本願寺は問題解決のための最大限の努力を行うが、所詮、対症療法であり、根本的解決はできない。こうした問題をドラスティックに解決する唯一の手段は、一向一揆による領国支配である。しかし畿内においては、天文一揆の敗北以後、諸権門との政治的バランスの重視を旨とする本願寺にその意志は全くなかった。

その点、領国経営と連動した流通政策を享受できる戦国大名城下町の方が、新たな展開の可能性をはらんでいたといえよう。ここに本願寺・寺内町の大きな限界があり、寺内町民の統一政権への傾斜の萌芽があらわれるのである。

大坂については、十六世紀半ば以降の詳細な史料を欠き、石山戦争前夜の本願寺・寺内町をめぐる実態はほとんど不明とせざるをえない。しかし、最後に一つだけ象徴的な史料をあげ、都市民の志向の展開を予想しておきたい。

天正八年（一五八〇）七月、顕如退城後も大坂に踏みとどまっていた教如が信長方と最終的な和平を結んだ。

条々

一人質為氣仕可遣事

一往還末寺、如先々之事

一賀州之儀、大坂退城以後、於無如在者、可返付事

一町人等、可立置事

一月切り、八月十日以前究事

七月十七日
(織田信長)
(朱印)

これは、本願寺が大坂の地を信長に引き渡すにあたっての条件を書き上げたものである。大坂退城にあたっては両者の間で息の長い交渉がもたれており、この文面には本願寺・大坂方の切実な希望が反映されている。

ここで注目されるのは第四条である。「町人等、可立置事」。本願寺が大坂から去ったとしても、その「町人等」はそのまま居住することを許すというのである。



図II-10 豊臣期の大坂城下町

内田九州男「豊臣秀吉の大坂建設」(佐久間貴士編『よみがえる中世2／本願寺から天下へ 大坂』、平凡社、1989年)より

のみを強調する。また空間構造の分析はあっても、それが展開してゆく方向性については余り関

- (1) 網野・勝俣前掲論文・著書注序章(1・2)。
- (2) 峰岸・藤木前掲論文・著書注序節(5)。
- (3) 宮本前掲論文注序章(3)。序論第1節参照。

建築史の都市空間構造論は、都市建設の計画性に主題を置き、多くの場合、都市領主の主導性

実際の、教如退城後、大坂御坊と同時に寺内町も全焼してしまったため、この条件は直接的には実現しなかった。だが、たとえ本願寺が去り、寺内町でなくなったとしても、その都市で生活しようとする志向に、寺内町という枠組みを脱し、統一政権に賭けようとする都市民たちの姿を見ることができらるだろう。

心を払わない。それゆえ、自治都市の展開方向は不明のままで、固定的な都市空間論となりがちである。そして、近世への移行はすべて統一政権の都市改造で説明してしまうのである。

だが、実際は、博多や尼崎でも絶えず都市構造の改変がなされていたはずであり、宮本氏のように固定的なイメージで説明するのは正しくないだろう。

(4) 小島前掲論文注序節(15)など。序論第2節参照。

(5) 『本願寺文書』『織田信長掟書』、信長文書の研究八七七。

結 論

― 中世都市から近世都市へ ―

本論では、京都、大山崎、大坂を取り上げた。いずれも畿内地方に属する都市ではあるが、相互に都市としての性格は全く異なり、また本論で分析した時代もまちまちであった。しかしそれぞれの具体的な検討の中で、中世から近世への移行期における都市のあり方をめぐる共通の歴史像が浮かび上がってきたようにも感じられる。

そこで最後に、序論での研究史整理、課題設定とも関連づけて、中世都市から近世都市への変容をどのように理解できるのか、簡単にまとめておきたい。

中世都市の最大の特徴は、その分散性と分裂性に求められる。

これは一つには空間構造の問題である。寺社や城館を中心とする同心円的なまとまりが、複数集まったのが典型的な中世都市であった。中世前期の多賀城や平泉をはじめ、中世後期にかなりの規模の都市に発達した博多や尼崎、また戦国期城下町にこうした特徴が認められる。各都市によって程度の違いはあるが、それぞれの同心円の独立性は強く、統一的な都市の姿はみられない。

こうした中世都市の特性は京都においてもうかがわれ、北野社・大徳寺・東寺・東福寺など、洛外の寺社門前が独立空間であっただけでなく、上京・下京それぞれの内部にも無数の同心円があった。

一方、地方の農村社会の中に生まれた市町の場合でも、複数の小規模な寺社門前に中心核がわかれている場合が多い。鎌倉時代の大山崎も、このような典型的な中世都市の空間構造を示していたといえよう。

中世都市の分裂性の第二は、社会構造面でみられる。都市の主要産業である商工業は、中世社会においては特権的な座人によって独占され、それを座の本所が支配していた。また多くの都市民は被官となつて、武士との間に主従制的な関係をつよめていった。都市の多くでは、土地に関する支配も小規模に分散している。

こうした錯綜した関係は、首都であるがために多くの領主が集中している京都において、最も顕著に認められる。だが京都ほどではなくとも、大なり小なり同様のことは各地の中世都市において想定できよう。しかも商工業や主従制にもとづく社会関係は、必ずしも物理的な空間構造としてあらわれるとは限らず、この点に空間構造論の弱点がある。

ところで、中世後期になると、各地で都市民の地縁的な結合がみられるようになってくる。いわゆる自治都市においてこうした動向は著しく、自律的な共同体が都市社会の中で一定の役割をはたしは

じめる。

なかでも大山崎は最も早くこうした共同体が成熟した都市で、十四世紀の終わりには、ある程度の都市自治を実現していた。京都の場合は、もちろん古くから地縁的な共同体があつて祇園祭の執行なども行っていたが、近世につながるような強固な共同体は十六世紀前期に生まれた。

このようにそれぞれの都市の条件により、中世後期に成長してくる共同体の性格は異なる。しかし、一般に都市民の地縁的な共同体は、都市を支配する領主権力に対して様々な要求を繰り返すとともに、みずからが都市社会を構成する一つの単位として成長してゆく。また都市民の志向は、積極的に中世都市の空間を拡大・変容してゆこうとするエネルギーともなった。

十六世紀の後半には、各地の都市で都市民・共同体が、新しい社会秩序を形成するとともに、都市空間のあり方を規定する力を蓄えていった。

しかしこうした都市民の結びつきが強まり、いくつかの畿内都市ではある程度の自治が実現したとしても、完全な意味で都市民衆がその都市の市政権を握ったり、自由な経済活動を展開したりすることはできなかった。なぜなら武士の支配が、当該期社会の大部分を覆ってしまっていたからである。

京都などにおいては、都市で円滑な社会生活を送るためには、武士との個別的、私的な関係が必要とされたが、反面、このことは武士の都市民・共同体に対する非分を生み出しつづけた。大坂の場合も、都市領主Ⅱ本願寺は、惣構内部の事は専決できたが、惣構外の守護支配下の地域については、基本的に無力であった。

狼藉や合力銭の強要、請取沙汰や所質などの中世的な慣行、さらに無数に乱立する関所、商工業活動にともなう過大な座役銭、撰銭令など、都市民の生活、経済活動を乱す行為を、將軍から末端の小者まで、戦国期の武士は繰り返していた。集住し、商工業を生活のかてとする都市民にとっては、「平和」が何よりも必要とされた。だが戦国期の分裂した権力によってその実現はきわめて困難であり、ここに都市民の間に、統一的で公的な都市支配へのある種の待望論が高まったとしても不思議ではない。

領主権力の側にとっても、極度に分裂した支配構造のままでは、新しい社会秩序を構築するまでに成長してきた都市共同体を支配することができず、新たな支配体制を模索することとなった。こうして統一された領主権力と、都市内を統一的にまとめうる共同体が出会うことになる。

統一政権は、町共同体を支配の基盤とするための施策を行う一方で、領主権力内部の体制整備、中世的な都市支配構造の解体を敢行した。寺内町の解体もこうした過程の中で説明されるべきである。そして最終的には、多くの都市において、一人の統一権力（織豊大名）が、町共同体からなる都市社会と対峙する、近世的な都市が誕生してゆくのである。

以上、きわめて大まかに中世都市から近世都市への移行を、できる限り普遍性をもちうるかたちを目指してまとめてみた。

中世後期になって急速に成長を遂げ、都市社会の中で一定の力を発揮するようになった都市民・共同体が、都市を分裂支配する領主権力に働きかけ、統一権力の誕生、統一的な都市支配を実現させていったといえよう。その意味で近世都市（空間）を生み出したのは、中世の都市共同体であったと結論づけうるのである。